

博士論文

論文題目

現代中国語における証拠性
——情報源表出形式の意味機能——

A Study on Evidentiality in Contemporary Chinese:
the Meanings of Information Source Expressions

氏 名 李 佳樑

目次

略語一覧表	i
第1章 はじめに	
——情報源の表出——	1
1.1 証拠性：文法範疇としての情報源	1
1.2 筆者の着想	4
1.3 本研究の構成と主たる主張	5
1.4 例文・言語資料について	8
第2章 証拠性に関する研究史の概観	9
2.1 「証拠性」の言語学への導入と取り組み	9
2.1.1 研究テーマとしての「evidential」の確立	9
2.1.2 広義的証拠性：Chafe 1986	11
2.1.3 狭義的証拠性：Anderson 1986	13
2.1.4 命題目当てのモダリティの下位類としての証拠性：Palmer 2001	16
2.1.5 文法的現象との見方：Aikhenvald 2004	18
2.1.6 機能主義的類型論からの是正	20
2.2 中国語の「証拠性」の全貌を探るための研究	22
2.2.1 張伯江 1997 および李訥ほか 1998 における“传信范畴”	22
2.2.2 張成福・余光武 2003 の挿入句に関する研究	25
2.2.3 朱永生 2006 の試み	28
2.2.4 陳穎 2009 の考察	30
2.3 中国語の事例を「証拠性」という観点から分析した研究	44
2.3.1 主な成果	44
2.3.2 「証拠性」と誤認した研究について	45
2.4 本研究の立場	48

第3章 中国語（共通語）の証拠性システム……………	50
3.1 基本概念	50
3.1.1 情報	50
3.1.2 情報源	52
3.1.3 証拠性	54
3.1.4 情報源表出形式	55
3.1.5 証拠性システム	58
3.2 共通語における証拠構造	60
3.2.1 実証的情報源の証拠構造	60
3.2.2 推論的情報源の証拠構造	61
3.2.3 伝聞的情報源の証拠構造	66
3.3 共通語における証拠素	68
3.3.1 “说是”・“想是”の第一義的用法	68
3.3.2 証拠素と認定する理由	71
3.4 共通語における証拠策	75
3.4.1 実証的情報源の証拠策	76
3.4.2 推論的情報源の証拠策	85
3.5 共通語の証拠性システム	93
第4章 証拠素の“说是”の用法と成立……………	95
4.1 考察対象	95
4.2 先行研究	97
4.3 伝達動詞から〈伝聞〉の証拠素へ	102
4.3.1 発信者指向と受信者指向	102
4.3.2 伝達動詞の脱範疇化	104
4.4 伝達行為を前提にする“说是”	104
4.4.1 「発信者指向の解釈」のみの“说是”	105
4.4.2 「受信者指向の解釈」のみの“说是”	109
4.4.3 「発信者指向の解釈」と「受信者指向の解釈」が両立する“说是”	112
4.4.4 「発信者指向」から「受信者指向」へ移行する外因と内因	116

4.5	伝達行為を超えた“说是”	118
4.5.1	情報源の選択と情報源の共有しやすさ	119
4.5.2	話し手参与のデキゴトに用いられる“说是”	122
4.5.3	「逆接」の“说是”の理論的意義	123
4.6	本章のまとめ	126
第5章	〈伝聞〉と意外性	
	——上海語の“伊讲”を中心に——……………	127
5.1	問題提起	127
5.1.1	文末に用いる用法	127
5.1.2	“伊讲”の意味機能	128
5.1.3	研究目的	132
5.2	先行研究	134
5.2.1	擬似的な伝達行為による効果	134
5.2.2	語用論的な効果	134
5.3	文末の“伊讲”が意外性を表す原因	136
5.3.1	意外性の表出に関する語順調整	136
5.3.2	“伊讲”が文頭から離れる内在的動機	139
5.3.3	文末の“伊讲”が〈伝聞〉を表さない原因	141
5.4	本章のまとめ	142
第6章	〈伝聞〉と注意喚起	
	——台湾語の文末の“讲”を中心に——……………	144
6.1	文頭・文中・文末に現れる“讲”	144
6.2	先行研究	146
6.3	“讲”の文末用法の再確認	149
6.3.1	平叙文における生起	149
6.3.2	命令文における生起	154
6.3.3	疑問文における生起	157
6.3.4	“讲”の文末用法のまとめ：聞き手目当ての「注意喚起」	166

目次

6.4	なぜ“讲”で「注意喚起」できるか	168
6.4.1	「省略」説 vs. 「移動」説	168
6.4.2	聞き手側の意外性	170
6.5	本章のまとめ	172
第7章	〈推論〉と強意の訴えかけ	
	——上海語の感嘆構文“勦太 AP 噢”を中心に——……………	173
7.1	問題提起	173
7.2	「感嘆」を表す“勦太 AP 噢”	175
7.2.1	イディオムとしての分析	175
7.2.2	聞き手目当てのモダリティ	177
7.2.3	「情報のなわ張り」	180
7.3	先行研究	181
7.3.1	主な考察	181
7.3.2	問題点	182
7.4	「制止」から「推測」へ	184
7.4.1	「推測」	184
7.4.2	「危惧」	186
7.4.3	“勦”で表す「推測」における証拠性および確信度	189
7.4.4	「推測」を表す“勦”と「制止」を表す“勦”との相違点	190
7.5	「推測」から「感嘆」へ	192
7.6	本章のまとめ	196
第8章	内在する状態の表現から見た中国語の証拠性……………	197
8.1	問題提起	197
8.2	先行研究	200
8.3	調査の結果	204
8.4	他者の内在的状态に言及する証拠性のストラテジーおよび傾向	209
8.4.1	〈直接経験〉	209
8.4.2	〈推論〉	210

8.4.3	〈知覚〉	219
8.4.4	連用修飾語における情報源表出形式の生起	227
8.5	本章のまとめ	232
第9章	おわりに	234
9.1	各章の主な結論と更なる一般化	234
9.2	今後の課題	237
9.2.1	情報源表出形式の拡張の可能性	237
9.2.2	証拠策について	241
参考文献	242

略語一覧表

3	三人称
ABL	斜格
AFAR	translocative (at a distance)
ASSUM	〈(論理に基づいた) 推論〉
ATTRIB	属性
CAUS	使役
CL	類別詞
COMP	補文標識
diminutive	指小辞
DIR, DIR.EV	〈直接経験〉
EXP	経験相
F	女性
FP	文末語気助詞
IMPV	命令法
IND	直說法
INFR	〈(観察に基づいた) 推論〉 ; 〈(根拠を問わない) 推論〉
INTERJ	間投詞・感嘆詞
KONG	台湾語における文末語気助詞の“讲”
LEST	危惧
LOC	方位詞
NEG	否定詞
NEUTRAL	中性
NF	非女性
NONFIRSTH	〈非直接経験〉 (non-firsthand)
NONVIS	非視覚
PAST	過去時
PERF	完了相
PRES	現在時

略語一覧表

PROG	進行相・持続相
PROH	禁止を表す否定詞
Q	疑問標識
REC.P	近過去
REP	伝聞
SEQ	逐次的(sequencer, sequential)
sg, SG	単数
SP	構造助詞
VIS	視覚
VIO	上海語の“勳”

第1章 はじめに

——情報源の表出——

莊子、恵子と濠梁の上に遊ぶ。莊子曰く、「儵魚出で遊び従容たり。是れ魚の楽しむなり」と。恵子曰く、「子は魚に非ず。安んぞ魚の楽しむを知らん」と。莊子曰く、「子は我に非ず。安んぞ我の魚の楽しむを知らざるを知らん」と。

『莊子』外篇第十七より

1.1 証拠性：文法範疇としての情報源

証拠性 (evidentiality) とは、情報源がどのようなものかということによって文の形を変える文法範疇のことである。数・格・時制・アスペクトなどを文の中で必ず何かしらの形式で表出しなければならない言語があるように、すべての陳述において情報源の表示が義務付けられている言語は、馴染みのない言語が多いようではあるが、世界中の言語の四分の一も占めているという (Aikhenvald 2004:1)。

例えば、コロンビアのバウペス県で話されている Tariana 語は5つの動詞接尾辞を用い、それぞれ VISUAL, NON-VISUAL, INFERRED, ASSUMED, REPORTED という5つの情報源を言語化している。

(1) (Tariana 語)

a. Juse irida di-manika-ka

José football 3sgNF-play-REC.P.VIS¹

‘Joséはサッカーをしていた。’ (その様子が見えたので)²

b. Juse irida di-manika-mahka

José football 3sgNF-play-REC.P.NONVIS

¹ 本研究では、説明がない限り、先行研究から引用した例文のグロスは元のままを録する。グロスの意味については、「略語一覧表」を参照。

² 日本語訳は元の英語訳に基づいて筆者が訳したものである。

‘Joséはサッカーをしていた。’（その音が聞こえたので）

c. Juse irida di-manika-**nihka**

José football 3sgNF-play-REC.P.INFR

‘Joséはサッカーをしていただろう。’（見えた痕跡に基づけば）

d. Juse irida di-manika-**sika**

José football 3sgNF-play-REC.P.ASSUM

‘Joséはサッカーをしていただろう。’（これまでの知識に基づけば）

e. Juse irida di-manika-**pidaka**

José football 3sgNF-play-REC.P.REP

‘Joséはサッカーをしていたそう。’（そう聞いたので）

(Aikhenvald 2004:2-3)

ところで、冒頭で引用した『莊子』の「知魚楽」として知られている寓話は、もし莊子と恵子が中国語ではなく、この Tariana 語で話しをしていたら、二人の議論もきっと成立しなかったであろう。

Tariana 語のこの5つの動詞接尾辞——*-ka*, *-mahka*, *-nihka*, *-sika*, *-pidaka*——は、一つのパラダイムをなし、Tariana 語において情報源を示す *evidentials* である。それは言語によって、次の次元において異なる証拠性の姿を見せる。

① *evidentials* の有無

情報をどこから知り得たのかということと言語化する手段はどんな言語においても存在すると思われる。例えば、感覚動詞などが情報源の表明のために用いられることは容易に想定できる。

(2) 我 看见 小张 在 踢球。

私 見る 張くん しているところ 蹴る ボール

‘張くんがサッカーをしていたのを見た。’

ところが、それらの手段がすべて *evidentials* とは限らない。Aikhenvald 2004 の定義によれば、文法的コーディング (*grammatical coding*) のみを *evidentials* と見なしている。時制にたとえてみれば、(3)における“刚才”から、「張くんがサッカ

一をする」ことが過去に起きたデキゴトだということが了解できる。だからと言って、“刚才”を英語の動詞接尾辞 $-ed$ と同様視することはできず、中国語の過去時を表す文法的形式と考えることはできない。

- (3) 刚才 小张 在 踢球。
 先刻 張くん しているところ 蹴る ボール
 ‘張くんはさっきサッカーをしていた’

これと同様に、(2)の“我看见”から「張くんがサッカーをしていた」ことを話し手が目撃した、ということが了解できる。しかし、「閉じた」文法的カテゴリをなさない“我看见”はあくまでも本動詞の一つの用法であり、情報源を表出する語彙的な手段にすぎない。将来的に *evidential* に変容する可能性は否定できないとしても、現段階では *evidential* と見なすことはできない。

② *evidentials* がある場合、それによって言語化される情報源の種別

Aikhenvald 2004 のデータに基づいて簡単な例で言うと、視覚 *visual* を含めた知覚 *sensory* に基づいた情報を一つの *evidential* でマークし、残りの *inference*, *assumption*, *hearsay*, *quotative* をもう一つの *evidential* でマークする言語もあれば、*visual* を一つの *evidential* で、残りのものをすべてをもう一つの *evidential* でカバーする言語もある。また、〈推論〉を、五感による観察の結果に基づいた推論 (*inference*) と論理に基づいた推論 (*assumption*) とに区別して、異なる *evidentials* で言語化する言語もあれば、区別せず一つの *evidential* を用いる言語もある (Aikhenvald 2004:65, Table 2.1)。

情報源の中で、どれを *evidential* で言語化し、どれをしないかに関してはある程度、含意普遍性 (*implicational universals*) 的な傾向が見られる。例えば、二つの情報源を選出し *evidentials* で言語化を行う言語の中で、*firsthand* と *non-firsthand*、*non-firsthand* 対「その他」、〈伝聞〉対「その他」の3種類の対立関係を有する言語は世界中で確認されているのに対して、〈視覚以外の知覚〉と〈伝聞〉、または〈聴覚〉対「その他」という2種類のシステムを持つ言語は僅かであるという (Aikhenvald 2004:26)。このことから、情報源を言語化する選択肢が二つの場合は、〈視覚以外の感覚〉は情報源として言語化するハイアラーキのかなり低い位置

にあることが窺える³。

③ evidentials は省略可能か否か

たとえ evidentials による情報源の表出が義務化されている言語だとしても、一定の条件が満たされた場合、evidential が省略できる言語がある。例えば、ペルーとブラジルで話されている Shipibo-Konibo 語の場合、先行する談話において情報源が既に文法的にマークされ、それで母語話者にとって情報源が明白であれば、evidentials を用いなくても良いという (Valenzuela 2003:39, Aikhenvald 2004:78)。

また Anderson 1986 には次のことが述べられている。陳述された事実が話し手と聞き手の両方ともに直接観察された場合は、evidentials はめったに使われないし、話し手があるイベントに対して意識的な参与をした場合、そのイベントについての情報は自然に〈直接経験〉と見なされ、その evidential がしばしば省略されるという。Anderson 氏のこの一般化は必ずしも言語共通的ではないが、evidentials の省略を許す言語の存在という事実、また省略を可能にするいくつかのモチベーションが提示されている。

1.2 筆者の着想

周知のように、中国語は孤立語であるため、Aikhenvald 2004 のような狭義的な evidential の存在を基準にしてみれば、「中国語には証拠性がない」のはごく自然な帰結となる。そのため、evidential(ity)という概念を導入し中国語の事例を分析しようとする研究は見られるものの、中国語における情報源の表出にまつわる、より全般的な枠組みについては深入りされておらず、考察の余地がかなり残されている。また、事例研究においても、「これは情報源を表すものだ」という記述に留まってしまいう「ラベル貼り」式のものが少なくなく、証拠性についての通言語的な研究成果が中国語学に十分に反映されているとは言い難い。

そこで、本研究は「中国語における情報源の表出」を中心的なテーマとして、①中国語には evidentials、もしくはそれに近いものはないか、②中国語の母語話者は

³ cf. Cornillie 2009: '[...] hearsay readings, [...] are the most common evidential readings in languages without an obligatory grammatical category of evidentiality. Languages with an obligatory evidential system, by contrast, often have grammatical marking of direct evidence (visual, auditory, etc.)'

何を手がかりにして情報源を理解するのか、といった問いを念頭に置き、中国語の言語事実を合理的に説明できる情報源の表出に関する枠組みを探る。その上で、事例研究として、一部の構文・機能語の成立のメカニズムを情報源の表出の視点から解明する。この研究を通じて、証拠性は中国語の具体的な現象を分析する際に有効であること、またこれからの証拠性の研究は中国語をもっと視野に入れるべきであることを主張したい。

1.3 本研究の構成と主たる主張

本章の「問題提起」を含め、本研究は9つの章から構成される。

1980年代の半ば以降、それまで専らネイティブ・アメリカン言語だけが対象であった証拠性に関する研究は、世界中の言語を数多く取り上げ、徐々に盛んになってきた。一方、文法範疇としての証拠性を持つ言語が世界の言語の約25%を占めているにも関わらず、これまでたくさんの研究が蓄積されてきたメジャーな言語の中で、典型的な文法範疇という意味での証拠性が存在すると思われる言語は決して多くない。ゆえに、研究者の間で未だに「証拠性」の定義は必ずしも統一されていない。情報の入手ルートに限っている見方もあれば、命題の事実性をはじめ、認識論全般に関わるものだという考え方もある。特に文法範疇としての証拠性を持たない（と思われている）言語の研究をしている研究者にとっては、後者の立場が好都合である。

そのような影響を受けて、中国語を対象とする証拠性関係の研究が発足した時点から、「中国語の証拠性」という概念自体は、内包も外延もさほどはっきりしてはいない。それに加えて中国語学の世界では、“传信”——つまり、話し手が確信しているということを伝える——という伝統的な用語が以前から定着しており、余計に紛らわしい。第2章では証拠性に関する先行研究の概観を行う。一般言語学の立場から証拠性の枠組みを提案した先駆的な論考と、証拠性の概念を用いて中国語の事例を考察・分析した事例研究をレビューする。

この作業を通して、証拠性の「レッテル」を貼っただけで満足する研究ではなく、証拠性の研究の質を向上させるために、また証拠性をめぐる類型論的な考察を可能にするために、「証拠性」をより厳密に定義せねばならないことを主張する。具体

第1章 はじめに

的に述べると、本研究においては、①「証拠性」とは、情報源の種別によって文の形が変わる文法的現象のことである、②情報源の種別以外の意味要素は、証拠性とは見なさず、なおかつ「情報源」は、「読売新聞によると」における「読売新聞」の類の日常的な情報源とは違い、文法的に区別され、あるいはより文法化の度合いが高い形式によって表出される情報の入手ルートに限るものとする、という2点である。

このような基本的な立場を取り、本研究は § 1.2 で提示した2つの中心的テーマについて考察・分析を行っていく。

第3章と第4章は主に一つ目のテーマに関する考察である。第3章は、情報源の表出をめぐるいくつかの基本概念——「情報」と「情報源」——を定義し直し、中国語の共通語（“普通话”を指す。以下、単に「共通語」と表記する）において情報源を表出する「証拠構造」・「証拠素」・「証拠策」を見出す。それを踏まえた上で共通語の証拠性システムを提示し、類型論的な位置づけを行う。さらに、①中国語の話者は証拠素・証拠構造・証拠策を手がかりにして、情報の出处や入手ルートを了解する、②中国語には〈伝聞〉を表わす証拠素もしくはそれに近いものが存在し、〈伝聞〉と〈その他〉という2選択の証拠性システムを持つ、と結論づける。

第4章では、第3章で提示した共通語の〈伝聞〉の証拠素である“说是”についてより精密な記述をする上で、もともと伝達動詞であった“说”が“是”と結合して証拠素へシフトしたメカニズムを解明する。さらに、“说是”節の後によく逆接的な内容が続く現象はどこに起因するのか、また“说是”だけを〈伝聞〉を意味する語句から取り上げて「証拠素」と認定する理由についても詳しく説明する。

第5章以降は事例を取り上げ、一部の機能語・構文の成立が情報源の表出に動機づけられていることを論じる。

第5章と第6章は、中国語の方言である呉語に属する上海語と閩語に属する台湾語における〈伝聞〉を表す形式の派生義について、情報源の表出に関連付けて変容の過程を分析する。第5章では、上海語において「三人称単数代名詞＋伝達動詞」の“伊讲”が文末に現れた場合、情報の情報源を選ばず、単に意外性を表すという用法に注目し、その原因を明らかにする。第6章では、平叙文・命令文・疑問文の文末に用いられる台湾語の“讲”を取り上げ、この3種類の文に現れるときの共通点を「注意喚起」と認定して、なぜ文末の“讲”がこの方向に拡張してきたのかに

ついて仮説を立てて検証する。

第7章では考察の焦点を〈伝聞〉から〈推論〉に移す。同種でない情報源の表出形式が一つの文の中に共起することは可能であるが、どれがより広いスコープを取るかによって、情報源表出形式の意味機能の拡張が起きるか否かが決められる。第7章は上海語の事例を提示しながら、〈推論〉を表す形式“勳”が程度副詞の“太”の要求する〈直接経験〉より広いスコープを取る場合における、構造全体が「感嘆」という強意の訴えかけを表すメカニズムを解明する。

第8章では情報源の提示が最も求められると思われる、他者（第三者）に内在する状態への言及に関して、情報源の表出のしかたを切り口にして、証拠策の使用について考察する。コーパス調査の結果に基づいて、連用修飾語における内在する状態の表現のしかたおよびその頻度をタイプごとに提示し、他者に内在する状態を表すときに〈直接経験〉・〈推論〉・〈知覚〉の情報源が表出されることを分析する。そのことから、とりわけ他者に内在する状態に言及するとき、情報源が如何に関わっているのかが明らかになる。

これらの事例研究(特に第5章から第7章)から窺えることが一つある。それは、実証的情報源から由来した情報に、伝聞的・推論的な情報源を示す言語形式が関与すると、その言語形式が情報源を示さなくなり、一律に心的態度あるいは聞き手目当てのモダリティの領域に移行するということである。

ちなみに、〈推論〉と〈伝聞〉の情報源表出形式が〈実証的情報源〉由来の情報に付く現象だけを取り上げる理由は、他の組み合わせ——〈推論〉・〈伝聞〉に〈実証的情報源〉の形式が関与する組み合わせ、〈伝聞〉に〈推論〉の形式が関与する組み合わせ——は、ウソを付く発話内容になるか、そもそも中国語として成立しないのどちらかだからである。また、上海語の“伊讲”・“勳太 AP 噢”および台湾語の“讲”を分析対象とするのは、これらの形式が情報源表出形式の意味・機能拡張（機能語・構文への転化）の具体例として、現段階では最も典型的なものだと考えられるからである。

第9章では、各章の主な結論をまとめ、更なる一般化を行う。

1.4 例文・言語資料について

本研究中に用いる例文は、主に①CCL（北京大学中国語学研究中心－現代漢語語料庫）、②日中対照コーパス（北京日本学研究中心2003年版）、③出版物・インターネットで採取した文、ならびにテレビ番組などから書き起こした文、④参考文献に掲載されている例文、⑤筆者の調査により入手した文である。原則的にそれぞれの出典を明記する。なお、出典が記されていないものは⑤または筆者による作例であるが、すべて母語話者のネイティブチェックを受けている。

第2章 証拠性に関する研究史の概観

本章は証拠性に関する先行研究の概観を目的とする。§2.1 では一般言語学の立場から証拠性を考察した先駆的な論考および最新の研究動向をレビューする。§2.2 では、中国語に焦点を当てて、中国語に基づいた証拠性の枠組みと証拠性の概念を用いて行った事例研究を紹介しながら、理論の枠組みにかかわる問題点を指摘する。

2.1 「証拠性」の言語学への導入と取り組み

「証拠性」は広義的な捉え方と狭義的な捉え方とがある。前者は情報の入手方法のあらゆる手段による表出に関心を寄せているが、後者は「証拠性」を情報の入手方法を文法的手段で言語化する現象に限っている¹。従って、広義の「証拠性」は意味論的・語用論的な現象と見なされているのに対して、狭義の「証拠性」は文法範疇である。

2.1.1 研究テーマとしての「evidential」の確立

アメリカの言語学者である Franz Boas は、1911 年に出版した『アメリカのインディアン語の手引き (Handbook of American Indian Languages)』の中で、ネイティブ・アメリカンの言語に属する Kwakiutl 語では「ある人が病気にかかった」という情報を伝えるにあたって、話し手が目撃していない限りは、情報を知り得た手段——伝聞か推論か夢か——を動詞に後置する接辞を用い、情報自体とともに提示しなければならないと述べた。同じ年に発表した別の著書では、これらの接辞を「情報源に関する接辞」と位置づけた。「証拠性 (evidentiality)」という用語は当時まだ用いられていなかったが、すでにこういった言語現象に気づいていたことが窺える。Boas の『Kwakiutl 語法』(1947)では、Kwakiutl 語に知識の出所および知識の

¹ Ekberg & Paradis 2009 は「Evidentiality in linguistics concerns how the source of information is expressed in linguistic communication, whether grammatically coded, lexically coded or merely inferred」と述べている。そこから分かるように、文法的なコーディングのみならず、語彙的表出ないし含意される情報源も evidentiality として取り扱っているのも主な流れの一つである。

確信度 (certainty) を表す接辞があると述べられている。その中で、「evidential」は推論のマーカの意味で用いられていた。そのあとに発表された Roman Jakobson の『Shifters, verbal categories, and the Russian verb』(1957) では、evidential が動詞にかかわるカテゴリの「仮のタグ」として導入され、その下に伝聞・夢・推論・過去の経験 (記憶) という4つの証拠性タイプが挙げられている。1960年代の半ばから、「evidential」が専門用語として言語学研究の脚光を浴びはじめた²。

証拠性がテーマにされた最初のシンポジウムは W. Chafe と J. Nichols の主催の下で 1981 年にアメリカで開催された。1986 年に出版されたシンポジウムの論文集『Evidentiality: The Linguistic Coding of Epistemology』は「南米・北米の言語における証拠性」・「他の地域の言語における証拠性」・「英語と一般言語学の視点から見る証拠性」という3つのサブテーマに分かれており、18本の論文が収録されている。これらの論文を見ると、当時の研究者が evidential(ity)で指した言語形式や現象は必ずしも同質のものではないように思われる。

1990年代以来、証拠性に関する研究は徐々に盛んになってきた。1998年に開かれた第6回語用論国際シンポジウムでは、証拠性をめぐる分科会が2回行われ、証拠性の特集としての『Journal of Pragmatics』第33巻第3号(2001年)に、その分科会に提出された論文が7本掲載された。また、2005年にスウェーデンのルンド大学で開催され、Evidentiality: theoretical and applied を表題にしたワークショップに提出された論文の中の5本が、『Functions of Language』第16巻第1号(2009年)に掲載された。その内容は、証拠性にまつわる理論的な見直しから、証拠性の表現に関する子供の使用状況と解釈まで多岐な分野に跨っている。

Aikhenvald 2004 は情報ソースが文法的手段でどう言語化されるかをこれまで最も網羅的に探った研究である。この研究では、世界各地の500種以上の言語から用例を収集し、証拠性の体系・情報源のマーカ・証拠性の意味的拡張・他の文法範疇とのかかわり・証拠素 (evidential) の語源など、数多くのテーマが扱われた。

以下、その後の研究に最も示唆を与えてきた Chafe 1986、Anderson 1986、Palmer 2001、Aikhenvald 2004 の4点および最新の研究動向に関する2点を中心に、それぞれの「証拠性」の捉え方を紹介した上で、その成果について検討を加える。

² 詳しくは Jacobsen 1986 を参照。

2.1.2 広義的証拠性 : Chafe 1986

Chafe 1986 は証拠性の視点から日常会話と学術的文章との相違を探ることを目的としているが、そこで提示された「証拠性」の定義および「証拠性」にかかわる意味パラメーターが広義的証拠性として最も啓発的で代表的な見解となっている。

共時的には、一つの言語表現は「証拠」の表出にとどまらず、二つ以上の証拠性の下位類に跨ることが可能であること、②通時的な考察から分かるように、情報に対する思考次元の間に移行することがよくあること、という2点を指摘していたChafeは *evidential* の文字通りの意味（即ち「証拠」）に拘らず、「知識または情報に対する話し手の態度を反映する言語表現」を「証拠性表現」(*evidential*)と呼び、「証拠性」を最も広義的に捉えている。氏は「証拠性」には図1に示すいくつかの概念 (*notion*) が含まれると主張している。

〈図1〉 Chafe 1986 が提示した「証拠性」の構成

知識のソース		知る方法		知識との配合度	
source of knowledge		mode of knowing		knowledge matched against	
				信頼できる <i>reliable</i>	
???	→	信念 <i>belief</i>	→	知識 <i>knowledge</i>	
証拠 <i>evidence</i>	→	帰納 <i>induction</i>	→		→ 言語的資源 <i>verbal resources</i>
言葉 <i>language</i>	→	伝聞 <i>hearsay</i>	→		→ 予期 <i>expectation</i>
仮設 <i>hypothesis</i>	→	演繹 <i>deduction</i>	→		
				信頼できない <i>unreliable</i>	

「知識」とは、*evidential* に修飾 (*qualify*) される基本的な情報のことである。その知識に対して、話し手はどれほど信頼できるかといった判断を下す。それは「信頼できる／信頼できない」という連続体のことである。「信念」「帰納」「伝聞」「演繹」という「知る方法」とは「知識」を獲得した方法を指す。そのなかに、「信念」以外の「知る方法」はそれぞれ唯一の「知識のソース」と対応している（信念の「知識ソース」は不明）。そして知識がどれほど言語的資源または予測にマッチするかということについては「知識との配合度」で考える。

Chafe は次の例で以上の概念を説明している。なお、下線は筆者が Chafe の主張

第2章 証拠性に関する研究史の概観

に基づいて加えたもので、evidential に当たる。下線以外の部分は「知識」と理解して良い。その説明から分かるように、Chafe は「知識のソース」「知る方法」「信憑性」「配合度」を表す言語形式——*I feel, probably, might, I think, must sort of, oddly enough* など——をすべて証拠性表現と見なしている。

	知識の ソース	知る 方法	信憑性	配合度
(1) a. <u>I feel</u> something crawling up my leg. ‘ <u>何か</u> が足に這い上がっている <u>気が</u> <u>する。</u> ’	感覚の 証拠	帰納	—	—
b. It’s <u>probably</u> a spider. ‘ <u>おそらく</u> クモだろう。’	—	—	高い	—
c. It <u>might</u> be a spider. ‘クモ <u>かもしれない。</u> ’	—	—	低い	—
d. <u>I think</u> it’s a spider. ‘クモだ <u>と思う。</u> ’	—	信念	—	—
e. It <u>must</u> be a spider. ‘ <u>きっと</u> クモ <u>にちがいない。</u> ’	明言しない 証拠	帰納	—	—
f. It feels <u>sort of</u> creepy. ‘ <u>むずむずする</u> ような感じがする。’	—	—	—	不完全な マッチ
g. <u>Oddly enough</u> it feels good. ‘ <u>おかしな</u> ことに、気持ちいい。’	—	—	—	予期に 相反

胡壮麟 1994 は Chafe の提示した枠組みに次の5点の修正を加えた。①「信念」に対応する「知識のソース」の「???」を「文化的証拠」と名づけたこと。それは信念が常に過去の経験に依存しており、あらゆる個人・団体・社会の経験が最終的に文化として蓄積されるからだという。②「知識のソース」としての「証拠」と「言葉」はあまりにも日常的すぎて不明瞭であるため、「五感的証拠」と「言語的証拠」に変えるべきだということ。③「知識のソース」と「知る方法」は互いに密接し、

截然と分けられないことが多いため、一つのカテゴリにしたほうが良いということ³。
 ④「知る方法」のどれかが他より信頼できるというような誤解がされないように、「知る方法」から「信憑性」への4つの矢印を一つにしたこと。⑤「知識との配合度」というカテゴリを「信憑性」へ合併させたこと。

以上で述べた Chafe 1986 および胡壮麟 1994 の修正点について、次の2点が言える。まず、胡壮麟 1994 の指摘どおり、「知識のソース」と「知る方法」は基本的に一対一の対応関係にあるため、異なるカテゴリに属させることが必要とは思えないことである。次に、「信憑性」と「知識との配合度」についてである。「証拠性」を広い意味で捉えないと「証拠」だけを取り扱うことになってしまうのではないかと Chafe 1986 が指摘しているが、Aikhenvald 2004 の批判の通り、それは evidential に含まれる「証拠」に対する誤解である。狭義的な証拠性は日常言語の意味での「証拠」とはまったく別のものと考えべきである。また、「知識のソース」もしくは「知る方法」を表す表現の中には、確信度・言語表現の適切性・予測との関係を含意するものがあるとは言え、必ずしもそういった意味が含まれるとは限らない。従って、「信憑性」と「知識との配合度」まで含めた広義的な「証拠性」には、内実の違うものが混在してしまいがちなのではないかと懸念される。

こういった疑問点が残されているものの、証拠性がそれほど文法化されていない言語における証拠性的意味の研究に Chafe 1986 が重要な示唆を与えてきたことは否定できない。

2.1.3 狭義的証拠性：Anderson 1986

もっとも広義的証拠性を主張している Chafe 1986 とは対照的に、Anderson 1986 はより狭義的な立場を取っている。Anderson の考えでは、evidential は文法的現象であり、典型的な evidential は次のように規定されている。

- ① a. evidential とは、話し手が利用可能で、ある事実に関する陳述を裏付けるものの種別を示すもののことである。種別の表明というのは、次の何れ

³ §2.1.5 に紹介する Aikhenvald 2004 も「知識のソース」と「知る方法」を一つにして、「情報源」と呼ぶことにしている。以下、説明がない限り「情報源」を「情報の入手ルート」や「情報を知る方法」として理解されたい。

かを明確化することである。

- ・直接的証拠を観察（推論を必要としない）
 - ・証拠に基づく推論
 - ・推論（証拠は特定せず）
 - ・論理や他の事実に基づく論理的予測
 - ・証拠なら、それは例えば聴覚的のものなのか、それとも視覚的のものなのか
- b. evidential 自体は文の主要な述部（main predication）にはならず、何らかの事実に関する陳述に加えられた限定化成分になる。
- c. 語用論的な推論ではなく、evidential は、それ自体の基本的な意味として、①a で示された証拠の意味を有する。
- d. 形態論的には、evidential は語形変化に用いる語尾や接辞、または自由な統語要素であるが、複合語や派生の形式ではない。

更に、以上①a～d の4点から次のことが推論できると Anderson 氏はしている。

- ② evidential は普通、現実（realis）の断言には用いられるが、非現実の文や仮定の文には用いられない。
- ③ a. 陳述された事実が話し手と聞き手の両方ともに直接観察された場合は、evidential はほとんど使われない。ただし、特別の強調や驚きの意味で使われることがある。
- b. 話し手がある出来事へ意識的に参与している／した（つまり、話し手が自律的な動作主もしくは意識的な経験者である）場合、その出来事についての知識は自然に直接経験と見なされ、evidential が多くの場合に省略される。
- c. 疑問文における第二人称はよく陳述における第一人称と同様に扱われる。（ただし、その場合は、典型的な evidential ではなく、普通の感覚動詞を含むケースも有りうる）

Anderson 1986 の枠組みは、Chafe 1986 の「知識との配合度」を含まずに、より狭い意味で「証拠性」を捉えている。その上、自立語やフレーズなどの形式で証拠

性的な意味(=ある事実に関する陳述を裏付けるものの種別)を表す言語において、その形式が特定の文において **evidential** であるか否かを判別するための基準がいくつか提示されている。とりわけ、①b から分かるように、例えば X という形式が共時的に感覚動詞の用法もあれば、**evidential** の用法もあるとする。もしある文において、X にストレスを置くことができるならば、X は文の主要な述部であり、**evidential** にはならない。次の文の大文字で示される語はストレスが置かれることを示し、[] は **evidential** を示す。(2)d ~ (2)f は証拠性表現的な用法であるのに対して、(2)a は主要な述部に用いられる感覚を表す語で、(2)b と (2)c は感覚動詞的な用法である。

(2) a. It's sour.

‘それは酸っぱい。’

It stinks.

‘それは嫌な臭いがする。’

b. It **SMELLS/LOOKS/FEELS** fresh.

‘それは {匂い／見ため／触感} からすると新鮮だ。’

c. That fruit smells like dried fish. (I wonder what chemicals make it have that effect.)

‘あの果物は干し魚の臭いがする。(何らかの化学物質がその効果をもたらしたのかも知れない)’

d. It [smells] like dried fish. (=‘I think it's dried fish.’)

‘それは干し魚のようだ。’ (=私はそれを干し魚と思う。)

e. It [smells/looks/feels] **FRESH**.

‘それは {匂い／見ため／触感} では新鮮だ。’ (=それは新鮮なようだ。)

f. [I smell] a pie baking.

‘パイを焼いている臭いがする。’

(Anderson 1986)

また、③では **evidential** が用いられなかったり、省略されたりする場合がどんな場合なのかが言及されている。そこから、明示される **evidential** がなくても〈直接経験〉や〈知覚〉など **firsthand** 的な証拠性の意味は多くの場合に無標と理解して

も良い。

さらに、evidential の用法を持つ形式は②および③の a・b で規定された文脈——即ち、非現実的な事態や話し手自身が参与したり、直接に観察したりした事態など——においてあえて現れた場合、証拠性を表すものから逸脱して、他の意味機能を獲得すると言える。例えば、非現実と思われる命令文に証拠性表現が用いられると、情報源の提示と異なる意味機能が生じると予測できる。

2.1.4 命題目当てのモダリティの下位類としての証拠性：Palmer 2001

Palmer 2001 はモダリティを命題目当てのものとイベント目当てのものと2種類に分け、それぞれ命題に対する判断とこれから起こりうる何らかの動作・行為に対する話し手の態度を示すものと考えている。そのなかで、認識的モダリティと証拠性は両方とも命題の真理値もしくは事実性の状態に対する話し手の態度に焦点を当てると考えられるため、同じく命題目当てのモダリティに属すると主張している。両者の違いは、認識的モダリティは命題の事実性の状態に対する判断を表すが、証拠性は命題の事実性をめぐる話し手が所有している証拠を表すというところにあるという。更に、証拠性には知覚 (sensory) と報道 (reported) という二つの下位タイプがある。

〈図2〉 Palmer 2001 に見られる命題目当てのモダリティ

命題目当てのモダリティ (Propositional modality)
認識的モダリティ (Epistemic)
推論的 (Speculative)
演繹的 (Deductive)
仮定的 (Assumptive)
証拠性的モダリティ (Evidential)
報道 (Reported) : 報道(2)、報道(3)、報道 (一般) ⁴
知覚 (Sensory) : 視覚 (Visual)、非視覚 (non-visual)、聴覚 (Auditory)

⁴ 「報道」は伝聞のことであり、又聞き (quotative) を意味する「報道(2)」と、2人以上を介した伝聞 (hearsay) を意味する「報道(3)」と、一般的知識 (folklore) を意味する「報道 (一般)」という3つのサブカテゴリを有する。

〈推論〉・〈演繹〉・〈仮定〉は英語でそれぞれ助動詞の *may, must, will* で表すという。そのなかで、〈推論〉はあらゆる可能な結論を、〈演繹〉は唯一の可能な結論を、〈仮定〉は合理的な結論を表すと述べている。また、〈演繹〉と〈仮定〉の相違といえ、前者は観察の結果に基づく推測であるのに対して、後者は経験や一般的な知識からの推測であることにあるという (Palmer 2001:25)。

以上で述べたことから分かるように、認識的モダリティと証拠性的モダリティとの間に境界線を引くことは容易ではない。まず、認識的モダリティは「証拠」とのかかわりが皆無とは実際には言い難い。例えば、〈演繹〉と〈仮定〉は、いずれも「観察」かもしくは「経験」や「一般的知識」といった「証拠」らしきものにかかわっているため、「証拠性的モダリティ」を人為的〈報道〉と〈知覚〉だけに限定しない限り、「証拠性的モダリティ」にも属すると思われる。それから、同じ形式でこの二つのカテゴリの意味を表せるケースが見られる。Palmer 2001:9 では、〈推論〉を表す英語の助動詞の *may* と〈演繹〉を表す *must* に相当する *sollen* と *wollen* に証拠性表現としての用法もあることを示す次の例が挙げられている。

- (3) a. Er soll steinreich sein.
 He SOLLEN+3SG+PRES+IND very rich be
 ‘He is said to be extremely rich’
- b. Er will eine Mosquito abgeschossen haben.
 he WOLLEN+3SG+PRES+IND a Mosquito shot down have
 ‘He claims to have shot down a Mosquito’ (plane) (Palmer 2001:9)

(3) a は〈伝聞〉から知り得た情報であり、b は文の主語が主張した情報である。こういった情報源はそれぞれ助動詞の *sollen* と *wollen* によって表出される。

Palmer 2001:35–36 は純粋な証拠性的モダリティを〈報道〉と〈感覚〉に限定しており、それに〈仮定〉などをも含めるものを「拡張的な証拠性の体系 (extended evidential system)」としている。この処理は言うまでもなく、Palmer の認識的モダリティと証拠性的モダリティとの相違に関する捉え方に繋がっている。つまり〈報道〉と〈知覚〉は命題の事実性そのものの状態と関係せず、命題の事実性をめ

ぐる話し手が有する証拠というわけである。ところが、〈報道〉は確かに命題の事実性の状態と無関係のように思われるが、〈知覚〉は決してそうではない。そのことは、〈知覚〉の文は後から取り消すことができないことから分かる。例えば、

- (4) a. *我 看到 小张 在 踢球，
私 見る 張くん しているところ 蹴る ボール
但 我 觉得 不 可能。
しかし 私 思う NEG 可能だ
‘*張くんがサッカーをしているのを見たが、私はそうは思わない’
- b. *我 {估计 / 觉得} 小张 在 踢球，但 我 觉得 不 可能。
予測する 思う
‘*張くんがサッカーをしていると {思う/いう気がする} が、私は
そうは思わない’
- c. 我 听说 小张 在 踢球，但 我 觉得 不 可能。
と聞いている
‘張くんがサッカーをしていると聞いたが、私はそうは思わない。’

(4) c に示すように〈報道〉はキャンセル可能であるのに対して、a の〈知覚〉（具体的には〈視覚〉）は Palmer が言う〈推論〉に当たる b と同様に、キャンセルできない。従って、認識的モダリティと証拠性的モダリティとの区別を、命題の事実性の状態なのか、それともその状態をめぐる証拠性なのかという次元でうまく捉えられるかについては、未だに議論の余地が残されている。

2.1.5 文法的現象との見方：Aikhenvald 2004

Aikhenvald 2004 は、証拠性の働きを情報ソースの提供とし、そして evidential の中心的な意味を情報の入手ルート（＝情報源）と捉えており、言語によって明示しなければならない情報ソースの種別が違ってくると指摘している。

通言語的データが示しているように、他の文法範疇と比べて、Aikhenvald が規定した「証拠性」は独特の特徴を示している。例えば、evidential を使って嘘をつくことができること——つまり、話し手の提示された情報源は事実（話し手がそこか

ら情報を知り得たこと)に合致するが、その情報自体はウソであること——からわかるように、証拠性は話し手の陳述内容の真偽とは別の次元にあるものである。evidential は、伝達情報の真理値に影響しないだけでなく、evidential 自身に真理値があり、否定をされたり、それについて質問されたりすることができるとしている。さらに、evidential そのものが時間的な参照を受けることができるという。また、多くの文法範疇と異なり、情報源は一つの文に2回以上マークすることができ、異なりつつも相容れる情報源から同一の観察者か二人以上の観察者が当該情報を知り得たことを表すのである。

Palmer 2001 とは対照的に、Aikhenvald は証拠性を命題目当てのモダリティから独立させて考えている。通言語的なデータを根拠にして、証拠性を(陳述される命題の確信度にかかわる)認識的モダリティと(発話行為にかかわる)ムードとは別のカテゴリとしている。evidential は信憑性や可能性といった副次的な意味を獲得することが可能であっても、必ずしもそうなるわけではない。ある形態素を evidential と認定するにあたっては、その中心的な意味が情報源を表し、なお且つこの意味がデフォルトの読みでなければならない。また、この読みは語彙的手段で強化したり、他の語彙項目で解釈されたり置き換えられたりすることが可能でなければならない。

これまでの研究者が evidential の多くをモダリティを表す成分と考えてきたのは何故なのか。それは主なヨーロッパ諸言語には本格的な evidential が極めて乏しく、馴染みのある範疇の概念を借用しながら、まだ広く知られていない範疇である証拠性を捉えていたからであると、Aikhenvald は指摘している。

また、証拠性に関する従来の研究には、文法範疇として存在している evidential と情報源を表す語彙項目を同じように見なす傾向が見られる。例えば、英語の一部の挿入句 (parenthesis) を evidential と考えて、「英語にも証拠性がある」と主張している研究がある。Aikhenvald はこのような見方に対して批判的な立場を取っている。その理由として、各言語に情報源を言語化する手段があるからと言って、それが文法範疇としての証拠性が存在することを意味するとは限らないことを挙げている。語彙項目で証拠性的意味を表す言語を証拠性が存在する言語だと認定する考え方は、*yesterday* や *today* などの語彙項目をテンスのマーカであるとして認定するような主張と同様に説得力が欠けるのだという。

Aikhenvald 2004 は evidential を厳密に定義した上で、それまでの証拠性の研究を明快にまとめ、証拠性と関連するカテゴリとのかかわりを体系的に論じたものでもある。しかし、問題がないわけではない。それは、余光武 2010 に指摘されているように、英語のような狭義的な証拠性を持たない言語における情報源の表出の仕方を意味論的な研究として単に位置づけただけであり (Aikhenvald 2004:11)、これらの言語を対象とする証拠性関係の研究を行う価値には触れなかったということであろう。

2.1.6 機能主義的類型論からの是正

これまでの証拠性に関する研究が避けられなかった理論的な問題は恐らく二つに集中している。両方とも文法範疇としての証拠性を持たない言語だからこそ生じた問題である。その一つは、語彙的手段で情報源を表出する言語において、証拠性の研究を行う価値がどれくらいあるのかという問いである。もう一つは、証拠性と必然性・蓋然性を主な意味とする認識的モダリティとの関係である。以上の二つの問題について、Boye & Harder 2009 と Cornillie 2009 はそれぞれ示唆に豊んでいる論考である。

まずは一つめの問題であるが、Aikhenvald 氏などが証拠性を純粋な文法範疇として扱っているのに対して、Boye & Harder 2009 はある範疇を定義するにあたって構造的基準を援用すると、この範疇を把握するために必要な関連現象が排除されてしまう恐れがあると批判した。その典型例として、情報源を意味する小辞 (particle) を evidential だと Aikhenvald 2004 が認定している一方で、同じく情報源を意味し、動詞だけを修飾する副詞と対照的である文副詞 (sentence adverbial) を evidential から排除したことが挙げられる。このような「差別」は妥当ではなく、「用語上の理由以外に思い当たらない」と批判し、その理由をこういった文副詞は多くの側面において evidential と認められたものと極めて類似するのみならず、語源が同一であるケースすら珍しくないからだとしている。

Boye & Harder 2009 はそこで evidentiality を、「時間」「数」「人称」などと同様に、特定の言語構造に依存せず、専ら意味を反映する「機能-概念本質領域 (functional-conceptual substance domain)」として位置づけた上で、そこを出発点にして考察・議論を展開すべきではないかと主張した。ただし、それを文法的表出

vs.語彙的表出、意味論的解釈 vs.語用論的解釈、二次的情報（即ち情報源は何なのかを示し、付随的なもの） vs.一次的情報（即ち命題内容）というふうに分けて考えることは証拠性のような範疇の記述にも意味があると述べている。機能こそが文法的ステータスを決めており、特定の類の情報——情報源に関するものがこれに当たる——を一次的情報の「道連れ」のようにパッケージングするため、拘束・音韻的簡略化・義務的な表出は皆、本来の「二次的情報」としてのステータスの自然な反映と考えられる、と述べた。

Boye & Harder 2009 は (Chafe 1986 などと異なり) evidentiality を「情報源」より拡大的に解釈せず、より「語彙的」と思われてきた情報源の表出手段に対しても、証拠性にまつわる研究の一環として、「二次的情報の表出」という機能的な要因と文法化との相関関係から研究を行う妥当性・必要性を理論的に裏付けたものである。Aikhenvald 2004 などの基準で文法範疇としての証拠性を持たないと思われる言語においても、証拠性の研究を展開する可能性を示したと思われる。

次に二つめの問題についてである。文法範疇としての証拠性を持っている言語だけを対象にして証拠性を考察した Aikhenvald 2004 のデータからも分かるように、証拠性と命題が真である蓋然性・必然性を内包する認識的モダリティとは別々のカテゴリであり、必ずしも相関関係がない。また、証拠性と認識的モダリティのそれぞれの定義からも、決して区別が付かないカテゴリではないと思われる。ところが、文法範疇としての証拠性を持たない言語における情報源の表出に関する先行研究によく見られるように、表出される情報源と情報自体の真偽に対する話し手の評価の間には緩い対応関係が確認されている。それは何故であろう。

証拠 (evidence) の信憑性 (reliability) に対する評価と命題の真実らしさ (likelihood) に対する評価は、一見混同されがちである。そこから両者の対応関係が生まれるのではないかと推測される。しかし、その対応関係はなぜ緩いものなのか。また、「百聞は一見にしかず」のような日常の経験がある一方、〈伝聞〉の信憑性が〈視覚〉に劣っているかどうかは決して自明でもなければ、言い切れることでもない（詳しくは § 4.5.1 を参照）。Cornillie 2009 は、このことは証拠 (evidence) の共有ステータス (shared or non-shared status) によって決定されると述べた。証拠の来源 (sources of evidence) は；①話し手のみアクセスできるもの、②話し手も他の参加者もアクセスできるもの、③話し手以外の参加者のみアクセスできるものと、3通りの可能

性があるが、その中で、②の場合は最も信憑性の高い情報源であり、また①と③は信憑性が安定していないという考えが提示されている。

2.2 中国語の「証拠性」の全貌を探るための研究

中国語における「証拠性」に関する先行研究は、主な流れが二つある。一つは、中国語の「証拠性」の全貌の解明を目的とする研究である。もう一つは、「証拠性」というコンセプトを用いて中国語の事例分析を目的とするものである。

以下この二つの流れにある代表的な先行研究をレビューする前に、まず *evidentiality* の中国語訳について断っておきたい。*evidentiality* の中国語訳としては、“传信（范畴）”（张伯江 1997、陈颖 2009、乐耀 2011a, 2011b など）・“实据性”（牛保义 2005 など）・“言据性”（房红梅 2006）・“示证性”・“可证性”（张成福・余光武 2003、胡壮麟 1994 など）のようにいくつか挙げられる。このように、研究者によって用語が違ったりするだけでなく、*evidentiality* に対する各研究者の理解も必ずしも一致するものではない。

一般言語学の研究としての証拠性の研究については胡壮麟 1994 や严辰松 2000 や牛保义 2005 などにおけるこの概念の紹介が挙げられるが、中国語の言語事実にもどう適用するのかについてはあまり深く評論されていないため、ここではレビューを割愛する。以下に中国語の証拠性の全貌を探ろうとした研究だけを取り上げて紹介しつつ、証拠性という概念にまつわる問題点に焦点を当てて検討を加える。なお、中国国内における“传信范畴”研究をほぼ網羅してレビューしたものには乐耀 2011a があるが、各研究の疑問点についての以下の指摘は乐耀 2011a には見当たらない。

2.2.1 张伯江 1997 および李讷ほか 1998 における“传信范畴”

张伯江 1997 は Chafe 1986 と Anderson 1986 などを踏まえ、“传信范畴”について情報源の信憑性に重きを置き、特定の文に関する現実世界にある根拠に対する人々の関心を反映するものであり、多くの言語に陳述をめぐる証拠の信憑性によってパラダイムをなす形式が存在すると述べた。その上で、中国語における“传信”表現は主に；①情報源を表す挿入句、②デキゴトの事実性 (*actuality*) を表す副詞、

③話し手の確信度を表す〈説明〉〈断言〉の文末語気助詞、という3種類があり、その中で③に関する研究において“传信范畴”というコンセプトが最も啓発的であろう、という考えを示した。最後に“的”を「確信 (certainty) のマーカー」、「吧」を「非確信 (uncertainty) のマーカー」と見なせる可能性についても言及した。

その応用篇とも思われる李讷・安珊笛・张伯江 1998 は“传信 (evidential) 表达系统”を情報源の信憑性を反映する言語表現として位置づけながら、中国語の文末の“的”はあるイベントに対する確信 (certainty) という心的態度を表す“传信标记”だと主張した。

张伯江 1997 および李讷ほか 1998 における“传信范畴 (evidentiality)”に対する理解は、後の中国語の研究者に大きな影響を与えている。ところが、そこに存在する evidentiality を情報源そのものではなく、情報源あるいは証拠の信憑性に直結させるという考え方には証拠性に関する重大な誤解が生じていると思われる。この誤解を生み出した原因は複数ある。

まず第一に、张伯江 1997 および李讷ほか 1998 が最も啓発を受けたと思われる先行研究の一つとしての Chafe 1986 は「証拠性」を拡大解釈し、その内包する要素を「情報源」から「情報に対する話し手の態度全般」にまでシフトさせた。この拡大解釈を必ずしもそのまますべて受け継いではいないが、张伯江 1997 および李讷ほか 1998 は情報源・証拠の信憑性を“传信范畴”の中核にしている。

第二に、Chafe 1986、张伯江 1997 および李讷ほか 1998 などがなぜ evidentiality を拡大解釈せざるを得なかったかと言うと、彼らの対象言語である英語や中国語には「情報源」を表す文法的形式——つまり接辞や屈折や小辞 (particle) ——がそもそも顕在しない（と思われてきた）し、その代わりに（少なくとも中国語の場合）情報の真偽に対する話し手の心的態度を表す表現が豊富だからである。また中国語の場合、「情報源」を表す挿入句は「独立成分」と見なされ、従来文法研究の対象として扱われる価値がそれほど大きくないと思われていたからである。

第三に、中国語の“情态 (モダリティ)”と“语气 (ムード)”との関係について研究者の間にまだ一致する見方が得られていないという現状において、本来モダリティかムードのいずれかで説明のつくはずの現象を、拡大解釈した「証拠性」に関連付けた憾みがあるということが挙げられる。文末の“的”に限って言えば、“的”によって伝達される話し手の確信という態度は主に認識的モダリティにかかわる

表現として考えるほうがより妥当かもしれない。極端に言うと、李讷ほか 1998 は「広義的」な証拠性関係の研究というより、むしろ認識的モダリティおよびムード関係の研究と見るべきである。例えば、当該論文の第四節では“我们说句末‘的’是传信标记，它所在的句子就应该是非事件性的（文末の‘的’が証拠性のマーカーであるからには、それが所在する文はイベント性がないものであるはず）”と述べられており、“的”に関して、他動性が低いこと（ストーリーの本筋より背景を叙述するために用いられること、アスペクト的に終結点がない[つまり *atelic* である] こと、目的語の個性性と受影性が低いこと、または文体的にナレーションより会話のほうにより用いられること）が確認されている。しかしこれは情報源を表すものにはほとんど適用できない。

- (5) a. ?是 我 叫住了 她 问 她 一些 情况 的。
 である 私 呼び止める-*PERF* 彼女 尋ねる 彼女 いくつか 事情 *FP*
 (李讷ほか 1998)

- b. 听说 他 叫住了 她 (,)
 と聞いている 彼 呼び止める-*PERF* 彼女
 问了 她 一些 情况。
 尋ねる-*PERF* 彼女 いくつか 事情
 ‘彼は彼女を呼び止め、彼女にいくつかの事情を訊ねたそうだ’

- (6) a. *是 她 来 找 一 个 人 的。 (李讷ほか 1998)

である 彼女 来る 訪ねる 一 *CL* 人 *FP*

- b. 听说 她 来 找 一 个 人。
 と聞いている 彼女 来る 探す 一 *CL* 人
 ‘彼女はある人を訪ねて来たそうだ’

(5)a は“的”が終結点を持つ〈完了相〉を表すアスペクト助詞“了”と共起しないことを、(6)a は目的語の個性性と受影性が高い場合“的”が用いられないことを示しているものである。それらに対して同様の状況において、〈伝聞〉を表す“听说”に置き換えた(5)b と(6)b はいずれも自然である。そこから分かるように、“的”の振舞いは「情報源」とは無関係である。

2.2.2 张成福・余光武 2003 の挿入句に関する研究

张成福ほか 2003 は张伯江 1997 および李讷ほか 1998 と類似し、“传信范畴”を“语言中表达与信息来源可靠性程度相关的意义[……]的语法范畴（「情報源の信憑性の度合いに関する意味を表す文法範疇」）”と定義しているが、情報源を表す形式だけを証拠性研究の対象としている。彼らは情報源を表す挿入句を考察し、〈表

〈表 1〉 张成福ほか 2003 に提示された中国語の情報源と挿入句

証拠性項目			挿入句例示
現行的・目撃	叙実機能		不用说（言うまでもない），不瞒你们说（正直にいうと），不可否认（否定できない），大家知道（周知のように），说实在的（実を言う）
	まとめ機能		总而言之（総じて言う）と，总起来讲（総じて言う）と，总括起来说（まとめて言う）と，概括的讲（掻い摘んで言う）と，一言以蔽之（一言でまとめると）
引用	引用機能		听说（聞くところによると），据说（聞くところによると），有人说（ある人が言うには），人们都说（人々が言うには），古人说得好（昔の人が言うには），他们认为（彼らが思うには）
推論	推測機能	帰納的	由此看来（この点から見れば），由此可见（このことから分かるように），显而易见（はっきりしていてすぐ分かる）
		演繹的	一般来说（一般的に言う）と，一般情况下（一般的に），照理说（理屈から言えば），推而广之（押し広げて言う）
	非確信的		我想（私は～と思う），我觉得（私は～と思う／感じる），就我看来（私の見方では），依我看（私に言わせれば），看得出来（～と見える）
	例示的解説・換言機能		拿 X 来说（X を例にとって言う）と，像 X（X のように），这就是说（つまり）と，换句话说（換言すれば），相比之下（それと比較すれば），这么说吧（言い方をこのように変えると）
伝聞	伝言機能		据 X 分析（报道、调查……）（X の分析/報道/調査によると），按 X 的说法（X の情報によると），听 X 说（X から聞いた話では）

1) に示すように、中国語においては〈現行的・目撃〉・〈引用〉・〈推論〉・〈伝聞〉という4種類の情報源が区別されており、これらの4種類の情報源を表す挿入句がそれぞれ特定の機能と繋がっている、と主張している。

談話機能によって挿入句を分類すること自体は有意義な試みではあるが、張成福ほか2003には大きな問題点が幾つか存在している。まず〈表1〉に挙げられている諸々の機能はそれぞれ特定の情報源と対応しているとは限らないことが指摘できる。そもそも、「叙実機能」・「まとめ機能」・「例示的解説・換言機能」などに分類される挿入句は情報源を示すものなのだろうか。例えば「叙実機能」と「まとめ機能」の挿入句は、あくまでも命題に対する話し手の確信を表すに過ぎず、それが〈現行的・目撃〉という情報源と関係があるとは思えない。

(7) 不用说, 这 时候 顾客 必定 愤然 离去,
言うまでもない この とき 顧客 必ず 憤然として いる 去る
再 也 不 踏进 这 家店 门,
二度とも NEG 踏み込む この CL 店 入口
而且 十分之八九 会 四处 宣扬 不利 的 言语。(CCL)
しかも 十中八九 するものだ 至る所 宣伝する 不利だ SP 言葉
‘言うまでもないが、そのときお客さんは必ず憤然として去って、二度とこの店に入ろうとしないだろう。しかも十中八九悪いクチコミをあちこちに広げるだろう’

(8) 一言以蔽之: 对 “市民社会” 的 研究 在 中国 实证
一言でまとめる に対する 市民社会 SP 研究 における 中国 実証的
话语 成長 中 的 支撑 作用 可能 会
言論 成長 なか SP 支える 働き かもしれない するものだ
大于 其 作为 一 个 具体 课题 的 启迪 作用。(CCL)
より大きい その として 一つ CL 具体的だ 課題 SP 啓発 働き
‘一言で言うと、「市民社会」に関する研究は、具体的な研究課題として
もたらず啓発よりも、中国の実証的言論の成長の中で発揮するサポート
の効果がより大きいかもしれない’

上の例で説明すると、(7)におけるお客さんの行動や(8)における「サポートの効果がより大きい」ことは現場の観察に基づく情報でもなければ、目撃されているものでもない。あえて情報源を特定するならば〈推論〉に当たると思われる。反対に〈推論〉と結び付けられている“拿 X 来说”の実例(9)を見てみると、その後に出ている情報は決して〈推論〉から知り得たものではない。

- (9) 另一方面，发达国家（地区）总体上 也 加大了
 一方 发展国 地域 全体的にも 強化する-PERF
 反倾销 的 力度。拿 美国 来说，1995 年，美国
 アンチ・ダンピング SP 力 取る アメリカ 来る 言う 1995 年 アメリカ
 发起 的 反倾销 调查 为 14 起，
 発動する SP アンチ・ダンピング 調査 である 14 CL
 2001 年 则 高达 74 起。 (CCL)
 2001 年 なら に昇る 74 CL
 ‘一方、発展国も全体的にアンチ・ダンピングを強化している。米国を例
 に取って言うと、1995 年に米国が発動したアンチ・ダンピング調査は 14
 件あり、2001 年は 74 件にも昇っていた’

以上の実例から分かるように、「叙実機能」・「まとめ機能」・「例示的解説・換言機能」などに分類される挿入句はやはり情報源を特定化するための手がかりにならない。よって、談話機能と情報源との間に対応関係があるという主張は恣意的なものに思われる。

さらに、〈表 1〉に挙げられている〈引用〉と〈伝聞〉の区別が付きにくいことも指摘できる。恐らく張成福ほか 2003 は〈引用〉の場合、引用される元の発話者が特定されないのに対して、〈伝聞〉の場合はそれが特定される、と考えているようである。しかし〈引用〉に分類される“他们认为”から窺えるように、人称代名詞が使われている以上は元の発話者がやはり特定できる。ゆえに、〈引用〉と〈伝聞〉との境界線が非常に曖昧である。

最後に、張成福ほか 2003 は“传信策略 (evidential strategies)”という Aikhenvald 氏の用語を援用していながら、情報源を意味する語彙項目を evidential strategies と

している。しかしながら、Aikhenvald 氏が *evidential strategies* と認めているものには語彙項目がない。Aikhenvald 氏は情報源を第一義としないものの、特定の情報源を拡張義 (*extension*) として読み取れる文法形式を *evidential strategies* と呼んでいるのである (詳しくは § 3.1.4 を参照)。

§ 2.1.5 で既に紹介した通り、Aikhenvald 氏はそもそも語彙的手段による情報源の表出を自分の研究視野に入れたい立場である。氏が強調しているように、情報源を表出できない言語は非常に想定しにくいものの、すべての言語は証拠性を文法範疇として持っているわけではない。そこで、ある言語の語彙項目を根拠にして、この言語において区別される情報源を見出すというアプローチは果たしてどれほど有効であろうか。例えば、中国語の場合、語彙項目の“我看到～ (私は～を見た)”・“我听到～ (私は～を聞いた)”・“我闻到～ (私には～においがした)”・“我摸到～ (私は～を触った)”はそれぞれ〈視覚〉・〈聴覚〉・〈臭覚〉・〈触覚〉を表すが、これらの情報源を一個の〈知覚〉にまとめるか、それともそのまま4つにするか、答えに悩むであろう。そこから分かるように、たとえ Aikhenvald 氏のように完全な文法的手段に拘る立場を取らなくても、Boye & Harder 2009 が指摘するように、本来の「二次的情報」としてのステータスの自然な反映である文法化の度合いのより高い形式に絞り込む必要がある。つまり、ある言語において、高い文法化の度合いである形式によって表出される情報源こそが、その言語の話者にとって文法的に区別される情報源である。その意味において、動詞句に非常に近い性格を持つ挿入句を切り口にするのは、中国語において区別される情報源を見出す「作業」には向いていないことが明らかである。

2.2.3 朱永生 2006 の試み

朱永生 2006 は Aikhenvald 氏の見解を踏襲していると述べた上で、中国語の証拠性を「目撃型」と「非目撃型」に分け、前者は“所有以明确的方式交代信息来源的语言现象 (明確な手段で情報源を表出するあらゆる言語現象)”を、後者は“所有以模糊的方式交代信息来源的语言现象 (ぼやかした手段で情報源を表出するあらゆる言語現象)”を指すと述べている。ところが、繰り返しになるが Aikhenvald 氏は現実世界の様々な情報源を先験的に分類するのではなく、あくまで情報源の意味を持つ文法的形式を基にして当該の言語において区別される情報源を見出すとい

う研究手法である。また、Aikhenvald氏が提唱した「目撃型」と「非目撃型」は情報源そのものであり、情報源が明言されるかどうかはこの分類と関係しない。

- (10) 据 《新京報》11月2日報道，截止10月20日，全国已有
 による 新京報 11月2日報道 までに 10月20日 全国 既に 存在する
4500余 干部 从 煤矿 撤资 4.73亿元。(朱永生 2006)
 4500 余り 幹部 から 石炭鉱山 資金を取り戻す 4.73 億 元
 ‘『新京報』11月2日付の報道によると、10月20日までに全国に4500
 名あまりの幹部が石炭鉱山から4.73億元の資金を取り戻したという’
- (11) 最近 多 家 新闻媒体 相继 报道了 我国著名 的
 最近 多い CL マスメディア 相次いで 報道する・PERF 我が国 有名だ SP
牛皮癣 (原文：“癣”) 专家 肖淑珍 主任 在 破解 皮肤病
 乾癬 専門家 肖淑珍 主任 における 解ける 皮膚病
顽症 方面 取得了 重大 进展。 (朱永生 2006)
 頑固な病気 分野 得る・PERF 重大だ 進歩
 ‘最近いくつかのメディアが相次いで、我が国の有名な乾癬治療専門家
 である肖淑珍主任医師が、頑固な皮膚病の治療において重要な進歩を
 実現したことを報じていた’

以上の2例の波下線で示した情報が両方とも〈伝聞〉と見なせる新聞記事からのものであるにもかかわらず、朱永生 2006は(10)を「目撃型」の例として、(11)を「非目撃型」の例として挙げている⁵。

また、朱永生 2006は中国語において、構文・語彙（動詞・助動詞・副詞・形容詞・名詞）などの形式で証拠性を言語化していると述べた上で、それぞれの用例を挙げている。そこにも理解に苦しむものが少なくない。例えば、証拠性を表す構文について、氏は①“投射小句+不含情态成分的信息内容（投射節+モダリティ成分を含まない情報内容）”、②“投射小句+包含情态成分的信息内容（投射節+モダ

⁵ 例(10)と(11)との相違点は波下線部の情報の情報源でもなければ、情報源の表出の明晰さの差でもない。(10)の波下線部の情報は「一次的情報」なのに対して(11)の下線部は主節に埋め込まれた「二次的情報」であることこそが両者の根本的な違いである。

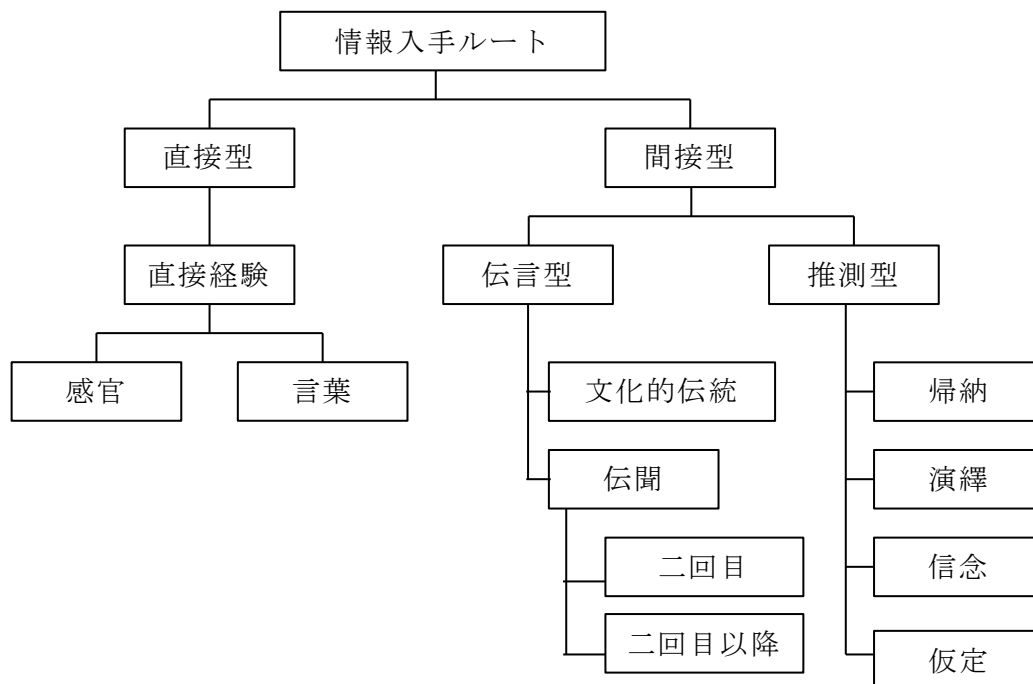
リティ成分を含んだ情報内容) ”、③“没有投射小句，只有包含情态成分的信息内容(投射節はなく、モダリティ成分を含んだ情報内容のみ) ”、④“没有投射小句，只有不包含情态成分的信息内容(投射節はなく、モダリティ成分を含まない情報内容のみ) ”と、4種類の構文があると主張している。しかしながら、これらの4種類の構文を合わせてみれば、あらゆる構文がすべて含まれることになるのではないかと思われる。当然の帰結として、すべての構文が証拠性を表すものだということになる。これはどうだろう。さらに、証拠性を表す語彙として挙げられた助動詞・副詞・形容詞・名詞は、従来認識的モダリティを表す形式と認識されてきたものばかりである。もしこれらが証拠性を表す形式だと主張するのであれば、証拠性と認識的モダリティとの関係を整理しておくことが先決であろう。こういった整理なしに議論を展開するのは説得力が欠けていると言わざるを得ない。

2.2.4 陈颖 2009 の考察

「現代中国語における証拠性に関する研究」(原文：“现代汉语传信范畴研究”) という題名から窺えるように、博士論文を基にした陈颖 2009 は中国語の「証拠性」を体系的に捉えようとした先駆的な研究の一つであり、中国語の証拠性表現を全面的に分類し記述しようとしたものである。専ら中国語の共通語を対象言語にした最初の博士論文として、研究史の立場からも特筆すべきであろうから、以下ではその問題点をすこし詳しく見ていきたい。

陈颖氏は、「話し手が伝達する情報の情報源を様々な構造 (construction) によって言語化する、という文法の構造的次元」という Bussmann 1996 の evidentiality の定義を援用し (陈颖 2009:36)、“传信范畴”の機能を「聞き手に知識の来源の信憑性を提供すること」と述べた上で、動詞の接尾辞などによる表出ではないが、中国語にも“传信范畴”があり、副詞・動詞・語気助詞ないし構文にも“传信”の機能を持っている“传信语”が複数存在すると分析している (陈颖 2009:2)。ある情報に関する直接の証拠——視覚・聴覚などの感覚から得られたもの——を話し手が持っているか否かによって、“传信语”を“直接传信语”と“间接传信语”に二分することができる。さらに具体的な情報源の種別に基づいて、次頁の〈図3〉のように下位分類をしている (陈颖 2009:45)。しかしながら、陈颖 2009 には、以下に挙げるような大きな疑問点が見られる。

〈図3〉 陈颖 2009 の情報源（情報入手ルート）の分類



2.2.4.1 「情報源」と「情報源の信憑性」と「情報の信憑性」との混同

これまでにも述べたことであるが、陈颖 2009 が援用した Bussmann 2000 の *evidentiality* の定義——文法構造レベルで表出される情報源——と陈颖氏が提示した“传信范畴 (*evidentiality*) ”の機能——知識の来源の信憑性を提供すること——は同じではない。*evidentiality* は果たして情報源なのか、情報源の信憑性なのか、陈颖 2009 においては一貫した考えが見当たらない。さらに、「情報源の信憑性」と発話内容としての「情報の信憑性」（或いは情報の真偽に対する話し手の評価）との必要な区別もされていないように思われる。

「情報源の信憑性」こそが *evidentiality* だというふうに主張されているならば、それはそれで認めてもよい⁶。しかし、「情報の信憑性」と「情報源の信憑性」とは同じ次元として考えてはならない。信頼できる情報源から知り得た情報がより高い信憑性であるとしても、より信頼できる情報が必ずしも信憑性の高い情報源から入手したものとは限らないし、同様に、話し手が確信していない（ように表出される）情報が必ずしも信憑性の低いと言われる情報源から知り得たものでもない。例えば、

⁶ もちろん、狭義的な “*evidentiality*” とは異なる内実である。

(12) 她 丈夫 问 道：“你 在 干 什么 呀？”
 彼女 夫 尋ねる COMP あなた しているところ する 何 FP
 她 说：“难道 你 没有 看见 吗？” 柴巴 说：
 彼女 言う まさか あなた NEG 見る FP チャイバ 言う
 “不见得 吧，我 看见了 一些 我 不 愿意 看见
 とも限らない FP 私 見る-*PERF* いくつか 私 NEG したいと思う 見る
 的 事情 呢。” (CCL: 十日谈・故事第八)
 SP こと FP

‘夫が尋ねて言う：「何をしている？」彼女が言う：「まさか、あなた見えていない訳じゃないでしょう」柴巴が言う：「そうとも限らないだろう。私は見たくないことを見たのだ」’

妻が友人と浮気していた一部始終を目撃した夫の発話の中で、妻の嘘をばらすような情報“不见得”に、半信半疑の語気を表す“吧”（陈颖 2009:157）が付いている。ところが、“不见得”という情報をどう知り得たかということ、その直後の発話から分かるように、〈直接経験〉——より正確に言えば、視覚——に由来したものであろう。陈颖 2009:65 自身も視覚について最も信頼できる強力な情報源だと述べている。従って、表出された「情報の信憑性」と「情報源の信憑性」は別物であることが明らかである。

それにもかかわらず、陈颖 2009 には「情報の信憑性」を表すものを「情報源の信憑性」を表したり含意したりするものとして、*evidentiality* の研究範囲・対象を不適切に広げた印象が感じられる。「情報の信憑性」を表す副詞（或いはそれに相当する語句である“真、真的、无疑、百分之百”など）や語気助詞（“的₆、嘛、呗、呢、哩、喽、啰”など）や能願動詞の“敢”をすべて「来源の信憑性を提供する」「传信语」と見なしているのはその証拠である⁷。また、挿入句の“老实说、实话说、说实在的”について、陈颖 2009:208 は「命題の実の来源を示していないが、命題に対する話し手の主観的な評価を反映している」とし、〈信念〉の“传信

⁷ 陈颖氏は文末の“的”を二つに分けており、“的₆”は過去時を表すテンスの助詞であり、“的₆”は確認のモーダルを表す語気助詞であると分析している（陈颖 2009: 153）。

語”として見ている。これは陈颖が自ら定義した“传信范畴”から逸脱しているように思われる。

2.2.4.2 情報源についての先験的な分類

情報源に対して陈颖氏は〈図3〉のように下位分類をしているが、かなり先験的に見え、言語事実に裏付けられていない。

まず「直接型」に属す「言葉」と「間接型」に属す「伝聞」について考える。陈颖 2009:47 はある人が話したり書いたりした情報、つまり *firsthand* の場合を〈言葉〉とし、それに相反して *firsthand* でない場合は〈伝聞〉と分け、それぞれの例として、次の(13)と(14)を挙げている。

- (13) 接着 听到 女孩 大声 说：“太阳 晒过来 了，
 続いて 聞く 女の子 大声 言う 太陽 照りつける-超える-来る FP
 到 我家 去 聊 吧，我家 没 人。” (陈颖 2009:46)
 至る 私家 行く お喋りをする FP 私家 ない 人
 ‘そうしたら女の子が大声で言ったことを耳にした。「日差しはこっちに移ってきた。家に行ってお喋りしましょう。家には誰もいない」と’
- (14) 我 听 张三 说 李四 出国 了。 (陈颖 2009:47)
 私 聞く 張三 言う 李四 出国する FP
 ‘私は張三から李四が出国していると聞いた’

しかしながら、以上の二つの例から分かるように、〈言葉〉であれ〈伝聞〉であれ、形式的な区別は存在せず、いずれも“听(到)～说”なのである。もちろん概念的に直接聞いた発話と人に伝えられた発話を区別しても良いが、言語形式では同じように言語化されている——例えば、 *Wǒ tīngdào Zhāng Sān shuō Lǐ Sì chū guó le.* (私は張三から李四が出国していると聞いた)——以上のことから、陈颖 2009 の分類する〈言葉〉と〈伝聞〉が異なるものだという考え方は説得力に欠ける。

次に、〈伝聞〉と〈文化的伝統〉に関しても同様の指摘ができる。例えば、陈颖 2009:48 は“却说”と“传说”を〈文化的伝統〉という情報源を表す“传信语”としている。そもそも情報源を表出する機能があるかどうか疑問である“却说”は

さておき、“传说”だけを見ても〈文化的伝統〉という情報源が中国語で他の情報源と区別して言語化されてはいない⁸。“传说”は必ずしも伝説や民話の情報だけに用いられるわけではないからである。

- (15) 传说 勾践 计谋 中 还 有 重要 一 项,
言い伝える 勾践 計略 中 また ある 重要だ 一つ CL
就是 把 越国 的 美女 西施 进献 给 夫差,……(陈颖2009:48)
つまり を 越国 SP 美女 西施 差しあげる に 夫差
‘言い伝えによると、勾践の計略にはまた重要な一つがあり、それは即ち越国の美女である西施を夫差に差し上げること、ということだ’
- (16) 传说 某人 在 大冬天 骑 辆 破 摩托车,
言い伝える ある人 における 真冬 乗る CL ボロボロの バイク
沿着 乡间 小路 来回 行驶,
沿う・PROG 田舎 狭い道 行きつもどりつ 運転する
嘴里 还 不住 地 呼喊 着…… (CCL)
口中 また 止まらない SP 叫ぶ・PROG
‘ある人が真冬にボロボロのバイクに乗って、田舎の狭い道路を走り回りながら、とめどなく叫んでいたという’

例(15)は歴史的物語という文脈であるため、“传说”が〈文化的伝統〉の“传信语”のように見える。ところが、(16)に示したように、もっと一般的な〈伝聞〉の場合にでも“传说”が使える。こういう事実から分かるように、〈伝聞〉と異なる形式で〈文化的伝統〉を言語化することは中国語では存在しない。よって、〈文化的伝統〉を独立した情報源として認めることには事実に基づく根拠がないのである。

次に、「推測型」に分類されている〈帰納〉・〈演繹〉・〈信念〉についてである。陈氏は、感覚からの証拠に基づいて過去の経験などと照らし合わせて推測することを〈帰納〉とし、仮定されている条件から結論を導くことを〈演繹〉としてい

⁸ 『現代漢語詞典(第6版)』では“却说”について、「古い小説によく用いられる表現であり、上文に述べられていることを再び提起するために使われる」と記述している。この記述から見れば、“却说”は情報源を提示するものではなく、聞き手・読み手に先に述べた内容を再び提起するという合図をする談話標識だと考えるべきである。

る。また〈信念〉については、証拠を問わないことが〈帰納〉および〈演繹〉との分岐点だと述べている。それぞれの例として(17)~(19)の a が挙げられ、下線部は〈帰納〉・〈演繹〉・〈信念〉を明示するものである。

(17) [何か足に這入っている感じがして]

a. 一定 是 只 虫子。 (陈颖 2009:49)

きっと である CL 虫

‘きっと虫に決まっている。’

b. {很 可能 / 我 估计} 是 只 虫子。

とても かもしれない 私 予測する である CL 虫

‘虫かもしれない。／虫と思う’

(18) a. 这 肯定 不 是 一般 的 失窃案，

これ 絶対に NEG である 普通 SP 盗難事件

很 可能 是 敌特 分子 干 的，

とても かもしれない である 敵方のスパイ 集団に属する人 やる SP

而且 是 里应外合 …… (陈颖 2009:50)

しかも である 内外で呼応する

‘これは絶対に普通の盗難事件ではあるまい。敵方のスパイの仕業の可能性が高いのだ。しかも内外で呼応しているのだ’

b. 这 肯定 不 是 一般 的 失窃案，

これ 絶対に NEG である 普通 SP 盗難事件

{一定/我 估计} 是 敌特 分子 干 的，

きっと 私 予測する である 敵方のスパイ 集団に属する人 やる SP

而且 是 里应外合 ……

しかも である 内外で呼応する

‘これは絶対に普通の盗難事件ではあるまい。敵方のスパイの仕業に決まっている／だと思ふ。しかも内外で呼応しているのだ’

(19) a. 我 估计…… 她 是 看上 您 啦! (陈颖 2009:51)

私 予測する 彼女 である 気に入る あなた FP

‘彼女はあなたを気に入ったのだと思う’

b. 她 {一定 / 很 可能} 是 看上 您 啦!
彼女 きっと とても かもしれない である 気に入る あなた FP
‘彼女はあなたを気に入ったに決まっている／かもしれない’

繰り返しになるが、ここでもやはり同様に、同じ文脈に——つまり情報源が変わらないという前提のもとで——この“伝信語”だけが専ら使用されるわけではない。(17)~(19)の b のように置き換えても、情報が由来した情報源に変わりはない。従って、〈帰納〉・〈演繹〉・〈信念〉といった下位分類にも妥当性が欠けると結論付けられる。

最後に、陈颖 2009 の「間接型」の証拠性の中で〈假定もしくは想像〉という下位類を再考する。陈颖 2009 は〈假定もしくは想像〉の情報源は、“如果”、“假如(もし~ば)”などで表されるとして、次のような例を挙げている。

(20) 诸 位 读者, 假如 你们 有 兴趣,
諸々の CL 読者 ならば あなたたち ある 興味
请 光临 “美食家” 大饭店 品尝 指教!
どうぞ いらっしゃる 美食家レストラン 召し上がる 指導する
(李国文《危楼記事》, 陈颖 2009:49)
‘読者諸君、もしご興味があれば、ぜひ“美食家”レストランにお召し上がりになりいらっしゃって、ご指導ください。’

陈颖氏の考え方に従うと、例(20)における“你们有兴趣”は“假如”という「マーカ」から話し手の〈假定〉に由来したものだということが分かるということであり、“假如”を“听说”“看来”などに置き換えると、〈伝聞〉や〈推論〉から“你们有兴趣”という情報を知りえたことになる。この意味で、“假如”なども情報源の表出に繋がっているのではないか、という発想であろう。

しかし次の比較から分かるように、(21)c は a,b,d のように単独で情報を伝達することができない。条件節は情報の一部に過ぎず、普通それだけでは情報にならな

い⁹。そのことから、“如果”・“假如”などがあくまで条件節に用いられる仮定法 (subjunctive mood) を明示するのであり、それらを〈伝聞〉を表す“听说”などと同様に、情報源を示すものとして扱うのは妥当ではないことが明らかである。

(21) 你 为什么 请 我们 来 “美食家” 大饭店?

あなた 何のため 招待する 私たち 来る 美食家レストラン

‘どうして私たちを「美食家」レストランに招いたのか’

a. 听说 你们 有 兴趣。

REP have

‘あなたたちは興味があるという’

b. 看来 你们 有 兴趣。

INFR have

‘あなたたちは興味があるようだ’

c.*假如 你们 有 兴趣。¹⁰

SUBJ have

‘あなたたちは興味があったら’

d. 你们 有 兴趣。

have

‘あなたたちは興味がある’

陈颖 2009 ではそこまで考察していないが、条件節以外の場合における〈假定〉——いわゆる subjunctive mood の意味で——が一つの情報源になり得るかどうかをここで考えておこう。

次の(22)b における“你们有兴趣”は仮定法に当たる用法である。一見したところ、a,b はミニマル・ペアのように見え、「あなたたちは興味がある」ということは〈推論〉の世界か、もしくは仮定法に表された「願望」の世界において成立するわけである。ところが、この仮定法に表された「願望」は〈推論〉と異なり、情報源として認識されない。それは b が情報源を問う質問に対する回答にならないこと

⁹ “假如你们有兴趣”という発話だけでは真理条件が存在しないのである。

¹⁰ ここで文は完結しないとわけである。

から窺える。

(22) 你 怎么 知道 我们 有 兴趣?

あなた どう 知る 私たち ある 興味

‘あなたは どうやって 私たちは 興味があると 知ったのか?’

a. 我 估计 (推論) 你们 有 兴趣。

予測する

‘あなたたちは 興味があると 推し量った’

b. [#]我 希望 (仮定) 你们 有 兴趣。

望む

‘あなたたちは 興味があると 望んでいる’

“我希望”は「あなたたちは興味がある」ことの情報源を示すものではなく、「あなたたちは興味がある」ことが話し手にとって望ましいか否かという話し手の態度を示すものである。〈仮定〉は仮定節においてもそれ以外の場合においても情報源の提示とは関係ない。よって〈仮定〉は情報源に数えられないのである。

それでは、陈颖 2009 が〈仮定〉を情報源に入れた理由は何であろうか。以下は推測の域を出ないが、恐らく表現機能上の根本的な相違を見落とし、(21)a~d、(22)a、bなどの文をミニマル・ペアと誤って認識したことが一つの可能性であろう。たしかに、非直説法 (non-indicative) を証拠性ストラテジー (§ 3.1.4 を参照) として用いる言語は存在する。例えば、フランス語には *conditionnel de l'information incertaine* (不確実な情報を表す条件法) があり、動詞の仮定形で疑わしい、特に〈伝聞〉からの情報であることを思わせる機能を有しているという (Aikhenvald 2004:106-108)。もしかすると陈颖 2009 もこの類の言語事実を念頭に置きながら、中国語においても同様のことが起きているのではないかと考えたのかもしれない。しかしながら、(21)(22)から分かるように、中国語における「仮定」に当たるものは情報源の特定化に機能しないのである。

これまでの分析に基づけば、〈図3〉の〈直接経験〉・〈伝聞型〉・〈推測型〉以下の下位分類は中国語の言語事実裏付けられていないため、有効であるとは思えない。

2.2.4.3 “传信语”の認定をめぐる問題点

陈颖 2009 は中国語の証拠性表現を全面的に分類し記述しようとした点で評価されている（乐耀 2011a）。しかしその中に問題点もいくつかある。

まず、既に述べたように「情報源の信憑性」と「情報の信憑性」との混同により、「情報の信憑性」を表すものを“传信语”と見なしたことが指摘できる。

次に、述語の意味特徴や広域的な文脈に含意されるデフォルトの情報源を、文に存在する特定の要素あるいは構文全体が含意するものと誤認していることが挙げられる。

A. 中間構文（middle construction）について

陈颖 2009:77 は次の(23)a と(24)a を区別せずに「中間構文」と考え、両方とも情報源——「直接経験」か「推論」——が解釈される効果を有するとしている¹¹。VP + NP + AP への変換可能な(23)a（この類においては、AP は NP が VP されるときに現れる性質である）は話し手の「直接経験」であるのに対して、変換不可能な(24)a（この類においては、AP は「NP を VP する」ことの性質である）は「間接型」-「推論」-「信念」だとしている。

- (23) a. 这个面包 吃起来 很甜。
 この CL パン 食べる-動き出す とても 甘い
- b. 吃起来, 这个面包 很甜。 (陈颖 2009:76)
 食べる-動き出す この CL パン とても 甘い
 ‘このパンは食べてみるととても甘い。’
- (24) a. 那 种 脚手架 安装起来 很 麻烦。
 あの 種類 足場 取り付ける-動き出す とても 面倒臭い
- b. *安装起来, 那 种 脚手架 很 麻烦。(陈颖 2009:72)
 取り付ける-動き出す あの 種類 足場 とても 面倒臭い
 ‘あの種類の足場は組むのに手間がかかる。’

¹¹ (24)a のような文は中間構文ではなく、対象物の行為の難易性や快・不快を表す難易構文と考えるべきである。なぜなら、この類の文における AP は難易性や快・不快を表す、ほぼ閉じた形容詞句に限られているからである。

理由としては、(24)の「足場を組む」という行為は必ずしも話し手自身の経験ではないからだとしている。

しかし、ただパンを食べることは日常的に誰でも可能であるのに対して、足場を組むのは建築作業員しか行わないことだからと言って、前者は「直接経験」で、後者は「推論」と認定するのはあまりにも強引である。仮に(24)の話し手が足場を組むことを経験した建築作業員だったら、(24)における中間構文も「直接経験」を表すものになるのであろうか。そもそも「このパンが甘くて美味しい」ということは「食べる」ことによって了解されることであるが、話し手がこのパンを食べたか否かについては中間構文自体からは何も窺えない。情報源が〈推論〉である“我猜想这个面包吃起来很甜（「このパンは甘い食感だと私は思う」）”もまったく問題なく成立することから、中間構文自体は情報ソースと直接関係しないことが明らかである。さらに、“甜（甘い）”など味覚にかかわるものは、取り消すことができるものの、デフォルトに「直接経験」であることを含意しているので、(23)a が直接経験だと解釈されることに積極的に貢献しているのは“吃起来”よりはむしろ“甜”のほうである。以上のことから、中間構文を証拠性表現として捉えることは妥当ではない¹²。

B. 能願動詞について

陳穎 2009:93-111 は能願動詞の“能、会、要、得(děi)”にも“传信语”としての用法があるとしている。例えば、

¹² (23)は a,b 両方とも言えるのに対して(24)は a の片方しか言えないのは何故かについて、陳氏は(23)の“这个面包（吃起来）甜”と(24)の“那种脚手架（安装起来）麻烦”は異なる情報源に由来した情報であるからだとしている。しかし指摘したように、(23)a と(24)a は異なる情報源かどうかはこの二つの文だけでは到底言い切れないため、陳氏のこの説明は適切ではない。(24) b が言えない原因が他にあり、(23)a と(24)a を最初から同じ構文として扱うことは妥当ではない。また、そもそも(24)b は次のような対比の文脈では許容度が上がる。

- (i) 安装起来, 那 种 脚 手 架 很 麻 烦。
組み立てる・動き出す あの CL 足場 とても面倒くさい
拆起来, 这 种 脚 手 架 很 麻 烦。
解体する・動き出す この CL 足場 とても面倒くさい
‘組み立てるなら、あの種類の足場は手間がかかる。解体するなら、この種類の足場は
手間がかかる’

- (25) 如果 我 当时 改成 车八进五 封锁 河头，
 ならば 私 当時 変える-なる 車八進五 封鎖する 河口
 就 能 成为 更 剧烈 的 对攻 局面 了…… (陈颖 2009:96)
 すると 可能だ なる 更に 激しい SP 攻め合う 態勢 FP
 ‘もし当時車八進五に変えて河を封鎖できたら、より激しく攻め合う態勢になっただろう’
- (26) 我 相信， 她 一定 会 用
 私 信じる 彼女 きっと するものだ 用いる
 某 种 形式 向 你 传达 信息 的。 (陈颖 2009:98)
 某 CL 形 に あなた 伝達する 情報 FP
 ‘彼女はきっと何らかの形であなたにメッセージを送ると信じる’
- (27) 这样 你 到 社会 上 就 要 吃亏！
 このよう あなた 至る 社会 中 すると するものだ 損をする
 (陈颖 2009:102)
 ‘このまま社会に出たらあなたは損をする’
- (28) 快 下 大雨 了， 要 不 快 走，
 すぐ 降る 大雨 FP ならば NEG はやい 行く
 就 得 挨 淋。 (陈颖 2009:108)
 すると するものだ される 濡らす
 ‘もうすぐ雨が降るのだ。はやく行かないと、雨に降られるよ’

陈颖 2009 は、(25)～(28)にある能願動詞の用法をほかの用法から切り離し、〈推測型〉－〈演繹型〉の情報源がこれらの能願動詞によって表出されると述べている。その証拠として、これらの能願動詞の“非传信”の用法の場合、文頭などに“我觉得”のごとく話し手の推測・認識を表す形式が許されないことが挙げられている。(29)b と(30)b との比較から、(30)a の“能”は〈推測〉を表さないのに対して、(29)a,b の“能”は〈推測〉を表す“传信语”だということが分かるということである。

- (29) a. 那 不 好， 一起 走 不 就 齐 了，
 あれ NEG よい 一緒に 行く NEG すぐ そろふ FP

我们 肯定 能 上 船。 (陈颖 2009:95)

私たち 絶対 できる 乗る 船

‘あれは良くないよ。一緒に行けばいいんじゃない。私たちはきっと船に乗れる’

b. 那 不 好, 一起 走 不 就 齐 了,

あれ NEG よい 一緒に行く NEG すぐ そろふ FP

我觉得 我们 肯定 能 上 船。 (陈颖 2009:97)

私 思う 私たち 絶対 できる 乗る 船

‘あれは良くないよ。一緒に行けばいいんじゃない。私たちはきっと船に乗れると思う’

(30) a. 达到 零度 的 时候, 水 就 能 结冰。 (陈颖 2009:95)

達する 零度 SP とき 水 すると できる 凍る

‘零度に達すると、水が凍る’

b. *达到 零度 的 时候, 我觉得 水 就 能 结冰。

達する 零度 SP とき 私 思う 水 すると できる 凍る

(陈颖 2009:96)

‘零度に達すると、水が凍ると思う’

しかしながら、(29)aに“我觉得”が付けられるのに対して(30)aには付けられないのは、この二つの文における“能”が異なる用法だからというよりも、むしろ「一緒に行くと、私たちが乗船できる」に比べて「零度になると、水が凍る」の方が我々にとって一般的知識・真理だと認識されているからである。ある情報が一般的知識・真理なのかどうかは、結局その言語の話者の百科事典的知識によって決められる。零度になると水が凍る、ということは(30)bを非文とジャッジした陈颖 2009をはじめ、多くの人にとって常識であろう。しかし、その知識を知らない人がいると仮定しよう。その人は、冷やし続けている水の真ん中に温度計を挿して観察をしている。温度計の数字が例えば 0.01 度になった途端に、水が凍りそうになっているのを見て、その人が(30)bを言っても全く問題ない。

この分析から分かるように、(30)bの不自然さは文中の“能”が“伝信”しないことに起因するものではなく、あくまで語用論的に不適切である——一般的知識・

真理に〈推測〉類の情報源を添付すると、まるで話し手自身はその知識・真理を発見して、なおかつ聞き手にそれを確認してもらおう (§ 4.5.1 を参照) とするよう
に解釈される——からである。換言すれば、(29)b が自然であるのは、文中の“能”
が“传信”しているからではなく、「一緒に行くと、私たちが乗船できる」という
情報そのものが一般的知識・真理ではないので、話し手の〈推測〉であろうと思わ
せるからである。(29)と(30)の“能”は全く同一の語であり、ある事態が成立可能
だということを表している。「ある事態が成立可能」という情報事態を何の情報源
から知り得たかは、“能”とは無関係である。

“会、要、得(děi)”にも“传信”の機能があることに関しても以上と同じような
検証の方法で否定できるので、ここでは割愛する。

なお、蛇足になるかもしれないが、次に示す対立において、(31)a が不自然であ
る理由を「明日雨が降る」は〈推論〉で得た情報なのに、〈推論〉の「マーカ
ー」がないから文が成立せず、やはり能願動詞の“会”で〈推論〉の情報源が提示され
る必要があるのではないかといった反論が予測される。

- (31) a. ??明天 下 雨。
明日 降る 雨
‘??明日雨が降る’
- b. 明天 会 下 雨。
明日 するものだ 雨 降る
‘明日雨が降るだろう’

しかし、(31)a が不自然なのはその情報自体が文脈的におかしいからだと思われる。
例えば、人工降雨の責任者の発話としてならば、(31)a は何の問題もなく成立する
であろう。ところが、一般の人々は当然、天気を制御することが不可能であり、未
来の天気を語るときにあくまで何らかの「趨勢」としては言いようがない。“会”
はまさにその「趨勢」を認めるものである。換言すれば、「趨勢がある」を意味す
る“会”自体も「明日雨が降る趨勢がある」という情報の一部である。その情報が
何の情報源から知り得たのかは、“会”からは何も窺えることができない。(31)b
が〈推論〉と解釈されるのは語用論的な結果に過ぎず、以下に示すようにキャンセ

ルことができる。

- (32) a. 我 觉得 明天 会 下 雨。
私 思う 明日 するものだ 降る 雨
‘明日雨が降ると思う’
- b. 我 不 觉得 明天 会 下 雨。
私 NEG 思う 明日 するものだ 降る 雨
‘明日雨が降ると思わない’
- c. 我 觉得 明天 该 下 雨 了。
だろ う FP
‘明日雨が降るだろうと思う’
- d. “我 不 觉得 明天 该 下 雨 了。
“??明日雨が降るだろうと思わない’

“(应)该”は〈推論〉の情報源を含意する (§3.4.2.2 を参照)。それ故、「明日雨が降る」ことを推論したにもかかわらず、“我不觉得”でさらに「こう推論しない」と否定する(32)dは許容できない。これと対照的に、(32b)は依然として成立する。このことから分かるように、“会”の意味機能はあくまで「趨勢」のあることの表出に留まり、〈推論〉までには関わっていない。

2.3 中国語の事例を「証拠性」という観点から分析した研究

2.3.1 主な成果

Chappell 2001 は従来、アスペクトの一つとしての「経験相 (experiential)」を表す形式として考えられてきた動詞接辞の“过”と動詞に前置する“识”(閩南語)について、アスペクトの意味が中核ではなく、むしろ evidential marker と考えるべきだと主張した。董秀芳 2003 は“按理说、一般说、依我说、俗话说、老实说、实话说”などの語彙化がかなり進んでいる形式は情報の根拠や情報源を表すとしている。林华勇・马喆 2007 は粵語に属する廉江方言の発話動詞“讲”にまつわる文法化のなかで見られる証拠性的な用法に言及した。谷峰 2007 は証拠性の観点から、

上古漢語の発話動詞“云”が〈伝聞〉を表す用法、さらに情報に対して確信しないという心的態度を表す形式へ文法化した過程を明らかにした。乐耀 2011b は人称と文末助詞“了₂”と共起する実態について「情報のなわ張り」と広義的な証拠性から説明している¹³、¹⁴。

日本の中国語研究者も近年、中国語の証拠性に関連する現象への関心を見せ始めている。小野 2010 は程度副詞の“挺”と“太”について両方とも「“Direct Evidentiality (直接証拠性)”に基づく情報ソース、すなわち話し手自身が実際に経験・体験して知り得た性質や属性に関する程度を表す」と結論付けた。また、日本中国語学会誌の『中国語学』258号では、「証拠性」をキーワードに挙げた論文が3本にのぼる。その中で、呉蘭 2011a は“看来”・“看上去”・“看样子”を証拠性表現（推論）と認定しているのに対して、“好像”を証拠性表現ではなく、蓋然性判断のモダリティ表現と考えるべきだと述べている。福田 2011 の研究は数量表現が後続しない“(静態形容詞+) 不了”と“(静態形容詞+) 不了+数量表現”を、それぞれ「論理的推論」と現場の状況を述べる「様態」といった証拠があるといった意味解釈に偏る、としている。

なお、これらを含め、本研究の第3章以降で言及する事例の先行研究が他にもあるが、その都度触れるつもりなのでここでは詳しいレビューは割愛する。

2.3.2 「証拠性」と誤認した研究について

証拠性に関する事例研究の中には、実際は証拠性の射程外（広義的な証拠性であっても）で扱うべきものも存在する。李晋霞ほか 2003 だけを例に取って説明する。李晋霞ほか 2003 は“如果说 p, (那么) q”を“如果 p, (那么) q”と比較し、“如果说”における“说”は p の真偽や、p と q がそれぞれ所属する二つの領域をメタファーで結び付けることが妥当かどうかに対して、話し手が弱い確信度を持つことを表す証拠性形式だとしている。

¹³ “了₂”は話し手に関する情報を表す文に最も現れやすいことと、3人称主語を取る“了₂”文には“传信语”が最も使用されていることと、1人称主語を取る“了₂”文は“主观传信语”と共起しやすく、2人称と3人称主語の“了₂”文は“客观传信语”と共起しやすいことが乐耀 2011b に確認されている。

¹⁴ evidential(ity)をキーワードにした研究は他に史金生 2000 などがある。しかしこれらの研究は情報源のことと関係なく、専ら命題に対する話し手の確信度に関するものであるため、本研究のテーマの範囲外にある。

- (33) 现在 已经 转化 的 他, 对 帮教 人员
現在 既に 悔い改める SP 彼 に対する 助言指導する 人員
感恩不尽: “李洪志 不 是 说 他们 都 是 ‘魔’ 吗?
感謝にたえない 李洪志 NEG である 言う 彼ら 皆 である 魔 Q
如果说 这些人 是 ‘魔’ 的话, 我 宁愿 跟 这些 ‘魔’
もし 言う これら 人 である 魔 ならば 私 むしろ と これら 魔
做 朋友, 也 绝 不 跟 李洪志 这 个 凶恶 的 ‘神’ 走。”
つくる 友達 も 絶対 NEG と 李洪志 この CL 凶悪だ SP 神 行く
(李晋霞ほか 2003 例(32))

‘もし彼らが「魔」だと言うならば、私は「魔」の彼らと友達になっても、
李洪志という凶悪な「神」の後にはつかない’

- (34) 如果 说 上海 是 腾飞 的 东方 巨龙 的 龙头,
ならば 言う 上海 である 飛び上がる SP 東方 巨竜 SP 竜の頭
那么 浦东 这 颗 明珠 则 是 龙头 上 的 眼睛。
それなら 浦東 この CL 美しい真珠 なら である 竜の頭 上 SP 目
(李晋霞ほか 2003 例(11))

‘もし上海を急成長している東方の巨竜の頭と言うならば、浦東という美
しい真珠はこの竜の目だ’

伝達動詞は確かに〈伝聞〉や〈引用〉といった情報源につながりやすい。しかし、
“如果说”はこのようなケースに数えられるであろうか。まず指摘しておきたいの
は、李晋霞ほか 2003 における「証拠性」も情報源のことではなく、主に話し手が
情報の真偽に対して下す評価のことを指している。それはともかく、“如果说”に
おける“说”は、果たして李晋霞ほか 2003 が主張しているように「弱い確信度」
を表すのであろうか。

一見したところ(33)は、話し手が「彼らが魔だ」ということを信じていないよう
な読みが成立するようである。しかし、これは q に該当する「彼らの友達になりた
い」という文脈からもたらされた効果である。次のように、q を「彼らの友達にな
るのをやめる」に変更すると、話し手が「彼らが魔だ」ということを信じているよ

うに解釈できるようになる。

(35) 如果说这些人是‘魔’的话

もし言う これら 人 である 魔 ならば

那么 我就 不 跟 他们 做 朋友 了。

それなら 私 すると NEG と 彼ら つくる 友達 FP

‘もし彼らが「魔」だと言うならば、私は「魔」の彼らと友達になることをやめる’

また、(34)の場合、話し手が「上海が発展し続けている中国の先頭に立っている」ことを確信していないと言えるであろうか。また、p と q がそれぞれ所属する二つの領域をメタファーで結び付ける（マッピングする）ことが妥当かどうかに対する低い確信度、という考え方も言語事実に裏付けられていない。

(36) a.?? 如果说上海是 腾飞 的 东方 巨龙的 龙头，

ならば 言う 上海 である 飛び上がる SP 东方 巨龙 SP 竜の頭

那么 浦东 这 颗 明珠 则 是

それなら 浦東 この CL 美しい真珠 なら である

龙头 上 的 眼睛 吧。

竜の頭 上 SP 目 FP

‘もし上海を急成長している東方の巨竜の頭と言うならば、浦東という真珠はこの竜の目だろう’

b. 说来说去，“新书”生命所系 是 一个“新”字，

何と言っても 新書 命 SP かかる である 一つ CL 新 文字

如果 译成 中文，则 相当 于 “新知丛书” 吧。(CCL)

ならば 訳す-なる 中国語 なら 相当する に 新知叢書 FP

‘何と言っても、「新書」の最も肝心なところは「新」という一文字にある。中国語に訳せば、「新知叢書」に相当するであろう’

もし李晋霞ほか 2003 の主張通りに、話し手が両領域のマッピングの妥当性に対し

て確信し切れていないことが“如果说”に表されているならば、その低い確信度を明示する“吧”を付けることができるはずである。しかし実際のところ(36)a はかなり不自然である。それに対して、“如果”を使った(36)b は逆に文末に“吧”が許容される。これらの対照から分かるように、p の真偽であれ、両領域の間のマッピングの妥当性であれ、“如果说”の“说”とは関係がないのである。“如果说”の“说”は低い確信度を表さない以上、李晋霞ほか 2003 の分析は証拠性の射程に入るものではないことが分かる。

この“说”は発話主体が言語化されていないことを除けば、ほとんど本動詞の伝達動詞のままだと考えられる。つまり、“如果说 p, (那么) q”は「p と言うならば、q と宣言する」という意味を表す、つまり発話行為領域 (Sweetzer 1990 を参照) の条件複文である。情報源や証拠性とは別の次元で考えるべき事例である。

2.4 本研究の立場

本章は主として、一般言語学における「証拠性」の研究アプローチを紹介し、中国語の証拠性の全貌を探ろうとする4つの先行研究と一部の事例研究に見られる疑問点を指摘した。そこから分かるように、中国語の証拠性の研究には未だに、概念的混乱や誤解が少なからず存在している。全般的な研究であれ、事例研究であれ、研究すべき課題やその内容に、議論の余地がかなり残されている。その中で最も注意を要することは、①「情報源」と「情報源の信憑性」と「情報の信憑性」との混同、②カテゴリとしての「証拠性」という意味で表出される情報源を認定する基準、という2点である。

以上挙げた諸問題点の改善を図るべく、本研究は、Aikhenvald 2004 と Boye & Harder 2009 と Cornillie 2009 で述べられた観点を整理・検討した上で、以下に示す立場を取ることにする。

I. 「証拠性」は、情報源の種別によって文の形が変わる文法的現象である。情報源の信憑性や情報そのものの信憑性によって話し手が異なった表現を用いることを「証拠性」とは見なさない。

II. 「証拠性」の意味に関連する情報源は日常言語での「情報源」と異なり、

より文法化の程度が高い形式によって表出される情報の入手ルートに限る。動詞によって表出される情報の入手ルートは「二次的情報」と見なしにくいため、文法的現象である「証拠性」としての情報源ではない。

次章では上記の基本的な考えに沿って、中国語（共通語）の証拠性システムについて考察する。

‘フランス王はハゲだという’

- b. フランス王はハゲである。
- c. フランスという国が存在する。
- d. フランスに国王がいる。

ある発話行為を妥当にする前提も情報として捉えることから、情報を伝達できる言語形式は平叙文（感嘆文を含む）のみならず、名詞句・命令文・疑問文にもそれぞれ伝達される情報があると帰結できる。

名詞句に内在する情報は、すなわち「当該名詞句で指している事物がその名詞句の内包に一致している」という認定である。例えば名詞句の(3)a から、(3)b が情報として抽出できる。

- (3) a. 这 部 名著
この CL 名著
‘この名著’
- b. これは名著だ。

命令文に内在する情報は、次のようなものが考えられる。①発話者が「x が y をする・しない」ことを求めていること。②発話者は自分のこの要求を妥当であると信じていること。それは更に、「x が y をする・しない」の実現の必要性があること、x に「y をする・しない」能力があること、「x が y をする・しない」ことを要求する権限があること、などに具体化することができる。

また、疑問文に内在する情報は、次のようなものが考えられる。①発話者が訊ねる疑問点以外の部分について疑念を持っていないこと。②発話者は自分の訊ねを妥当であると信じていること。これは命令文の場合とほぼ平行している。次の例で説明すると、(4)b 以降のものはすべて(4)a から読み取れるものであり、本研究では(4)a の疑問文に内在している内容を情報であると考ええる。

- (4) a. 他 喜欢 吃 什么?
彼 好きだ 食べる なに

‘彼は食べ物何が好き？’

- b. 彼に好きな食べ物がある。
- c1. （話し手にとって）この質問は答えてもらう必要がある。
- c2. 聞き手はこの質問に正確に答えることができる。
- c3. （話し手には）聞き手に対して回答を要求する権限が十分にある。

情報である以上、その情報源（入手ルート）は当然問題になる。従って、平叙文だけではなく、伝達される情報を有する名詞句・命令文・疑問文にも情報源にかかわりがある。

3.1.2 情報源

「情報源（information source）」とは、以上で定義したような情報を話し手もしくは参加者（participants）がどう知り得ているのかのことである¹。例えば、人から聞いた情報は〈伝聞〉という情報源を持ち、自分の目で見た情報は〈目撃〉或いは〈視覚〉という情報源を持つわけである。

既に述べたように、情報を有するのは(5)aのような平叙文だけではなく、名詞句・命令文・疑問文にも情報が読み取れる。そのため、名詞句などにも情報源がかかわることがある。例えば、(6)aの下線部は名詞句の“名著”に含まれる情報の情報源を示すものと考えられる。

- (5) a. 看来 小王 没 去 学校。
見たところ 王くん NEG 行く 学校
‘王くんは学校に行かなかったようだ’
- b. 情報＝王くんは学校に行かなかった
- c. 情報源＝〈推論〉

¹ 証拠性研究における「情報源」は日常言語で使われている「情報源」（例えば「読売新聞によると」における「読売新聞」）と別の意味である。§ 2.1.2 で紹介したように、「知識のソース」（即ち日常的に言う「情報源」）と「知る方法」は基本的に一对一の関係にあるため、両者を区別しなくても良いといった指摘がなされてきた。また、Aikhenvald 2004:393 も information source を the way in which a speaker or participant has learnt the information と定義した。本研究はこれと同様の立場である。

- (6) a. 这 部 所谓 的 名著
 この CL いわゆる SP 名著
 ‘このいわゆる名著’
 b. 情報＝これは名著だ
 c. 情報源＝〈伝聞〉

もう一つ注意されたいポイントとしては、話し手以外の参加者が情報をどう知り得たのか——話し手以外の参加者の情報源——が表出されることも考えられる。例えば南アメリカで話されている Quechua 語の以下の疑問文において表出される情報源は聞き手のものであるという。(7)では、聞き手が当該の出来事について〈直接経験〉に由来した情報を持っているのが含意される (Aikhenvald 2004:245)。

(7) (Wanka Quechua)

imay-mi wankayuu-pi kuti-mu-la

when-DIR.EV Huancayo-ABL return-AFAR-PAST

‘When did he come back from Huancayo?’

(Aikhenvald 2004:245)

Aikhenvald 2004 は通言語のデータを踏まえて、情報源にかかわる意味パラメーターを提示し、それらのパラメーターが Willett 1988 で提唱された証拠性の中核的な3領域に当てはまると述べた。以下のようにまとめることができる。

(8) 「情報源」にかかわるパラメーター

グループ 1 実証的 (attested) 情報源

FIRSTHAND：視覚や聴覚、または自らの経験から知ること

SENSORY：身体感覚による感知から知ること

VISUAL：目撃から知ること

AUDITORY：聴覚から知ること

NON-VISUAL：聴覚・臭覚・触覚などから知ること

DIRECT：話し手もしくは参加者自分自身の感覚的な経験から知ること

グループ2 推論的情報源

INFERRED：目撃した情報またはある出来事の結果から知ること

ASSUMED：論理的思考または一般的知識・経験から知ること

グループ3 伝聞的情報源

REPORTED：誰かの言葉から知ること

QUOTATIVE：誰かの言葉を一言一句そのまま引用したこと

なお以上に挙げたグループ1のパラメーターには、意味的に重なっているものが一部ある。例えば NON-VISUAL に AUDITORY が含まれている。それは、情報源が AUDITORY であるか否かによって言語形式が異なる言語もあれば、情報源が VISUAL であるか否かによって言語形式が異なる言語もあり、このような通言語的に情報源の表出を記述・分析する枠組みを作り出すためである。一つの言語において、NON-VISUAL と AUDITORY がパラダイムの共存することはないだろう。また、FIRSTHAND と DIRECT はほぼ同じ情報源を示すように思われる。これはこれまでの先行研究では用語が統一されていないからだと考えられる。

3.1.3 証拠性

本研究での「証拠性」には狭義の使い方と広義の使い方がある。狭義の使い方においては、「証拠性」は情報源によって文の形式——とくに情報源の意味に直結できる形式——が変わるといって文法カテゴリを指す²。広義の使い方においては、「証拠性」は情報源の表出と解釈をめぐるあらゆる現象を指す。ただし、§2.1.2 で述べた Chafe 1986 のような情報に対する態度全般をめぐるものではないことに留意されたい。以下狭義の使い方と広義の使い方を例で説明する。

例(9)では、「明日は雨が降る」という情報が〈伝聞〉から知り得たか、〈推論〉から知り得たかといった違う情報源によって、“说是”か“想是”が用いられる。このような現象は、狭義的な証拠性に当たる。

(9) a. 明天 说是 下 雨。

明日 REP 降る 雨

² 多くの場合は動詞の形であるが、本研究ではそれに限らない立場である。

‘明日は雨が降るといふ’

b. 明天 想是 下 雨。

明日 INFR 降る 雨

‘明日は雨が降ると思う’

一方、“杭州很漂亮”にも“杭州太漂亮了”にも情報源に直結できる形式が存在しないものの、前者は後ろに“我还没去过”が共起できるのに対して、後者は共起できない。この許容性の差は、“杭州太漂亮了”は〈直接経験〉の情報源を前提にしているからにほかならない³。

(10)a. 杭州 很 漂亮, 可是 我 还 没 去过。

杭州 とても きれいだ しかし 私 まだ NEG 行く -EXP

‘杭州はきれいだ、まだ行ったことがない’

b. *杭州 太 漂亮 了, 可是 我 还 没 去过。

杭州 すごく きれいだ FP しかし 私 まだ NEG 行く -EXP

‘杭州はすごくきれいだ、まだ行ったことがない’

例(9)の“说是”・“想是”と違って、“杭州很漂亮”・“杭州太漂亮了”には情報源の特定に（意味的に）直結できるものは顕在しない。このような現象は、広義の証拠性として考えたい。

狭義の証拠性が存在しない言語があるかもしれないが、広義の証拠性を持たない言語は考えられない。しかしある言語の「証拠性システム」に言及する場合は、狭義の証拠性に限り、その言語において文の形式を決める情報源は何であるかということを目指す。

3.1.4 情報源表出形式

文法カテゴリである狭義の証拠性を持つ言語は、より文法化の度合いが高い形式

³ 杭州の景色が映っている映像などを見たり、それに関する生き生きとした紹介文を読んだりしたのであれば、実際に杭州に行ったことのない人でも“杭州太漂亮了”と発言しても良い。しかし、これはあくまでも高い臨場感を前提として、擬似的な〈直接経験〉を表しているものだと考えるべきである。

を用いて情報源を表出する。逆に言えば、広義の証拠性しか持たない言語はそれに相反して、文法化の度合いが低い形式や他のカテゴリを表す手段を借用し情報源を表出する。

Hopper & Traugott 1993:103-104 が指摘するように、脱範疇化においては文法化に伴い、major category (> adjective/adverb) > minor category という単一方向性が考えられる。従って、ある言語において、情報源を言語化する形式が自立性の低く、専ら文法機能を担うような minor category に属する場合、その言語は狭義の証拠性を持つ。一方、それが major category ばかりに属したり、または専ら他のカテゴリを表す手段を借用して情報源を表出したりするのであれば、その言語は広義的な証拠性を持つことになる。形容詞・副詞によって情報源を表出する言語は、この両者の中間として位置づけられる。Boye & Harder 2009 が指摘するように、情報源を意味する文副詞は小辞との区別が判然としない（§ 2.1.6 を参照）ため、副詞によって情報源が表出される場合は、より狭義的な証拠性と考えるても良い。

また、情報源の特定化につながる形式の中で、語源の観点から見ると、情報源の種別を第一義とする形式もあれば、そうでない形式もある。例えば、例(9)の“说是”・“想是”は前者の例であり、(10)bの“太～(了)”は後者の例である。以上の「情報源表出形式の文法的ステータス」と「その形式が情報源を第一義とするか否か」を二つの軸として交差させると、次の〈表1〉ができる。情報源を第一義とする形式の中で、major category に属すものは「証拠構造 evidential construction」と呼び、minor category に属すものは「証拠素 evidential」と呼ぶことにする。また本研究は、情報源を第一義としないものの、それを手がかりにして情報源を特定でき、minor category に属す形式は「証拠策 evidential strategy」として考える。

〈表1〉 情報源表出形式

		情報源を第一義とするか否か	
		第一義	非第一義
文法的 ステータス	minor	証拠素 (evidential)	証拠策 (evidential strategy)
	major	証拠構造 (evidential construction)	情報源の表出と関係なし

evidential と evidential strategy という二つの用語は、Aikhenvald 2004 でも用いられているものである。狭義の証拠性しか扱わなかった Aikhenvald 2004 は major category に属する形式——つまり語彙的形式——によって情報源を表出する現象に触れないことにしている。これに対して、本研究は情報源の表出につながる動詞句から構文までの様々な形式を「証拠構造」と仮称しておく。証拠素 (evidential) と証拠策 (evidential strategy) に関しては、基本的に Aikhenvald 2004 を踏襲して使うが、副詞の中の自立性が極めて低いものをも minor category に属するものと考えているので、Aikhenvald 2004 が evidential と見なさなかったこのような副詞も本研究では evidential になることに留意されたい。また、「証拠素」と「証拠構造」を特に区別しなくても良いと思われる場合は「証拠表現」と呼ぶ。

ところで、「証拠素」と「証拠構造」を区別する理由は何であろう。一つ目の理由としては、§ 2.2.2 に既に触れたように、語彙項目（即ち「証拠構造」）で表される情報源的なものは、文法範疇の意味での証拠性を考える際に必要以上にシステムを複雑化させかねないことが挙げられる。視覚・聴覚のような個々の感覚をそれぞれ一つの情報源として認定するか、それとも一括りにして〈知覚〉とするかは、語彙項目だけを根拠にしていくら議論しても有意義な結論を到底導けない。

さらに、もう一つの理由がある。文法的性 (grammatical gender) が実際の性別と一致しないことも多いように、証拠素が意味する文法的情報源は、必ずしも実際の情報源と一致するわけではない。例えば、次の Abkhaz 語（グルジア共和国内北西部）の用例を見てほしい。

(11) (Abkhaz 語)

ha+ra h-nə-(a)j+ba-r-c^ʰa-wa-zaapʹ

we we-thither-together-CAUS-exterminate-PROG-NONFIRSTH

‘We are apparently killing each other’ (Aikhenvald 2004:222)

話し手が「殺し合い」という出来事の参与者という点から考えると、(11)の情報の実際の情報源は〈直接経験〉にほかならない。にもかかわらず、NON-FIRSTHAND の情報源を表す証拠素が例(11)に用いられている。これに対して、「証拠構造」の場合、その証拠構造が意味する情報源と実際の情報源とが一致しないことは考えら

れない。例えば、上海語の“伊讲（「彼が言う」）”は文末に置かれた場合は、文頭に置かれた場合と異なり、〈伝聞〉の証拠構造ではなく、〈伝聞〉の証拠素だと考えられる（詳しくは第5章を参照）。しかし、次の比較から分かるように、実際には、「張くんが遅刻している」ことを〈直接経験〉として知り得た場合でも文末の“伊讲”が許される⁴。

(12) [張くんが遅刻したのを見て]

a. 小张 也 迟到 了 伊讲。

張くん も 遅刻する FP REP

‘意外なことに、張くんも遅刻したんだ’

b. #伊 讲 小张 也 迟到 了。

彼 言う 張くん も 遅刻する FP

‘彼は張くんも遅刻したと言った’

以上をまとめると、情報源表出形式はあらゆる言語にあると考えられるのに対して、「証拠素」は文法範疇としての証拠性を持つ言語にしか存在しない。それ故、文法レベルで証拠性に関する類型論的研究——例えば通言語的に証拠素の語源由来や派生用法の比較、証拠性システムと証拠素の意味用法とのつながりを考察するものなど——を行うために、「証拠素」を「証拠構造」とは別に、「特別扱い」する必要があると思われる。

3.1.5 証拠性システム

ある言語における証拠素の数と各証拠素の意味（つまり表す情報源）が、その言語の「証拠性システム」を決める。Aikhenvald 2004 によると、2 選択（証拠素が二つある言語）から 5 選択のシステムの存在が確認されている。

⁴ この点に関して、証拠素のほかに証拠策も証拠構造と対照的である。例えば、本章の注3で述べたように、実証的情報源の証拠策として考えられる“太～了”（§3.4.1.1を参照）は擬似的な直接経験に用いられることがある。なお、言うまでもないが、このような証拠素および証拠策の「転用」には一定の条件が必要である。

(13) 確認されている証拠性システム (Aikhenvald 2004: Conventions)

A: 2 選択のシステム

- A1. Firsthand and Non-firsthand
- A2. Non-firsthand versus ‘everything else’
- A3. Reported (or ‘hearsay’) versus ‘everything else’
- A4. Sensory evidence and Reported (or ‘hearsay’)
- A5. Auditory (acquired through hearing) versus ‘everything else’

B: 3 選択のシステム

- B1. Direct (or Visual), Inferred, Reported
- B2. Visual, Non-visual sensory, Inferred
- B3. Visual, Non-visual sensory, Reported
- B4. Non-visual sensory, Inferred, Reported
- B5. Reported, quotative, and ‘everything else’

C: 4 選択のシステム

- C1. Visual, Non-visual sensory, Inferred, Reported
- C2. Direct (or Visual), Inferred, Assumed, Reported
- C3. Direct, Inferred, Reported, Quotative

D: 5 選択のシステム

- D1. Visual, Non-visual sensory, Inferred, Assumed, and Reported

以上の諸システムから、情報源の文法的表出にはある程度の含意的普遍性が見られる。例えば、ある言語において *inferred* を表す証拠素があれば、必ず *sensory* (*visual* か *non-visual sensory*) 或いは *direct* を表す証拠素があるようである。逆に言うと、*sensory* (*visual* か *non-visual sensory*) 或いは *direct* を表す証拠素を持たない言語は、*inferred* を表す証拠素も持たないと予測されるのである。

以下では、証拠素・証拠策・証拠構造に焦点を当てて中国語（共通語を中心にして）における情報源の表出を俯瞰する。そこから中国語の証拠性システムを抽出する作業を行う。

3.2 共通語における証拠構造

情報源の意味に直結できるもののうち、major category に属す形式が証拠構造である、という基準から考えれば、共通語における証拠構造は主に情報を知り得た手段を意味する動詞句である。情報源の種別は動詞の意味によって決まる。

以下、Willet 1988 と Aikhenvald 2004 が提唱した〈実証的情報源〉・〈推論的情報源〉・〈伝聞的情報源〉という順で共通語の証拠構造を挙げていく。なお、これらの形式が全てのものだと網羅するのではなく、あくまでも典型例として提示するだけである。しかし、これらの形式以外に存在する、証拠構造の認定基準に満たす形式も以下に示す諸々のタイプ（つまり感覚動詞・思考動詞・伝達動詞）のどちらかに分類されることができるとは必ずである。

3.2.1 実証的情報源の証拠構造

視覚・聴覚・臭覚・味覚・触覚などを意味する感覚動詞は〈知覚〉をメインとした実証的情報源の表出につながっている。以下の例文では、波下線で示される部分は情報であり、直線で示される部分は情報源を示す証拠構造である。

- (14) 过了 一会儿， 街上 的 行人 开始 多起来，
 経つ-PERF 僅かな時間 街-LOC SP 通行人 し始める 多い-動き出す
 我 看到 前面 不 远 处 已 有 一 个 报摊
 私 見る 前方 NEG 遠い ところ 既に 存在する 一つ CL 新聞を売る露店
 即将 开张。 (CCL)
 もうすぐ 開店する

‘しばらくすると、街の通行人が多くなってきた。前の遠くないところに、一軒の新聞を売る露店がもうすぐ開店するのが見えた’

- (15) 我 听见 女仆 把 一 盘 蔬菜 轻轻 地 放 在 我 背后 的
 私 聞く 下女 を 一つ CL 野菜 軽い CL 置く に 私 後ろ側 SP
 碗柜上， 以免 扰乱 这 一 片 寂静。 (CCL)
 食器棚-LOC しないですむように かき乱す この 一つ CL 静かさ
 ‘下女がこの静かさを邪魔しないように、一皿の野菜を私の後の食器棚に

そっと置いたのが聞こえた’

- (16)但 随之 又 更加 不安, 因为 我 闻到 他们
 しかし これに伴って また 更に 不安する ~なので 私 嗅ぐ 彼ら
 全都 有 酒气, 知道 他们 刚刚 把 酒 喝完。(CCL)
 すべて ある 酒の匂い 分かる 彼ら したばかりだ を 酒 飲み終わる
 ‘しかしその後さらに不安になった。彼らが全員お酒の匂いがするのを嗅
 ぎ、彼らはお酒を飲み終わったばかりだと知ったからだ’

- (17)金門高粱 不 加 小配料, 一 喝 就
 金門コーリャン酒 NEG 加える 添加物 ちょっと 飲む すると
 尝出 像 以前 北京 卖的 四十度 散装 白酒,
 味わって分かる 似ている 昔 北京 売る SP 40度 バラ売り 白酒
 比 二锅头 差着 一个 等级。(CCL)

より 二鍋頭 劣る-PROG 一つ CL 等級

‘金門コーリャン酒は添加物を加えない。少し飲むと、昔北京で売られた
 40度のバラ売りの白酒に似ていて、二鍋頭に比べて一クラス下であること
 が味わってみて分かる’

- (18)睡到 半夜, 一 翻身, 我 觉出 床
 寝る-至る 夜中 ちょっと 寝返りする 私 感じる ベッド
 在 轻轻地 颤抖, [……] (CCL)

しているところだ 軽い SP ぶるぶると震える

‘夜中まで寝て、寝返りをうつとベッドが小さく揺れている気がした’

3.2.2 推論的情報源の証拠構造

文を目的語に取った思考動詞は推論的情報源を示し、話し手もしくは他の参加者が推論を通して認識した内容を導く。

- (19)我 猜测 黄量 小 时候 一定 是 一个 优等生。(CCL)

私 推測する 黄量 小さい とき きっと である 一つ CL 優等生

‘黄量は小さいとききっと優等生だったと思う’

- (20) 有了 这么 好 的 工作, 我 觉得 我 得
 ある-PERF このよう よい SP 仕事 私 思う 私 する必要がある
正儿八经 谈 一 次 恋爱了。 (CCL)
 真面目に 対話する 一つ CL 恋愛 FP
 ‘こんなに良い仕事も見つかったし、恋愛をちゃんと一回しなきゃと思っ
 た’
- (21) 革命 胜利 以后, 有些 现象 我 认为 是 很 不 健康 的。
 革命 勝利する 以降 一部の 現象 私 思う である とても NEG 健康 FP
 (CCL)
 ‘革命が勝利して以来、一部の現象は極めて不健康だろうと思う’
- (22) 作家 的 组织 固然 可以 排遣 他们 的 孤独, 但是 我 怀疑
 作家 SP 組織 むろん できる はらす 彼ら SP 孤独 しかし 私 疑う
它们 未必 能够 促进 作家 的 创作。 (CCL)
 それら とは限らない できる 促進する 作家 SP 創作
 ‘作家の組織はむろん彼らの寂しい心をはらすことができるが、作家たち
 の創作が促進されるとは限らないだろうと思う’

この種の思考動詞を用いる文は、人間を意味する主語を取らなくても良い場合がある。その場合は、話し手個人を含め、一般的にそのように推論・認識されることがを表す。

- (23) 今天, 地球上 平均 每天 有 一 种 生物 灭绝。 估计 到
 今日 地球上 平均 毎日 ある 一つ CL 生物 絶滅する 推測する 至る
21 世纪, 可能 消失 的 物种 总数 将
 21 世紀 かもしれない 消失する SP 生物の種 総数 もうすぐ~する
达 100 万 种。 (CCL)
 達する 100 万 CL
 ‘今日、地球では平均で一日あたり1種類の生物が絶滅している。21世紀
 になると、絶滅した生物の種の総数は100万種に達するだろうと思われ
 る’

(24) 如果 你 也 生活 在 这 座 城市, 相信 你
 ならば あなた も 生活する における この CL 町 信じる あなた
 可能 遇见你 我。 (CCL)

かもしれない 遭遇する-EXP 私

‘もしあなたもこの町に住んでいたら、私と会ったことがあるだろうと思
 う’

また、「～による」を意味する“据”などがこれらの動詞の直前に用いられた場合
 は、話し手以外の人への〈推論〉的認識であることを表す。

(25) 这 种 蜥蜴 长着 与 噬人鲨 类似 的 牙齿,
 この CL トカゲ 生える-PROG と 人喰いザメ 類似する SP 歯
 据 信 是 9000 万 年 前 地球 上 最 大、
 による 信じる である 9000 万 年 前 地球 上 最 も 大 き い
 最 可 怕 的 的 食 肉 动 物 。 (CCL)

最も 恐ろしい SP 肉食動物

‘この種類のトカゲは人喰いザメのと類似する歯をしている。9000 万年前
 の地球上で最も大きく、恐ろしい肉食動物だったと思われる’

次に、思考動詞の“想”と視覚動詞の“看”に“来”が後続する形である“看来”、
 “想来”または“看”と“起来”・“上去”からなった“看起来”・“看上去”も
 〈推論〉を表す。

(26) 原 以为 这 些 钱 在 北 京 起 码 够
 もともと 思い込む これら 金 における 北京 少なくとも 足りる
 生活 半年, 现在 看来, 别 说 生活 半年, 连 半年
 生活する 半年 現在 見たところ NEG 言う 生活する 半年 すら 半年
 的 房租 都 不 够。 (CCL)

SP 家賃 まで NEG 足りる

‘最初はこのお金が少なくとも北京で、半年間の生活費に足りると思った

が、今になって半年間の生活費はおろか、半年間の家賃にも足りないだろうと思う’

- (27) 我 认识 唐刚 时, 他 就 已经 结婚 了, 老婆 一直 在
私 知り合う 唐剛 とき 彼 もう 既に 結婚する FP 妻 ずっと 居る
农村 老家, 孩子 都 三四岁 了。想来 老婆 已 不
農村 実家 子供 既に 三四歳 FP 考えたところ 妻 既に NEG
年轻, [……] (CCL)
若い

‘唐剛と知り合いになったとき、彼は既に結婚していた。嫁さんは農村の実家において、お子さんが既に三四歳になっていた。嫁さんはもう若いだろうと思う’

- (28) 她 的 头发, 脸上 的 妆, 衣服、鞋子, 每一 样 都 很
彼女 SP 髪 顔-LOC SP 化粧 服装 靴 每一つ CL すべて とても
精致, 精心 雕琢 得 极 有 品味,
手が込んでいる 心を込める 飾り立てる SP 極めて ある 品
价格 看起来 也 相当 不菲。 (CCL)
値段 見たところ も 相当 高い

‘彼女の髪型、顔の化粧、服、靴、どれもこれも手が込んで、心を込めて品があるように飾られている。値段も相当高いだろうと思う’

- (29) 这 名 混 在 人群中 的 袭击者 留着 大胡子,
この CL 混じる いる 人混み-LOC SP 襲撃者 蓄える-PROG 髭もじゃ
看上去 最多 20岁 出头, [……] (CCL)
見たところ せいぜい 20才 上回る

‘人混みに混じり込んでいるこの襲撃者は髭もじゃで、見たところせいぜい20才を超えた年頃だ’

推論を行い、ある認識に至った主体は前置詞句の“在～”で明確にすることができる。(30)・(31)はもし“在～”がなければ、話し手がそのように認識していると解釈される。

- (30) 在 他 看来, 昆曲 艺术 最 好 的 演 员 在 大 陆,
 における 彼 見たところ 昆劇 芸術 最も 良い SP 俳優 居る 大陸
而 最 好 的 观 众 却 在 台 湾。 (CCL)

しかし 最も 良い SP 観衆 しかし 居る 台湾

‘彼は、昆劇は最も優秀な俳優が大陸にいるが、最も優秀な観客は台湾に
 いるだろうと思っている’

- (31) 他 的 最 高 理 想 就 是 求 外 国 人 高 抬 贵 手,
 彼 SP 最も 高い 理想 他でなく である お願いする 外国人 大目に見る
 不 打 他, 让 他 好 好 当 洋 奴。 在 他
 NEG 殴る 彼 CAUS 彼 良い 務める 外国人様の手先 における 彼
想 来, 日 本 人 能 打 败 英 国 佬, 而 中 国
 考えたところ 日本人 できる 敗北させる イギリス人 一方 中国
一 定 打 不 过 日 本。 (CCL)

きっと 勝てない 日本

‘彼の最高の理想は、外国人がどうか大目に見てくださって彼を殴らない
 で、彼を安心して外国人様の手先にすることだ。彼は、日本人はイギリ
 ス人に勝てるし、中国は絶対に日本に勝てないだろうと思っている’

- (32) 门 就 在 这 边, 在 我 看 起 来, 多 半
 扉 他ではなく ある この辺 における 私 見たところ たぶん
就 是 我 们 能 够 走 到 的 最 后 一 个 地 方 了。
 他ではなく である 私たち できる 行く-至る SP 最後 一つ CL 場所 FP
 (CCL)

‘扉はここにある。私は、ここがたぶん私たちが辿り着ける最後のところ
 だろうと思う’

『現代漢語詞典』(第6版)などは“想来”と“看来”を副詞として認定している。
 しかし上の例に示したように、連用修飾語としての“在～”や推測を行った時点
 を明示する“现在”などの修飾を受けられることから分かるように、それが一切で
 きない“想是”と比べて、“想来”と“看来”には脱範疇化の傾向が見られてい
 るものの、動詞の性格が依然として色濃く残っている。それゆえ、“想来”と“看来”

は証拠素ではなく、証拠構造に分類するべきであろう。

また、多くの言語で確認されているメタファーによる意味拡張である（Sweetzer 1990 を参照）が、中国語においても視覚動詞の“看”と伝達動詞（もしくは発話動詞）の“说”が意味拡張をし、一人称主語と共起した場合、〈推論〉の情報源を表すことがある。

(33) 这 倒 是 件 得 民 心 的 事, 我 看
 これ 意外なことに である CL 得る 民の心 SP こと 私 見たところ
 凭 这 一点 可以 和 齐国 打上 一 仗。(CCL)
 を頼りにする この 一点 できると 齐国 戦う-始まる 一つ 戦
 ‘これなら人心をつかむのだ。これで齐国と戦えるだろうと思う’

(34) 公共汽车、大型 客车 生产 的 自动化 程度 高 不 到 哪里
 バス 大型 乗用車 生産 SP 自動化 度合い 高い NEG 至る どこ
 去, 那 我们 就 有 竞争 优势, 所以 我 说,
 行く それなら 私たち すると ある 競争 優勢 だから 私 言う
 中国 重型 汽车 的 前途 是 很 光明 的。(CCL)
 中国 重型 自動車 SP 未来 である とても 明るい FP
 ‘バス・大型乗用車生産の自動化の度合いがあんまり高くないから、
 私たちの方が競争的優位を持っている。だから私は、中国の重型自動車の
 前途はとても輝かしいだろうと思う’

3.2.3 伝聞的情報源の証拠構造

伝達動詞は文を目的語に取った場合、伝聞的情報源を表出する効果がある。

(35) 我国 汉朝 有 个 著名 的 女 舞蹈家 赵飞燕, 传说
 我が国 漢朝 居る CL 著名だ SP 女の ダンサー 趙飛燕 言い伝える
 她 的 舞姿 轻盈 得 像 燕子 一样, 能够 在 人 的
 彼女 SP 踊る姿 軽い SP 似る つばめ 同様 できる における 人 SP
 手掌上 跳舞。(CCL)
 手のひら-LOC 踊る

‘我が国の漢朝時代に、趙飛燕という名高き女子ダンサーがいる。彼女の踊る姿はまるで燕のようにしなやかで美しく、人の手のひらの上で踊ることができるという’

(36) 八卦 相传 是 伏羲 所 造, 后来 用 来 占卜。(CCL)
八卦 言い伝える である 伏羲 SP つくる 後 使う 来る 占い

‘八卦は伏羲に作られたといい、後に占いに使われている’

(37) 在 这 以后, 我 听说 周扬 的 身体 更 差 了,
における それ 以降 私 と聞いている 周揚 SP 体 更に 劣る FP
他 住进了 医院, 医生 说 他 可能 成为 植物人。(CCL)

彼 住み込む-PERF 病院 医者 言う 彼 かもしれない なる 植物人間

‘その後、私は周揚はさらに衰弱して入院したと聞いた。お医者さんは、彼は植物人間になるかもしれないと言った’

(38) 据 有关 方面 说, 所谓 “挂靠关系”, 年初 已 “中止”。
による 関連する 組織 言う いわゆる 付属関係 年初 既に 中止する
(CCL)

‘関係組織によると、いわゆる「付属関係」は年初に既に「中止」となったという’

〈伝聞〉を示すという共通の意味を有していても、個々の伝達動詞の語彙的な意味の違いによって、互いに動詞を置き換えられない事例が存在する。例えば玉地 2005 は“听说”と“据说”の違いについて、“听说”は人から直接聞いたことを表すのに対して、“据说”はメディアから情報を得たこと、あるいは間接的に人から情報を得たことを意味する、と分析している⁵。この分析は、§ 2.1.4 で紹介した

⁵ 玉地 2005 の分析は修正する余地が全くないわけではないが、概ね妥当であると思われる。呉蘭 2011b は玉地 2005 の分析に対して、以下のような用例を反例としており、“听说”は話者との関係が比較的に近い情報に用いられ、“据说”は話者と関係していない情報に用いられると主張している。

- (i) (テレビで日本に大地震があったという報道を見て、日本にいる友達に電話して)
{听说/*据说} 昨天 日本 地震 了, 没事 吧。 (呉蘭 2011b)
昨日 日本 地震する FP 大丈夫だ FP
‘昨日日本に地震があったそうだけど、大丈夫?’
- (ii) (乾隆皇帝を研究する専門家から、直接話を聞いて)

Palmer 2001 の「報道 (2)」と「報道 (3)」を想起させるが、後で述べる理由からも分かるように、玉地 2005 の述べる“听说”と“据说”との相違点からは、中国語において「直接聞いた」という情報源と「メディアから、または間接的に人から聞いた」という情報源を文法的に区別しているという結論を導けない。本研究は基本的に文法的に区別される情報源だけを取り扱っているため、証拠構造の語彙的な意味に帰結できる用法の違いについては、これ以上立ち入らない。

3.3 共通語における証拠素

情報源を第一義とし、なお且つ minor category に属す形式は“说是”と“想是”の二つである。

3.3.1 “说是”・“想是”の第一義的用法

“说是”と“想是”はそれぞれ〈伝聞〉と〈推論〉の情報源と直結する形式である。例えば、例(39)の“说是”から、「バケツが血に流された」という情報が〈伝聞〉から知り得たものと了解できる。

{据说/^{??}听说} 乾隆 喜欢 作 诗, 一生 写过 十几万 首。 (呉蘭 2011b)
乾隆 好きだ 作る 詩 生涯 書く-EXP 十数万 CL
'乾隆は詩を作るのが好きで、生涯で十万首以上の詩も作ったそうです'

呉蘭 2011b は“听说”と“据说”の用法をより精密に記述しているが、なぜ i)・ii) に示したような相違が存在するのかについての説明を与えていない。“听说”と“据说”にこのような使い分けが存在する原因は、やはり“听说”と“据说”の語彙的意味にほかならない。仮に情報 X が A→B→C→D という順番に A~D の 4 人の中で広がるとしよう。C は D に“据 A 说 X”とは言えるが、“听 A 说 X”とは言えない。これは“据 (による)”は情報入手の具体的手段 (例えば直接か否か) が語彙的な意味として規定されておらず、それに対して“听”は「聞く」という手段に限定されるからである。「(情報を) 直接聞ける」人は多くの場合、自分との関係が近い人であり、その人から聞いた情報自体も自ずと自分との関係が比較的近いものとなる。一方、「(情報を) 直接聞けない」人は多くの場合、自分との関係もそれほど近くなく、それに連動してその人から発信された情報も自分と関係しない可能性が高くなる。ゆえに〈伝聞〉から情報を入手する前提のもとで、情報と話者との親疎関係により、“听说”か“据说”かの選択が可能になるのである。なお、文体の面においては、“据说”のほうが書面語により相応しいことは言うまでもない。「距離」を置いて述べる“据说”は客観性が求められる書面語との相性が良いからであろう。

(39) 这 瘸腿 的、残疾 的 小 女孩 刚 一
 この 跛 SP 体に障害がある SP 小さい 女の子 したばかり ちょっと
 落 地, 她 娘 的 鲜血 就 像 血河 一样 奔涌而出,
 落ちる 地面 彼女 母親 SP 血 すぐ 似る 血の川 同様 湧きだす
 止 也 止 不 住, 接生 用 的 红 木桶
 止める も 止める NEG 止む お産を助ける 使う SP 赤い 木のバケツ
 说是 都 让 血 给 冲走 了。(李锐、蒋韵《人间》)
 REP まで によって 血 に 流す-離脱する FP

‘跛で体に障害のあるこの女の子が生まれたとたん、彼女のお母さんはまるで川が湧き出すかのように出血して、止めようもなかった。お産を助けるときに使う赤い木のバケツまでも血に流されたという。’

次の(40)と(41)の“想是”からは、「風邪を引いた」という情報と「月が出ている」という情報が両方とも〈推論〉から知り得たものだと分かる。

(40) 老白 下晚 挨了 浇, 又 没 穿 衣, 想是 冻着 了,
 白さん 夜中 される-PERF 濡らす また NEG 着る 服 INFR 風邪を引く FP
 脑瓜子 痛 得 蝎虎。(CCL: 周立波《暴风骤雨》)
 頭 痛む SP 尋常ではない

‘白さんは夜中に水に濡らされ、服も着ていなかった。風邪をひいたのだろうか、頭がひどく痛いようだ’

(41) 呵! 窗户纸 发 亮, 想是 月亮 出来 啦, 休息 吧!
 あっ 窓紙 放つ 明るい INFR 月 出てくる FP 休む FP
 (CCL: 李英儒《野火春风斗古城》)

‘あっ！窓紙が明るくなってきた。月が出ているようです。休みましょう！’

なお § 3.1.2 で提示したように、証拠性に関する先行研究では、論理思考に基づく推論を ASSUMED とし、観察の結果に基づく推論を INFERRED というように分けている。ところが論理思考に基づく推論と思われる(40)と観察の結果に基づく推論と

思われる(41)に示されるように、“想是”は両方の場合ともに用いられる。つまり ASSUMED と INFERRED は“想是”の用法において未分化であり、文脈から切り離された場合“想是”に表される〈推論〉が基づいた根拠を特定することはできない。そのため、共通語において証拠素によって表出される〈推論〉は、ASSUMED も INFERRED も可能であり、どちらに解釈するかは文脈によって判断される。特に補足説明がない限りには、本研究は、ASSUMED と INFERRED を区別せず、「推論」で一括する⁶。

次の例(42)～(44)の a のように、例(39)～(41)の“说是”・“想是”を削除した場合、それぞれの情報は話し手の〈直接経験〉（目撃したか、出来事が発生した現場に話し手が立ち会ったから知り得た）に由来した情報、もしくは話し手が一般的知識・真理——すなわち情報源はいかなるものであっても、提示の必要がない——だと思っているように含意される。

(42)a. 接生用的红木桶 ∅ 都让血给冲走了。

‘お産を助けるときに使う赤い木のバケツまでも血に流されていた’

b. 听 产婆 说, 接生用的红木桶 ∅ 都让血给冲走了。

聞く 産婆 言う

‘産婆さんから、お産を助けるときに使う赤い木のバケツまでも血に流されたと聞いた’

(43)a. 老白 下晚 挨了 浇, 又 没 穿 衣, ∅ 冻着 了。

‘白さんは夜中に水に濡らされ、服も着ていなくて、風邪をひいた’

⁶ ASSUMED と INFERRED という二つのパラメーターは、“看起来”・“看上去”と“看来”の次の文における許容度の差を説明するのに有効かもしれない。年齢をめぐる推論の根拠として、外観的なもの（即ち INFERRED）が最も想定しやすいであるため、i）のように特殊な文脈がない限り、論理思考に基づく推論に傾く“看来”は不自然である。

(i) 他 {看起来/看上去/*看来} 二十岁 出头。
 彼 20 才 上回る
 ‘彼は 20 才を超えた年頃のように見える’

ところが、“看起来”・“看上去”・“看来”はあくまで語彙項目である。INFERRED だけを表す語彙形式や ASSUMED だけを表す語彙形式を有する言語が存在しても不思議なことではない。だからといって、その言語における文法範疇としての証拠性には、ASSUMED と INFERRED という二つの情報源があるという結論には辿り着けない。

b. 依_____我看, 老白下晚挨了浇,又没穿衣,∅冻着了。
 によって私見たところ

‘白さんは夜中に水に濡らされ、服も着ていなかった。風邪をひいた
 ろう’

(44)a. 窗户纸发亮, ∅月亮出来啦。

‘窓紙が明るくなってきた。月が出ている。’

b. 依我看, 窗户纸发亮, ∅月亮出来啦。

‘窓紙が明るくなってきた。月が出ているようです’

言うまでもなく、(42)~(44)の a は〈直接経験〉もしくは「一般的知識・真理」という読みが含意されるものであるけれども、(42)~(44)の b のように情報源を意味する形式を用いた場合、この含意は取り消される。

3.3.2 証拠素と認定する理由

3.3.2.1 “说是”と“想是”の低い自立性・独立性

〈伝聞〉と〈推論〉の情報源を意味する形式は“说是”と“想是”のみではない。§3.2.2と§3.2.3で述べたように、“听说”、“据说”、“据传”、“据称”などは〈伝聞〉を示し、“我猜”、“看来”、“想来”などは〈推論〉を示す。“说是”と“想是”だけを証拠素と認めるのは、この二つが文法的に自立性・独立性が低く、つまり minor category により近い形式だからである。

“说是”と“想是”の有する低い自立性・独立性は、以下の振舞いから窺える；

① “说是”と“想是”は名詞化できない。

(45) ‘この件は {誰かから聞いた/私が推測した} のだ’

a. *这件事是 {说是/想是} 的。

この CL ことである FP

b. 这件事是 {听说/我猜} 的。

② これらの形式は否定できない。

(46) ‘彼は北京に行ったとは {聞いて/推測して} いなかった’

a. *没 {说是/想是} 他 去了 北京。

NEG 他 行く -PERF 北京

b. 没 {听说/推想} 他 去了 北京。

③名詞句を目的語に取れない。さらに④アスペクト辞が付かない。

(47) ‘この件を聞いたことがある’

a. *说是 过 这 件 事

EXP この CL こと

b. 听说过 这 件 事

(48) ‘この可能性を推測したことがある’

a. *想是 过 这 一 可能性

EXP この 一つ 可能性

b. 推测 过 这 一 可能性

⑤時間詞や前置詞句などによる連用的修飾を受けられない。

(49)a. *前几天说是, *现在说是, *现在想是, *在上海说是

b. 前几天听说, 现在据说/据传/据称, 现在看来, 现在想来, 在上海听说
‘先日聞いた、今聞いた、今推測すると、今考えると、上海で聞いた’

⑥情報源の所有者（即ち受信者）を言語化することができない。

(50) ‘彼は北京に行ったと私は聞いている’

a. *我 说是 他 去了 北京。

私 他 行く -PERF 北京

b. 我 听说 他 去了 北京。

(51) ‘彼は北京に行っただろうと私は推測している’

- a. *在_____我想是他去了北京。
 における私 彼 行く -PERF 北京
- b. 在_____我想他来他去了北京。

⑦形式の拡張によって発信者を明示することができない。

(52)a. *他 { 说是/想是 }

b. 据报纸上说, 据报纸上称, 据大家传, 据他推想

‘新聞によると～という、皆の噂によると～という、彼の推測によると～’

以上の一連のテストに示したように、“说是”、“想是”は完全に文副詞と同様の振舞いを呈し、低い自立性・独立性を有することがわかる。

また、“说是”・“想是”において後置成分である“是”については、副詞化の接尾辞だと考えられる。陈光磊 1994 は“是”を“类后缀（準接尾辞）”と認定し、董秀芳 2004 はこのような“是”を語尾とまでは認定していないが、“词内成分（語の内部成分）”と考え、“说是”を副詞に数えている。また、通時的な考察から言くと、この“是”は太田 1958/1987[2003]:249 では副詞の語尾と考えられている。志村 1984/1995:75-78 も中古初期（3世紀～6世紀）に“～是”の構造を持つ語が激増していた中で、“是”が語尾として定着してきたと述べている。動詞的な形態素が表す意味を引き継ぎながら、動詞から脱範疇化させるという動機により、高い生産力を持つ後続の“是”が利用されるようになったと、本研究は考えている。以上から分かるように(39)～(41)にある“说是”、“想是”は副詞と考えるのが妥当である。

既に § 2.1.6 で紹介したように、Boye & Harder 2009 は情報源を意味し、自立性の低い副詞を証拠素から排除した見方を批判した。その理由は、自然言語には、こういった副詞は証拠素と認められたもの——とりわけ小辞 (particle) ——と多くの側面において極めて似通っているのみならず、語源が同一であるケースも珍しくないからである。中国語に関しても、これと類似する指摘ができる。刘一之 2006 によると、古い北京官話には、引用した発話の直後にそれが〈伝聞〉・〈引用〉であることを示す“说”を用いることがあるという。(53)a はその例である。

- (53)a. 姥姥 说：“你 二 舅 说：“他 拳头 大
 おばあちゃん 言う あなた 二番目 叔父 言う 彼 拳 大きい
 的 字 认不了 半 箩筐，还 觑着脸 当 校长。” 说。
 SP 字 読めない 半分 カゴ 依然として 凶々しく 努める 校長 REP
 就 这样儿，他 得 得着 好儿？”
 他ではなく このよう 彼 できる 得る-つく 利益

（刘一之 2006 により）

‘おばあちゃんは言った「あなたの二番目のおじさんは言ったよ。『彼は拳ほどの大きな字をカゴの半分ほど（の量）も知らないのに、よくも凶々しく校長を努めていやがるもんだ』と。そういうことで、彼は利益を得られるのだろうか」と。’

- b. 说是 他 拳头 大 的 字 认不了 半箩筐，还 觑着脸 当 校长。

‘彼は拳ほどの大きな字をカゴの半分ほど（の量）も知らないのに、よくも凶々しく校長を努めていやがるもんだという’

(53)a と b との比較から窺えるように、b の副詞の“说是”は、品詞性で言えば助詞と認めるべき文末の“说”と、ほぼ同様の機能——〈伝聞〉を示すこと——を果しているだけではなく、同じく発話動詞に由来したものである。従って、“说是”を minor category に属す形式と考える妥当性が十分にある。

一方、〈推論〉の証拠素の“想是”が比較的古い言い方であり、ジャンルが限られる点に留意されたい。“想是”は文学作品にしばしば現れるが、現在の口語ではほとんど使わないと言っても過言ではない。

3.3.2.2 〈伝聞〉以外の情報にも用いられる“说是”

また、上海語の文末の“伊讲”と同様に“说是”は〈伝聞〉ではなく、話し手の〈直接経験〉に由来した情報にも用いられる（その後、逆接的な後続部分が必要であるが）。詳しい考察は § 4.5.3 に譲り、ここでは“说是”を使うことによって、当該情報を擬似的な引用として提示して修正・追加説明を行うことができることを指摘しておくにとどめる。

(54) ‘私はスケッチを5年も習ったとは言え、結局絵を1ヶ月しか習っていない人よりも下手だ’

a. 我 说是 学过 五年 素描， 结果 画出来 的 东西 比 只
私 REP 学ぶ-EXP 5年 スケッチ 結局 描き出す SP もの より ただ
学了 一个月 的 都 不如。
学ぶ-PERF 1ヶ月 SP すら に及ばない

b. *我 据说 学过 五年 素描， 结果 画出来 的
私 聞くと ところによると 学ぶ-EXP 5年 スケッチ 結局 描き出す SP
东西 比 只 学了 一个月 的 都 不如。
もの より ただ 学ぶ-PERF 1ヶ月 SP すら に及ばない

(55) ‘私は三十歳を超えたとは言え、実はまだまだ世間知らずだ’

a. 我 说是 已 过 而立之年， 其实 为人处世 还
私 REP 既に 超える 三十歳 実は 物事に対する身の処し方 まだ
幼稚 得 很。
幼い SP とても

b. *我 据说 已 过 而立之年， 其实 为人处世 还 幼稚 得 很。

これに対して、“据说”などの〈伝聞〉を表す証拠構造にはこのような派生的用法がなく、〈伝聞〉由来の情報にしか用いられない。§3.1.4の例(11)と類似するこのような現象から、“说是”を証拠素と考えたほうがより妥当であることが分かる⁷。

3.4 共通語における証拠策

証拠策は情報源を第一義としないものの、特定の情報源に由来した情報にしか用いられない形式であり、またこの形式の使用によって特定の情報源を含意する。実証的情報源と推論的情報源に関して、共通語の証拠策がいくつか存在すると考えら

⁷ なお本研究では、ここで言う“说是”を“说是说”や“虽说是”などのヴァリエントと考えられない。なぜなら、“我{说是说/虽说是}学过五年素描”は「私がスケッチを5年習ったという」という解釈のほか、「私は(自分が)スケッチを5年習ったということを確かに言った」という解釈も可能であるのに対し、“我说是学过五年素描”の可能な解釈は前者のみだからである。

れる。

3.4.1 実証的情報源の証拠策

3.4.1.1 程度副詞“太”

小野 2010 は、“挺”と“太”を両方とも「“Direct Evidentiality（直接証拠性）”に基づく情報ソース、すなわち話し手自身が実際に経験・体験して知り得た性質や属性に関する程度を表す」程度副詞とした。その根拠として、小野 2010 の調査結果によると、高い確信度“一定”と推論を表す助動詞“会”からなる“一定会”に後続する“挺”と“太”の実例は CCL において一つも確認されなかったし、次のような文も極めて不自然に聞こえるという⁸。

- (56)^{??}您 能 不 能 把 我 介绍 给 中川先生，
 あなた できる NEG できる を 私 紹介する に 中川先生
 听说 您 和 中川先生 关系 挺 好 的。 (小野 2010)
 と聞いている あなた と 中川先生 仲 とても よい FP
 ‘中川さんにご紹介いただけませんか。あなたは中川さんとけっこう仲が
 いいと聞いておりますので’

“挺”は〈直接経験〉から知り得た性質や属性に関する程度を表すものかどうかについて、再考する余地がまだあると思われる⁹。しかし、“太”は〈推論〉・〈伝聞〉に基づく情報の表出に向いていないのは確実である。次の例を見られたい。

⁸ §2.2.4.3 で既に述べたように、本研究は助動詞の“会”が〈推論〉と関係なく、単に技能・慣習を表すと考えている。

⁹ 例(56)の自然度について、筆者の調査ではインフォーマントの回答は全員、問題ないということである。また現に CCL では一例だけではあるが、“一定会挺”の用例も発見された。

- (i) 我 师父 最是 慈祥 不过， [……]她 一定 会
 私 师父 最も おだやかで優しい に及ばない 彼女 きっと するものだ
 挺 喜欢 你 的。 (CCL: 金庸《神雕侠侣》)
 とても 好きだ あなた FP
 ‘我が師匠は最もおだやかで優しいお方で、[……]きっとあなたを気に入ってくれるでしょう’

(57) 悠悠：洋子小姐 是 吗？

洋子さん である Q

‘洋子さんでいらっしゃいますか’

洋子：你 是？

あなた である

‘あなたは’

悠悠：啊…… 我 是…… 你 的 粉丝。

INTERJ 私 である あなた SP ファン

你 的 每 场 话 剧 我 都 看。

あなた SP 各々 CL 演劇 私 すべて 見る

‘あの……私……あなたのファンです。あなたの演劇を毎回見ています’

洋子：谢谢。 可惜 这次 我 不 能 演 祝英台 了。

ありがとう 惜しい 今回 私 NEG できる 演じる 祝英台 FP

‘ありがとうございます。惜しいことに、今回は祝英台を演じることができなくなりました’

悠悠：噢， 不要紧 的，好好 休息。……

INTERJ 大丈夫 FP よい 休む

唉， 做 演员 太 辛苦 了。

INTERJ やる 俳優 すごく 辛い FP

‘ええ、気になさらないで。ゆっくり休んでください。……ああ、俳優って大変辛いですね。’

洋子：你 也 是 做 这 行 的？

あなた も である やる この 業界 SP

‘あなたもこの業界の人間なのですか’

悠悠：噢 不 不 不 不……我听 别人 说 的。

INTERJ NEG NEG NEG NEG 私 聞く 他人 言う FP

‘あっ、違う、違う……私は人から聞いたのです’

(テレビドラマ《爱情公寓 2》第 3 回)

例(57)は、入院中の女優の洋子の代わりに舞台上に上がることになっていた悠悠が、病院でお見舞いの傍ら、自分も女優であることを隠しながら、(引用部分の後のセリフから分かることだが)洋子に病身であっても出演してもらえるように説得しようとするエピソードである。“做演员太辛苦了”というセリフを口にしたとたんに、洋子に「あなたも女優なの」と尋ねたことが興味深い。つまり、“太”を用いた以上、普通は話し手自身の体験から知り得た情報の表出としての解釈が最優先されるわけである。ただ、例えば俳優が辛そうに仕事をしているのを直接目撃した場合などにおいては、〈直接経験〉に準じて、“做演员太辛苦了”と発話することは可能である。なお、小野 2010 は、“太”の表す程度の意味は、多くの辞書や文法書において、「過分」の意味と「極めて高い程度」という二つに分けられているが、後者は修飾される形容詞の意味と密接な関係を有することで現れるものであり、すべて「過分」という意味に集約することが可能である、と指摘する。本研究もこれと同じ立場である¹⁰。

¹⁰ なお、“太”は次のように仮設・条件複文の主節に用いられる。

- (i) 他 要是真 这样, 那 就 太 不像话 了。
 彼 仮に 本当に そのよう それ すると すごく 話にならない FP
 ‘彼はもし本当にそうだったら、とてもみっともない’

仮想事実のもとで導いた結論に用いられるからと言って、“太”は〈実証的情報源〉に由来する情報を必要とすることを否定することができない。なぜなら、(i)のような文において“太”が直接かかっている命題は、“他太不像话了(彼はとてもみっともない)”ではなく、あくまでも“这样太不像话了(そのようなことはみっともない)”（「彼はそのようなことをした」ということを確認できていない限り、「彼はとてもみっともない」という判断が成立しない）だからである。後者はまさに〈実証的情報源〉から知り得た情報（例えば、以前にそのようなことを経験しており、そこで「みっともない」と感じた）であり、意味上では“太”は“他要是真这样”という仮定・条件節の作用域には入っていないとも考えられる。それ故、仮設・条件複文の主節に用いても差支えはない。

また、“太”が § 3.4.2 で述べる推論的情報源の証拠策と共起することもまれに見られる。例えば、

- (ii) 他们 可能 太 疲劳 了。
 彼ら かもしれない すごく 疲れている FP
 ‘彼らはすごく疲れているかもしれない’

(ii)のような文が成立するには文脈の支えが必要である。例えば、彼らは時々欠伸をしたり、仕事でミスを繰り返したりするような文脈である。そのことから、(ii)における“可能”は、実際のところ「彼らは疲れている」についての推論ではなく、「彼らは疲れている」ことと「時々欠伸をしている」こともしくは「仕事でミスを繰り返している」ことと

ちなみに、「真」と断言するような副詞“真(的)”、“确实”などは〈直接経験〉に密接すると思われやすいが、実際のところ情報源を特定化するのに関与しない。次の例で示すように、これらの語は〈推論〉に由来した情報にも用いられるのである。

- (58) 跑 吧? 不行, 看来 她 真 敢 开枪。
逃げる FP ダメ 見たところ 彼女 本当に する勇気がある 発砲する
(CCL: 郑义《枫》)

‘逃げようか。ダメだ。彼女は本当に銃を撃つだろう’

- (59) 大家 只顾 逃, 逃了 多少 路, 谁 也 不 知道。
皆 ひたすら 逃げる 逃げる-PERF いくら 距離 誰 も NEG 分かる
以 速率 估计 逃 的 路 实在 不 少 了。(CCL)
をもって 速度 推測する 逃げる SP 距離 実に NEG 少ない FP
‘皆はひたすら逃げていた。どれほど逃げたかは誰もが知らなかった。速度で試算すれば、かなり長い距離を逃げただろう’

- (60) 我 猜想 我 确实 往 前 走 了, 尽管 不 知道 怎么
私 推測する 私 確かに へ 前 歩く FP けれど NEG 分かる どう
走过去 的。(CCL)
歩く-越える-行く FP
‘私は確かに前に進んだと思う。どうやって進んだか分からないけど’

本研究の定義に従い、情報源の特定に関与しない“真(的)”などの副詞は情報源表出形式とは認めない¹¹。

の因果関係の成立についての推論であることが窺える。(ii)の類の用例も“太”が実証的情報源から知り得た情報を求めることの反例にはならない。

¹¹ “真的”に置き換えられず、認定を強調する副詞“真”も、次の例に示すように、“看来”などと共起することができる。

- (i) 胡适 居然 主动 邀请 人, 到 自己 执教 的 大学,
胡適 意外なことに 自発的だ 誘う 人 至る 自分 教鞭を執る SP 大学
来 做 批评 自己的 著作 的 讲演, 这 看来 真 有
来る やる 批判する 自分 SP 著作 SP 講演 これ 見たところ 実に 有する

3.4.1.2 “形容詞＋着＋呢”構文

形容詞または形容詞に準じる句の後ろに用いる文末助詞の“着＋呢”は、ある種の属性・状態を確認するという機能を持ち、誇張の気持ちを多少含むと指摘されている（呂叔湘主編 1999:667）。例えば、「彼」・「私」の目が腫れていることを確認したのを伝えようとする場合は、(61)c,d を用いる。しかし、(62)が示すように、“着＋呢”を「彼の目は赤い」に付けることができるのに対し、「私の目は赤い」に付けると許容度が落ちる。

(61) [彼／私が泣いた直後]

- | | |
|-----------------|----------------|
| a. 他的眼睛很 肿。 | b. 我的眼睛很肿。 |
| 彼 SP 目 とても 腫れる | 私 |
| c. 他的眼睛肿着呢。 | d. 我的眼睛肿着呢。 |
| ‘彼の目はすごく腫れている’ | ‘私の目はすごく腫れている’ |

(62) [彼／私が泣いた直後]

- | | |
|----------------|---------------|
| a. 他的眼睛很 红。 | b. 我的眼睛很红。 |
| 彼 SP 目 とても 赤い | 私 |
| c. 他的眼睛红着呢。 | d. ??我的眼睛红着呢。 |
| ‘彼の目はすごく赤い’ | ‘私の目はすごく赤い’ |

それから、王彦杰 2010 にも指摘されたように、「少量」という意味素性を持つ形容詞は“着＋呢”と相容れない。例えば、

- | | |
|--------------------------|------------------------|
| (63)a. 花 钱 的 地 方 很 多。 | b. 花 钱 的 地 方 很 少。 |
| 費やす 金 SP ところ とても 多い | 少ない |
| c. 花 钱 的 地 方 多 着 呢。 | d. *花 钱 的 地 方 少 着 呢。 |
| ‘お金を費やすところがすごく多い’ | ‘お金を費やすところがすごく少ない’ |

学者 风度, [……] (CCL)

学者 風格

‘意外なことに、胡適は自ら、自分が教鞭を執っている大学に、自分の著作を批判する講演をしに来るように人を誘った。これは実に学者的風格があることだろう’

- (64)a. 他 个子 很 高。
 彼 背 とても 高い
- b. 他 个子 很 矮。
 低い
- c. 他 个子 高 着 呢。
 ‘彼は背がすごく高い’
- d. ??他 个子 矮 着 呢。
 ‘彼は背がすごく低い’

「お金を費やすところが少ない」ことや「身長が低い」ことを確認した上で誇張の気持ちで表すことが可能と予測されるにもかかわらず、(63)d と(64)d はいずれも不自然である。上記の呂叔湘主編 1999:667 の記述だけではなぜ(62)～(64)の d が不自然なのかを適切に説明することが難しい。

証拠性の観点から見ると、“着+呢”は視覚・聴覚・味覚・臭覚・触覚を含める〈知覚〉および自ら参与しているデキゴトの〈直接経験〉から知り得る情報のみに見える形式であると考えられる。言い換えれば、“着+呢”は〈知覚〉からの情報を要求するのである。

触覚や深部感覚 (deep sensation, 皮膚より深い部分の筋肉や腱などにある受容器から生じる感覚のこと) などによって確認できる身体部位が腫れていることに対して、目が赤いことは視覚によってしか確認できない。一方、他者の目が赤いことは話し手から見えるが、話し手の目が赤いということは、鏡や映像などに映った自分の姿を見ているような特殊な場合でない限り、話し手自身には観察できない。それゆえ(62)d は不自然になるわけである。

それから、当然ながら「大量」(大きいもの、数の多いもの、程度の高いもの)より「小量」(小さいもの、数の少ないもの、程度の低いもの)のほうが知覚されにくい。例えば「数が多いもの」であればあるほど容易に発見されるのに対して、「数が少ないもの」は見落とされがちである。そのため、「小量」という意味素性を持つ形容詞は、〈知覚〉から知り得る情報を求める“着+呢”と相性が良くないのも無理もないことである。したがって、(63)d の「お金を費やすところが少ない」ことはもとより、実際に「身長が低い」ことは一目で分かるにもかかわらず、(64)d もかなり特殊な文脈が整わなければ不自然な文となる¹²。

¹² 王彦杰 2010 は“早、小、年轻”など、時間・年齢に関する形容詞が無理なく“着+呢”と共起できることについて、これらの形容詞の参照点、すなわち時間軸における話し手の心理的視点は過去における起点ではなく、未来における遠い点であり、形容詞の表す時間的な点からこの未来における点までの距離が大きいため、“着呢”と共起できると述べて

ところで、“着+呢”が〈知覚〉由来の情報にしか用いられないモチベーションはどこにあるのだろうか。このことは、“着+呢”を構成する個々の形態素の意味および語源から考えると、説明が付くと思われる。通時的な考察から既に明らかにされてきたように、“着”は「付着」から「存続」へと意味拡張をしてきたものであり、“呢”は場所詞の“裏”と同源である（呂叔湘 1940、太田辰夫 1958/1987[2003]、孫錫信 1999、魏玉龙 2009）。このような“着”と“呢”から構成される“着+呢”は、リアルな時空間における存続の表出になる。これはまさに直接経験や知覚による観察を前提として要求するものであり、よって“着+呢”は〈知覚〉に繋がっているのである。

以上、話し手には観察できない属性・状態、または「少量」の意味素性を持つ形容詞に“着+呢”が用いられないこと、または“着+呢”の語源から、“着+呢”は〈直接経験〉・〈知覚〉による情報のみに使用でき、これらの情報源の証拠策と見なせることを述べた¹³。

いる。本研究はそれに同意する。(64d)が自然である文脈は、例えば次のように、「背が高い」と見なされる身長まで、その人の身長はまだ程遠いといったものである。

- (i) A: 他 个子 高 不 高?
 彼 背 高い NEG 高い
 ‘彼は背が高いのか’
 B: 不 高, 不 高, (他 个子) 矮 着呢。
 NEG 高い NEG 高い 彼 背 低い
 ‘いいえ、高くない。彼は背がどうも低い。’

¹³ 以下の例に示すように、“形容詞+着+呢”を述語とする節は〈伝聞〉の情報源を表す“听说”に埋め込むことができる。

- (i) 听说 他 个子 高 着呢。
 と聞いている 彼 背 高い
 ‘彼は背がどうも低いそうだ’

しかし、これは“着+呢”が〈直接経験〉・〈知覚〉の証拠策のことを否定するものではない。なぜなら、(i)のような文は、埋め込み節の情報源の持ち主(受信者1)と“听说”を述語動詞とする主節の情報源の持ち主(受信者2、話し手)が異なる人物だからである。受信者2にとって“他个子高着呢”は〈伝聞〉由来の情報であるが、受信者1から見ると、“他个子(相当)高”は〈直接経験〉・〈知覚〉に基づいたものである。“形容詞+着+呢”が“估计”のように〈推論〉を表す動詞の目的語節にならないのは、まさに受信者1と受信者2が同一人物だからである。

- (ii) ??估计 他 个子 高 着呢。
 と予測する
 ‘彼は背がどうも低いと思う’

3.4.1.3 述語に用いる状態形容詞および一部の成語

状態形容詞は従来、描写することをメインの機能とし、物事の状態を表すとされてきた（刘月华ほか 2001:193）。中には、接辞を持つ形容詞、「名詞的・動詞的形態素＋形容詞的形態素」型の複合形容詞、形容詞の重ね型という3種のもものが挙げられる。従来の記述では、状態形容詞について高い描写性を持っていると述べられてきたが、「描写性」という概念そのものの意味が曖昧である。

状態形容詞には描写性のほかに、別の機能もあるかもしれない。しかし、証拠性の観点から見れば、特に述語および様態補語に用いられる状態形容詞は〈知覚〉に基づく情報を要求すると考えられる。

まず ABB 型の“香喷喷”を例にして証明したい。料理番組に登場しているゲストがテーブルに載せた料理を美味しそうに眺めているのを見た視聴者は、(65)a・b を問題なく言えるが、c はかなり不自然であり、d はさらに許容度が落ちる。

(65) [ゲストの様子を見た視聴者は料理について]

- | | |
|-----------------------------|-------------------|
| a. 这道菜 很香。 | b. 这道菜 看来 很香。 |
| この CL 料理 とても 香ばしい | 見たところ |
| c. ^{??} 这道菜 香喷喷 的。 | d. *这道菜 看来 香喷喷 的。 |
| ‘この料理はいい匂いがする’ | ‘この料理はいい匂いがするようだ’ |

この場面における「この料理はいい匂いがする」ことは、話し手がゲストの反応に基づいた〈推論〉から知ったとしか考えられない。(65)a は証拠性が中立的であり、情報源を表出しないため、問題なく成立する。b は“看来”という〈推論〉を意味する証拠構造を用い、実際の情報源と一致しており、自然な発話である。これに対して、a・b のミニマル・ペアとしての c・d は不自然である。その起因はやはり“香喷喷”と“(很)香”との差に求めるしかない。そこで考えられるのは、“香喷喷”

また、少し補足すると、“着+呢”が付いた情報が通常〈直接経験〉・〈知覚〉から知り得たものと考えにくい場合は、聞き手は「どうやってそれを知っているのか」と問いかけてくるのが一般的な反応である。それに対し、〈直接経験〉・〈知覚〉から知り得たものと想定できる場合は、通常はそれを問うことがない。

は[いい匂いがする-SENS]というような意味構造を持っているということである。それゆえに、実際は〈推論〉から知り得た情報にもかかわらず恰も〈知覚〉に基づいた情報のように語る c は文脈上妥当ではない。また、[[いい匂いがする-SENS]-INFR]のように矛盾している情報源が言語化されている d は非文になるわけである。なお、“听说这道菜香喷喷的”は文法的であるが、上の論点の反例にならない。これは(65)c,d の内実と異なるのである。[[いい匂いがする-SENS]-REP] から分かるように、〈伝聞〉は話し手側の情報源である一方、〈知覚〉は第三者側（＝引用される元の発話者）の情報源であり、話し手は第三者側の情報源を含めたものを新たな情報としているからである。

それから、接頭辞を持つ状態形容詞・各種の重ね型・「名詞的・動詞的形態素＋形容詞的形態素」型の複合形容詞に関しても、同様の振舞いが確認できる。

(66)a. 他 袖子 一 挽， 身子 一 弓， 两眼 瞪 得
 彼 袖 ちょっと 引っ張る 体 ちょっと 曲げる 两眼 見開く SP
 滴溜圆，向“敌人”前沿 猛扑过去， [……]（CCL：作家文摘）
 丸い に 敵 前線 突進する-越える-行く
 ‘彼は両袖を上げ、腰を曲げ、目をまん丸にし、「敵」の前線に凄い勢いで突っ込んでいく。’

b. 他[……]两眼 瞪 得 圆圆的， [……]

c. *他[……]两眼 瞪 得 估计 {滴溜圆/圆圆的}， [……]

(67)a. 客人 邋里邋遢， 一 条 领带 又 脏 又 旧，
 客 だらしない 一つ CL ネクタイ また 汚い また 古びた
 白 衬衫 领边 也 现出 黄里 透 黑。
 白い シャツ 襟 辺り も 現れる 黄色 中 示す 黒

（CCL：《读者（合订本）》）

‘来客はとてものだらしめない人だ。古びたネクタイは汚いし、白シャツは黄色の中に黒が混じったような染みが襟に出ている。’

b. ??客人 估计 邋里邋遢 的， [……]

(68)a. 有的 大 树 长到 60 多 米，
 ある 大きい 木 成長する-至る 60 あまり メートル

- 树干 仍然 笔直。 (CCL: 《中国儿童百科全书》)
 幹 依然として 真っ直ぐ
 ‘60メートル以上も高く、幹が依然として真っ直ぐな大きな木がある’
 b. ^{??}估计 树干 仍然 笔直。

それ以外に、四字熟語から構成される一部の成語も類似する効果があると思われる。例えば、形容詞の“蒼翠”と瑞々しく、まるで水滴が垂れそうなさまを表現する“欲滴”からなる四字熟語の“蒼翠欲滴”は状態形容詞のカテゴリに入らないが、上記の述語に用いられた場合の状態形容詞と並行する現象が確認される。

- (69)a. 大雨 过后, 饱经 荡涤 的 棕榈树 枝叶
 大雨 経つ 後 多くの～を味わってくる 洗い流す SP シュロ 枝 葉
 繁茂, 蒼翠欲滴。 (CCL: 1994年人民日报)
 生い茂る 青々としている
 ‘大雨の後、よく洗濯されたシュロは枝も葉っぱも茂り、青々としている’
 b. *估计 棕榈树 枝叶 繁茂, 蒼翠欲滴。

なぜ状態形容詞には上記のような効果があるのだろうか。それは、状態形容詞の高い「描写性」は知覚による観察を前提にしているからだと思われる。観察を行わないと細部までの描出が不可能である。その裏返しとして、細部までの描出は〈知覚〉という情報源の存在を保証することになる。

3.4.2 推論的情報源の証拠策

3.4.2.1 「危惧」の副詞群：“怕是” “恐怕” “别是”

「危惧(apprehensional)」とは事実として成立可能と思われ、かつ不利なことである。この定義から分かるように、そこには「蓋然性」といった認識的モダリティの意味素性が混在している(Lichtenberk 1995を参照)。共通語は副詞の“怕是” “恐怕” “别是”で「危惧」を表す(高増霞 2003を参照)。

(70)a. 那 个 时 候 我 哪 里 知 道 什 么 “中 戏” 呀， 就 是
 その CL とき 私 どこ 分かる 何 中 戲 FP たとえ～ても
 知 道 了 怕 是 也 考 不 上。 (CCL: 中国北漂艺人生存实录)
 分 か る -PERF 懸 念 す る も 受 か ら な い
 ‘そのころ「中戲」のことを少しも知らなかった。知っていたとしても受
 けられなかっただろう’

b. 就 是 知 道 了 想 是 也 考 不 上。

(71)a. 若 不 是 他 选 中 我 做 了 秘 书， 那 个 月
 もし～ならば NEG である 彼 選 ぶ 私 務 め る -PERF 秘 書 あの CL 月
 的 房 租 我 真 不 知 道 该 到 哪 儿 去 找， 恐 怕
 SP 家 賃 私 本 当 に NEG 分 か る べ き 至 る ど こ 行 く 探 す 恐 ら く
 早 被 房 东 赶 到 大 街 上 去 了。
 と っ く に に よ っ て 大 家 追 い 出 す -至 る 大 通 り -LOC 行 く FP

(CCL: 中国北漂艺人生存实录)

‘彼が私を秘書として選んでくれなかったら、その月の家賃をどう工面し
 たらよいか、本当に分からなかった。きっととっくに大家さんに大通り
 に追い出されてしまっただろう’

b. 想 是 早 被 房 东 赶 到 大 街 上 去 了。

(72)a. 这 孩 子 怎 么 的 呢， 别 是 有 病 吧，
 この子 どう FP FP ひょっとして～だろう ある 病 気 FP
 送 医 院 里 检 查 检 查 吧。 (CCL: 汪曾祺《羊舍一夕》)
 送 る 病 院 -LOC 検 査 し て み る FP

‘この子はどうしたの。まさか病気なんかじゃあるまいね。病院につれて
 検査をしてもらったら’

b. 这 孩 子 想 是 有 病 吧。

「不利だ」というニュアンスを捨象すれば、以上の(70)～(72)の実例の a におけ
 る“怕是”“恐怕”“别是”をそれぞれの b のように、〈推論〉を表す証拠素の“想
 是”に置き換えても、a と意味がほとんど変わらない。

また、〈表2〉に示す CCL で調査した結果からも分かるように、“怕是”“恐

怕” “别是”は〈直接経験〉の情報源を含意する “太”と共起しにくい¹⁴。

〈表2〉CCLにおける“别是”・“怕是”・“恐怕”と“太”との共起

組み合わせ	“别是+太”	“怕是+太”	“恐怕+太”
用例数	0	2	11

さらに、“??我的眼睛{怕是/别是}红着呢(私の目は赤くなっているのではないか)” “??客人{怕是/别是}拉里邈邈的(お客さんがだらしのないのではないか)” などの表現も非常に不安定であることから、やはりこれらの副詞は〈直接経験〉や〈知覚〉の情報源からの情報とは相容れないものだと思われる。

これらの振る舞いから判断すれば、“怕是” “恐怕” “别是”は決して〈推論〉を第一義としていないが、〈推論〉から入手した情報を要求するのが一般的である。それゆえ、〈推論〉の証拠策と考えても差し支えないであろう。

3.4.2.2 必然性・蓋然性を表す副詞句・助動詞・動詞句

必然性を表す副詞・助動詞(“必然, 一定, 准”など)と蓋然性を表す副詞・助動詞(“可能, 也许, 或许, 兴许, 应该”など)は〈推論〉から情報を知り得たことを要求する。例えば、

(73) [……]可以 肯定, 在 那 久远 的 过去, 这里 必然
 できる 断言する における あの ずっと昔 SP 過去 ここ 必ず
 是 一 片 汪洋 大海, [……] (CCL)
 である 一つ CL 広々とした 海
 ‘断言できるのは、遠い昔、ここはきっと広々とした海であっただろうと
 いうことだ’

(74) 你 还是 到 男生 宿舍 住 吧, 兴许 男生
 あなた やはり 至る 男子 寮 泊まる FP もしかして~だろう 男子

¹⁴ “恐怕”と“太”の共起が他より多いのはこの環境における“恐怕”がポライトネスを示すものに拡張しているからだと思われる。つまり、このような“恐怕”は話し手の〈推論〉と関係なく、単に断定の気持ちを避ける為に用いられ、情報自体はむしろ証拠性が中立的である。

不 会 赶 你。 (CCL)

NEG するものだ 追い出す あなた

‘あなたはやはり男子寮に泊まってください。男子生徒はあなたを追い出さないかもしれない’

(75)他 的 判断 应该 是 可信 的。 (CCL)

彼 SP 判断 はず である 信じられる FP

‘彼の判断は信じられるものであろう’

このことは、必然性・蓋然性に関する評価は〈推論〉を前提にしていることを表している。あるデキゴトの成立を推論してから、初めてそれが必然的に成立するか、蓋然的に成立するかどうかについて言えるようになるからである。(73)～(75)の“必然”“兴许”“应该”を削除すれば、〈推論〉の意味の代わりに何れも一般的な知識・真理にシフトする。

また、話し手が自ら意図的に参与していることを情報とする文、つまり〈直接経験〉にはこれらの形式が用いられない。

(76)a. 我 昨天 故意 把 消息 告诉了 他。

私 昨日 わざと を ニュース 伝える-PERF 彼

‘私は昨日わざとそのニュースを彼に伝えた’

b. *我 昨天 {必然/可能/应该} 故意 把 消息 告诉了 他。

‘私は昨日わざとそのニュースを彼に伝えた {に違いない／かもしれない／はずだ}’

このことから、これらの形式が〈推論〉由来の情報を要求することが窺える。

なお、§2.2で紹介したように、これまでの先行研究には認識的モダリティを表す能願動詞——“能、会、要、得(děi)”——も「証拠性」として考えられているものがある。その中に、①「証拠性」を「情報に対するあらゆる態度」として広義的に捉え（乐耀 2011a が指摘しているように）、認識的モダリティの能願動詞を「証拠性」の研究対象としたものもあれば、②これらの能願動詞が推論的情報源を含意すると思われるため、「証拠性」と認定しているものもある。本研究は「証拠性」

を情報源の表出に限定する立場であるため、①のような考えはさておき、②だけについて筆者の考え方を述べる。§ 2.2.4.3 では、“能、会、要、得(děi)”は推論的情報源を含意する機能を有していないことを既に立証した。要は“能、会、要、得(děi)”が付いて、〈推論〉として読めるものは、実は文脈——その情報が一般的な知識・真理と見なされないということ——から〈推論〉に基づく情報であると解釈されるのであり、それはこれらの能願動詞の使用自体とは関係しないのである。

さて、能願動詞の中で“能、会、要、得(děi)”が情報源を含意しないのに、“应该”だけが情報源を含意するのはなぜであろう。これは“能、会、要、得(děi)”は力動的なモダリティ (dynamic modality) を表す用法があるのに対して、“应该”は助動詞として成り立った時から義務モダリティを表す形式であり、力動的なモダリティを表す段階がない(太田 1958/1987[2003]:187-188 を参照)、ということと表裏一体の関係だと考えられる¹⁵。

ところで、蓋然性を表す形式には上記の副詞・能願動詞のほか、本来；

- ①「下手をすると」といった意味を表す“搞不好”、“弄不好”など、
- ②「知り得ない」を意味するやや文語調の“(也)未可知”、「确实ではない」を意味する“(也)不一定”、および、
- ③「断定できない」・「請け合えない」といった意味を表す“说不定”、“说不准”、“保不齐”、“保不准”、“保不住”、“没准”など

も挙げられる。これらの形式も〈推論〉に由来する情報にしか用いられない。その中で、①は文副詞と同様の振舞いで、例(77)のように述語の前に現れる。

(77) 这种事情应该跟吉亚德说，搞不好可以
 この CL こと すべき と ジヤド 言う やる NEG 良い できる
 获得 奖赏。 (CCL)
 獲得する 褒美

‘この件はジヤドに伝えるべきだ。褒美をもらえるかもしれない’

¹⁵ Cornillie 2009 は英語の助動詞の must と may について「これまでの研究で明らかにされたように、概念的な観点から見れば、must および他の言語における対応物には、義務モダリティから証拠性モダリティへというシフトが見られ、そこで帰納的推論と演繹的推論の意味を獲得してきた。これに対して may は違う。may は能力の読みに由来したもののため、論理的な過程にかかわらない」と述べた。中国語の“应该”と“能”以下の能願動詞についても、類似する分析が可能である。

②は述語として用いられ、〈推論〉の情報を主語に取る。

(78) 这些 信 一定 是 莫罗 在 饱受
これら 手紙 きっと である モロ における 多くの～を味わってくる
折磨 后 被迫 写的, 甚至 受了 药物的 影响, 也
苦しめる 後 迫られる 書く FP 更には 受ける-PERF 薬 SP 影響 も
未 可 知。 (CCL)

NEG できる 知る

‘これらの手紙はきっとモロが大変な苦痛を受けた後にやむなく書かされたものだ。薬物の影響すら受けているかもしれない’

(79) 小心 点, 有 陷阱 也 不 一定。 (CCL)

気をつける CL 存在する 落とし穴 も NEG 確実だ

‘気を付けて。落とし穴があるかもしれない’

③は例(80)・(81)のように文全体をスコープに取る副詞の用法もあれば、例(82)・(83)のように述語の用法もある。

(80) 如果 没 有 这 段 经历, 说不定 我 早就 退役 了。
ならば NEG ある この CL 経験 かもしれない 私 とっくに 退役する FP
(CCL)

‘もしこのエピソードがなかったら、私はとっくに引退していたかもしれない’

(81) 人 呐, 这 一 辈子, 谁 也 保不齐 有 点 子 揪心扯肝
人間 FP この 一つ 生涯 誰 も 請け合えない ある CL 心配する
的 事 儿 吧! ? (CCL: 陈建功、赵大年《皇城根》)

SP こと FP

‘人間はさ、一生涯に誰でも心配事が多少あるだろう’

(82) 一时 看花了 眼, 办了 错 事 儿,
一時に 見る-かすむ-PERF 目 やる-PERF 誤っている こと

也 保不齐 的, [……] (CCL)

も 請け合えない FP

‘たまたま目がかすんで、工作中誤ることもあるだろう’

(83) 她 是 你们 裹进去 的, 顶多 劳教 两年,
彼女 である あなたたち 巻き込む FP 多くとも 労働教育 2年
辯好 了, 当庭释放 也 没 准。 (CCL)

弁護する-良い FP 即時釈放 も NEG 必ず

‘彼女はあなた達のせい巻き込まれたのだから、せいぜい2年の労働教育に処せられるだけだろう。うまく弁護できたら、即時釈放になるかもしれない’

3.4.2.3 文末の語気助詞の“吧”

従来では、文末に現れる“吧”は文タイプによって推論に用いる“吧”と命令に用いる“吧”とに分ける考え方が主流である。平叙文の文末に付く“吧”は推論のもので、命令文に付く“吧”は命令に用いるものである。さらに、正反疑問文・選択疑問文・疑問詞疑問文に付く“吧”は“你说～吧”の“你说”が省略された形で、命令に用いるものとされている（赵元任 1968、吕叔湘等 1999、朱德熙 1982などを参照）。

しかし共時的に考えれば、あらゆる文タイプにおいて“吧”は文末に用いられると、情報が真である蓋然性が高くないことを表しながら、〈推論〉という情報源の存在を含意することが確認できる。

(84) 老白 下晚 挨了 浇, 又 没 穿 衣, 冻着_____了 吧,
白さん 夜中 される-PERF 濡らす また NEG 着る 服 風邪を引く FP FP
脑瓜子 痛 得 蝎虎。

頭 痛む SP 尋常ではない

‘白さんは夜中に水に濡らされ、服も着ていなかった。風邪をひいたかどうか、頭がひどく痛いようだ’

(85) 有了 这么 好 的 工作, 我 得 _____ 正儿八经
ある-PERF このよう よい SP 仕事 私 する必要がある 真面目に

谈 一 次 恋爱 了 吧。 (CCL)

対話する 一つ CL 恋愛 FP FP

‘こんなに良い仕事も見つかったし、恋愛をちゃんと一回しなきゃと思った’

“吧”は以上のような平叙文だけではなく、命令文・疑問文（諾否疑問文以外のタイプ）の文末にも現れる。その場合は、命令文・疑問文から読み取れた情報（§3.1.1を参照）の情報源として〈推論〉が含意される。

(86) 你 休息休息 吧, 让 我 去 吧。

あなた ちょっと休む FP CAUS 私 行く FP

‘あなたはちょっと休んでください。私に行かせてください’

情報1=聞き手に「ちょっと休む」を求めることが妥当である

情報2=聞き手に「私に行かせる」を求めることが妥当である

情報源1,2=〈推論〉

(87) 你 吃 饭 还是 吃 面 吧?

あなた 食べる ご飯 それとも 食べる ラーメン FP

‘あなたはご飯を食べるのか、それともラーメンを食べるのか’

情報=聞き手に「ご飯とラーメンのどちらを食べるか」と訊ねることが妥当である

情報源=〈推論〉

その妥当性が「蓋然的」であるからこそ、命令文の(86)はより柔らかく聞こえるのである。また例(87)のような“吧”は、呂叔湘等 1999 などには「催促」のニュアンスがあると指摘されているが。それが「催促」というより、むしろ「懇願」のほうがよりふさわしいかもしれない。この「懇願」のニュアンスは、自分が訊ねるという行為の妥当性が必然的ではないことを示すことによって、疑問の語気を和らげることにより初めて現れるものと考えられる。「懇願」であればあるほど、「催促」に聞こえるわけである。

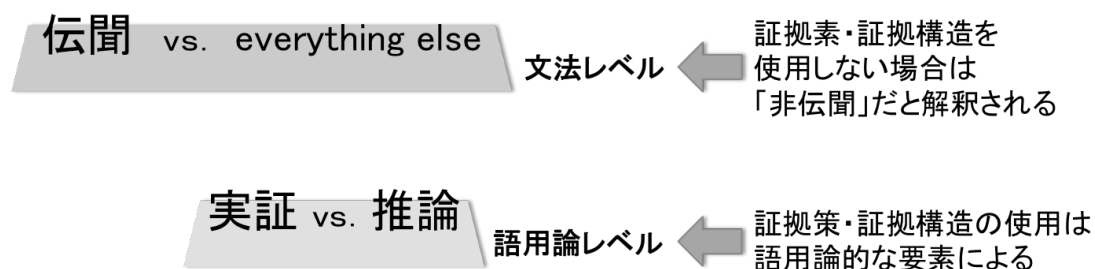
3.5 共通語の証拠性システム

本章では「情報」・「情報源」・「証拠性」、情報源の表出につながる「証拠素」・「証拠策」・「証拠構造」といった基本概念を定義した。概ね Aikhenvald 2004 を踏襲しているが、これに対する Boye & Harder 2009 の批判から示唆を得て、「証拠構造」の新たな導入、および情報源を表す副詞も「証拠素」と見なすという考え方は Aikhenvald 2004 と異なる点である。

共通語における証拠素は“说是”と“想是”の二つが存在し、それぞれ〈伝聞〉と〈推論〉という情報源を意味する。ところが、〈推論〉の証拠素の“想是”が比較的古い言い方であり、ジャンルが限られる面もある。また共時的には〈伝聞〉の証拠策がないのに対し〈推論〉の証拠策は複数存在する。〈推論〉の証拠策がこれだけ発達していることは証拠素不足の代償とも考えられる。そこから“想是”が現に証拠素として廃れつつあることが窺える。つまるところ、“说是”と“想是”が目下全く同様のジャンルにおいて共存していないと考えてもよさそうである。従って、共時的な観点からいうと、共通語は〈伝聞〉だけが区別される、〈伝聞〉と〈その他〉という2選択の証拠性システムを持っていると考えられる。

言い換えれば中国語において、情報源について、伝聞なのかそうでないのかということがより文法的なレベルで問われているのである。“说是”という証拠素までが発達していることが、〈伝聞〉であることの明示を文法的に要請するということを端的に反映しているものだと考えられる。〈非伝聞〉由来の情報に関して、その情報源を明かさかどうかは語用論的な要素による部分が多いのに対し、伝聞由来の場合は、“听说”の類の語彙的な手段を用いて〈伝聞〉であることを示しても可能であるが、何れかの「マーカ」での標示が義務的となるのである。さもないと、〈推論的情報源〉または〈実証的情報源〉由来の情報だと解釈される。標示の義務性（大堀 2005 の文法化の5つの基準の一つ）という観点からも、情報源としての〈伝聞〉には〈推論的情報源〉・〈実証的情報源〉と根本的な違いが存在すると認めて良い。

〈図1〉中国語（共通語）の証拠性システム



証拠素の他に、証拠策も特定の情報源から由来した情報にしか用いられないため、その情報源を含意すると考えられる。また、感覚動詞・思考動詞・伝達動詞からなる証拠構造が概ね実証的情報源・推論的情報源・伝聞的情報源に対応している。なお、情報源を明示する証拠素・証拠構造も現れなければ、証拠策も使われていない場合、当該情報は〈直接経験〉に由来した情報か一般的知識・真理と考えられる情報だと解釈される。

第4章 証拠素の“说是”の用法と成立

前章では“说是”を〈伝聞〉の証拠素として挙げた。本章では、“说是”の用法についてより精密な記述をする上で、もともと伝達動詞であった“说”が“是”と結合して証拠素へと拡張したメカニズムを説明することを一つの目的とする。さらに、“说是”の節の後によく逆接的な内容が続く現象はどこに起因するのか、また“说是”だけを〈伝聞〉を意味する語句の中から取り上げ「証拠素」と認定する理由についても詳しく議論する。

本章の構成は以下のとおりである。§4.1で考察対象を明らかにしてから、§4.2で先行研究を検討する。§4.3では証拠素の“说是”が確立する過程で見られる「発信者指向」から「受信者指向」へのシフト・脱範疇化についての予備知識を提示する。§4.4は証拠素の“说是”が伝達動詞に近い用法から単に〈伝聞〉という情報源を示す機能へと移行する過程を考察し、この変容の内因と外因を分析する。§4.5では“说是”が逆接的な文脈に用いられる現象をめぐって、その条件および理論的意義を説明する。

4.1 考察対象

“说”と“是”が共起しているからと言って、常に一語の〈伝聞〉の証拠素であるわけではない。まず断っておきたいのは、ここで問題にしている一語の“说是”の“是”は常に軽声で発音され、強勢を受けないということである。ところが、それでも伝達動詞の“说”+コピュラの“是”と分析できるものが存在する。

- (1) a. 忽然 有 人 拦住 去路, 说 是 郑国 派来 的 使臣,
突然 ある 人 止める 進路 言う である 鄭国 派遣する-来る FP 使臣
求 見 秦国 主将。 (CCL:《中华上下五千年》)
頼む 会う 秦国 主将
‘突然にある人が進路を塞ぎ、鄭国に派遣されてきた使臣と言い、秦国の
主将に会いたがっている’
- b. 忽然 有 [人]_i 拦住 去路, \emptyset_i 说 \emptyset_i 是 郑国 派来 的 使臣

- (2) a. 她 曾 答应 和 刘志彬 结婚, 但 要 他
 彼女 かつて 承諾する と 劉志彬 結婚する しかし ほしい 彼
 拿出 一 笔 钱 置办 结婚 用品, 说 是 她
 持ち出す 一 つ CL 金 購入する 結婚する 品物 言う である 彼女
 母亲 要求 的, 具体 多少 我 不 清楚。 (王朔《人莫予毒》)
 母親 求める FP 具体的 いくら 私 NEG 分かる
 ‘彼女はかつて劉志彬と結婚することを承諾した。ただし、結婚の品物を
 調達するお金を彼に出させようとした。彼女の母親がそう求めたという
 ので、具体的な金額は私には分からない’
- b. [她]_i 曾 答应 和 刘志彬 结婚, 但 要 [他 拿出 一 笔 钱 置办 结婚
 用品]_j, \varnothing_i 说 \varnothing_j 是 她 母亲 要求 的。
- (3) a. 他们 昨天 来 找 我了, 主要 是 打听 你, 问 咱们
 彼ら 昨日 来る 探す 私 FP 主に である 訊ねる あなた 聞く 私たち
 刚 复员 那 会儿 的 事, 说 是 那 时候
 したばかり 退役する あの とき SP こと 言う である あの とき
 出 的 事。 (王朔《玩儿的就是心跳》)
 起きる SP こと
 ‘彼らは昨日僕に尋ねに来た。主に君のことを調べるためだった。僕らが
 部隊から退役したばかりの頃のことについて聞かれた。事件がその時に
 起きたのだと’
- b. [他们]_i …… 问 咱们 刚 复员 那 会儿 的 事, \varnothing_i 说 \varnothing_j 是 那 时候 出 的
 [事]_j。

これらの例は、“是”の後に名詞句もしくは“的”フレーズ（ヘッドが省略されたものおよびいわゆる分裂文の“是～的”構文における“的”フレーズを含む）が共起し、なお且つ文脈にはその名詞句もしくは“的”フレーズで指された対象と同定できるものがある、という点において共通しており、これらの用例における“说是”は一語であるとは考えられない。ゆえに、本研究では、後ろに名詞句もしくは“的”フレーズが現れる“说是”をとりあえず考察の範囲外に置く。

4.2 先行研究

董秀芳 2004 は、例(4)のような“说是”を副詞と見て、そこにおける“是”が“但是，就是，越是，只是，总是，别是”などの“X 是”における“是”と同様に、単語内の成分に文法化していると指摘している。しかし、“说是”についてそれ以上の詳しい分析は展開していない。

(4) 这些 天 都 没 见 张三, 说是 他 被 公安局 抓起来 了。

これら 日 すべて NEG 会う 張三 REP 彼 によって 公安局 捕まる FP

(董秀芳 2004)

‘ここ数日張三に会っていないね。公安局に捕まったという’

陈颖 2009:171-179 は文中に現れる“说是”は固定化した構造ではないとして、後続する節の冒頭に現れた“说是”だけを考察対象にしている。ところが、固定化した構造であるか否かの判断基準が提示されていないため、このように考察対象を限定するのは同意しがたい。確かに陈颖 2009:173 に挙げられた文中の“说是”は“说+是”と分析すべきものばかりであるが、そう分析できない“说是”は文中にも現れるし、所在する節は必ずしも後続する節でもない。例(5)は文中の例で、例(6)は“说是”が所在する節が主節の前に位置する例である。

(5) 这 瘸腿 的、残疾 的 小 女孩 刚 一

この 跛 SP 体に障害がある SP 小さい 女の子 したばかり ちょっと

落 地, 她 娘 的 鲜血 就 像 血河 一样 奔涌而出,

落ちる 地面 彼女 母親 SP 血 すぐ 似る 血の川 同様 湧きだす

止 也 止 不 住, 接生 用 的 红 木桶

止める も 止める NEG 止む お産を助ける 使う SP 赤い 木のバケツ

说是 都 让 血 给 冲走 了。(李锐、蒋韵《人间》)

REP まで によって 血 に 流す-離脱する FP

‘跛で体に障害のあるこの女の子が生まれたとたん、彼女のお母さんはまるで川が湧き出すかのように出血して、止めようもなかった。お産を助

けるときに使う赤い木のバケツまでも血に流されたという。’

- (6) 以前の领导 都 是 很 不 稳定, 也 很 不
 以前 SP 指導者 すべて である とても NEG 安定する も とても NEG
 成熟 的。从 陈独秀 起, 一直 到 遵义会议, 没 有 一 届
 成熟する FP から 陳独秀-LOC ずっと まで 遵義會議 NEG ある 一つ CL
 是 真正 成熟 的。在 这 中间 有 一 段 时间,
 である 本当に 成熟する FP における これ-LOC ある 一つ CL 時期
 说是 要 强调 工人阶级 领导, 就 勉强 拉
 REP したい 強調する 労働者階級 指導する すると 無理やり 引っ張る
 工人 来 当 领导。 (CCL: 《邓小平文选・第三卷》)
 労働者 来る 務める 指導者

‘昔の指導者はとても不安定で、未熟だった。陳独秀の時代から遵義會議
 までは、本当にまとまった指導者が一人もいなかった。ある時期に、労
 働者階級の指導を強化すると言って、労働者を無理やりに指導者にさせ
 たことすらある’

逆に“说+是”と分析できる(2a)(3a)が、陈颖 2009:174 では固定化した構造と見なさ
 れている。固定化した構造の認定基準がこのように不明のまま、固定化した構造
 の“说是”を〈伝聞〉という情報入手ルートを表すものとして、間接引用を示す“说
 是₁”と逆接関係を示す“说是₂”に分けている。それぞれに関して、(7)と(8)のよ
 うな例が挙げられている。

- (7) 过了 两天, 胡大头 来 了, 说 是₁ 来 东城票房 说
 経つ-PERF 数日 胡大頭 来る FP 言う である 来る 東城劇場 解説する
 戏, 顺便 把 衣裳 给 武老头 带回去。
 芝居 ついでに を 衣装 に 武じいさん 携帯する-帰っていく
 (邓友梅《那五》, 陈 2009:176)
 ‘数日後、胡大頭が来た。東城劇場に芝居の解説をしに来て、ついでに衣
 装を武じいさんに持って帰ると言った’

- (8) 说 是₂ 新居, 其实是 人家 住过 的 旧 房子, 墙壁 斑驳
 言う である 新居 実際 である 人 住む-EXP SP 古い 住宅 壁 ただら模様
 剥落 汚濁 不堪。 (王朔《永失我爱》, 陈 2009: 175)
 剥げ落ちる 汚い 耐えられない
 ‘新居とは言え、実際は人が住んだ古い住宅で、壁が斑でぼろぼろと剥げ
 落ちそうで、汚くてたまらない’

さらに、陈颖・陈一 2010 は陈颖 2009 を基にして、固定化構造の“说是”を“N+说（伝達動詞）+是（コピュラ）+目的語”という構造から発達してきたものだと分析している。

吕为光 2011 は“说是”の文法化について、伝達動詞“说”とコピュラ“是”との結合を語源として、そこから間接的手段を通して情報を知り得たことを示す“传信标记”の用法（陈颖 2009 の“说是₁”に相当する）ができて、さらに反事実（contrafactive）のマーカ（陈颖 2009 の“说是₂”に相当する）と、コミュニケーションの相手が言及していた物事や出来事を新たに提起し、話題として説明するという談話機能を有する談話的マーカの用法ができた、と述べている。

この二つの研究における大きな問題点が二つある。一つ目は“说是₁”を内部の均一なものと仮定したことにある。しかし、後の§4.4の考察から分かるように、この仮定は成り立たない。

二つ目は、“N+说（伝達動詞）+是（コピュラ）+目的語”というように、“说是”を伝達動詞“说”とコピュラ“是”との機械的な結合から語彙化したものという考えである。もしそうであるならば、“说”の直前に発話者を意味する名詞句が現れてもいいはずであるし、“是”の主語も文脈から想定できるはずである。例(1)～(3)のaはまさしくそうである。例えば(2)aは次のように明言化できる。

- (9) 她 曾 答应 和 刘志彬 结婚, 但 要 他
 彼女 かつて 承諾する と 劉志彬 結婚する しかし ほしい 彼
 拿出 一 笔 钱 置办 结婚 用品, 她 说 这 笔 钱
 持ち出す 一つ CL 金 購入する 結婚する 品物 彼女 言う この CL 金

是 她 母亲 要求 的, [……]

である 彼女 母親 求める FP

‘彼女はかつて劉志彬と結婚することを承諾した。ただし、結婚の品物を調達するお金を彼に出させようとした。彼女は、彼女の母親がそのお金を求めたのだと言った’

しかし、本研究において〈伝聞〉の証拠素と見なせる“说是”については、発話者の同じ節での明示や“是”の主語の想定ができない。例えば、発話者が明示された例(10)bは非文であり、实例(11)aもやはり“是”の主語を想定できないし、強いて動作主を“是”の主語と解釈すると文がおかしくなる。

(10) a. 晚上 出门 时 多 穿 件 衣服 吧,

夜 出かける とき 多い 着る CL 服 FP

说是 晚上 开始 降 温。

REP 夜 始まる 下がる 温度

‘今夜出かけるときに、服をもう一枚着なさいね。夜から気温が下がってしまうという’

b.*晚上 出门 时 多 穿 件 衣服 吧, 你 妈 说是 晚上 开始 降 温。

あなた 母

(11) a. 时 隔 不 久, 一 位 老大娘 又 慌慌张张 地

時間 隔たる NEG 久しい 一つ CL おばあさん また 慌てる SP

哭着 走进 平山消防中队, 说是 把 两岁的 外孙子 关

泣く-PROG 歩く-入る 平山消防中隊 REP を 2歳 SP 外孫 閉める

在 6楼 的 家里, 钥匙 没 拿出来, 煤气灶上

における 6階 SP 家-LOC カギ NEG 持ち出す-来る ガスコンロ-LOC

还 烧着 一 壶 水。 (CCL: 1994 年 报 刊 精 选)

さらに 加熱する-PROG 一つ CL 水

‘暫くして、一人のおばあさんが泣きながら慌てて平山消防中隊に入ってきた。2歳の孫を6階の自宅に残したまま、カギを持たずに出かけてしまい、それにガスコンロにヤカンでお湯を沸かしていると

言った’

- b.*时 隔 不 久, 一 位 老 大 娘 又 慌 慌 张 张 地 哭 着 走 进 平 山 消 防 中 队,
 说{她 / 自己}是 把 两 岁 的 外 孙 子 关 在 6 楼 的 家 里, [……]。
 彼女 自分

それから、事実関係であるが、陈颖 2009 および陈颖ほか 2010 は“说是₁”を間接引用（間接話法）のマーカールと考えている。しかし次のような反例と思われる用例が確認されている。

- (12) 庫 化 山 个 体 小 酒 厂 厂 主 李 国 家 趁 他 下 乡
 庫 化 山 私 營 小 酒 工 場 工 場 長 李 国 家 乘 着 他 去 農 村
 征 稅 之 際, 將 990 元 現 金 塞 給 他 妻 子, 说 是 “暫 時
 徵 收 的 稅 金 之 際 將 990 元 現 金 交 給 他 妻 子 暫 時
 寄 存 在 這 里”。 (CCL: 1994 年 報 刊 精 選)
 預けるにここ

‘庫化山の私営の酒工場の工場長李国家は彼が税金を徴収しに農村へ行った間に、990 元の現金を彼の妻に渡して、「しばらくここに預かってもらうのだ」と言った’

- (13) 他 抖 抖 索 索 地 遞 給 我 一 个 网 兜, 说 是 “你 妈 带
 他 哆 哆 索 索 地 遞 給 我 一 个 網 袋, 說 是 “你 媽 帶
 你 媽 帶 的”, [……]¹ (人 民 日 報)
 あなた FP

‘彼はぶるぶると震えながら私に一つの網袋を渡し、「君のお母さんが君に渡してほしいものだ」と言った’

直示的な表現——現場指示の“这里”、代名詞の“你”——ならびに引用符の使用は、例(12)・(13)における“说是”によって導入された発話内容が直接話法のものであることを語っている。

¹ この例の“说是”に“的”フレーズが後続するため、本章では考察対象外にしている。しかし、この文は陈颖 2009 および陈颖ほか 2010 の考察範囲の中にあると思われる。

また、“说是”は文頭に現れた場合も、必ずしも逆接的な用法とは限らない。例えば、

- (14) 他 伸 手 抚摸 “神墙”，竟然 透着 一股 热力，
 彼 伸ばす 手 なでる 神の壁 意外なことに 表す-PROG 一つ CL 温かみ
 暖 人 心脾。[说是] 神墙，果然 不 虚。
 暖かい 人 臓腑 REP 神の壁 予想通り NEG 偽り

(CCL: 肖克凡《膏药失灵》)

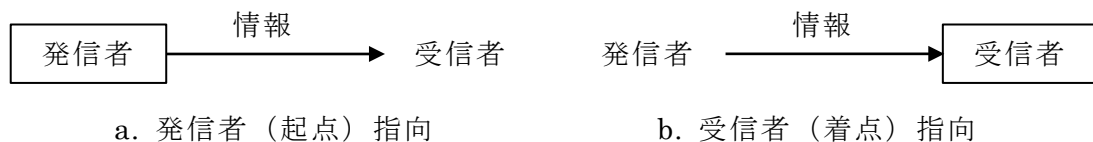
‘彼は手を伸ばし「神の壁」をそつとなでると、何と意外なことに壁に温かみがあり、心が暖かくなる。さすが神の壁というものだ’

以上のように、記述と分析にも不備と問題点が見られるため、語彙化した“说是”について再考察が必要と思われる。また、“说是”の文法化のメカニズムを明らかにすることによって、中国語における発話動詞の文法化の一側面の解明が期待できるであろう。

4.3 伝達動詞から〈伝聞〉の証拠素へ

4.3.1 発信者指向と受信者指向

〈図1〉移動事象としての伝達行為



伝達行為は、「情報」が「発信者」から「受信者」まで移動する事象である。この移動過程における情報が〈伝聞〉の情報となる。移動そのものを起点からでも着点からでも捉えることができるように、伝達行為の場合でも、それぞれ起点・着点に相当する「発信者」・「受信者」のどちらかから捉えられる。発信者をプロファイルして捉えた場合は発信者指向 (sender-oriented) の伝達、受信者をプロファイ

ルして捉えた場合は受信者指向 (receiver-oriented) の伝達と呼ぶことにする²。

伝達行為に対するこの2種類の捉え方に応じて、ある情報が〈伝聞〉から入手したものだということを示す手段も大別して2通りが考えられる。一つは、発信者指向で、発信者の誰かがそう言ったと意識されることである。もう一つは受信者指向で、通常、受信者の話し手が——誰からなのかは問題にしない——そう聞いたことだけを明言することである。例えば、

(15) ‘彼はもうすぐ定年退職らしい’

- a. 传说 他要 退休 了。 (発信者指向)
 言い伝える 彼 するだろう 退職する FP
- b. 听说 他要 退休 了。 (受信者指向)
 と聞いている

“传说”と“听说”とは、情報の「彼はもうすぐ定年退職だ」は〈伝聞〉からのものだということを伝える面においては大差がない。ところが、例えば(15)a・bの文頭に“人们”を加えると、“人们”が発信者なのか、それとも受信者なのかは、発信者指向か受信者指向かによって解釈が違ってくる。

(16) a. 人们 传说 他要 退休 了。

人々

‘人々は彼がもうすぐ定年退職だと言っている’ (発信者指向)

b. 人们 听说 他要 退休 了。

‘人々は彼がもうすぐ定年退職だと聞いている’ (受信者指向)

多くの場合、ある〈伝聞〉の証拠表現が発信者指向か受信者指向かは、“传说”と“听说”のように、その表現自体の語彙的な意味によって決まる。一方、語彙的な意味のレベルでどちらかに決まらないケースは皆無ではない。例えば、日本語の

² sender-oriented と receiver-oriented は、谷峰 2007 に見られている subject-oriented と speaker-oriented に基本的に対応している。しかし、subject-/speaker-oriented はあくまでも言語形式レベルの概念であるのに対して、sender/receiver-oriented のほうが伝達行為の捉え方に直結でき、より高い一般性を狙った用語と思われる。

場合、「山田さんがもうすぐ定年退職だという」という文の解釈として、「誰かがそう言っている」即ち発信者指向の読みと、「私がそう聞いている」即ち受信者指向の読みとが両立可能である。どちらかの読みに限定するには、「イウ」という語彙の情報以外の手がかりが必要となる。

4.3.2 伝達動詞の脱範疇化

言うまでもないが、伝達動詞は発信者指向である。一方、日本語の「～トイウ」のように、伝達動詞に由来した受信者指向の読みが可能な〈伝聞〉の証拠表現も存在する。そこで、発信者指向から受信者指向への移行があったと想定できる。この移行は伝達動詞の脱範疇化と同時に生じ、表裏一体の関係にある。

動詞の脱範疇化は、一般的に次のような現象として顕在化すると考えられる。①動作主体の言語化が拒否されること。②否定・疑問表現が成立しない。③テンス・アスペクトの表出が拒否され、汎時間性が強まること。④連用修飾を受けないこと。日本語の「イウ」を例に取って説明する。

- (17) a. 山田さんが定年退職だと誰かが言う。 (動作主体の言語化)
- b. 山田さんが定年退職だと言わない。 (否定)
- c. 山田さんが定年退職だと言うか。 (疑問)
- d. 山田さんが定年退職だと言っていた。 (テンス・アスペクト)
- e. 山田さんが定年退職だとはっきり言う。 (連用修飾)

上記の①～④のいずれかが満たされていない場合、「イウ」は伝達動詞としか解釈されない。「イウ」の脱範疇化の本質は、再分析を起こし主節から副詞的な語句に降格させることである。

4.4 伝達行為を前提にする“说是”

§4.1 で画定した考察範囲の中には、より発信者指向に近い“说是”とより受信者指向に近い“说是”がある。また両端の中間地帯に位置し、両義的なものもある。これは、元の意味（真理条件）を保ちながら、“说是”を“说”と“听说”もしく

は“据说”のどちらに置き換えられるかというテストで判断できる。

〈表1〉“说是”のバラつき

	より major category		より minor category
	発信者指向	←————→	受信者指向
“说”への置き換え	○	○	×
“听说”等への置き換え	×	○	○

4.4.1 「発信者指向の解釈」のみの“说是”

次のような“说是”は文の意味を変えずに“说”に置き換えることができるが、“听说”に置き換えることができない。例えば、

- (18) 上 星期，吴琼 拿了 我的一幅画 出去，回来 说是
 前の週 吳琼 持つ-PERF 私 SP 一つ CL 絵 出て行く 帰ってくる REP
 売给了 一 个 旅游者，500 元。(CCL: 《中国北漂艺人生存实录》)
 売る-に-PERF 一つ CL 観光客 500 元

‘先週、吴琼は私の絵を一枚持って出かけたが、帰ったら500元である観光客に売ったと言った’

- (19) 他 拿出 一 份 他 自己 写好 的 离婚协议书 要
 彼 持ち出す 一つ CL 彼 自分 書き終わる SP 離婚協議書 ほしい
 小涛 签字， 说是 希望 春节前 把 这 事 了了，
 小涛 サインする REP 望む 春節-LOC を この こと 解決する
 要不然， 春節 回 青島 没法 交待。(CCL: 1994 年報刊精選)
 さもなければ 春節 帰る 青島 できない 説明する

‘彼は自ら書いておいた離婚協議書を取り出し、小濤にサインさせようとした。春節の前までにこの件を解決したい。そうじゃないと、春節に青島に帰ったときに説明しようがないと言った’

- (20) 她 给 婆母 写了 封 信， 说是 春節 全家 一起 回家
 彼女に 姑 書く-PERF CL 手紙 REP 春節 家族全員 一緒に 帰る 家

看望 母亲。 (CCL: 1994 年报刊精选)

訪ねる 母親

‘彼女は姑に一通の手紙を書いた。春節に家族全員で実家に帰って母に会いに行くと’

(21) 谣言 四处 蔓延, 说是 这件事 一定 得

噂 あちこち 広がる REP この CL こと どうしても しなければならない

对簿公堂 才 可能 和解 了。(CCL: 哈佛管理培训系列全集)

裁判を起こす 初めて できる 和解する FP

‘噂が広がっている。この件は裁判を起こさないと和解が無理だと’

例(18)(19)の発信者は人間であり、例(20)(21)の発信者は言語活動の産出物である。厳密に言うと両者は同じではないが、「産出者—産出物」のメトニミー（例えば「漱石を読む」の類）およびメタファーに基づいて、言語活動の主体としての人間が発信者になれるのみならず、言語活動の産出物でも発信者と捉えられる。よって“说是”がこの2種類の発信者とともに用いられることは不思議ではない。以下は便宜上この“说是”を“说是 s”と記す。

これらの用例の共通点は次の4点がある。①“说是 s”の前提である伝達行為の主体即ち発信者は specific でなくても構わないが、必ず文脈にある名詞句と同定できる。この点に関しては、伝達動詞の“说”と全く同様である。

(22) a. 上 星期, 有人 拿了 我的一幅画出去, 说是

前の週 ある人 持つ-PERF 私 SP 一つ CL 絵 出て行く REP

卖给了 一个 旅游者。

売る-に-PERF 一つ CL 観光客

‘先週、誰かが私の一枚の絵を持って出かけて、一人の観光客に売ったと言った’

b. *上 星期, 我的一幅画 不见了, 说是 卖给了一个旅游者。

なくなる

‘先週、私の絵が一枚なくなった。一人の観光客に売ったと言った’

② “说是 s” の共起する節（以下は「“说是 s” 節」と略す）は自立性・独立性が極めて低く、基本的に後続節にのみ現れる。この点に関しても、伝達動詞の“说”と全く同様である。

(23) ***说是** 我的画卖给了一个旅游者。

‘私の絵はある一人の観光客に売ったと言った’

(24) ^{??}**说是** 自己希望春节前把这事了了，他拿出离婚协议书要小涛签字。

‘自分が春節の前までにこの件を解決したいと言って、彼は離婚協議書を取り出し、小涛にサインさせようとした’

③話し手が “说是 s” の発信者にならない。“说”にはこの制限が見られない。

(25) a. *上星期，我拿了自己的一幅画出去，回来**说是**卖给了一个旅游者。

b. 上星期，我拿了自己的一幅画出去，回来**说**卖给了一个旅游者。

‘先週、私は自分の絵を一枚持って出かけて、一人の観光客に売ったと言った’

(26) a. *我给婆母写了封信，**说是**春节全家一起回家看望母亲。

b. 我给婆母写了封信，**说**春节全家一起回家看望母亲。

‘私は姑に一通の手紙を書いた。春節に家族全員で実家に帰って母に会いに行く’

④ “说是 s” 節において、“说是” の直前には発信者が明示されない。“说”にはこの制限も見られない。

(27) a. *他拿出离婚协议书要小涛签字，他**说是**自己希望春节前把这事了了。

b. 他拿出离婚协议书要小涛签字，他**说**自己希望春节前把这事了了。

‘彼は離婚協議書を取り出し、小涛にサインさせようとした。彼は、自分が春節の前までにこの件を解決したいと言った’

上記の①～④から、“说是 s”の使用条件は次のようにまとめられる。

(28) “说是 s”の使用条件： NP_i[[...][\emptyset_i [说是 s [...]]]]

即ち“说是 s”節において、“说是 s”は直前に話し手を含まない発信者を指す、音形のない再帰代名詞「 \emptyset 」を要求する³。

次の例(29)・(30)は例(19)・(21)をもとにして一部単純化したものであるが、(28)の具体例として提示しておく。

(29) 他_i[[要小涛签字],[\emptyset_i [说是 s [希望春节前把这事了了]]]]。

‘彼は小涛にサインさせようとした。春節の前までにこの件を解決したいと言った’

(30) 谣言_i[[四处蔓延],[\emptyset_i [说是 s [这件事一定得对簿公堂才可能和解了]]]]。

‘噂が広がっている。この件は裁判を起こさないと和解が無理だと’

これに対して、伝達動詞の“说”の場合は、同様に発信者を主語として要求するが、それは話し手自身であっても良く、また音形の有無を問わない。この使用条件から、“说是 s”は完全な伝達動詞と比べ、伝達動詞から脱範疇化していることが窺える。具体的に述べると、まず“说是 s”が発信者をゼロ形式でなければ許さないことから、発信者の言語化は拒否されると言える。第二に、“说是 s”が発信者として話し手を排除するため、“说是 s”が用いられた以上、話し手が発信者であり得ない。従って、“说是 s”は後に続く情報が自ずと話し手にとっての〈伝聞〉になり、“说”に置き換えられるにもかかわらず伝達・発話行為の意味が希薄化する徴候が見られる。

一方、自立性・独立性の低い“说是 s”は常に主節に依存し、主節のイベントの発生時間に基づいて、“说是 s”の伝達行為が時間軸上に位置づけられる。例えば伝達行為は、(18)の場合には「帰ってきた」後に、(20)の場合には「手紙を書く」と同時に起きるものと考えられる。その結果、更なる脱範疇化が進むために欠かせない「汎時間性」がブロックされている。

³ 再帰代名詞は先行詞が自分より先に現れることを求める。

4.4.2 「受信者指向の解釈」のみの“说是”

次のような用例および冒頭に挙げた例(5)における“说是”は“听说”・“据说”に置き換えることができるが、“说”に置き換えることができない。以下は“说是r”と記す。

- (31) 那一年，我家是一件大祭祀的值年。这祭祀，
その一つ年 私家である一つ CL 大きい 祭り SP 当番 この 祭り
说是三十多年才能轮到一回，
REP 30 あまり年 初めてできる ~の番になる一つ CL
所以 很 郑重；[……] (鲁迅《故乡》)
だから とても 丁重だ

‘その年、私の家はある大きな祭りの当番になる。その祭りは、三十何年に一度廻ってくるらしいため、鄭重を極め、[……]’

- (32) 那座粉红色围墙的大宅，没见了门卫，往里望望，
あの CL ピンク色 塀 SP 大きな屋敷 NEG 見る-PERF 守衛 へ 中 覗く
静悄悄的，说是家属还住着。 (CCL: 1994 年报刊精选)
静かだ PF REP 家族 まだ 住む-PROG

‘あのピンク色の塀に囲まれている屋敷は、守衛がおらず、中を覗いてみたら、しんと静かである。家族はまだ住んでいるという’

- (33) 龙门：相传大禹治水凿龙门，横跨黄河两岸；
龍門 言い伝える 大禹 治水する 掘り開く 龍門 横に跨る 黄河 兩岸
“鲤鱼跳龙门”就指这儿，说是跳得过去
鯉 跳ぶ 龍門 他ではなく 指す ここ REP 跳ぶ-できる-越える-行く
魚 就 化为 龍。
魚 すると 変化する-なる 龍 (CCL: 《中国儿童百科全书》)

‘龍門：大禹が治水のために、黄河の兩岸に跨った竜門を掘り開いたという。「鯉が龍門を跳ぶ」はそこを指すのである。魚はそこを登ることができれば竜になるという’

これらの文に最も顕著な形式的な特徴としては、特徴①“说是 r”の直前に名詞句の共起が許され、その上その名詞句が“说是 r”に後続する述語と主述関係にある、という点がまず指摘できる。例(5)と(31)はその典型例である。また、“说是”節の文頭に名詞句がない例(32)・(33)は次のように変換できるため、同様の構造だと言える。

(34) 那座粉红色围墙的大宅，没见了门卫，往里望望，静悄悄的，家属说是还住着。

(35) 龙门：相传大禹治水凿龙门，横跨黄河两岸；“鲤鱼跳龙门”就指这儿，鱼说是跳得过去就化为龙。

つまるところ、“说是 s”の場合、音形のない再帰代名詞がその直前のスロットを占めているとすれば、“说是 r”の直前のスロットは空いていると考えられる。そのスロットが空いているからこそ、“说是 r”に後続する節の主語が raising し、そこを埋めることができるわけである。

また(31)～(33)から、特徴②“说是 r”の先行文脈に“说是 r”が前提にしている伝達行為の発信者が存在しない、ということが考えられる。これを立証すべく、次の(36)の a,b を比較されたい。

(36) a. 我 直接 去了 张三 的 宿舍，门 锁着。 问了
私 まっすぐ 行く -PERF 张三 SP 寮 扉 施錠する -PROG 聞く -PERF
一下 \emptyset_i, \emptyset_i 说是 张三 住进了 精神病院！
ちょっと REP 张三 住む-入る -PERF 精神病院

(CCL 张炜《柏慧》を元にして一部変更⁴⁾)

‘私はまっすぐ张三の寮に行った。ドアの鍵がかかっている。ちょっと聞いたら、张三は精神病院に入院しているとのことだ’

b. *我 直接 去了 张三 的 宿舍，门 锁着。问了 一下 \emptyset ，张三 说是 住进了 精神病院！

⁴⁾ 元の文は“我直接去了他的宿舍，门锁着。问了一下，说是住进了精神病院！”である。

(36)b はなぜ許容されないのでしょうか。“说是”の直前に“张三”という名詞句があり、後続する「精神病院に入院している」と主述関係を成している。そのことから、この“说是”は“说是 r”だと分析される。一方、“说是”の前提としての伝達行為の発信者が、「ちょっと聞いたら」という先行文脈によって「前景化」されている。つまり、質問を聞かれた人という特定の個人が答え、その人が発信者であると意識されているわけである。このことは、(36)b の“说是”が“说是 s”であるという結論を導く。そうすると、この“说是”は“说是 r”でもあれば“说是 s”でもあるという自己矛盾になってしまう。よって(36)b は文として成立しないのである。

もう一つの例を見よう。(37)a における“据说”を“说是”に置き換えた(37)b は全体として極めて座りが悪い⁵。それに対して、“说是”を後続する節の主語と述語の間に移動させた(37)c はごく自然に感じられる。上記の“说是 r”に関する特徴①と②から、この自然度の差が予測できる。

- (37) a. 有人 实验, 6 年 不 给 仙人掌 浇 水, 它
 ある人 実験する 6 年 NEG に サボテン (水を) かける 水 それ
 还 顽强 地 活着。 据说 有些
 依然として くじけない SP 生きる-PROG 聞くとろこによると 一部の
 大 仙人掌 的 寿命 可 达 数百年。
 大きい サボテン SP 寿命 できる 達する 数百年
 (CCL: 中国儿童百科全书)
- ‘ある人が6年間サボテンに水をやらないという実験をしたら、そのサボテンはくじけず生き抜いた。一部の大型サボテンの寿命は数百年もあるという’
- b. *有人实验, 6 年不给仙人掌浇水, 它还顽强地活着。 说是 有些大仙人掌的寿命可达数百年。
- c. 有人实验, 6 年不给仙人掌浇水, 它还顽强地活着。有些大仙人掌的寿命 说是 可达数百年。

⁵ (37)b における一番目の文と二番目の文とのつながりが良くないということである。この二つの文を単独でジャッジすれば両方とも文法的である。

まず(37)b・cが共通している状況から考える。それは、「寿命が数百年もある大型サボテンがある」と発話したのは実験者であり得ないということである。つまり「実験者≠発信者」である。なぜなら、「実験に使われたサボテンが6年間水をやられずに耐えてきた」ことから、「一部の大型サボテンの寿命は数百年もある」ことは導けないし、さらに、もし実験前に「サボテンが環境に強い」といったことを知っていたら、そもそも実験を行わないからである。一方、形式の面において、(37)bの“说是”は文頭に現れているため、“说是 s”である可能性がある。さらに、先行文脈にある実験者という特定の人物を表す“人”があるため、伝達行為の発信者と解釈される。そうすると、「実験者=発信者」となり、上に分析してきた状況との間に矛盾が生じる。結果として(37)bは不自然となる。これに対して(37)cの場合、“说是”が主語と述語の間に現れるため、これで“说是 s”と解釈される可能性が排除される。それによって「実験者≠発信者」としか解釈できず、統語的な解釈と意味論的な解釈が一致するのである。

第三に、上記の2点目と連動し、特徴③“说是 r”の伝達行為の発生時間が時間軸上の特定の点に位置づけることができない、ということが挙げられる。それは発信者が不特定であるため、発信者によって行われる伝達行為の発生時間も当然不特定になるからである。

以上に挙げた“说是 r”の3つの特徴は何を意味するかというと、まず、“说是 s”の持つような発信者専用のスロットが消えた“说是 r”は、「項構造」が変わり、副詞的なものへ移行していると言える。また、伝達行為の発生時間が不特定だということは、取りも直さず汎時間性が強まるということになる。要するに、“说是 s”と比べると“说是 r”のほうが元の伝達動詞の意味がかなり希薄になり、より高い脱範疇化の度合いを呈するのである。

4.4.3 「発信者指向の解釈」と「受信者指向の解釈」が両立する“说是”

次の例(38)・(39)は、「発信者指向の解釈」と「受信者指向の解釈」が両方許される、つまり“说”にも“听说”にも置き換えることのできる“说是”の用例である。この“说是”を“说是 s/r”と記す。基本的に“说是 s”と同様に“说是 s/r”は先行文脈から発信者を特定の個人として特定できる。例えば(38)では“林森”、

(39)では“儿子”が発信者であり、いずれも先行文脈に現れる名詞句である。

(38) 我们家虽然富裕，但林森从不乱花
 私たち家けれど豊かだしかし林森決して NEG むやみに費やす
 钱，她平时积攒的钱有 160 元，说是要捐
 金 彼女 普段 寄せ集める SP 金 存在する 160 元 REP したい 寄付する
 给希望工程。 (CCL: 1994 年报刊精选)

にプロジェクトホープ

‘私たちの家はお金がかかなりあるが、林森は決してお金の無駄遣いはしない。普段からの貯金は 160 元もあって、プロジェクトホープに寄付したいと言った’

(39) 这种限制的结果是，儿子都五六岁了，竟然一
 この CL 制限 SP 結果 である 息子 既に 五六歳 FP 意外なことに 一つ
 个人不敢 自己在 房间里睡觉，说是怕
 CL 人 NEG する勇氣がある 自分における 部屋-LOC 寝る REP 怖がる
 静怕黑。 (CCL: 1994 年报刊精选)

静かさ 怖がる 暗い

‘このように制限した結果、息子はもう五六歳にもなったのに、なんと自分一人で部屋で寝ることができないのだ。静かで暗いのが怖いと言った’

また、“说是 s/r”の用例の中には、(40)(41)のように先行文脈には発信者が明示されないものの、より広域的な言語外の文脈——社会的事情や歴史的背景などに関する知識——から容易に補完されるものもある。

(40) (=例(6)) 以前的领导都是很不稳定，也很不成熟的。从陈独秀起，一直到遵义会议，没有一届是真正成熟的。在这中间有一段时间，说是要强调工人阶级领导，就勉强拉工人来当领导。 (CCL: 《邓小平文选·第三卷》)

‘昔の指導者はとても不安定で、未熟だった。陳独秀の時代から遵義會議までは、本当にまとまった指導者が一人もいなかった。ある時期に、労働者階級の指導を強化すると言って、労働者を無理やり指導者にさせ

たことすらある’

- (41) **说是** 要 以 粮 为 纲, 就 不 顾
 REP したい をもって 食糧 なす 主要な部分 すると NEG 気にかける
 生产 条件, 田地 坡地 一律 开垦 种 粮, 干劲 没
 生産する 条件 田畑 山の斜面 一律に 開墾する 植える 食糧 労力 NEG
 少 费, 粮食 并 没 打 多少。
 すくない 費やす 食糧 実際は NEG 収穫する いくら

(CCL: 1994 年報刊精選)

‘食糧をかなめにすると行って、生産地の条件を無視して、田畑でも山の斜面でも一律に開墾して食糧を栽培したあげく、大変な労力をかけた割には、大した収穫はなかった’

“说是 s/r”では基本的に発信者が先行文脈において明示されるため、発信者指向の“说是 s”に置き換えられるのは予想がつくことである。ところが、受信者指向の“说是 r”にも置換可能なのはなぜなのか。次の(42)aは“说是”以降の情報——お金の使い道——が“说是 s/r”の(38)と極めて類似しているが、“听说”か“据说”にしか置き換えられない。

- (42) a. 说完, 从 衣兜里 掏出 1元5角钱
 話す-終わる から 服のポケット-LOC 取り出す 1元5角 金
 放到 我 手里, **说是** 要 给 叔叔 买 糖 吃。
 置く-至る 私 手-LOC REP したい におじさん 買う 飴 食べる

(CCL: 1994 年報刊精選)

‘話が終わったら、ポケットから1元5角のお金を取り出し、私の手に握らせた。おじさんに飴を買ってあげたいと’

- b.*说完, 从衣兜里掏出1元5角钱放到我手里, **听说**要给叔叔买糖吃。

(38)と(42)aの相違は“说是”より先の先行文脈にある。(42)aの“说是”の先行文脈で表されているのは個別で一回的な動作行為である。それに後続する伝達行為は、発信者の一連の動作の中の一つとして捉えられ、時間軸上の明確な位置づけができ

る。これに対して(38)の場合、「お金の無駄遣いはしない」や「貯金する」などがいずれも恒常的で、反復性を有するデキゴトであり、個別で一回的な動作とは言えない。そのため、後続の“说是”が一連の動作の中の一つとして捉えられず、先行文脈のデキゴトを手がかりにして伝達行為を時間軸上にある特定の点に位置づけることが不可能になる。換言すれば、汎時間性が強まるということになる。その結果として、受信者指向のほうに移行するわけである。この点は先行文脈が動作性の極めて低いイベントである(39)からよりはっきりと窺える。

なお、“说是”の先行文脈で表されるデキゴトが低い動作性を持つということは“说是 r”と解釈できる必要条件ではあるが、十分条件ではない。“说是 r”と理解されるためのもう一つの条件を補足すると、“说是 r”節の後に無標で発信者指向に戻ることは起こらない、ということが考えられる。例えば、この条件を満たしていない(43)aにおける“说是”は“说是 s”としか考えられず、bのような解釈が許容されにくい。

- (43) a. [発信者指向] 有的 矿 每月 除了 发给 一点 生活费外，
 ある 鉱山 毎月 除いて 支給する-与える すこし 生活費-LOC
 工钱 一直 扣着 不 给，
 給料 ずっと 取り押さえる-PROG NEG 与える
 [発信者指向] 说是 [情報] 年终 一并 结算，
 REP 年末 あわせて 精算する
 [発信者指向] 严重 伤害了 外地 民工 的 感情。
 ひどい 傷つける-PERF よその土地 農民工 SP 感情
 (CCL: 1994 年報刊精選)

‘一部の鉱山では月に少しの生活費を除き、賃金をずっと支給せずに、年末に一括で精算すると言ひ、よその地域から来ている農民工たちの感情にひどく傷を付けた’

- b.?? [発信者指向] 有的矿每月除了发给一点生活费外，工钱一直扣着不给，
 [受信者指向] 说是 r/听说 [情報] 年终一并结算，
 [発信者指向] 严重伤害了外地民工的感情。
 c. [発信者指向] 有的矿每月除了发给一点生活费外，工钱一直扣着不给，

[受信者指向] **说是 r/听说** [情報] 年终一并结算。

d. [発信者指向] 有的矿每月除了发给一点生活费外，工钱一直扣着不给，

[受信者指向] **说是 r/听说** [情報] 年终一并结算，

[発信者指向] { 这种做法 / 其实 / 结果 } 严重伤害了外地民工的感情。

この CL やり方 実は 結果として

その理由は以下のように考えられる。“说是”を“说是 r”と解釈するためには、“说是”以前の先行文脈の発信者指向から、“说是”以降の受信者指向にシフトしなければならない。一方、このシフトの過程の中では受信者が終始、表面（形式的）に現れない。もしその後さらに発信者も表面に出ずに発信者指向に戻ると、文全体が「合図」が伴わずに「発信者指向→受信者指向→発信者指向」とシフトを2回行うことになる。これは文の理解に大変な負担になるだろうから、実際に起こり得ないのである。(43)cのように最後の節を削除するか、dのようにその節の頭にゼロ代名詞を使わずに“这种做法（このようなやり方）”で主語を補完させるか、“其实”・“结果”などで2回目のシフトがあったことの合図を出すことにより初めて、“说是 r”と解釈することができる⁶。

4.4.4 「発信者指向」から「受信者指向」へ移行する外因と内因

以上の考察・分析から、〈伝聞〉を示す“说是”の内部は均一的ではなく、「発信者指向」→「発信者指向/受信者指向」→「受信者指向」といった移行が見られる。この移行は、次のような統語的・意味的環境において起きるものと考えられる。

(44) 「発信者指向」から「受信者指向」への移行の統語的・意味的環境

①統語的環境：先行文脈において発信者が明示されていない。

②意味的環境：伝達行為が時間軸上にある一つの特定の点として位置づけることができない。

⁶ “其实”は「その実際のところ」で、“结果”は何らかのデキゴトの「結果」であるといった語彙的な意味から両方ともある種の「非飽和名詞」——文脈などからその所属、またはそれがどういうことに関係しているかが分からないと普通に使わない名詞——と考えられる。そこで発信者をつなげて、発信者指向に戻ることを暗示する効果を発揮する。

“说是”を“说是 r”と解釈するためには、必ずこの二つの環境の中のどちらかを整えなければならない。これらが“说是”が発信者指向から受信者指向へ移行する外因である。

ところが、“说是 s/r”が伝達動詞の“说”にもまた専ら〈伝聞〉を示す“听说”にも置き換えられることから、伝達動詞の“说”も(44)で規定された環境に用いられることが分かる。例えば、伝達行為が汎時間的と思われる(39)と発信者が明示されていない(40)の“说是”を次のように“说”に置き換えても、文は依然として成立する。

(45) 这种限制的结果是，儿子都五六岁了，竟然一个人不敢自己在房间里睡觉，

说怕静怕黑。

(46) 在这中间有一段时间，说要强调工人阶级领导，就勉强拉工人来当领导。

それにもかかわらず、“说”には“说是 r”のような受信者指向の用法がない。つまり、同様の統語的・意味的環境において“说是”は発信者指向から受信者指向へ移行するのに、“说”は移行しないのである。それはどこに起因するのであろうか。

筆者は、発信者指向の段階で“说是”が既に“说”と機能を異にしていると考えられる。上で述べたように、“说是 s”節においては発信者が“说是 s”の直前での生起することを排斥しているが、一方“说”は発信者が“说”の前に現れても差し支えない。このことから、“说是 s”は発信者指向で伝達という動作行為を意味しているが、動詞としての統語的な機能が不完全であり、それと比べて“说”のほうは依然として歴然たる動詞であるということが言える。この統語的な機能差は“说是”の“是”から来ているにほかならない。この“是”はコンピュータやフォーカス・マーカというより、むしろ“总是（いつも）”・“但是（しかし・ただし）”のように前接する語が副詞か接続詞であることを形態面で確保する接尾辞的なものと考えられる⁷。つまり“是”が“说是”の受信者指向へのシフトの可能性をもたらす

⁷ “总”には「まとめる」という意味の動詞と「いつも・ずっと」という意味の副詞の用法がある。また、“但”にも「ただ・単に・ひたすら」という意味の副詞と逆接関係を示す接続詞の用法がある。いずれにおいても、“是”は語幹の品詞性を限定する接尾辞的な機能を持つと考えられる。

ているわけである。

このように、伝達行為を意味する発信者指向の形式が受信者指向へ移行できるのは、単に(44)で提示された統語的・意味的な環境だけでは十分ではない。“说是”の場合は、接尾辞的な“是”との結合によって品詞性が強制的に動詞から副詞に変わってから初めて移行が可能になると考えられる。ところが、“是”との結合はあくまで脱範疇化を促進させる手段の一つにすぎず、言語（方言）によっては、それ以外の方法も考えられる。例えば、伝達行為を意味する発信者指向の形式を通常動詞の統語的位置から離れさせ、伝達される情報を表す文の文中や文末に移動させる、などである。詳しくは第5章と第6章で述べる。

4.5 伝達行為を超えた“说是”

先行研究は、次のような用例における“说是”を逆接関係を示すもの（陈颖 2009、陈颖ほか 2010）や「反事実のマーカ―」（吕为光 2011）と見なしている。

- (47) 我们 并没见一个县(市)书记、县(市)长写过检查；
 私たち 実際は NEG 見る 一つ CL 県 市 書記 県 市長 書く -EXP 反省文
 即便 发生了 大要案，也全是 秘书 代笔，
 たとえ～ても 起こる -PERF 重大な事件 も すべて である 秘書 代筆する
 党委 和政府 盖章，说是“集体 承担 责任”，其实是
 党の委員会 と 政府 捺印する REP 集団 引き受ける 責任 実 は である
 没有 一个人 承担 责任，更 没 谁 可能
 NEG 存在する 一つ CL 人 引き受ける 責任 さらに 居ない 誰 可能だ
 会 去 吸取 教训。 (CCL: 《中国农民调查》)
 するものだ 行く 汲み取る 教訓
 ‘私たちは、県（市）の書記や県（市）長本人が反省文を書くのを見たことがない。たとえ重大な事件が起きても、すべて秘書が代筆し、党の委

-
- (i) a. 总在一起算 ‘一つにまとめて計算する／いつも一緒に計算する’
 b. 总是在一起算 ‘いつも一緒に計算する’
 (ii) a. 但愿人长久 ‘{ひたすら／ただし} 人が長生きすることを願う’
 b. 但是愿人长久 ‘ただし人が長生きすることを願う’

員会と政府が認め印を押すだけだ。「集団で責任を取る」とはいえ、実際は誰も責任を取らないし、教訓を汲み取る人も誰もいない⁸

仮にこのような“说是”を「逆接の“说是”」と読んでおく⁸。また、なぜ「逆接の“说是”」が逆接関係を示したり、反事実の事象を提示したりできるかについて、これらの先行研究では〈伝聞〉という情報源に話し手が直接に関与していないため、信憑性が高くないからだと分析している。

しかしながら、〈伝聞〉だからと言って一概に信憑性が低いとは言えないだろう。例えば、ある情報を聞き手に伝えるときに、「これは私の〈直接経験〉だ」と付け加えた場合と「みんながそう言っているのだ」と付け加えた場合と、どちらのほうの方がより信用してもらえらるだろうか。下にも述べるように、必ずしも〈直接経験〉のほうの方が勝るとは限らない。§ 2.1.6 で紹介した Cornillie 2009 の観点に倣って言うと、話し手も他の参加者も共有できる情報源こそ最も高い信憑性を有する。つまり、〈伝聞〉は情報源として常に劣った信憑性を有するわけでもなく、〈伝聞〉由来の情報の方がほかの情報源より事実と違う場合が多いとも言い切れないのである。そこから分かるように、単に「伝聞」だからと言って、逆接や反事実に直結するわけではない。“说是”が逆接的・反事実的な文脈に用いられる動機付けを別のところに求めるべきである。

4.5.1 情報源の選択と情報源の共有しやすさ

“说是”がどんな条件のもとで「逆接の“说是”」に転換するのか。この問題を解決するために、まず情報源の選択にかかわる要因から考えよう。

日常的な経験から分かるように、ある出来事をめぐっては、複数の情報源から情報を知り得ることが可能である。とりわけ、話し手が自ら参加しているデキゴトに関しては、ふつう〈直接経験〉の情報源を持っていると思われる。例えば、スポーツの試合に最後まで出ている選手は当然、試合の結果を〈直接経験〉で知り得るはずである。また試合場からの放送などで試合の結果も流されるから、〈伝聞〉として試合結果を知り得ることもあり得る。通常、出場選手として〈直接経験〉で知り

⁸ 本研究では「讓歩」を「逆接」の一部と見なしている。そもそも「讓歩」は、「逆接」を相手にとってより受け止めやすい形に発展させたものだからということが出来るからである。

得た試合の結果と放送などから聞いた——つまり〈伝聞〉で知り得た——試合の結果とは一致する。しかし例えば、自分側が勝ったつもりだと出場選手が強く思っているのに、審判員の判断で負けたと発表される、といった一致しないケースも考えられる。そのときに、試合の結果を人に伝えようとすれば、次の a~d からどれを使うだろう。

(48)	表出情報源	実際の情報源
a. 私たちは勝った。	〈直接経験〉	〈直接経験〉
b. 私たちは負けた。	〈直接経験〉	〈伝聞〉
c. 私たちは負けた <u>らしい</u> 。	〈伝聞〉	〈伝聞〉
d. 私たちは勝つた <u>らしい</u> 。	〈伝聞〉	〈直接経験〉

まず d が最初に排除できる。なぜなら、〈伝聞〉という情報源において話し手側が勝っているという情報が現に存在しないからである。続いて話し手が審判員の判断を認めていない以上、b も選択されないと予測できよう。b と d は両方とも言語形式で表出・含意される情報源と情報の実際の情報源とは不一致である。問題になるのは、a と c の中のどちらを取るかである。ほとんどの人が c を選ぶであろう。

話し手にとって、話し手自身が経験したことと誰かから聞いたこととを比べると、前者のほうがより信憑性が高いかもしれない。しかしながら、人に情報を伝達するときに添付する情報源として、〈直接経験〉の方が逆に低い信憑性を持つ場合がある。なぜかというと、〈伝聞〉という情報源は多くの場合、聞き手が話し手と共有可能だからである。つまり、例えば話し手が新聞から情報を知ったのであれば、聞き手が同じ新聞を手に入れ情報を確認することができるし、誰かから聞いた話であれば、その人を訪れて訊ねれば良い。その意味で、情報源が共有可能である。それに対して、話し手の〈直接経験〉は話し手のその場、その時に限った個人的体験であり、聞き手に再現できる可能性は極めて低い。

情報源の共有しやすさは普通、話し手はその情報源にどれくらいかかわっているか（あるいはその情報源がどれくらいに話し手に依存しているか）ということと負の相関があると考えられる。実証的情報源は完全に話し手次第であり、場合によっては排他的にも考えられるため、最も共有しにくい。一方、伝聞的情報源は話し手

と基本的に無関係であるため、最も共有しやすい情報源なのである。その中間にあるのが推論的情報源である。推論が基づいている観察などは話し手によるものであるが、推論規則のような多くが共有されているため、推論的情報源は比較的共有しやすいと思われる⁹。この比較の結果を不等式で示すと、(49)になる。

(49) 情報源の共有しやすさ

実証的情報源 < 推論的情報源 < 伝聞的情報源

ちなみに、(49)の序列によって、推論的情報源だけが話し手の主張・認識を述べるときに、よくポライトネスのストラテジーとして使われること（例えば § 3.4.2.1 の注 13 で触れた“恐怕”）も説明できる。推論的情報源は話し手の排他的な参与が前提にされながら、聞き手からも共有できる。そうすると、自分の主張をすると同時に、「あなたから見てどうだろう」といった聞き手への配慮を見せることができる。これと比べると、伝聞的情報源は話し手の参与を排斥するため、第5章・第6章に見られるかなり特殊な表現意図がない限り、話し手が自分の主張を申し立てるのに向いていない。一方、実証的情報源は、自分の主張をするのに使えるが、聞き手が共有できない可能性が高いため、聞き手に気が配られていないと思われ、ときには独断的にも聞こえてしまうのである。

以上の分析を踏まえ、(48)c のみが選択されることが説明できる。いくら出場選手である話し手が自分こそが勝っていると確信していても、「私たちが勝っている」という情報源が〈直接経験〉であるため、聞き手にとっては検証不可能である。一

⁹ 話し手の実証的情報源で聞き手にとって共有可能なのは、発話時・発話空間において起きているデキゴトの場合のみである。それに対して、伝聞的情報源と推論的情報源にはこのような時空間の制限はない。次の(i)と(ii)はこの対立を示すものである。

- (i) 你看，{ 现在/*昨天/咱们这儿/??他们那儿 } 下雨了。
 ‘見て。{ 今/*昨日/私たちのところ/??彼らのところ } は雨が降ってきた’
- (ii) 好像/听说 { 现在/昨天/咱们这儿/他们那儿 } 下雨了。
 ‘{ 今/昨日/私たちのところ/彼らのところ } は雨が降ってきたようだ/そうだ’

つまり、たとえ発話時・発話空間において起きているデキゴトに関して、実証的情報源がより共有しやすいとしても、発話時・発話空間に限定しない伝聞的情報源と推論的情報源と比べると、全体の確率的な意味でも、実証的情報源のほうが劣る。なお、(i)における“你看”は「実証的情報源を共有せよ」という合図だと理解されたい。

方、聞き手に検証可能な情報源は〈伝聞〉のみである。その〈伝聞〉から得られる情報は「私たちが勝っている」ではなく、反対の「私たちが負けている」である。それにもかかわらず、話し手が嘘をついていると思われなくするには、cを選択するしかない。以上をより一般化すると、次のようにまとめられる。

(50) 話し手参与のデキゴトをめぐって表出される情報源の選択規則

話し手の参与しているデキゴトを伝達する(=p)とき、情報源が複数あり、なお且つ情報源によって知り得た情報が齟齬している(=q)場合、最も共有しやすい情報源およびその情報源から入手した情報を表出する(=r)。

また、(48)cを選択するのには消極的な理由ばかりではなく、積極的な理由もある。それは〈伝聞〉という情報源を提供することによって、話し手がその情報源から由来した情報と自分との間に距離を置いて、情報自体の真実らしさへの保証を回避できることである。つまり、(48)cからは話し手が自分の負けを認めたとは解釈されないのである。

4.5.2 話し手参与のデキゴトに用いられる“说是”

以上述べてきたことにより、§4.5.1の冒頭に提示した問題に答えることができる。つまり、話し手が自ら関与しているデキゴトに関する情報であるにもかかわらず、“说是”が付けられ、そしてその“说是”が「逆接」の機能を発揮する、ということの原因である。それは、私たちは(50)の $p \cap q \rightarrow r$ に基づいて $p \cap r \rightarrow q$ と推論する思考様式を持っているからである¹⁰。話し手が自分の参与したデキゴトに関する情報を語っている場合、その情報に対して〈直接経験〉以外の情報源の証拠表現を添付した、というようなミスマッチから、その情報が〈直接経験〉から由来している情報と多少のズレがあるだろうと予測される。それゆえ、話し手参与のデキゴトに関する情報が〈伝聞〉として述べられる場合、その後続文脈には必ず逆接的な内容がある。

次の例(51)で確認してみる。話し手は長年、鄧小平の「ボディーガード」を務め

¹⁰ このような遡及的推論(abduction)は論理的に有効な推論にはならないが、実際、原因を遡る場合よく使用される。沈家煊 2004 を参照。

た人物である。その人は鄧小平の誕生日祝いのことに直接関与し、それに関連することは〈直接経験〉で知り得たと考えて良い。そこで“说是”を使うことによって、鄧氏の誕生日祝いは、一般的に〈伝聞〉から知られている国の指導者クラスの誕生日祝いとなにか違いうだろうと聞き手に予測させる。その後続の文から、鄧氏の誕生日祝いはいかにも素朴でシンプルなものであることが打ち明けられて、まさに逆接的な意味関係を構成する。

- (51) 说是 过生日, 也就 是 做 个 生日 蛋糕,
 REP 過す 誕生日 も 他ではなく である 作る CL 誕生日 ケーキ
 増加 几 个 菜, 一家人 在 家里 吃 顿 饭。(CCL)
 増やす いくつ CL おかず 一家族の人 に 家-LOC 食べる CL ご飯
 ‘誕生日祝いをするとっても、誕生日ケーキをつくって、おかずを何品か増やし、家族揃って家で食事するに過ぎない’

また前出の例(47)の場合においては、話し手の〈直接経験〉では「集団で責任を取る」ことを知り得たはずであり、(50)の p に合致する。しかしそれがあえて〈直接経験〉ではなく〈伝聞〉として表出されている。つまり(50)の r に合致する。そこで q が推論される。つまり、「集団で責任を取る」ということは話し手の〈直接経験〉で知り得た情報——実際は責任を取ったり、教訓を汲み取ったりする人がいない——との間にズレがある、ということである。

4.5.3 「逆接」の“说是”の理論的意義

興味深いことに、〈伝聞〉のように話し手参与のデキゴトに関する情報を表出するのに用いられるのは“说是”のみで、“听说”・“据说”は使えない。上のスポーツの試合結果の(48)cの中国語訳として、“说是我们输了”は自然であるが、“听说我们输了”は状況的におかしい。後者を用いる場合は、話し手が試合に出ておらず、後から結果を教えられた場合である。

また、次の例において、一番目の“说是”に付いた情報の“我们在战争中打胜了”は〈直接経験〉からも入手できた情報のはずである。これもやはり“说是我们输了”と同様の理由で“听说”・“据说”に置き換えにくい。これに対して、“中国已是

四强之一”、“国民党要和平建国”という情報は話し手の〈直接経験〉では知る由もなく、名実ともに〈伝聞〉の情報であるゆえ、“说是”も“听说”、“据说”も使える。

- (52) 而 战后 祖国 的 局势 尤其 令 人 揪心：
 しかし 戦後 祖国 SP 情勢 とりわけ させる 人 不安する
 据说/听说/说是 中国 已 是 四 强 之 一，
 聞くところによると 中国 既に である 4 強 の中の一つ
 可是 又 太 不 象 一个 强国；
 しかし また すごく NEG 似る 一つ CL 強国
 说是/#据说/#听说 我们 在 战争中 打 胜 了，
 REP 私たち に 戦争-LOC 勝つ PF
 可是 总 让 人 觉得 有 点 “惨胜” 的 味道；
 しかし どうしても させる人 感じる ある CL 無残な勝利 SP 気持ち
 国民党 说是/据说/听说 要 和 平 建 国，
 国民党 REP したい 平和 建国する
 可 为 何 又 磨 刀 霍 霍。 (CCL: 报刊《读书》¹¹)
 しかし なぜ また 研ぐ 刀 シュッシュュッ
 ‘戦後の祖国の情勢はとりわけ懸念される。中国は既に4つの最強国の一つというが、あまり強国には見えない。私たちが戦争に勝ったとは言え、見るも無残な勝利の気が多少する。国民党は平和を守って国を建設するというが、なぜだかまた戦の支度をしている’

以上のことから分かるように、“听说”・“据说”は話し手が関与していないデキゴトについての情報にしか使えないのに対して、“说是”は異色であり、「条件付き」で話し手が関与しているデキゴトに関する情報にも使用可能である。その条件は、話し手の〈直接経験〉で得られた認識と“说是”でマークされた情報との間に多少のズレが存在する、ということである。

このような相違は自立性の他に、“说是”を“听说”・“据说”と区別するもう

¹¹ 罫線で囲まれた3つの語句の中の冒頭のものが原文で用いられている語である。

一つの根拠となる。つまり、“说是”は単に動詞句の“听说”・“据说”より脱範疇化の度合いが高い副詞に分類されるのみならず、「伝聞」という意味すら希薄化し、文法化の特徴の一つとされる「汎化」が進んでいる。

繰り返しになるが、情報源の言及ができない言語は存在しないだろうが、すべて文法範疇としての「証拠性」を持っているわけではない。それを持っているか否かを認定する基準は、この言語における証拠素——特定の情報源を第一義として、文法化の度合いが高い形式——の有無にほかならない。ところが、特に中国語のような孤立語の場合、証拠素の認定自体も決して容易なことではない。なぜなら、形態変化や接辞のような、文法化の度合いが高いとすぐに分かる形式が極めて少ないからである。一方、一部の副詞が名詞や動詞ほど *major category* ではないから、特定の情報源を第一義とする副詞まで証拠素と見なすこともできる。ところが、そうすると情報源の意味のある名詞・動詞をあえて証拠素と見なさない積極的な理由が必要となってくる。

そこで〈伝聞〉を表すが、条件付きで〈直接経験〉にも使えるということには理論的に大きな意義がある。文法的性 (*gender*) の場合を考えよう。生物学的性を表す形式はどんな言語にもあるだろうが、どんな言語も文法的性を持つわけではない。しかし、もしある言語において、生物学的性と一致しない「性」の形式があれば、この言語は文法的性を持っていると断言できる。例えば、文法的性を持つドイツ語では指小辞の *-lein* と *-chen* で終わる単語は中性であるが、その中に生物的性が女性のものもある。これは「逆接」の“说是”と類比できる現象である。

(53) a. *Fräu-lein*

女性-diminutive.NEUTRAL

‘令嬢’

b. *Mäd-chen*

下女・処女・女の子-diminutive.NEUTRAL

‘少女’

c. 说是-我们在战争中打胜了, ……

REP-直接経験

‘私たちが戦争に勝ったとは言え、……’

つまり、-lein と -chen が接続する名詞の生物学的性を問わずに接続可能であるように、“说是”が条件付きで、実際の情報源が直接経験であっても用いられるわけである。このことから“说是”が証拠素であり、“说是”の表す〈伝聞〉が文法的情報源であることが立証できる。

4.6 本章のまとめ

本章では共通語の〈伝聞〉の証拠素の“说是”について考察を行った。もともと伝達動詞の“说”が接尾辞的な“是”と結合した結果として、発信者主語が“说是”の直前の位置から排斥され、“说是”は動詞から脱範疇化するようになった。発信者主語の排斥に起因する発信者の不鮮明さ、ならびに伝達行為の汎時間性の強まりにつれて、“说是”は発信者指向から受信者指向へ移行し、証拠素として定着してきたと結論付けた。

さらに、「逆接の“说是”」については「逆接」の読みが出る条件にフォーカスを当てて分析した。話し手が直接関与しているデキゴトに関する情報は本来〈直接経験〉として表出されるべきである。それがあえて〈伝聞〉のように表出されるのは、この情報が話し手の〈直接経験〉から知り得た情報と完全に一致しているわけではない、ということに帰結できる。

これまでの研究では、“说是”を〈伝聞〉を表すものだという記述・分析はもちろん存在する。ただ、ほかの情報源表出形式、とりわけ証拠構造に分類されるべきものと同じレベルで考えられてきた。これが問題点である。その結果として、従来の研究の多くは、結局、先験的な枠組みを批判せずに中国語に適用し、中国語には諸々の情報源を表す形式が存在しており、それに該当するものは中国語の証拠性だ、といった結論に辿り着いたわけである。しかし、そのような結論は結局のところ、中国語にも *gender, number, tense* などの文法範疇が存在するという考え方とほぼ同様に誤っているとしか思えない。これに対して、本章は“说是”がより *minor category* に近い副詞であること、また〈直接経験〉など、〈伝聞〉以外の情報にも用いられることに重きを置き、“说是”のほうが証拠構造より、文法化の度合いが高い形式であり、この語だけを証拠素と認めることの妥当性を論じてきた。さらに、この“说是”によって表される〈伝聞〉は文法的情報源と位置づけられることを示した。

第5章 〈伝聞〉と意外性

——上海語の“伊讲”を中心に——

本章では、前章でとりあげた“说是”に続き、上海語の「三人称単数代名詞＋伝達動詞」の“伊讲”をとりあげる。“伊讲”が文末に現れると、その前の情報の情報源を選ばず、単に意外性を表すという事実に注目し、〈伝聞〉の提示に関連付けてその原因を分析する。

§ 5.1 では文末に用いる“伊讲”の意味機能——意外性を表すこと——を確認する。それから § 5.2 でこれまでの先行研究で提案された“伊讲”が意外性を表す形式になったメカニズムを検討する。そこで提示された問題点を解決すべく、§ 5.3 で筆者の考察・分析を述べる。§ 5.4 は本章のまとめである。

5.1 問題提起

5.1.1 文末に用いる用法

上海語の三人称単数を表す人称代名詞の“伊” [i³³⁴]と伝達動詞の“讲” [kã³³⁴]からなる主述構造の“伊讲”は文末に現れる現象が観察されている。

- (1) [電話で、自分の声が（女の名前と思われる）エリレンという人に似ていると言われた男は電話を切って]

侬 个 艾丽莲 发 啥个 声音 啦，哦哟 肯定 老 难看 个，
この CL エリレン 放つ 何の 声 FP INTERJ きっと とても 醜い FP

侬 个 人。我 声音 像 艾丽莲 伊讲。（コント）

この CL 人 私 声 似る エリレン REP

‘エリレンって人、どんな声をしているだろう。うわっ、きっと不細工に決まっている、その人はね。オレの音がエリレンに似ているって、あいつは言っていた。’

- (2) [初めて手に入れたスーツを大事に着ていたことを思い出して]

侬 个 辰光 刚刚 有 件 西装，不得了 噢。也 想得出 个
この CL とき したばかり 持つ CL スーツ 大変だ PF も 考え出せる FP

——現在 想想 真个 蠢 啦——戴 副 袖套 伊讲。
 いま 考えてみる 本当に バカ PF 付ける CL アームカバー REP
 (コント)

‘当時はスーツが手に入るなんて、とんでもないことだったよ。よくもそこまで考え出したもんだ—今はホントにバカみたいに思うけど—〔スーツの袖に〕アームカバーを付けるなんて。’

(1)(2)のような文末の“伊讲”は[i⁵⁵kā²¹]と発音され、文頭に用いられ発話内容を目的語として後ろに取る“伊讲”より速く発音され、強勢を受けず連読変調が起る。なお、本章の「文末の“伊讲”」はすべてこの音声的特徴を持つものである。

5.1.2 “伊讲”の意味機能

5.1.2.1 文末の“伊讲”に伴う意味素性

文末の“伊讲”の意味機能を抽出すべく、“伊讲”が用いられた文に共通している意味素性を確認しておく。

まず話し手参与のデキゴトに関する情報から見る。このような情報に“伊讲”が後続した場合、①話し手が意図的に参与していないか、十分なコントロールができない、もしくは②動作行為の実行によって、予測されていない結果が生じる、といったニュアンスが認められる。

(3) a. 我 昨日 迟到 了, 我 存心 个。

私 昨日 遅刻する FP 私 故意に FP

‘私は昨日授業に遅刻した。私はわざとだ’

b. *我 昨日 迟到 了 伊讲, 我 存心 个。

‘??意外なことに、私は昨日授業に遅刻した。私はわざとだ’

(4) a. 我 假装 撮脱 一 跤。

私 ~フリをする つまづく-完了する 一つ 転び

‘私は転んだフリをした’

b. *我 假装 撮脱 一 跤 伊讲。

‘??意外なことに、私は転んだフリをした’

(3)b では「遅刻」が意図的に行った行動ではないと解釈される。これは直後に「わざと遅刻した」という意味の後続を付け加えると文がおかしくなることから窺える。また、(4)b にコントロールできることを示す“假装（～フリをする）”が用いられるが、文が成立しない。そのようなことから、文末の“伊讲”はコントロールできるという意味素性とは相容れないことが分かる。

また時には、動作行為自体は意図的に実行されたのであるが、そこで生じた結果は予想外なものであることも考えられる。例(2)はその典型例である。スーツにアームカバーを着用することは自ら意図的に実行したのであるが、実行当時は、それがバカみたいに見えるという結果を招いてしまうのを見通せなかったというわけである。このような意味素性は“伊讲”になじみやすい。

次に、話し手が参与していないデキゴトに関する情報の場合を考える。この場合においては、③その情報が表す状況には既に気づいているものの、その発生・成立が感情的にすぐには受け入れられない、という状況である。例えば次の(5)では、B が A の行動を目撃して、その行動自体が確実に発生したことについて疑う余地はないが、その行動を行う理由に対して納得が行かないというニュアンスが下降イントネーションの“伊讲”に伴って表出される。疑問文の上昇イントネーションに変えない限り、(5)B1 の“伊讲”は削除しにくい。

(5) A: 我 不 欢喜 伊 么 就 拿 伊 甩脱 了 呀。

私 NEG 好きだ それ FP すると を それ 捨てる-完了する FP FP

‘私はコイツが気に入らないから捨てたのだ’

B1: 甩脱 了 伊讲! 伊 不 是 依 最 重要 个

捨てる-完了する FP REP それ NEG である あなた 最も 大事だ SP

朋友 嘛!

(アニメ)

友達 FP

‘捨てたなんて! コイツはあなたの最も重要な友達じゃないのか’

B2: ?? 甩脱 了! 伊 不 是 依 最 重要 个 朋友 嘛!

‘捨てた! コイツはあなたの最も重要な友達じゃないのか’

既存の知識の領域を出るような状況に気づいていても、十分な時間が経過しないと受け入れられないことがよくある。それで(6)の a と b との対立が見られるわけである。(6)b の“就”は予想ほど時間がかからなかったことを意味し、“伊讲”が要求している状況の受け入れに要する長い時間と抵触するため、“伊讲”との共起が許容されないのである。

- (6) a. 品种 有 得 介 许多 伊讲, 我 昨日 才 晓得。
種類 存在する SP こんなに たくさん REP 私 昨日 ようやく 知る
‘こんなに種類がたくさんあるとはなあ。私は昨日ようやく知ったのだ’
- b. *品种 有 得 介 许多 伊讲, 我 昨日 就 晓得了。
とっくに
‘こんなに種類がたくさんあるとはなあ。私は昨日とっくに知っていたのだ’

以上の①～③を合わせて考えれば、文末に“伊讲”が付いた文は話し手自身が参与しているデキゴトを表すものか、話し手が気づいたばかりのデキゴトを表すものの何れかである。そこにおける“伊讲”は「第三者の伝達行為による情報の受け渡し」との繋がりが極めて希薄になり、単に意外性 (mirativity) ——デキゴトの成立は予測されておらず驚くべきこと——を表すと思われる。

5.1.2.2 文末の“伊讲”は伝達行為を超えている

文末の“伊讲”の直前に現れた情報の中には、(1)のような〈伝聞〉からの情報と解釈できるケースもあれば、(2)のような〈直接経験〉からの情報のケースもある。ところが実際のところ(1)が〈伝聞〉に思えるのは、その文脈が〈伝聞〉としての解釈を許しているに過ぎず、文末の“伊讲”は基本的に〈伝聞〉を表すものではない。

これは次の例(7)と(8)との対照比較から裏付けられる。(7)a と(7)b は文の自然さにおいて差があることが確認できる。

(7) a. 伊讲 现在 房价 老 高 个。

彼 言う いま 不動産の値段 とても 高い FP

‘彼は今の不動産の値段はとても高いと言っている’

b. 伊讲 现在 房价 介 高。

こんなに

‘彼は今の不動産の値段はこんなに高いと言っている’

その差は程度表現と文頭の“伊讲”との共起に起因すると思われる。一見したところ、“老～(个)”と“介”は両方とも性質・属性の程度に関する副詞的な表現である。しかし、“老”は「程度が高いレベルに達している」という意味を表す程度副詞であるのに対し、“介”は直示的な表現であり、あくまで「指差し」だけで、問題にする程度の達したレベルの高低までは立ち入っていない。つまり文脈によって、高いと主張している場合もあれば、それに相反する場合もある。従って、歴とした〈伝聞〉、即ち第三者の発話内容の「伝言」をする場合、ジェスチャーを含め指示表現の先行詞的なものがない限り、(7)bは極めて自立性が低い。一方(7)aは問題なく言える。

仮に文末の“伊讲”も、文頭に現れた場合と同じように情報が〈伝聞〉から入手したことを表せるとする。そうであれば、(8)a・bの自然さはそれぞれ(7)a・bと全く同様のはずである。しかし、実際のところ、(8)a・bは、ともに自然な文である。

(8) a. 现在 房价 老 高 个 伊讲。

REP

‘まさか今の不動産の値段はとても高い(という)なんて’

b. 现在 房价 介 高 伊讲。

‘まさか今の不動産の値段はこんなに高いなんて’

さらに、(8)aは(7)aと違う意味を表し、単に誰かが不動産の値段がとても高いと言っていることを伝達しようとするものではなく、「値段が高い」という主張自体に対して驚きを感じたという話者の心的態度を表出する。これは(9)に示すように、(8)aの後ろに、驚きの心的態度を取り消すような後続部を許さないことから窺える。

(9) *现在 房价 老 高 个 伊讲, 我 也 舜恁 认为。

私 も この よう に 思 う

‘まさか今の不動産の値段はとても高い(という)なんて、私もそう思う’

(7)a と比べ、(8)a に観察されたこの意味の変化は“伊讲”が文末に置かれたことによって引き起こされたものである。また(8)b が言えるのは、値段がどれくらい高いのかを伝えるのではなく、値段が当該のレベルにあることに対する驚きを示すことに文全体の発話意図があるからである。

要するに、“伊讲+情報”は「誰が何と言っているのか」を伝達するのに対して、“情報+伊讲”はそれを超えて、「話し手が何に対して意外と感じているのか」を表出する文型である。

5.1.3 研究目的

本章は文末の“伊讲”になぜ意外性の読みが出るかを明らかにすることを目的とする。それから、意外性と〈伝聞〉の情報源との間に必然的な関係がどこまであるのかについても探りたい。

意外性の“伊讲”について、これまでの先行研究は寡聞にしてあまり知らず五指に足りないほどしか把握していない。钱乃荣ほか 2007: 312 は文末の“伊讲”を上海語の「助詞・間投詞・オノマトペ」として『上海語大詞典』（上海辞書出版社）に記載しているが、「実質的な意味を持たない」といった記述に留まっている。研究論文としては、陶寰・李佳樑 2009 と王健瑶（未刊）があるが、いずれも問題点が残っている¹。

なお王健瑶（未刊）によると、話し手が上海語から共通語に切り替えるときに、しばしば次の2例のような“伊讲” yǐjiǎng が用いられ、単に文を完結させて語気を和らげるといふ。

¹ 張誼生氏のご好意により、王建瑶（未刊）のコピーをご寄贈頂いた。ここで感謝の意を表す。

- (10) 他说 天下 老师 都 是 猫, 我说 广告系 的 老师
 彼 言う 天下 教師 すべて である 猫 私 言う 広告学科 SP 教師
 都 是 加菲猫 伊讲。 (王健瑶(未刊))

すべて である ガーフィールド猫 FP

‘彼は世の中の先生はみな猫だと言ったが。私が言うならば、広告学科の先生はみなガーフィールド (Garfield) だ’

- (11) 我知道 明天 一定 会 下 雨 伊讲, 所以 带着 伞。
 私 分かる 明日 きっと するものだ 降る 雨 FP だから 携帯する-PROG 傘
 (王健瑶(未刊))

‘私は明日はきっと雨が降ると知っているから、傘を持っている’

以上の2例は何れも王氏の文献から引用したもので、もとの出典は不明である。氏は、(10)・(11)のような“伊讲”は本来意外性を表すはずであったが、共通語の影響を受けるのに従い、(12)のように、命題の内容に対する意外性が“伊讲”の代わりに、共通語の副詞の“居然”などに表出されるようになったゆえに、“伊讲”自体の意外性を表す意味機能が次第に稀薄になった結果ではないか、と分析している。

- (12) 这种 人 居然 还 是 被 学校 聘请
 この CL 人 意外なことに それでもなお である によって 学校 招聘する
 回来 当 老师的 伊讲, 这 都 叫 啥 素质 啊!
 戻ってくる 務める 教師 SP FP これ すべて 呼ぶ 何 素質 FP
 (王健瑶(未刊))

‘こんなヤツがまさか学校に招いてもらって、先生として戻ってきたなんて。これはいったいどんな素質だというのか’

しかし、インフォーマント（上海語と共通語のバイリンガル）によると、(10)・(11)のような用例は上海出身の人が話す共通語としては決して許容できるものではないという。王氏自身も、このような用例は非常に稀で、誤用と見ても良いとしてい

る²。従って筆者は(10)・(11)のような“伊讲”を考察の範囲外に置く。

5.2 先行研究

これまでの先行研究は、すべて意外性を表す“伊讲”が伝達行為を表す“伊讲”の延長線上にあるものと考えている。一致しないところといえば、“伊讲”が文末に用いられた場合に〈伝聞〉という情報源を示す機能があるかどうかというところである。

5.2.1 擬似的な伝達行為による効果

王健瑶（未刊）は、“伊讲”が文末に用いられた場合に〈伝聞〉の情報源を示す機能があるという立場であると思われる。氏の説明によると、強い語気で主観的な評価を述べることによって聞き手のメンツを脅かせることを回避すべく、話者が“伊讲”を付けて、第三者が実在しないにもかかわらず、あたかも第三者の評価を引用しただけのように見せかける機能だという。氏は文末の“伊讲”の意外性の読みを、擬似的な伝達行為を表すと同時に生じた副次的な効果だと考えているようである。

それに対する疑問点は少なくとも以下の3つがある。①「ある情報が自分の予測を超えている」ということを認めることが聞き手のメンツを潰すとは限らない。②第三者の評価であるかのように見せかけるなら、文末に現れても文頭に現れてもさほど差がないはずであるが、意外性の読みは現に“伊讲”が文末に現れた場合のみに出る。王氏の分析では、これについて説明できない。③ § 5.1.2.2 で分析したように、文末に現れた“伊讲”が〈伝聞〉を示すことは文脈から切り離された場合では確認できない。

5.2.2 語用論的な効果

陶寰・李佳樑 2009 は“伊讲”が文末に用いられた時点で、もはや〈伝聞〉の情報源を明示する機能を発揮できず、専ら意外性を表すようになっていると述べている。

² もしこれが実在している現象であれば、その“伊讲”を「上海人キャラ」の役割語と位置付けて良いだろう。役割語およびキャラ語尾に関しては、金水 2003 と定延ほか 2007 を参照。

なぜ〈伝聞〉の明示から意外性の表出へシフトしたかという点、そもそも必要ではない情報源の提示がわざわざ後から追加される狙いは、情報源の提示ではなく、情報に対する態度——意外であること——を示すことにあると考えたからである。

しかし、それが意外性につながっているという分析は一般性に欠ける。既に指摘したように、確かに中国語の場合、情報源の提示が文法的に義務付けられておらず、通常は〈直接経験〉に由来した情報または一般的な知識・真理と話し手が思っている情報には情報源を付けない。ところが、情報源を明示しているからと言って、話し手がその情報の真実らしさを疑っているということは必ずしも導けない。〈伝聞〉という情報源は、単に話し手が情報の形成に積極的に参与していないことを表明し、話し手と情報の間に距離を置くだけである。その結果として、情報自体が怪しいという可能性もあれば、逆に話し手自身の主観的判断を最小限に抑え、情報の真実らしさをより客観的な立場から主張する、という捉え方もできる。

また百歩譲って、〈伝聞〉の情報源を付けて話し手が情報の真実らしさを確信していないといった前提を受け止めるとしても、そこに意外性が生じる保証は存在しない。意外性はむしろ当該情報が真であることを確認してから初めて生じる心的態度である。そもそも真であることを確認していないのに、「これは意外だ」と評価するのは合理的な発話とは考え難い。現に“听说”は〈伝聞〉の証拠表現であり、それが付いた情報に対して話し手が確信していないケースも存在するにもかかわらず、別に意外性を表すことはない。例えば次の共通語の例では、“听说”が付いているが、それに導入された情報の真偽に対して話し手は評価していない。これと関係なく、逆に「予想通り」という意味を表す副詞“果然”が用いられることから、情報に意外性がないことが分かるであろう。

(13) 派 人 到 嘉兴 火车站 打探, 果然 听说

派遣する 人 至る 嘉興 汽車駅 たずねる 予想通り と聞いている

已经 有 日本 便衣警察 到 车站 寻查 金九。

既に 存在する 日本 私服刑事 至る 駅 探す 金九

(CCL: 万润龙ほか《金九嘉兴避难记》)

‘人を嘉興駅に探りに行かせたら、予想通り、日本の私服刑事が既に駅で金九を捜査していたらしい’

以上から分かるように、やはり文末の“伊讲”に意外性が生じる原因は〈伝聞〉という情報源や情報源の提示に帰結できるものではなく、“伊讲”の個性に起因する面が大きいのではないかと思われる。

5.3 文末の“伊讲”が意外性を表す原因

5.3.1 意外性の表出に関する語順調整

既に述べたように、情報が〈伝聞〉に由来したことを示すからと言って、意外性の読みが必ずしも出るわけではない。“伊讲”が文頭に現れた場合は意外性の読みが出てこないのである。そこから分かるように、“伊讲”の意外性はまず文末に現れることに深い関係がある。

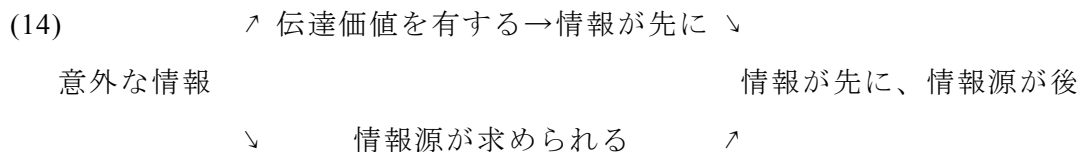
情報伝達を遂行させるという大きな目的から考えれば、情報そのものと比べると、情報源は言うまでもなく二次的なものであり、言わば「本体」としての情報の「付属品」と考えて良い。文のレベルにおいて、「付属品」が「本体」より先に表出されるかどうかは、統語的・意味的な規則による部分が多い。例えば〈伝聞〉の情報源を表す“(我)听(～)说”は「付属品」でありながら、統語的な規則によって節を目的語に取ると規定されているため、通常「本体」より先に出ている。§3.2からも分かるように、中国語の証拠表現には、知覚動詞・思考動詞・伝達動詞などの動詞に由来したものが多い。動詞の「名残」として、こういった証拠表現は多くの場合に目的語節を取り、文頭に現れる。しかし、张伯江・方梅 1994 が指摘するように、口語の場合、語順は決して文の統語的・意味的な構造を直接に反映するものではない。日常的な経験からも裏付けられるが、情報を先に提示してから情報源を添付するケースも決して少なくない。実際の会話において、時間の切迫性もあって、重要な情報を迅速かつ有効に伝えていくように、その場で表出の順番を臨時的に調整することもあり得る。なお、ここで言う「重要な情報であるほど先に表出される」ということは、一般的に“尾焦原則”と呼ばれる「中国語のデフォルトのフォーカスが文末に置かれる」という原則とは異なるレベルの話である。赵元任 1968 (§2.14) が既に指摘しているように、実際のコミュニケーションにおいては熟慮したあとの発話(“想好的句子”)とそうでない発話(“没想好的句子”)がある。重要な情

報を先に言う現象はまさに熟慮していない発話に見られるものである。一方“尾焦原則”は熟慮したあとの発話に適用されるものだと思われる。

では、統語的・意味的な規則を破っても情報源を後回しにするほど重要な情報は、どんなものが考えられるのか。それは高い伝達価値を持っていると話し手に判断された情報にほかならない。伝達価値が高ければ高いほど、その情報が付属品としての情報源より先に表出される可能性が高いわけである。

高い伝達価値を持っている情報には、大別して次の2種類がある。一つは、迅速な対応が求められる状況に関する情報である。例えば「火事だ！」の類である。もう一つは、既存の知識と異なったり、既存の知識から推測できなかつたりする情報、つまり意外性のある情報である。「犬が人間を噛んでもニュースにはならないが、人間が犬を噛めばニュースになる」という言葉があるように、「常識」を覆すような情報こそ伝達価値がある。なるべく先に表出したほうがいい情報は、この2種類である。

ところが、一番目の情報は文法が許す限りにおいて、そもそも情報源の添付が不要である。むしろ情報源を付けずに、〈直接経験〉や一般的な知識・真理のように表出したほうが、臨場感と切迫感が伝わりやすく、迅速な対応がより期待できるであろう。これに対して、これまでの知識から逸脱しているからこそ、意外性のある情報に情報源が求められるのが自然なことである。そこで、次のような一連の因果関係が考えられる（矢印の先は結果であることを示す）。



つまり、話し手としては、意外だと判断している情報を情報源より先に表出して、その直後に情報源を付け加える、という方策を講じるわけである。聞き手の方では話し手が通常の「情報源+情報」の語順を使わず、「情報+情報源」にした理由を推し量って、遡求的推論が働き、(14)に示した因果関係を「逆読み」する。そこで、情報自体に意外性があるということが読み取れる。

以上、文末の“伊讲”が意外性の読みを帯びる原因を、伝達価値および語順に関

連付けて解明を試みた。ところが、臨時的な語順調整であれば、“听说”ないし〈推論〉や〈直接経験〉を表す証拠表現も文末に現れることが許されている。にもかかわらず“伊讲”だけに意外性が定着する、ということについてはまだ十分な説明がなされていない。以下、それについて述べる。

“伊讲”だけに意外性が定着する理由は二つ考えられる。一つ目として、特定の情報に対して、「これは意外だ」という評価を聞き手に伝えるためには、聞き手に情報が真であることを信じてもらわねばならない。そこで、聞き手からも共有できる情報源を添付するのは効果的な措置となる。聞き手が共有できない情報源が提示されても、しょせん特定個人の直接経験であり検証不可能と思われてしまうため、情報自体を信じてもらえないし、それに依存する意外性も当然伝わるはずがない。Aikhenvald 2004:210 においても言及された「〈視覚 visual〉や〈直接経験 firsthand〉を表す証拠素には意外性の拡張が見られない」という現象はまさにここに起因するのではないかと考えられる。つまり、〈視覚〉や〈直接経験〉などは共有が困難な情報源である (§ 4.5.1 を参照) ため、話し手はそこから意外性のある情報を入手することが十分あり得るが、意外性の分かち合いの前提として、情報に対する聞き手の納得を得ることは難しいわけである。同様に〈推論〉はある程度共有可能であるが、〈推論〉が基づいた観察の結果は特定個人にしか共有できないものであるため、〈伝聞〉ほど共有しやすい情報源ではない。

二つ目として、“伊讲”における意外性の解釈はあくまでも、情報を表す命題 p と情報源を表す形式 q が「 $p+q$ 」という語順パターンで現れた結果であり、 q があるから意外性だというわけではない。これは、「 $p+q$ 」即ち q 後置の場合（例えば“他来了听说”）に生じる意外性の読みが、「 $q+p$ 」即ち q 前置の場合（例えば“听说他来了”）にはないということから窺える。しかし、もし情報源を表す q に関してそもそも「 $q+p$ 」という語順が存在しない——たとえ「 $q+p$ 」が文法的であっても、その q が情報源を表す形式ではない——のであれば、状況が変わる。つまり「 $p+q$ 」のみが唯一可能な語順となり、 q を削除した場合、「 $p+q$ 」というパターン自体が崩れて意外性の読みが消える。そうすると結局、意外性の読みは q によってもたらされたものと再分析される。次の分析から分かるように、“伊讲”はまさにこのケースである。

5.3.2 “伊讲”が文頭から離れる内在的動機

共通語の〈伝聞〉の証拠素である“说是”の成立について分析したときに述べたように、伝達動詞の“说”が“是”と結合することによって、発信者を表す名詞句を主語に取ることができなくなり、そこから脱範疇化の第一歩を歩みだしたのである。発信者指向から受信者指向へと移行するとともに、現れた位置が命題の先頭から命題の内部に割り込み主語と述語の間に現れる、という副詞と同様の振舞いをするようになった。これに類似することは、“伊讲”についても言える。ただし“伊讲”のケースでは脱範疇化の結果は副詞化ではなく、語気助詞化である。

聞き手が三人称代名詞の指示対象を同定できない場合は、ふつう話し手は三人称代名詞の使用を避ける。それをあえて使うなら、三人称代名詞の指示対象を明らかにする必要がないと話し手が思っていると判断できる。つまり、「誰がこう言っているのか」より「何とされているのか」のほうが伝達されるべき内容であると話し手が判断しているのである。言い換えれば、話し手が“伊”の指示対象をはっきりしない場合、その“伊讲”は発信者指向ではなく、受信者指向だと考えられる。

しかし、文頭という統語的な位置は発信者指向から逸脱することを妨げる。“伊讲”が文頭に現れた以上、聞き手としては必ず“伊”の指示対象を同定しようとするからである。これは決して話し手の本意ではなく、聞き手に無駄な労力をかけさせるため好ましくない。また一旦、聞き手がその“伊”は誰を指しているのかを聞き出したら、話し手は当然のことながら「分からない」と答えるわけにはいかない。従って“伊讲”を文頭に置けば、話し手としては発信者を明白に触れずに情報だけを伝達するという目標が達成できないのである。そこで聞き手に“伊”の指示対象を特定させないように、ヒントを出さなければならない。あるいは“伊”が誰のことなのかを考える余裕をなくさなければならない。“伊讲”を文頭の位置から離れさせ、文末に追加された形で付け加えるのはそのためである³。

文頭に現れる「三人称+伝達動詞」はより発信者指向で、文末に追加された「三人称+伝達動詞」はより受信者指向であるということは、次の比較からも窺える。

³ ここで言う「後から追加」は倒置であり、情報の直後に「誰がこれを言ったのか」を付け加え、ポーズ無しで音声的に強勢を持たないものに限る。赵元任 1968: § 2.14.2 を参照。

(15) a. 小王 讲 小张 辣海 住 医院。

王くん 言う 張くん しているところ 住む 病院

‘王くんは、張くんが入院中だと言っている’

b. 小王 讲 个, 小张 辣海 住 医院。

FP

‘王くんは言っているのだ。張くんが入院中だと’

c. 小张 辣海 住 医院 小王 讲。

‘張くんが入院中だと王くんは言っている’

d.*小张 辣海 住 医院 小王讲个。

‘張くんが入院中だという。王くんが言ったのだ’

(15)から分かるように、発信者を取り立てられるのは、文頭に置かれた場合である。後から追加された「三人称+伝達動詞」の中の「三人称」で表される発信者を取り立てることができない⁴。また、発信者指向の文脈である場合に、「三人称+伝達動詞」を後から追加するのは非常に不自然である。

(16) a. 小王 讲 小张 辣海 住 医院, 但是 小李 讲 小张 辣海 出差。

王くん 王くん 王くん 王くん 王くん 王くん 王くん 王くん 王くん 王くん
しかし 李くん

‘王くんは、張くんが入院中だと言っている。しかし李くんは、張くんは出張中だと言っている’

b.*小张 辣海 住 医院 小王 讲, 但是 小张 辣海 出差 小李 讲。

(16)は異なる発信者を対比項として取り上げる文脈である。「三人称+伝達動詞」が文頭に現れた場合は問題なく対比できるのに対して、それが文末に移動すると文が不適格となる。そこからもやはり文末という統語的位置は発信者指向に向いていないと言える。

ではなぜ文末という統語的位置が発信者指向に向いていないのか。根本的にいうと、VOを基本語順とする中国語において文末に生起するのに最も相応しいのは目的語にあたる名詞句か動作の結果（状態の変化を含む）である。言い換えれば、文

⁴ 取り立てる機能において、上海語の“个”は普通話の“的”と同様である。

末の位置に現れるものは述語動詞と認識されにくい。それゆえ、「三人称＋伝達動詞」がそこに現れると発信者指向を含め、伝達動詞に内在する「発信」という意味が弱化する。

以上のことから次のように結論づけられる。「三人称＋伝達動詞」が文頭に現れた場合は発信者指向であるが、文末に追加された場合は受信者指向である。また、文頭に現れた場合は目的語節を取る主節であるが、文末に現れた場合は語気助詞またはいわゆる挿入語句的な要素となり、脱範疇化しているわけである。話し手が「誰が言っているのか」を知られたくない——つまり発信者指向ではなく、受信者指向である——前提で“伊讲”を使うなら、当然“伊讲”を文末に移動させるしかない。

“伊”の指示対象が不明瞭であっても良いことを許容した以上は、“伊讲”自体に文頭から離れる動機が内在していると考えても良い。

まとめると、統語的位置と関係なく、「三人称＋伝達動詞」という言語形式から情報が〈伝聞〉から知り得たことを了解できるが、文頭の場合と文末の場合は発信者指向と受信者指向の違いがある。これと対照的な振る舞いを呈する“听说”は、普通文頭または主語と述語の間に現れるが、現れる位置を問わず、常に受信者指向である。“听说+情報”でも“情報+听说”でも受信者指向という点において変わりはない。従って、“情報+听说”から感じ取った意外性は容易に変わった語順に帰結できる。これに対して、“伊讲+情報”と“情報+伊讲”は意外性の有無ということを除いても、発信者指向と受信者指向という意味的な違い、ならびに主節と挿入語句という統語的な違いがあるため、“情報+伊讲”に感じ取った意外性を語順に帰結できず、結局文末の“伊讲”が意外性の読みが生じる原因であると分析されるのである。

5.3.3 文末の“伊讲”が〈伝聞〉を表さない原因

以上から分かるように、“伊讲”が文末に現れるのには外的な動機付けと内的な動機付けがある。外的な動機づけは、意外性のある情報が高い伝達価値を持ち、なるべく先に表出されるべく、情報源を後回しにするということである。内的な動機付けとは、不特定の指示対象を指している“伊”が“讲”と結合すると受信者指向にシフトするため、受信者指向に向いていない文頭の位置から離れ文末に移動する、ということである。

一見したところ皮肉なことに、“伊讲”が文末に移動するのには、受信者指向にシフトし、純粹に〈伝聞〉という情報源を表出するという内的な動機付けがあるためだが、移動が実現したら、本来の内在的目的が達成されず、〈伝聞〉の意味がかえって意外性の読みに凌駕される。次第に文末“伊讲”の情報源を示す機能が極めて弱体化し、専ら意外性を示すマーカーとなってきた。

これは、上海語において〈伝聞〉の情報源を示す証拠表現として既に“听说”[t^hij⁵⁵səʔ²¹]があり、文末の“伊讲”がそれにとって代わることができなかつたからだと考えられる。上海語の“听说”は共通語の“听说”と異なり、“听”と“说”[səʔ⁵⁵]の間に発信者を補うことができない。なぜなら、上海語の“说”が“讲”ほど、伝達動詞として生産的に用いられないからである。例えば、共通語の“听张三说”に対応する上海語は“听张三说”ではなく“听张三讲”なのである。その結果、上海語の“听说”は共通語の“听说”よりも〈伝聞〉の証拠素に近いと言える⁵。このような“听说”を放置し、わざわざ文末の“伊讲”を〈伝聞〉の証拠表現として起用するまでの強い理由は“伊讲”の用法からは求められない。従って、文末に移動された“伊讲”に残された選択肢は一つしかなくなる。即ち意外性を表すというマーカーである。

5.4 本章のまとめ

本章は上海語における意外性を表す文末の“伊讲”を取り上げ、先行研究の疑問点を指摘した上で、伝達行為を意味するはずの「三人称単数代名詞+伝達動詞」という主述構造がなぜ意外性を表すマーカーになってきたのかについて説明を試みた。

結論として、“伊讲”が意外性を表す形式になったのは情報に後置されたからである。しかし後置の動機付けには意外性の表出という目的もあれば、“伊讲”に内在する受信者指向に相応しい統語的位置を求めることにもある。後者は“伊讲”が受信者指向であるときに、常に意外性の読みが出ることを保障する。

一方、他の受信者指向の証拠表現は、現れた位置によって意外性が出たり出な

⁵ ただし、上海語の“听说”もその前に“我”などの受信者を補うことができるため、その意味で完全に動詞から脱範疇化してはいない。

ったりして、常に意外性の読みがあるわけではないため、意外性を表す機能を獲得していない。また、“伊讲”が受信者指向に相応しい文末に現れても、受信者指向の〈伝聞〉を表すことにならなかったのは、上海語には〈伝聞〉を表す“听说”があり、“伊讲”はそれにとって代わることができないからである。その結果、文末の“伊讲”は〈伝聞〉ではなく、意外性を表す形式になったのである。

以上の分析から分かるように、“伊讲”が意外性を表すマーカールとなったことには確かに〈伝聞〉の証拠素への移行があったが、〈伝聞〉だからと言って必ずしも意外性への派生義があるとは限らない。意外性を表す要因は、それ以外のところに存在するのである。

第6章 〈伝聞〉と注意喚起

——台湾語の文末の“讲”を中心に——

上海語における意外性を表す文末の“伊讲”を取り上げた第5章に引き続き、第6章では同様に文末に用いられ、伝達動詞に由来したモーダル形式と思われる台湾語の“讲”について考察を行う。

以下ではまず異なる統語的位置に現れる“讲”（伝達動詞と補文標識の用法を除き）の使用を確認する。そうして文末の“讲”に絞り込み、§6.2ではその意味機能についての先行研究を検討する。§6.3では文タイプごとに“讲”の使用を記述し、そこから「注意喚起」という意味機能を抽出する。§6.4で、抽出された意味機能をなぜ文末の“讲”が持つようになったのか、そのメカニズムと過程について仮説を立てて検証する。最後は本章のまとめである。

6.1 文頭・文中・文末に現れる“讲”

伝達動詞と補文標識 (complimentizer) 以外に、“讲” [kɔŋ⁵¹]は副詞として文頭および主語と述語の間に現れる。例(1)のように文頭に現れた場合は、〈伝聞〉が情報源であることを示すという¹。Tseng 2008:41はこの“讲”を“听讲” (hearsay)の短縮形だと認定している。

(1) 讲 古早 啊, 有 一 个 真 好 额 的 员 外 啦, [……]

REP 昔 FP いる 一つ CL とても 金持ち SP 豪族 FP

‘昔々、一人のとても金持ちの豪族がいたという’ (Tseng 2008)

主語と述語（もしくは主題と述題）に挟まれた“讲”は、情報源の〈伝聞〉を示す場合もあれば、上海語の文末の“伊讲”のような意外性——或いは「反予期 counter-expectation」——を表す場合もあると観察されている (Chang 1998, Tseng

¹ 本章における台湾語の用例はすべて複数名のネイティブスピーカーによるチェックを受けている。特に台北出身の陳姿因氏 (20代女性) と高雄出身の張佩茹氏 (30代女性) から多くのご助言を頂いた。改めて感謝の意を表したい。

2008 など)。例(2)は〈伝聞〉と意外性の両方が表出される例である。

- (2) 黑人 佢 讲 两翁仔某 拢 斗阵 来 买 菜 hoN,
 黑人 彼達 REP 夫婦 いつも 一緒に 来る 買う 食材 FP (Chang 1998)
 ‘黑人たちはいつも夫婦揃って食材を買いに来たという/
 意外なことに、黑人たちはいつも夫婦揃って食材を買いに来た’

Chang 1998 によると、第三者に報道 (report) されたことは、しばしば話し手の知識を超えるため、〈伝聞〉という情報源の提示に伴い、語用論的推論として反予期という意味が生じるのだという。この副次的な意味は、例(3)のような話し手が参与していたデキゴトについての叙述においてより顕在化する。

- (3) [凶暴な犬について話している]
 〇_i 行过 〇_j 讲 欲 给我_i 咬 la (Chang 1998)
 通過する REP しようとする に 私 噛む FP
 ‘(私が) 通過すると、意外なことに (犬は) 私を噛もうとした’

また、“讲”は文末にも現れる。次の例に示すように、平叙文の文末はもちろん、命令文と疑問文の文末にも使える。

- (4) 【平叙文】阮 翁 佢 路里 拈着 两万箍 讲。
 私たち 主人 に 道-LOC 拾う-つく 二万元 KONG
 ‘私の主人は道で二万元を拾ったよ’
- (5) [夫と大喧嘩をするたびに息子に荷物を持って来させて実家に帰ってしまった妻は、今回の夫婦喧嘩をそばから見ていて動かないでいた息子に]
 【命令文】共 我 个 包仔 提过来 讲!
 を 私 SP カバン 持つ-越える-来る KONG
 閣 柴 佢 遐 创 啥物?
 まだ ボンヤリする に そこ やる 何
 ‘私のカバンを持ってきなさい！何をぼんやりしているのよ’

(6) 【疑問文】 这个 物件 成本 偌济 钱 讲 ？

この 品物 元 いくら 金 KONG

你 卖 遮 贵！

あなた 売る そんなに 高い

‘その品物はコストがいくらなの？そんなに高く売りやがって’

伝達動詞が文末に現れ、何らかの「語気」を表すことは、漢語系において通時的にも共時的にも広く確認されている。例えば、上古中国語の“云”（谷峰 2007）、粵語廉江方言の“讲”（林华勇・马喆 2007）、成都方言の“说”に由来した“嗦”（熊進 2006）および本研究第5章で考察した上海語の“伊讲”などはその例である。しかしながら、台湾語の“讲”のように、文タイプを問わず文末に生起可能なケースは比較的少ない。この“讲”がそれぞれのタイプの文において、どのような意味機能を有しているのか、また、それらに対して統一的な説明が可能かどうかという問題が、本章の関心の所在である。次節に示すように、これまでの先行研究には、文末の“讲”の意味機能について諸説が見られるが、いずれも反例があり十全とは言い難い。

6.2 先行研究

管見の限りでは、これまでの先行研究には“讲”が疑問文の文末にも用いられることを指摘したものは見当たらないし、平叙文と命令文の文末の用法に関しても、より精密な記述と分析を行う余地が残されている。

Chang 1998 は、文末に現れた“讲”は実際には文頭の“讲”であるが、本来その後続くべき文が省略されたことによって、直前の文の文末にくっついたものと再分析されると分析し、省略されたものは話し手の信念や予期に反する状況を表すものであり、“讲”の使用はこういった状況が想定されていることを暗示する、と述べている。

しかし、“讲”の後には「省略」された内容を補えないものが少なくない。例えば次の(7)は、Chang 1998 の分析に従うと、ここにおいて、“讲”の後に「私は日本語を学びたいと思っていない」といった状況が想定されており、省略されたはず

である。ところが、話し手のことを全く知らない聞き手に対して(7)を発話することも可能である。例えば、初対面の外国語学習アドバイザーが聞き手の場合。そのような聞き手にとって、話し手が日本語を学ぼうと思っていないということを想定する動機付けがどこにあるのであろうか。

(7) 我 想欲 学 日本话 讲。

私 したい 学ぶ 日本語 KONG

俺 一 间 学校 较 好 无?

どの 一つ CL 学校 比較的に 良い NEG

‘私は日本語を習いたい。あなたはどの学校がいいかを知っているか’

高琇玫 2006 では、“讲”が「想起 (remind)」機能を有すると主張している。周知のように、リマインドされた側がその内容を事前に了解していることがリマインドの前提である。ところが“讲”がついた平叙文に伝達される情報は、必ずしもこの前提を満たしていない。例えば、前掲の(7)の「日本語を学びたい」という情報は初出であり、聞き手が事前に知っているものではない。また次の例から分かるように、聞き手にとって既知の情報であっても、必ずしも“讲”を用いてリマインドできるわけではない。

(8) *你 一定 知影, 阿英 细汉 足 糶 个 讲。

あなた きっと 分かる アイン 幼い 凄く 不細工 FP KONG

‘あなたはきっと知っているだろう。アインは子供の頃すごく不細工だった。’

Tseng 2008:45-46 は、文末の“讲”が、話し手にとっての意外性もしくはデキゴトの非現実性を示すのに用いられると述べている。しかし、次の例における“讲”が付いた、「アインは小さい時に不細工だった」というデキゴトは、決してアインの幼なじみである話し手にとって意外性のあるものでもなければ、非現実的デキゴトでもない。

(9) 我 共 阿英 做伙 大汉, 伊 细汉 足 糶 个 讲。

私 と アイン 一緒に おとなになる 彼女 幼い すごく 不細工 FP KONG

‘私はアインと一緒に大人になってきた。彼女は子供のころとても不細工だった’

Tseng 2008 に挙げられた非現実性を表す“讲”の用例は、条件文における結果・結論を示す主節と命令文に用いられたものである。確かにこの2種類の節には非現実性が成立する。ところが、これらの文法的環境においては、“讲”が文末に用いられなくても、非現実性は依然として保たれている。つまり、非現実性は条件文そのものや命令文によって保証されるものであり、“讲”の有無とは直接関係しないのである。

その他、Chapell 2008 は文末の“讲”を断言と警告に用いられる「モダリティ辞(modality particle)」と認定している。また Huang 2010 は、「感情を表現する機能」を文末の“讲”が有していると分析する。Chapell 2008 の主張では、“讲”が付いた文と付いていない文の相違を説明することが難しい。なぜなら、断言や警告といった発話行為の識別はそもそも文末の“讲”に依存するわけではないからである。“讲”が付かなくても、断言や警告のニュアンスは十分読み取れるわけである。一方、Huang 2010 では「感情を表現する機能」を命題の内容に対する話し手の態度や感情だと定義しているが、この定義はあまりにも抽象的で理解に苦しむものである。実例として、Huang 2010 はこういった態度や感情に位置づけられる「羨ましい気持ち」を“讲”で示した次の例を挙げている。

(10) 伊 实在 对 你 真 好 讲。 (Huang 2010)

彼 本当に に対する あなた とても 良い KONG

‘彼はあなたをとても大切にしている’

ところが、このような「羨ましい気持ち」は仮に存在しても、Chappell 2008 で述べられた断言と警告のムードと同様に、それが“讲”によってもたらされたものとは考えられない。

なお、“讲”が命令文の文末に用いられた場合の効果として、高琇玟 2006 は「催

促 (urge)」を、Tseng 2008 は「催促」や「脅かし」を挙げた。それぞれ平叙文の場合の「想起」と「非現実性の明示」に関連付けようとしている。これらの効果自体には、首肯できる部分が多い。ところが、既に述べたように「想起」にせよ「非現実性の明示」にせよ、これらの意味機能がそもそも“讲”によるものとは考えにくいため、「催促」といった効果が命令文に用いられた場合に生じた理由は“讲”以外の要素に求めるべきであろう。

6.3 “讲”の文末用法の再確認

先行研究についての以上のレビューから分かるように、“讲”の文末の用法に関して、疑問文はもとより、平叙文と命令文に関しても記述の精度をさらに高める必要がある。それによって初めて“讲”の意味機能を正確に把握することが可能になる。

6.3.1 平叙文における生起

平叙文の文末に“讲”が用いられるのは次の二つの場合である。

6.3.1.1 話し手側の新発見を提示する

話し手が気づいたばかりの（つまり「新たに発見」した）情報に文末の“讲”が付く。ただし聞き手がいる場合、その情報を聞き手が恐らく知っているだろうという想定の下では用いられない。具体例を見よう。

例(11)と(12)の“讲”が共起する文は両方とも話し手の〈知覚〉によって気づいたばかりの状況に関する叙述である。そこにおける“讲”の働きは話し手にとって意外性のあるデキゴトであることを示すことである。

(11) 目鏡 伫 遮 讲! 我 阁 揣 遮 久!

メガネにここ KONG 私また探すこんなに長い

‘メガネはここにあった! ずっと探していたんだ!’

(12) [子供の一文字も書いていない宿題を見た母親が父親に]

作业 明仔载 就 欲 交 矣,

宿題 明日 もうすぐ 必要がある 提出する FP

伊 一 字 拢 无 写 进!

彼 一つ 文字 すべて NEG 書く KONG

‘明日までにもう提出しないとイケない宿題なのに、彼はなんと一文字も書いていない’

しかし、聞き手がすでに知っているだろうと思われる場合は、文末の“讲”が用いられない。例(13)のような情報は話し手にとって新発見であるが、聞き手が言われるまで知らなかったということは普通あり得ない。

(13) *乎! 你 嫁予 日本人 讲。

INTERJ あなた 嫁ぐ-に 日本人 KONG

‘なんだ!あなたは日本人の嫁になった’

ところで上海語の“伊讲”は、(11)・(12)はもちろん、(13)のような文脈にも用いられる。

(14) 啊? 依 嫁拨了 日本人 伊讲!

cf.例(13)

INTERJ あなた 嫁ぐ-に-PERF 日本人 REP

‘はっ?あなたは日本人の嫁になったって!’

この対比から分かるように、上海語の文末の“伊讲”は当該情報が話し手側の新発見でさえあれば使えるのに対して、台湾語の文末の“讲”は、話し手側の新情報であっても聞き手にとって既知の場合には用いられない。

6.3.1.2 聞き手の認識を是正する

話し手が前から把握している情報である場合、“讲”を使用できる条件は、聞き手がそれに相反する状況を思い込んでいるという想定が成立することである。

その典型的な例の(9)が最も自然な文脈は、今は美人であるアインを幼いころからずっと綺麗だと思い込んでいる聞き手に、異なる情報——つまり子供頃のアインは不細工だったということ——に気付かせるような文脈である

次の例(15)の“讲”が共起する文は話し手自身の意志・願望であるため、前から把握している情報だと思われる。また、その文に先行する文脈から、話し手がこのような意志・願望を持ってはいないと聞き手が思っていたことも推測できる。そうでなければ、聞き手は離れようとした「彼」を引き止めたはずなのである。話し手が把握している情報と聞き手が思い込んでいる（と話し手が思っている）状況はそれぞれ(16)の a・b に示す。

(15) 伊 已经 走 矣 啦?

彼 すでに 出発する FP FP

我 阁 想欲 佢 伊 讲 几 句 仔话 讲。

私 まだ したい と 彼 話す 幾つ CL 話 KONG

‘彼はもう行ったの？私はまだ彼に話したいことがあるのに’

- (16) a. 話し手が把握している情報：話し手はまだ彼に話したいことがある。
b. 聞き手が思い込んでいる状況：話し手はもう彼に話したいことがない。

次の(17)に関しては、“讲”がついた A1 のほうがより自然であるとインフォーマントは判断する。まだ着替えていないことから、先生がすぐには帰って来ないと聞き手の B が思っていることを話し手の A が推測し、それが話し手が把握している情報である、単に「先生がもうすぐ帰ってくる」ということを表明することとは異なるのである²。

(17) A: 你 哪会 穿 甲 按呢? 犹 未 换衫?

あなた どうして 着る に至る こう まだ NEG 着替える

‘あなたは どうして まだ そういう 格好 なんだ? まだ 着替えないの?’

² 実際に B がそういうふうに予測をしているかどうかは別の問題である。ここで重要なのは、話し手が思っている聞き手の予測があるのかどうか、あればどんなものなのか、ということである。

A1: 老师 连鞭 欲 入来 矣 讲!
先生 すぐさま するものだ 入ってくる FP KONG

‘先生はもうすぐ入ってくるから’

A2: #老师 连鞭 欲 入来 矣!

‘先生はもうすぐ入ってくる’

B: 害 矣, 我 毋 知 呢!

大変だ FP 私 NEG 知る FP

‘しまった。私は知らなかったよ’

一方、例(17)の場合“讲”の付いたほうが好ましいことに対し、(18)の場合は、“讲”が付いていないB2のほうがより自然な発話となる。なぜなら、Aの質問の内容から、Aはアインが来るかどうかに対して何の予測もしていないことが明らかであり、聞き手のAが「アインは来ないだろう」と思っているという“讲”を使う前提が満たされていないからである。

(18) A: 阿英 会 来 袂?

アイン AUX 来る NEG.AUX

‘アインは来るか、来ないか’

B1: #伊 会 来 讲。

B2: 伊 会 来。

彼女

‘彼女は来る’

次の2例における“讲”がついた文は、一見両方とも話し手と聞き手にとって既知の情報を語っているように見える。なぜなら、聞き手が「自分の家はお金持ちだ」・「自分は市街地でマンション2軒を購入した」ということを知らないはずがないからである。このことから、聞き手がこれらの情報に相反する状況を思い込んでいることは想定しにくい。ところが、例(19)・(20)は聞き手の認識を是正する“讲”の反例だと考えられず、むしろ裏付けるものである。

(19) 阮 兜 袂 当 恰 恁 兜 比,

私の家 できない と あなたの 家 比べる

恁 兜 遐 好 额 进。

あなたの 家 あんなに 豊かだ KONG

‘ウチはお宅に比べられない。お宅はあんなにお金を持っている。’

(20) 你 无 钱?

あなた ない 金

你 仨 市内 拢 买 两 间 厝 矣 进。

あなた に 市街地 すべて 買う 二つ CL 宅 PF KONG

‘あなたはお金がない？あなたは市街地でマンションを2軒も買った。’

(19)と(20)のような例では、話し手がまず何らかの発話行為を行う。その発話内容を p と記す。その後なぜ自分が p と発話したのかについて、原因や理由として q を提示している。この p と q の間に成り立つ因果関係こそが聞き手にとって予想されていないものである。(21)のように示すことができる。

(21) p , q 进。

a. 話し手が把握している情報：話し手が p と思う／そのように言うのは q からだ。

b. 聞き手が思い込んでいる状況：話し手が p と思う／そのように言うのは q 以外の状況からだ。

換言すれば、(19)・(20)の“讲”の作用域は q ではなく、「 q だからだ」であり、因果関係を明示する接続詞の意味が作用域に含まれている。(19)で説明すると、「ウチはあなたの家と比べられるものではない」(= p)と「あなたの家はとてもお金持ちだ」(= q)という二つの情報が提示され、話し手が p という判断をした理由或いは根拠は q である。それこそが話し手が前から把握しており、聞き手がそれに相反する状況を思い込んでいるように思われる情報である。

ただし注意すべきなのは、 p と q の間の因果関係は内容領域 (content domain) におけるものではなく、認識領域 (epistemic domain) もしくは発話行為領域

施すべきであるのにまだ実施されていないものだからである。しかし、命令文だからと言ってすべてが不満のニュアンスを帯びているわけではない。ということから、“讲”の不満は、動作行為の未実現に由来するものではないことが分かる。

§3.1.1 で述べたように、命令文に内在する情報は；①発話者が「x が y をする・しない」ことを求めていること（x は通常聞き手である）以外に、②発話者はこの求めを妥当なものであると信じていることも含めている。後者をさらに具体化すると、(i)「x が y をする・しない」に実現の必要性があること、(ii) x に「y をする・しない」能力があること、(iii)発話者に「x が y をする・しない」を要求する権限が十分にあることなどが挙げられる。“讲”の不満は上記の (i) ~ (iii) から来ていると考えられる。

(5)を例に取って説明すると、“讲”が付いていない(23)は a 以降の情報が読み取れる。その中に a は当該の命令文の文字通りの情報であるのに対して、b1~b3 はこの命令文が適切な発話行為として認められる前提である。

(23) 共 我 个 包 仔 提 过 来 !

- a. 話し手は聞き手がカバンを持って来ることを求めている。
- b1. 聞き手がカバンを持ってくることを実現する必要がある。
- b2. 聞き手にカバンを持ってくること可以实现できる。
- b3. 話し手に聞き手がカバンを持って来ることを求める権限がある。

(5)の文脈としては、話し手の女性は夫と大喧嘩をするたびに息子に荷物を持って来させて実家に帰るということである。今回も夫婦喧嘩をしていたため、息子としては母親のカバンを持って来てあげる必要があるであろう。それなのに、息子はひたすらそばから見ているだけで動かないでいた。この行動から、話し手は聞き手の息子がカバンを持って来る必要がないだろうと思いつているのではないかと推測する。次の(24)に示すように、話し手の推測に基づく聞き手が思いつている状況は、話し手が把握している状況に相反している。両者のこの相違が“讲”を用いる動機付けとなり、不満というニュアンスもそこから生じるのである。

(24) 共 我 个 包 仔 提 过 来 讲 !

- a. 話し手が把握している情報：聞き手がカバンを持ってくることを実現する必要がある。
- b. 聞き手が思い込んでいる（と話し手が推測する）状況：聞き手はカバンを持ってくることを実現する必要がない。

ところで、「不満」というネガティブな態度を遠慮無く示せる相手は、普通は自分より目下の人や親しい人に限られる。その効果を利用して、命令文の文末に“讲”を敢えて使って、そこに潜む「不満」を利用し、相手に親近感を感じさせることも予測できる。

(25) [病気の同僚を見舞って励まして]

逐家 拢 咧 等 你 转来，
皆 すべて しているところ 待つ あなた 戻ってくる
你 着 赶紧 好起来 讲！
あなた しなくてはならない 速く 快復する KONG

‘みんなはあなたが帰ってくるのを待っている。はやく治るのだ。’

上の例は一見したところ〈不満〉と解釈しにくいだが、“讲”を用いることで聞き手に「私たちは不満などの本音を明かしてもいい仲間だよ」という含意が伝わってくる。

まとめると、「命令文+“讲”」は次のように分析できる。

(26) 命令文 P+讲

- a. 話し手が把握している情報：話し手が P と求めたのは P'だからだ。
- b. 聞き手が思い込んでいる（と話し手が推測する）状況：話し手が P と求めたのは P'以外の状況からだ。

P' = 命令文 P が適切な発話行為として認められる前提

§ 6.3.1 で明らかにしたように、平叙文の文末に用いる“讲”は話し手が提供しようとする情報と聞き手の事前認識とが一致しないことを示す。その延長線上にある

のが、命令文の文末に現れ、〈不満〉のニュアンスを帯びる“讲”である。聞き手との認識上のギャップをクローズアップするという機能を有することが、命令文の文末表現としても“讲”が選ばれる理由となるわけである⁴。

なお高琇玫 2006 や Tseng 2008 などの先行研究では、命令文の文末に“讲”が付くと、催促のニュアンスが生じると述べられているが。それは、動作行為の要請に不満が加えられた副次的な意味だと思われる。実施すべきなのにまだ実施していないことからの不満を帯びながら人に動作行為を求めているのが、動作行為を早急に実施せよという促しのように聞こえるのは言うまでもないことである。

6.3.3 疑問文における生起

結論から先に言うと、疑問文の文末に“讲”を付けるのは、聞き手に答えを求めらるのではなく、話し手の発話意図を聞き手に推測させるためだと考えられる。以下、疑問文のタイプごとに“讲”をつけたことによって生じた意味機能の変化を考察していく。

6.3.3.1 諾否疑問文における生起

ここでの「諾否疑問文」とは polar question を指し、頷いたり首を振ったりすることで答えることができる疑問文である。従って、中国語学で一般に言う「反復疑問文」もそこに含まれている⁵。

①敢～讲?

台湾語の“敢 VP”型疑問文は共通語の“可 VP”型疑問文に近いものとされてい

⁴ 一見したところ、日本語の命令文の文末にも現れる「ってば」も、この“讲”に類似する機能を持つようである。聞き手との認識上のギャップをクローズアップするという点においては、確かに「ってば」と“讲”とが共通しているようにも思われる。しかし「ってば」の場合、前の発話内容を繰り返すこと、すなわち〈引用〉（擬似的でも構わないが）によって聞き手にギャップに対して注意を払わせるのに対し、平叙文の“讲”が「ってば」に訳せないことから分かるように、命令文の“讲”は、必ずしも平叙文の“讲”の連続として、「ってば」のような〈引用〉の過程を経ているわけではない。

⁵ 刘丹青 2008 : 10 に従う。閩南語には共通語のような yes-no question が存在するか否かについてはまだ意見が分かれている。例えば“敢 VP”型疑問文に関して、yes-no question と考えている研究者もいれば、反復疑問文の見方もある（詳しくは陈曼君 2011 を参照）。ただ、このことは本章とあまり関係しないため、ここでは疑問詞疑問文と選択疑問文以外の疑問文という意味で「諾否疑問文」という用語を使うことにする。

る（陈曼君 2011）。例えば、アインに車の運転ができるかどうかを確認する場合は(27)のような疑問文を用いるが、肯定か否定のどちらかの答えに傾くような意図は存在しない。

- (27) 阿英 敢 会晓 开 车?
Q できる 運転する 車
‘アインは車の運転ができるか。’

次の(28)に示すように、例(27)のような、“敢 VP”型疑問文の文末に“讲”を付けることがある。しかし“讲”が付いた場合は、話し手が疑念を持って質問するのではなく、修辞疑問文 (rhetorical question) の形を作り、話し手が意図している答えを了解しているはずの聞き手にその答えを再認識させるのである。聞き手の行動がその意図している答えに相応しくないと話し手が思い、その行動を正した上で相応しい行動を取ることを促すべく、聞き手に再認識させる必要があるということが読み取れる。

- (28) 拜托, 阿英 敢 会晓 开 车 讲?
お願いする アイン Q できる 運転する 車 KONG
你 竟然 叫 伊 开!
あなた 意外なことに CAUS 彼女 運転する
‘勘弁してよ。アインは車の運転ができるか。まさかあなたは彼女に運転させるなんて’
a. 話し手が把握している情報 (=意図している答え) :
アインに車の運転ができない。
b. 聞き手が思い込んでいる (と話し手が推測する) 状況 (=聞き手の行動から推測できること) :アインに車の運転ができる。

例(28)の発話を通じて、話し手は聞き手に「アインが運転できない」ことを再認識させ、彼女に運転させることをやめてもらうように働かけているのである。

以上をまとめると、“敢 VP 讲?”における“讲”は次の3つの機能を有してい

と言える；①修辞疑問文を作る。②話し手が伝えようとする情報が聞き手の認識に一致しないことを表明する。③聞き手の間違えた認識を是正し、話し手の把握している情報に相応しい行動を取ることを促す。命令文と同様に多くの場合、「不満」のニュアンスを帯びている。

②是～NEG 讲？

“敢 VP”型疑問文と同様に、“是～NEG”型疑問文も“讲”を文末に付けることができる。また付いていない場合と付いた場合の差も“敢 VP”と“敢 VP 讲”の場合と平行している。

(29) 你 饭 是 煮好 矣 未？

あなた ご飯 である 作り終える FP NEG

‘あなたはご飯を作り終えたか’

(30) 你 饭 是 煮好 矣 未 讲？

‘あなたはご飯を作り終えたか’

a. 話し手が把握している情報（＝意図している答え）：

ご飯はまだ作り終えていない。

b. 聞き手が思い込んでいる（と話し手が推測する）状況（＝聞き手の行動から推測できること）：

ご飯はもう作り終えている。

(30)は、ご飯を作り終えたかどうかを知っていないなら用いることができない。もうすぐ食事の時間になるのに、まるでご飯の支度が既に済んでいるかのように、聞き手がおしゃべりに夢中で食事を出すのが遅れるのではないかと話し手が判断しているなどの場合において、(30)は最も活躍する。従って、(30)の後に「食事までまだ時間がある」や「ゆっくりしていいよ」など、食事を出すのが遅れても構わないような内容が来ると不自然になる。

(31) 你 饭 是 煮好 矣 未 讲？

#离 食 饭 阁 早。/#免 急， 慢慢仔 来。
まで 食べる ご飯 まだ 早い PROH 急ぐ ゆっくり する
‘食事までまだ早い。/急がなくてもよい。ゆっくりして。’

③ 毋是～讲？

聞き手にある情報について確かめるときに“毋是～？”を使う。例えば、

(32) 你 毋 是 讲 进前 有 人 伫 路里 访问 你？
あなた NEG である 言う この前 いる 人 に 街-LOC 取材する あなた
‘あなたはこの前、街でインタビューされたと言ったのではなかったか’

(32)は話し手が「あなたが先日街でインタビューを受けたと言ったのではなかった」かどうかについて、聞き手に確認しているところである。これに対して、“毋是～？”の文末に“讲”を付けると、「あなたが先日街でインタビューを受けた」ということを聞き手に思い出させることになる。

(33) 你 毋 是 讲 进前 有 人 伫 路里 访问 你 讲？
我 柱才 伫 电视 有 看着 你 呢！
私 さっき に テレビ ある 見る-つく あなた FP
‘あなたはこの間に街でインタビューされたと言ったのではないか。私はさっきテレビであなたを見かけたのよ’

以上のように、談話において、“毋是～讲？”は主要な機能として会話のテーマもしくは「(談話の) 起点」を導入する。よって“讲”で発話が終わることは通常できず、発言権を保持するための方略 (turn-holding device) とも考えられる。一方、(32)は聞き手が話し手の確かめている事項について返答を求めているため、自然に発言権を聞き手に渡す。そして、聞き手が返事さえすれば十分であり、後続の発話を必要としない。

ところで、談話のテーマを導入する機能の実現という点における“毋是～？”と“毋是～讲？”の相違はどこに由来するのであろうか。これも“讲”に答えを求め

ざるを得ない。“毋是～讲？”で導入される事項は話し手と聞き手が二人とも知っているが、直近の会話には現れていない。従って、聞き手の中でそれを忘れていない可能性が高いことが予測される。(33)を例に取れば次のように説明できる。

(34) 你 毋 是 讲 进 前 有 人 伫 路 里 访 问 你 讲？

‘あなたはこの前、街でインタビューされたと言ったのではないか。’

a. 話し手が把握している情報（＝意図している答え）：

聞き手はこの前、街でインタビューされたと言った。

b. 聞き手が思い込んでいる（と話し手が推測する）状況（＝聞き手の行動から推測できること）：

自分はこの前、街でインタビューされたと言っていない。

話し手は“讲”を用い、聞き手が忘れかけている（と思われる）事項を聞き手に気付けさせることによって共有している情報を活性化し、談話の場に取り上げる⁶。特定のテーマを持ち出すことを“讲”で明示する以上、そのテーマをめぐる後続部分が必要にならない。さもなければ、テーマにならず、自己矛盾が生じる。それゆえ、“讲”が“毋是～？”に潜在するテーマ導入機能を実現させるのである。

④是毋是～讲？

“是毋是～？”の文末に“讲”を付けた場合も、例(35)に示すように、やはり修辭疑問文に変更する。

(35) 你 昨 暗 是 毋 是 阁 走 去 跋 筊 矣 讲？

あなた 昨夜 である NEG である また 歩く 行く ギャンブル FP KONG

‘あなたは昨夜またギャンブルをしに行ったね’

a. 話し手が把握している情報：

⁶ この場合の“讲”は確かに高琇玟 2006 の主張する「リマインド」の機能を持っている。電子掲示板で喩えてみよう。談話のテーマとして取り上げ可能な事項はこの電子掲示板のすべての書き込みである。話し手は聞き手と同様にこの電子掲示板のユーザーであると同時に、管理者でもある。書き込みは時間の経過につれてページの下部に沈んでいくが、“讲”の付いた書き込みはページの最上部までに持ち上げられ、管理者（＝話し手）が最も話したいテーマになる。

話し手は聞き手が昨夜にギャンブルをしに行ったことを知っている。

b. 聞き手が思い込んでいる（と話し手が推測する）状況：

話し手は聞き手が昨夜にギャンブルをしに行ったことを知らない。

(35)は聞き手が昨夜ギャンブルをしに行ったかどうかを聞いているものではない。話し手はむしろ聞き手が昨夜ギャンブルをしに行ったに違いないと確信している。(35)の発話の意図は、話し手が事実を知っていることを聞き手に気付かせることにある。

同様の分析であるが、(35)の“讲”の直前まで聞いた聞き手は、自分の昨夜の行動について話し手が知らないだろうと推測している。しかし話し手が把握している情報としては、話し手は聞き手の昨夜の行動を知っているということである。“讲”は両者が食い違っていることを言語化するのである。

話し手が本当に疑問に思っている場合は、文末に“讲”が付かない。例えば、話し手は聞き手の名前の字が分からない場合、疑問文に“讲”を付けると不自然である。(36)の後半の依頼行為から分かるように、話し手が把握している情報と聞き手が思い込んでいる状況とは一致しており、両方とも「話し手は聞き手の名前の字が分からない」と認識している。それが(36)の不自然さの原因である。

(36) #你 的 名 是 毋 是 按呢 写的 讲?

あなた SP 名前 である NEG である このように 書く FP KONG

你 共 我 教 一下!

あなた に 私 教える ちょっと

‘あなたの名前はこう書くのか？ちょっと教えてくれ’

6.3.3.2 選択疑問文における生起

文末に“讲”を付けた選択疑問文も修辞疑問文になる。特定の文脈から切り離せば、(37)と(38)は文末に“讲”がない場合、疑念を感じて質問する疑問文にも成りうる。このことから、“讲”は選択疑問文を修辞疑問文に解釈させることを形式で保証するものだと思われる。

(37) 遮 的 钱 是 欲 来 买 菜 抑 是 买 米 的 讲?
 それ SP 金 である したい 来る 買う 食材 それとも 買う 米 SP KONG
 ‘そのお金は食材を買うためのものか？それともお米を買うためのものか？’

(38) 你 是 来 读 书 抑 是 来 耍 的 讲?
 あなた である 来る 勉強する それとも 来る 遊ぶ SP KONG
 ‘あなたは勉強しに来たのか？それとも遊びに来たのか？’

a. 話し手が把握している情報：

話し手は聞き手がここに来た目的を知っている。

b. 聞き手が思い込んでいる（と話し手が推測する）状況：

話し手は聞き手がここに来た目的を知っていない。

ところで、(36)と同様に、実際の状況に対して本当に疑問に思っている場合は、選択疑問文にも“讲”が付かない。例えば、お茶碗を壊したのは誰なのかを知らない場合は、次のように文末に“讲”を付けると状況的に不自然になる。

(39) 碗 无 代 无 志 哪 会 破 去?
 茶碗 いわれがない どうして 割れる
 #碗 是 你 搥 破 的,
 茶碗 である あなた 打つ-割れる FP
 抑 是 小 弟 搥 破 的 讲?
 それとも 弟 打つ-割れる FP KONG
 ‘なんとも無かったのに、どうしてお茶碗が割れたんだろう？お茶碗はあなたが壊したのか、それとも弟が壊したのか？’

6.3.3.3 疑問詞疑問文における生起

疑問詞疑問文においては、“讲”が付加される前の形が原因・理由について訊ねたものであるか否かによって、“讲”が付けられた後の意味機能の変化が異なるようである。従って、とりあえず原因・理由についての疑問であるかどうかで分けて述べていきたい。

①原因・理由についての疑問以外の疑問の場合

(40)のような原因・理由についての疑問以外の疑問文に“讲”が付くと、これまでと同様に修辞疑問文になる。

(40) 这个物件 成本 偌济 钱? 毋 知 卖 有 利纯 无?
この CL もの コスト いくら 金 NEG 分かる 売る ある 利潤 NEG
‘このものはコストがいくらなのか? 売れば利潤があるのか?’

(41) 这个物件 成本 偌济 钱 进? 你 卖 遮 贵!
あなた 売る こんなに 高い
‘このものはコストがいくらなのか? そんなに高く売るなんて!’

a. 話し手が把握している情報:

話し手はこの品物のコストを知っている。

b. 聞き手が思い込んでいる（と話し手が推測する）状況:

話し手はこの品物のコストを知っていない。→高く定価を付けても良い

(40)の前半は単にコストが分からないので聞いたものである。それに対して、(41)は修辞疑問文であり、話し手が把握しているコストに相応しい値段はより安いものであると聞き手に指摘するのがその発話の意図である。話し手は、聞き手が実際より高く値段を付けていることから、聞き手が「この人（＝話し手）は品物のコストを知らないだろう」と思い込んでいると推測している。聞き手のその状況は決して話し手の把握している情報と一致しない。“讲”はそのギャップを明示するものだと考えられる。「話し手はコストを知っている」ことを聞き手に認識させるとともに、この情報にふさわしい行動——値段をより安くすること——を促すように働きかけるわけである。また例(42)についても、同様の分析ができる。

(42) 子供: 妈, 你 昨昏 哪会 无 共 我 留 菜?
お母さん あなた 昨日 どうして NEG に 私 残す おかず
‘お母さん、昨日どうしておかずを残してくれなかったの?’
母親: 你 昨昏 几点 转来 个 进?
あなた 昨日 何時 帰ってくる PF KONG

要 甲 毋 知影 人 去!

遊ぶ に至る NEG 分かる 人 行く

‘あなたは何時に帰ってきたのか? ぜんぜん姿を見せないほど遊んでいたのに’

a. 話し手が把握している情報:

話し手が聞き手の遅い帰宅時間を知っている。

b. 聞き手が思い込んでいる状況:

話し手が聞き手の遅い帰宅時間を知っていない。

→おかずを残してくれるようお願いしても良い

子供の帰宅時間からすると、おかずを残す必要がないと母親が判断していた。ところが子供の発話から、おかずを残してくれるべきだったと子供が思っていることがわかる。そこで“讲”を用い、話し手が把握している情報と聞き手の認識と異なっていることを表す。

ここまでの疑問文の文末に現れる“讲”の使用条件は、次のようにまとめられる。

(43) 疑問文 Q+讲

a. 話し手が把握している情報: 話し手が Q と聞いたのは Q'からだ。

b. 聞き手が思い込んでいる状況: 話し手が Q と聞いたのは Q'以外の状況からだ。

Q' = 疑問文 Q が修辞疑問文と解釈される前提

②原因・理由についての疑問の場合

原因・理由についての疑問文において、“讲”が文末に付くと、高い程度に対する感嘆になる。例えば、例(44)はラーメンがまずい原因を知りたいわけではなく、単にそのまずさ(の程度)が予想を超えたことを表出する。

(44) 这 面 哪会 遮 歹食 讲?

この ラーメン どうして こんなに まずい KONG

‘このラーメンはなんとまずいのだろう!’

ここで注意を要するのは、述語に程度表現がなければ、文末に“讲”を付けることができないということである。

- (45) a. *伊 哪会 抑 未 转来 讲?
 彼 どうして まだ NEG 帰ってくる KONG
 ‘彼はどうしてまだ帰ってこないのか?’
- b. 伊 哪会 遮 暗 抑 未 转来 讲?
 こんなに 遅い
 ‘もうこんなに遅いのに、彼はまだ帰ってこない!’

例(44)と(45)bにおける“讲”の機能は二つある。一つ目は、“讲”がついた疑問文を修辞疑問文として解釈されるのを形式で保証する機能である。二つ目は、性質・属性の程度に意外性があることを表す機能である。

一見したところ、(44)と(45)bにおける“讲”の二番目の機能は(43)の記述から逸脱しているように思われるかもしれない。ところが、その二番目の機能は、§ 6.3.1.1で述べた話し手側の新発見と極めて接近している。つまり、ある性質・属性に関してある程度に達している原因・理由を問う疑問文の文末に付いた“讲”は、平叙文と疑問文の中間地域に位置づけられるのである。平叙文の文末に現れた場合の話し手側の新発見を表す効果と、原因・理由を問う以外の疑問文の文末に現れた場合、その疑問文を修辞疑問文に解釈するように「合図」を出す機能を、両方とも持っているわけである。この意味で、より典型的な疑問文の文末に“讲”が付けられた効果についても、(43)の記述は依然として有効であろう⁷。

6.3.4 “讲”の文末用法のまとめ：聞き手目当ての「注意喚起」

以上の記述と分析から分かるように、発話の環境において聞き手の思い込んでいる状況に一致しない事態が存在しており、なお且つその存在を聞き手に気づいてもらうことが、平叙文・命令文・疑問文の文末に現れた“讲”に共通している機能で

⁷ 例(45)aに示したように、「ある性質・属性に関してある程度に達している原因・理由」以外の原因・理由についての疑問文には文末の“讲”がそもそも付けられない。

ある。つまり、

- ① 平叙文＋“讲”：当該命題に語られるデキゴトの存在に気づかせる
- ② 命令文＋“讲”：聞き手が当該の動作行為を行わねばならないことに気づかせる
- ③ 疑問文＋“讲”：聞き手が当該の質問の答えを知っていることに気づかせる

ということである。気づかせる対象は何れも平叙文・命令文・疑問文に含まれる情報である（§ 3.1.1 を参照）。それこそが異なる発話意図を有する発話行為タイプにおける“讲”の使用を可能にするのである。したがって、文末助詞の“讲”の中核的な機能は、ある事態を聞き手の思い込みに一致しない事態として提示し、聞き手に注意を払ってもらふことと考えられる。このような聞き手目当ての働きかけを「注意喚起」と呼ぶことができる。

特に注意が必要なのは次の2点である。一つ目は、これまでの先行研究における「話し手の予想を超えること（out of speaker's expectation）」や「予想外（counter-expectation）」の結論と異なり、“讲”の使用は聞き手の思い込みから逸脱している状況の成立が前提とされていることである。話し手にとって意外性の有無は“讲”の生起にかかわらないのである。これと対照になっているのは“讲”が主語と述語の間に現れた場合である。例(2)と(3)に示したように、文中に現れたときは命題が表しているイベント（文脈）によって意外性の読みが強かったり弱かったりする。ただ、そうであっても、その意外性は話し手にとって驚くべきかどうかのことであり、聞き手側が考慮に入っていない。確かに § 6.3.1.1 では話し手側の新発見においても“讲”が用いられるが、それが聞き手にとっても恐らく思いがけないことだろうという話し手の予測が成り立った場合に限っている。二つ目は、命題内容のみならず、命題の間や発話行為と命題内容との論理関係（主に因果関係）が聞き手の思い込みから逸脱した場合においても、“讲”でその逸脱を明示することができるということである。この2点が上海語の文末の“伊讲”との大きな相違点である。

6.4 なぜ“讲”で「注意喚起」できるか

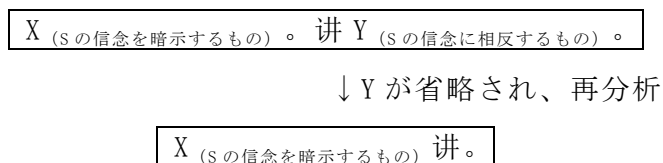
伝達動詞が情報源の〈伝聞〉をマークする現象は、通言語的に観察されている。例(1)に示したように“讲”が文頭に現れた場合にもこういった用法がある。それと同時に、日本語の古文、トルコ語、ブルガリア語、マケドニア語（以上は赤塚・坪本 1998:32 による）、チリの Mapudungun 語（Aikhenvald 2004:200）、現代日本語などにすでに確認されているように、〈伝聞〉の証拠素を借りて意外性(mirativity)といった心的態度を表すのも決して珍しいことではない。このことから、〈伝聞〉の証拠素はしばしば意外性を表現するものになることが分かる。意外性からさらに聞き手目当ての働きかけとして「注意喚起」の機能が発達してきても決して不思議なことではない。

6.4.1 「省略」説 vs. 「移動」説

ところが、発話動詞の“讲”は例(1)のようにもともと節を目的語に取って文頭に現れたのであるが、〈伝聞〉および話し手側の意外性の意味に移行した後も主語と述語の間に挟まれ、文末には現れない。一方、文末に現れた“讲”は、発話動詞としての機能はもとより、〈伝聞〉の情報源を表すことすらないのである。文末の“讲”のみが聞き手側の意外性もしくは「注意喚起」を表す機能を持つことについては、説明が必要であろう。

§ 6.2 でも紹介したように、Chang 1998 では、文頭の“讲”に後続する内容が会話で省略されることによって“讲”が直前の文に後続する文末助詞のように見えて、再分析が起きたと分析されている。それは〈図 1〉のように図式化できる（S は話し手を表す）。この分析により、“讲”が命令文と疑問文の文末にも用いられることについて説明できる。つまり、文末に現れる“讲”は本当なら後続して、話し手の「信念」と異なる内容を表す文の文頭に立つものであり、“讲”の前の文の直接的成分ではないため、前の文についての文タイプの制限を受けないのである。

〈図 1〉 Chang 1998 に主張された文末の“讲”の形成



ところが、既に指摘した“讲”の意味機能についての問題点のほかに、以上の文末の“讲”の成立に関する分析にも疑問点が残されている。即ち、“讲”が（省略された）後続文のみにかかわっているため、“讲”の前の文は話し手の信念さえ表せば、常に文末に“讲”が使用できると予測してしまう。しかし(18)B1はAの返事としてきわめて不自然である。

(46) =(18) A: 阿英 会 来 袂?

‘アインは来るか、来ないか’

B1: #伊 会 来 讲。

B2: 伊 会 来。

‘彼女は来る’

また(45)aの場合、“伊哪会抑未转来”を反語文として解釈できるような文脈を想定しても、文末に“讲”を付けることが難しい。

(47) [玄関に置かれているその人の靴を指さしながら言う]

=(45) a. *伊 哪会 抑 未 转来 讲?

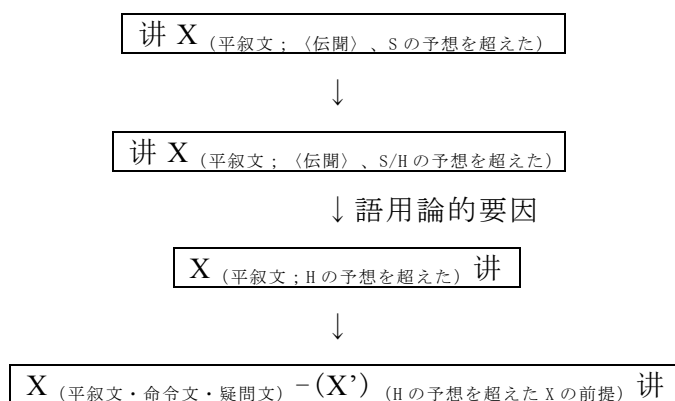
‘彼はどうしてまだ帰ってこないのか?’

つまり、“讲”に接続する文は話し手の信念を表すだけでは、“讲”の使用を許す十分条件にはならない。そのことよりも、聞き手の思い込みを超えたことこそが要求されているのである。

そこで、筆者は Chang 1998 の提案と別に、注意喚起の“讲”は上海語の“伊讲”と同様に“讲 X。”から“X 讲。”へと、主として語用論的な要因によって文末に現れるようになったものと考えている。この語用論的な要因は、限られた時間の中で最も重要で価値のある情報の伝達を保障すべく、それをなるべく先に伝えよう、そして時間の余裕を見て、それほど重要ではない情報を追加していく、という情報提供にあたっての戦略である。情報源と比べると、情報内容自体のほうがより重要であることは言うまでもない。そのため、限られた時間において情報内容を先に発話し、情報源の提示が後回しになるのである。このように、日常の会話で

しばしば X と“讲”とが逆転した順番で現れ、次第に“X 讲”という形式が定着してきたのだと考えられる。更に、中国語において文末という統語的位置には語気助詞が現れるのが一般的である。その結果、この位置に回された“讲”が文頭に置かれた場合のように、依然として〈伝聞〉という情報源を提示するという具体的な意味機能を維持することが困難になる。文法化或いは機能語化の進捗につれて、「意外」に感じうる対象は命題内容に限らなくなり、例(19)(20)のように、命題同士の関連や発話行為の前提などにまで拡張し、遂に平叙文のみに後続するという制限を破って、命令文と疑問文にも用いられるようになった。このことは次のように図式化できる（S は話し手、H は聞き手を表す）。

〈図 2〉 文末の“讲”の形成についての筆者の提案



6.4.2 聞き手側の意外性

その次に答えなければならないのは、話し手の予想を超えたという意味の意外性を表す“伊讲”と同様に、伝達動詞から〈伝聞〉を経て拡張してきた“讲”は、なぜ話し手側の「驚き」ではなく、聞き手の思い込みを超えたことを表し、「注意喚起」の機能を持つようになったのか、という疑問である。

ここで上海語の“伊讲”と台湾語の“讲”の次の統語的な相違点に注意されたい。それは、“伊讲”は文頭と文末という二つの位置にしか現れないのに対して、“讲”はこの二つの位置のほか、文中にも現れるという点である。なお且つ文中に現れた“讲”は既に話し手にとっての「意外性」を表せる。文頭と文中以外の3つ目の位置に現れることができるようになるからには、そこに現れることによって新たな機能を発揮しなければならない。そこで「話し手にとっての意外性」から「聞き手に

とっての意外性」へというシフトの候補が出現する。一方、話し手がわざわざ伝えようとする情報は通常聞き手に知られていないものか、知っていたが忘れていたものに限定されている。そうすると、聞き手にとっての意外性はほんらい無標でよいのである。そこから、「これはあなたにとって意外な情報であろう」と明言することは「これが注意すべきことだ」と、「注意喚起」の機能を果たすことになる。これと比べて、最初から文頭と文末の二つの位置にしか現れない上海語の“伊讲”は、「話し手にとっての意外性」以外の機能を獲得する動機付けが考えにくいため、文末に現れた場合に「話し手にとっての意外性」を表す段階に留まるのである。以上述べたことは、次の表で示すことができる。

〈表1〉 “伊讲” と “讲” の統語的位置と意味解釈

	伊讲	讲
文頭	one says	one says
文中	/	(one ⇌ s/he) I hear → beyond S's expectation
文末	(one ⇌ s/he) I hear → beyond S's expectation	(one ⇌ I) You hear → beyond H's expectation

では、“讲”はなぜ「聞き手にとっての意外性」へシフトすることが可能なのであろうか。§4.5.1で既に述べたように、情報源の中には話し手と聞き手の両方から共有しやすいものもあれば、そうでないものもある。ある情報が既存の知識から逸脱すればするほど、その情報を有効に伝える——即ち相手としての聞き手に信じてもらおう——ために聞き手からも共有できる情報源を添付する必要がある。〈伝聞〉が聞き手からも共有できる情報源であるが、その〈伝聞〉の情報源を聞き手側のもので解釈できれば、聞き手からの共有の可能性がより確実に保証される。それを実現させる手段として、情報の受信者を話し手から聞き手にシフトさせるのである。つまり hearsay には変わりがないものの、I hear から You hear に変更するわけである。この変更に伴い、意外性を感じる主体は話し手から聞き手へ移る。また、受信者＝話し手の場合には、話し手が発信者であり得ないのに対し、受信者＝聞き手の場合は、発信者が話し手と解釈されることも可能であり、本来の伝達動詞

の主語、すなわち伝達行為の主体／発信者が表面に現れない以上、文末の“讲”は誰が発信者なのかを自由に解釈することを許容する。それゆえ、文末の“讲”は I say であると考えても良い。ただし、受信者だけをクローズアップした場合、s/he says も I say も one says に抽象化することができる。

文末の“讲”が I hear より You hear と解釈されることから、命令文と疑問文の文末に現れるときに生じる「不満」や「催促」などのニュアンスについても説明できる。つまり、当該命令文の前提 (P') や当該疑問文が修辞疑問文に解釈される前提 (Q') を、聞き手も共有できる世の中に一般的に言われていることであるかのように聞こえるようにする。こうすると、「他の人もこう言っているから、あなたがそれを分からないはずがない」ということになる。そこに話し手の「不満」が潜む。こういった効果を利用し、聞き手への働きかけをより強くすることが話し手の狙いである。

6.5 本章のまとめ

本章は台湾語の文末の“讲”を中心に考察してきた。“讲”は平叙文にのみならず、命令文・疑問文の文末にも生起し、聞き手の思い込みから逸脱している情報・状況の実存をマークする機能を有していることを確認した。“讲”がこのような機能を獲得した過程については、次のようにまとめられる。

- ① 意外性のある情報であるため、語順を調整し情報源の提示をする“讲”が後回しとなる。
- ② 文中に現れる“讲”と差別化するため、文末の“讲”が表す情報源は話し手側の〈伝聞〉から聞き手側の〈伝聞〉に変わる。
- ③ 従って意外性を感じる主体も話し手から聞き手に変わる。
- ④ 意外性を感じる対象は、命題内容に留まらず、命題の間の因果関係や、発話行為と命題の間の因果関係まで拡張し、その現れとして、文末の“讲”の使用範囲は平叙文から、命令文・疑問文までに広がる。

第7章 〈推論〉と強意の訴えかけ

——上海語の感嘆構文“勦太 AP 噢”を中心に——

第5章と第6章では、〈伝聞〉に関連する形式の意味機能の拡張について考察してきた。本章では〈推論〉を表す証拠表現における意味機能の移行について、上海語の事例を取り上げて考察・分析を行う。同種でない情報源の表出形式が一つの文の中に共起することは可能である。しかし、本章の考察で明らかにするように、どちらがより広いスコープを取るかによって、情報源表出形式の意味機能の拡張を引き起こせるかどうかが決まる。

§7.1の問題提起では、上海語の“勦”の否定副詞の用法と推論を表す用法を概観し、「感嘆」を表す“勦太 AP 噢”の実例を提示する。§7.2で“勦太 AP 噢”の意味機能について精密な記述を行った上で、§7.3で“勦太 AP 噢”の成立に関する先行研究の問題点を指摘する。§7.4と§7.5では、“勦太 AP 噢”が「感嘆」の機能を獲得したことについて、§7.3で提示した本章の仮説を立証する。§7.6は本章のまとめである。

7.1 問題提起

“不”と“要”の合成からなる“勦”[viɔ³⁴]には、上海語において、以下の例(1)・(2)で示すように、「意志・願望の否定」と「制止」を表す用法がある¹。

(1) {我/伊} 勦 吃 大闸蟹。

私/彼 viɔ 食べる 上海蟹

‘私は上海蟹を食べ（たく）ない/彼は上海蟹を食べ（たがら）ない。’

(2) 依 勦 吃 大闸蟹。

あなた viɔ 食べる 上海蟹

‘あなたは上海蟹を食べるな。’

¹ 本章に用いる例文の適合性判断などに協力して頂いた母語話者は60代男性1名、50代男性1名、50代女性1名、40代男性1名、30代女性2名、20代男性2名、20代女性1名の計9名である。そのうち、中学生の時に上海に来てその後定住している40代の男性1名を除き、残りの8名はすべて上海出身・上海育ちである。

例(1)・(2)から分かるように、意志・願望の否定を表す“勳”は動作主の人称によって更に意味解釈が細分化される。

また、“勳”には「推測」を表す用法も存在する。

(3) 早浪廂 勳 落过 雨 了 噢。

朝 VIO 降る-EXP 雨 FP FP

‘朝、雨が降ったんじゃないか。’

さらに、「意志・願望の否定」や「推測」とは別に、上海語の“勳”は“太 AP”（“太”の発音は[tʰəʔ⁵]。APは形容詞句もしくは形容詞句に準じるもの。以下同様）を後ろに取り、さらに文末助詞の“噢”[ɔ]が共起する場合、構造全体として「これ以上 APなものはないよ」あるいは「極めて APだよ」といった「感嘆」を表す用法がある²。

(4) 哀 只 电影 勳 太 好看 噢! 伊 做啥 勿 看 啦?

あの CL 映画 VIO すごく 見て感じがいい FP 彼 なぜ NEG 見る FP

(呉悦 1997: 250³)

‘あの映画はすごく面白いのに。どうして彼は見ないんだい。’

(5) 猗 片 店 勳 太 齷齪 噢, 吃 伊拉 个 物事 有眼

この CL 店 VIO すごく 汚れている FP 食べる 彼ら CL もの ちょっと

吓丝丝 个。

(呉悦 1997: 251)

怖い FP

‘この店はすごく不衛生だから、この店のものを食べるのはちょっと心配だ。’

² 叶盼云 1994:194 は、感嘆に用いる“勳太……噢”には“勳讲太……噢”というヴァリエントが存在するとしている。しかし管見の限りでは、このような記述は他に見当たらない。また、筆者の調査では、感嘆の意味で“勳讲太……噢”を使うことを許容する上海語母語話者はいなかった。ゆえに、本稿は“勳讲太……噢”を考察の外に置く。

³ 共通語の“不”に対応する上海語の否定詞は“勿”と表記されている先行研究もあれば、“不”と表記されているものもある。本研究で引用する例文の漢字表記は引用元に従うが、筆者による作例と独自の調査で得た用例については“不”と表記する。

このような「感嘆」を表す“勦太 AP 噢”は 1990 年代の初頭に上海語に現れた表現であり（史有为 1995）、これまで多くの研究者が言及してきた（詳しくは § 7.3 で取り上げる）が、未だにその成立過程の解明はおろか、意味機能に関する記述も十分ではない。そこで、筆者はこの構造の意味機能をより精密に分析した上で、先行研究の不備を指摘し、証拠性の観点から“勦太 AP 噢”がなぜ「感嘆」に用いられるようになったのか、そのメカニズムを明らかにすることを試みたい。

7.2 「感嘆」を表す“勦太 AP 噢”

管見に入る限りでは、“勦太 AP 噢”に言及した従来の研究は、「感嘆」を表す他の形式との相違点には殆ど触れずに、ただ「ある属性・性質の程度が極めて高いことを表す」と記述して感嘆を表す形式の一つであると認めるに留まっている。

中国語の感嘆文は英語などと異なり、（音声上の要素を除き）特定の形式を取ることによって初めて成立するものではなく、「感嘆」を表すためのいくつかの形式を持っている。それゆえ、ある文を感嘆文と認定する場合、感嘆の語気を伴っているからなのか、それとも何らかのマーカがついているからなのか、判然としないケースがある。だからこそ、「この形式は感嘆を表すものである」といった単純な記述だけでは十全とは言い難い。

本稿は「感嘆」を表す“勦太 AP 噢”について、以下の 2 点が特に注目値することであると考え；①“勦太 AP 噢”は構造全体が既にイディオムになっており、その構成が変更されると文が成立しないか意味が変わってしまう。さらに、この構造は構成素の意味の総和から構造全体の意味を理解することができない。②“勦太 AP 噢”は高い程度に対する「感嘆」を表すだけでなく、聞き手に向けての強い働きかけを同時に含意する。これらの 2 点は何れも“勦太 AP 噢”を「感嘆」を表す構文と分析した先行研究において重要視されていない。

以下、上記 2 点に基づき、この構造の表す「感嘆」義に関して詳細に分析を行う。

7.2.1 イディオムとしての分析

まず、形式面では、“勦太 AP 噢”における“勦”と“噢”は、いずれもこの形

式が成立するのに必要不可欠な要素であることを指摘したい。

次の例から分かるように、“勳”を含まない例(6)・(7)はいずれも母語話者により不適格と判断される。一方、“噢”を削除した場合も、例(8)のように非文になったり、例(9)のように意味が変わったりしてしまう⁴。

(6) *哀 只 电影 太 好看 噢! ……

(7) *穉 片 店 太 齷齪 噢, ……

(8) *哀 只 电影 勳太 好看! ……

(9) #穉 片 店 勳太 齷齪, ……

例(9)の“齷齪(不衛生である)”がマイナス義を表すのに対して、例(8)の“好看”はプラス義の形容詞である。「映画がとても面白い」という、望ましい事態の成立を制止するような文脈は想定し難いので、(8)は成立しないのだと思われる。

次に“勳太 AP 噢”という構造の意味解釈の面から考えてみる。例(8)から既に明らかのように、“太 AP”が特定の文脈において望ましい事態を表す場合、“勳太 AP 噢”は語用論的な理由により「制止」と解釈できない。例(10)はダイエット食品のCMから採ったものであるが、広告という環境と切り離して、“不要太瘦噢”というフレーズだけをインフォーマントに示した場合は、「あまりに痩せすぎてはいけない」という「制止」の解釈が優勢であった⁵。

(10) 碧生源減肥茶, 不要 太 瘦 噢!

碧生源減肥茶 PROH すごく 痩せる FP

‘碧生源減肥茶、すごく痩せるよ/??痩せすぎてはいけませんよ’

しかし、ダイエットを目的にしている消費者からすれば、痩せれば痩せるほど望ましいことであるから、(10)のようなCMという環境に入れば、逆に「制止」の解釈は弱化する。二つの読みがあり、なおかつどちらも商品のダイエット効果が鼓吹さ

⁴ 例(9)は「この店をあまりにも汚くするな」という禁止の解釈しか許さない。

⁵ 例(10)は共通語の事例ではあるが、これは本章が取り扱う上海語の“勳太 AP 噢”の用法が共通語に浸食した結果生じた表現であると考えられる。

れることが、この CM のポイントである。

“勳太 AP 噢”における構成素の意味の総和から得られる自然な解釈は「あまりに AP すぎるな」であり、(4)(5)(10)が実際に表す「すごく AP だよ」という評価（＝「感嘆」）との間には意味上のギャップが存在する。ことに非上海語話者にとっては、この二つの意味を連想して繋げることはそう簡単なことではないだろう。

7.2.2 聞き手目当てのモダリティ

“勳太 AP 噢”は高い程度に対して「感嘆」を表すとともに、聞き手に向けて何らかの強い働きかけをしていると考えられる。その根拠として、まず“勳太 AP(噢)”が連体修飾句内に埋め込めないという事実が挙げられる。高い程度を表し、「感嘆」に用いることができる上海語の“太”[tʰəʔ]と比べれば、“勳太 AP(噢)”のこの特徴は明らかである。小野 2010 は、共通語の“太”の意味機能について、「話し手自身が実際に経験・体験して知り得た性質や属性に対して、話し手自身の主観において、想定できるレベルを越えてしまっている（行き過ぎている）と認定したことを表明する」と指摘している。この点については上海語の“太”でも全く同じことが言える。“太 AP”は話し手の心的態度を表す成分を含みながら、連体修飾句を構成できる。それに対し、“勳太 AP(噢)”は連体修飾句になることができない。

(11) 矚 本 书 太 贵 了!

この CL 本 すごく 高い FP

‘この本はあまりにも高すぎる’

(12) 太 贵 个 书, 我 买 不 起。

すごく 高い SP 本 私 買えない

‘高すぎる本は私には買えない’

(13) *勳 太 贵 个 书, 我 买 不 起。

VIO すごく 高い SP 本 私 買えない

‘すごく高い本は私には買えない’

これは、“勳太 AP 噢”が「程度が極めて高い」という主観的な属性の認定を行う

と同時に、客観的属性を要求する連体修飾成分と相性の悪い聞き手目当てのモダリティを有することの現れだと思われる⁶。

次に、他者としての聞き手を必要とするか否かという点についても、「感嘆」を表す“勳太 AP 噢”は独り言には使用できないといった“太 AP 了”との違いを呈する。仮に話し手が自分自身に言い聞かせるという場合を想定しても、“勳太 AP 噢”の使用は不適切である。一方、“太 AP 了”は話し手のその場における感動などの感情を即時に表出するものであり、聞き手の有無はその使用に影響しない。

それでは、聞き手が存在する場合には、“勳太 AP 噢”は“太 AP 了”と同様の機能を果たすのだろうか。まず質問に対する回答としては、いずれも用いられ、ここに意味上の差はない。

(14) A: 世博会 哪恁?

万博 どう

‘万博はどうだった?’

B1: 世博会 太 灵 了!

万博 すごく 素晴らしい FP

‘万博はとても素晴らしかった’

B2: 世博会 勳太 灵 噢!

‘万博はとても素晴らしかったよ’

ところが、質問に対する回答ではなく、いきなり発話されるとすれば、(14)B1の場合はそれだけで発話を終えることが可能であり、また聞き手としては、それを

⁶ 認識的モダリティを表すものは連体修飾語になりにくいとも考えられる。次は共通語の例であるが、

- (i) 进口 书 {也许/ 可能/ 一定} 比较 贵。
 輸入する 本 かも知れない 可能だ きっと 比較的 に 高い
 ‘輸入書はちょっと高いかもしれない/に決まっている’
- (ii) ?? {也许/可能/一定} 比较 贵 的 进口 书
 ‘ちょっと高いかもしれない/に決まっている輸入書’

下線部を述語とした(i)は自然であるが、連体修飾句にした(ii)は許容度が著しく落ちる。後文で明らかにするように、“勳”は認識的モダリティの意味に直結しやすいため、(13)のような連体修飾句を構成できないと考えることも可能である。

黙々と聞くだけでも良い。それに対して、B2だと発話がそこで終わることはなく、通常はさらに後続の文（台詞）が続かなければならないし、聞き手の方も、話し手の（B2 およびその後が続く）発話内容に対して、通常は同意を表す反応をするのが普通である。一言で言えば、聞き手の存在を前提にする“勳太 AP 噢”は、相手に同意ないし共感を求めるといふ強い働きかけを有している。このことを例(15) [例(4)の再掲] で説明してみよう。

(15) =(4) 哀只电影勳太好看噢！伊做啥勿看啦？

‘あの映画はすごく面白いのに。どうして彼は見ないんだい。’

例(15)は“勳太 AP 噢”を使うことで、聞き手に話し手と同じ感覚を共有させ、「あのすごく面白い映画を見逃す」ことが如何に残念なことかということ強く訴え、まだ見ていない彼（“伊”）に対して聞き手にもその残念な気持ちを共有させようとしているのである。

次の例は、「感嘆」を表す“勳太 AP 噢”という表現形式が中国全土から注目を浴びるきっかけとなったテレビ CM のキャッチフレーズである。

(16) 杉杉西服， 勳 太 潇洒 噢！

杉杉スーツ VIO すごく 格好いい FP

‘杉杉スーツは、すごく格好いいよ’ (テレビCMの書き起こし)

このセリフは言い切りであり、後に発話が続かないので、一見前述したことと合致しないようだが、CM という特殊な環境により、やはり聞き手に対する働きかけが認められる。つまり、CM を見ている消費者に商品を買って求めるようアピールしているのである。そこからも、“勳太 AP 噢”には情報の受け取り手にも同意・共感を示す反応・対応を求める機能が含まれていると考えられる。ここで求められる反応自体は必ずしも言語化されるわけではないが、いずれにせよ聞き手が認定できる内容である。

勿論、“太 AP”も例(4)や(16)のような文脈・環境で用いられれば、聞き手への働きかけが感じられることもある。しかし、それはあくまでも文脈や環境が付与し

B1: 为啥? 大闸蟹 勳 太 好吃 噢!

どうして 上海蟹 VIO すごく 美味しい FP

‘どうして? 上海蟹はすごく美味しいよ’

B2: 为啥? #大闸蟹 太 好吃 了!

‘どうして? 上海蟹はすごく美味しい’

(18)は上海蟹が好きではない聞き手(A)に対して、話し手(B)は不思議に思い、上海蟹はすごく美味しいと主張している場面である。上海蟹が好きではないことから、相手が上海蟹の美味しさをよく分かっていないだろうと認定し、“勳太 AP 噢”を用いて、自分は知っているが相手が知らない情報を強く訴え、相手にそのことを認めさせようとするのである。その意味機能により、むしろ“勳太 AP 噢”の使用によって、相手の発話との関連性が保たれるわけである。一方“太 AP”は聞き手の認知状況を考慮に入れるどころか、聞き手の存在すら前提にしなくても良い表現であるため、(18)B2は文脈関連性が希薄になり唐突な物言いに感じられる。

以上の分析、特に“太 AP”との対照から、“勳太 AP 噢”は「感嘆」を表す場合、(19)のような意味機能を持つと考えられる。

(19)「感嘆」を表す“勳太 AP 噢”は、ある性質や属性の程度が自分の中の想定範囲から逸脱するほど極めて高い、という話し手独自の判断を聞き手に強く訴え、同時にそれに対する同意もしくはそれに準じる何らかの反応(seeking agreement)を求める。

7.3 先行研究

7.3.1 主な考察

その構成要素から見れば、「あまりに AP すぎるなよ」という「制止」の意味を表すはずである“勳太 AP 噢”が「すごく AP だよ」といった「感嘆」に用いられるのは何故か。このことを考察した先行研究は幾つかあるが、それらはすべて“勳太 AP 噢”における“勳”のみに着目している。“勳”の意味役割さえ明らかにできれば、問題が解決すると考えられてきたのである。そこには以下にまとめる二種

類の主張が見られる。

一つ目は、“勦”は「余剰的否定」を表すというものであり、これはつまり、“勦”の意味機能を捨象する考え方である。その根拠として、“勦”の有無が文や句の意味解釈に影響を与えないことが挙げられている。楊庆铎 1996、戴耀晶 2004、张爱玲 2006、杨娟 2009 などはこの立場である。

二つ目は、「制止」の解釈が転じて「感嘆」へ移行したという説で、つまり、“勦”が元来有している否定副詞の意味を活かす考え方である。史有为 1995 は「制止」義が直接「感嘆」義に転じていると分析する立場をとる。呉悦 1997:250 は、“勦太 AP 噢”が「感嘆」に用いられるのは「本来とは逆の意味（原文：反語）による転用」だと見なしている。類似した考え方は顾之民 1996 と王敏 2000 にも見られる。要約すれば、“不要太 A”は“太 A”の成立を前提とするので、「制止」を裏返しに解釈することで「あまりに～すぎるな」→「すごく～だ」という変換を経て「感嘆」を表すようになったのだと分析しているのである。また、张爱玲 2009 は、基準値を超えたことを意味する表現としての“太 AP”があまりにも陳腐なため、それを用いて高い程度を有する属性の AP に言及したくない（あるいは、してほしくない）、ということをも動機として“勦太 AP”の感嘆用法が成立すると分析している。

7.3.2 問題点

以上で挙げた先行研究の指摘にはいずれも疑問に思われる点がある。まず一つ目の主張だが、“勦”は余剰的成分であるとは言えない。§7.2.1 で既に明らかにしたように、“勦”を含まない“太 AP 噢”は感嘆を表さないばかりか、その構造自体が成立しないからである。

次に二つ目の主張について検討したい。「制止」義と「感嘆」義、および“勦太 AP 噢”との間には次頁の〈表1〉に挙げるように、いくつかの文法的・意味的な相違点が存在する。同じ形式でありながら、「制止」の場合と「感嘆」の場合との間にこれだけの相違点が見られるということは、やはり「感嘆」を表す用法が「制止」の用法から直接獲得されたものであるという見方について、再考の余地があると言わざるを得ない。

〈表1〉 “勦太 AP 噢”の「制止」と「感嘆」における相違点

“勦太 AP 噢”		「制止」	「感嘆」
相違点			
A) “噢”の構造上の必要性		必須要素ではない	必須要素である
B) 主語に関する人称制限		二人称のみ	制限なし
C) “太 AP”の 意味的特徴	望ましき	望ましくない性質・属性を 表す形容詞が殆どである	AP 自体が望ましいか否かは 不問である
	現実性	非現実	現実

そもそも“勦～噢”に埋め込まれた形式全体が「感嘆」を表すのは“太”だけであり、それ以外の程度副詞にはその用法が無い。“勦”の「制止」義から「感嘆」義が直接転用されたという捉え方では、この現象を説明できない。更にそれを裏付けるのは、非上海語話者にとって、この「感嘆」を表す“勦太 AP 噢”が容易に理解できないという事実である。もし本当に「本来とは逆の意味（原文：反語）による転用」の結果「感嘆」を表すようになったのであれば、十分な文脈情報が与えられさえすれば、聞き手・読み手が理解できないはずがない。しかし、(16)で挙げたテレビCMのキャッチフレーズは、初めて耳にした時に如何にも新鮮で、文字通りの意味（構成素の意味の総和）に直結し難いと感じられたからこそ、人々にインパクトを与え、次第に流行語にもなったのである。

また、先に紹介した张爱玲 2009 の分析にも疑問点が残る。張氏の考察では、ありきたりな表現（即ち“太 AP”）を用いて表すことを避けたい属性とは、取りも直さず極めて高い程度を有するものであると分析されている。しかし実際に“太”の使用を憚る状況を考えると、張氏の分析とは逆に、属性の程度が“太”の表す程度に遠く及ばない場合も考えられる。張氏の分析では片方の状況だけしか考慮されておらず、十全なものとは言えないだろう。

以上の考察に基づき、本章は § 7.2 で明らかにした「感嘆」を表す“勦太 AP 噢”の意味機能を踏まえ、その用法の成立過程について新たな仮説を提案したい。それは、「感嘆」を表す“勦太 AP 噢”は「制止」用法から直接拡張されたのではなく、(20)に示すように、“勦”が「推測」を表すという中間的段階を経由して初めて成り立つというものである。

(20) 「制止」→「推測」→「感嘆」

ただし、(20)は“勦”自体の意味機能の拡張を表すものではなく、“勦”が用いられる用途の拡大を表すものである。次の§7.4と§7.5では、「制止→推測」と「推測→感嘆」といった経路について、それぞれ詳しく論じていく。

7.4 「制止」から「推測」へ

7.4.1 「推測」

冒頭の例(2)と(3)で既に示したように、“勦”は「制止」の用法と「推測」の用法を両方持っている。“勦”のように、「制止」を表す否定の成分が転じて「推測」を表す現象は、上海語だけではなく、ほかの方言や言語にも見られる。共通語において、“别”は「制止」に用いられる以外に、“否定性猜测”（否定的願望を含む推測）を表すこともある（邵敬敏・罗晓英 2004）。例(21)を参照されたい。さらに、(22)のように“别”の直後に“是”が伴うと、「推測」の意味がより際立つ。また、日本語の「～のではない(か)」における機能の一つは「推測」を表すことである。これと同形の「～のではない」は「制止」を表す。

(21) 哎， 现在 你 是 真 老吴 还是 假 老吴，
 INTERJ いま あなた である 本当 呉さん それとも 偽りの 呉さん
 我 都 吃不准。 别 又 是
 私 もう 断定できない PROH/ひょっとして～だろう また である
 冒充 的 吧！ (CCL)
 成りすます SP FP

‘やれやれ、あなたは今回本当の呉さんなのか、偽物の呉さんなのか、私には断定できない。またなりすましたのでは{なければいいが／ないのだろうか}。’

(22) 别是 她 截听了 电话 来 复仇 的 吧。
 ひょっとして～だろう 彼女 盗み聞く -PERF 電話 来る 復讐する FP FP

(王朔《人莫予毒》)

‘彼女は電話を盗み聞きして復讐しに来たんじゃないのだろうか’

- (23) a. そんなところで遊ぶんじゃない。 (「制止」)
 b. 明日はひょっとしたら雪なんじゃないか。 (「推測」)

意味と形式の一対一対応という同型性 (isomorphism) の観点から、複数の言語において、「制止」と「推測」とが同じようにコーディングされるということは、この二つの概念・発話行為に共通する点があることを反映している。

さて、その共通点とは何だろうか。普通、成立する可能性のない事態をわざわざ想定してそれを制止することはあり得ない。その裏返しとして、制止されることは成立可能な事態でなければならないのである。つまり、「事象が成立可能」という「制止」の場合における背景 (ground) としての前提が、「推測」においては前景 (figure) となるのである。

また、文頭に主語が現れない場合、“勅 VP” が「制止」を表すのか、「推測」を表すのかは、文脈、とりわけ話し手が当該の発話行為を通じて事態をコントロール (「制御」) するために満たされなければならない条件によって決定されることが多い。この条件を「制御可能条件」と名付けておく。具体的に言うと、それは次の3つに下位分類できる；

- ① 「非現実性」：コントロールするために VP は発話時点で非現実の事態でなければならない。
- ② 「(聞き手の) 制止能力」：動作行為の中止や取り消しなどを実際に行うのは聞き手なので、聞き手がそういう能力を持たないと制止も制御も不可能である。
- ③ 「(話し手の) 権限性」：自分が言った通りに聞き手に行動させる権限が話し手にあるかどうか。この権限がなければ、制御は不可能である。

以上の3つの制御可能条件をすべて満たした場合、“勅 VP” は「制止」を表すと解釈され、逆に満たされない条件が多ければ多いほど、「推測」の解釈に傾く。なお、「制止」から「推測」に至る途中には「祈念」「願望」という段階がある。

- (24) a. [+非現実性] [+制止能力] [+権限性] : 「制止」
 (依) 勑 再 迟到 了 噢。
 あなた VIO また 遅刻する FP FP
 ‘二度と遅刻するんじゃないよ’
- b. [+非現実性] [+制止能力] [-権限性] : 「祈念」
 (老天爷, 依) 勑 让 雨 落下来 噢。
 お天道様 あなた VIO CAUS 雨 降る-降りる-来る FP
 ‘お天道様、雨を降らせないでくれ’
- c. [+非現実性] [-制止能力] [-権限性] : 「願望／推測」
 勑 落 雨 噢。
 VIO 降る 雨 FP
 ‘雨が降らないといい / 雨が降るんじゃないか’ (非現実の事態)
- d. [-非現実性] [-制止能力] [-権限性] : 「推測」
 勑 落过 雨 了 噢。
 VIO 降る-EXP 雨 FP FP
 ‘雨が降ったんじゃないか’ (現実の事態)

(24)は制御可能条件の満たされている度合いに基づいて、“勑”が共起する文の意味解釈の変容を示したものである。なお、注目すべき点がもう一つある。(24)のcとdから分かるように、“勑 VP”が「推測」を表す場合のみ、VPは非現実の事態(“落雨”)でも現実の事態(“落过雨了”)でも良いということである。つまり、「推測」に用いる“勑”は現実と非現実という二つの意味領域に跨っているのである。

7.4.2 「危惧」

ところで、“勑”の表す「推測」には、事態の論理的可能性(蓋然性)に対する話し手の判断だけではなく、この事象がもし現実になったら(あるいは現実であったら)「まずい」という危惧の気持ちも含まれている。このことは同じく推測を表す上海語の副詞“像煞”[ziA¹³saʔ⁵](元の意味は「すごく似ている」と比べると、

より明白である。

(25) a. 穉 个人 像煞 是 日本人。

この CL 人 すごく似ている である 日本人

‘この人はどうやら日本人らしい’

b. 穉 个人 勦 是 日本人 噢。

この CL 人 VIO である 日本人 FP

‘この人は日本人なんじゃないか’

(26) A: 穉 个人 是 日本人 就 好 了。

この CL 人 である 日本人 すると よい FP

‘この人は日本人だといいな。’

B1: 穉 个人 像煞 是 日本人。

B2: #穉 个人 勦 是 日本人 噢。

例(25)b は「この人は日本人だ」ということが事実であってほしくないというニュアンスを含む。これに対して、(25)a の“像煞”にはその含意がない。それゆえ、主語にあたる人物が日本人であってほしいと表明する(26)A のレスポンスとして(25)a は極めて自然であるが、(25)b は妥当ではない。

以上のことから、厳密に言えば、「推測」を表す“勦”は最初から認識的モダリティの形式として成立しているものではなく、Lichtenberk 1995 の提唱した「危惧-認識のモダリティ」(apprehensional-epistemic modality) の形式と見なすべきである⁷。

ところで、話し手が事態の成立に対して望ましくないという感情を抱く原因には

⁷ Lichtenberk 1995 は To'aba'ita 語 (ソロモン諸島) の補文標識の *ada* の機能について、“Besides signaling less-than-full certainty on the part of the speaker about the factual status of the proposition, *ada* also signifies that the possible situation is in some way undesirable”と述べ、「危惧-認識のモダリティ」を表すマーカであるとして認定している。例えば、「彼らは食事を終えただろう」という文に、自分の食べる分までもが食べられてしまったことを懸念している意味を含ませるときには、次のように言う。

(i) *Ada keka fanga sui na'a.*
LEST they:SEQ eat COMPL PERF
'They may have finished eating.' (Lichtenberk 1995:295)

以下の二つのレベルがある；

- ① 事実レベル：ある事態の発生によって話し手自身もしくは話し手がシンパシーを寄せる対象に、不利益な影響を与える場合、その事態が事実レベルにおいて望ましくない。例えば、洗濯物を干すつもりの人（この人は話し手自身あるいは話し手がシンパシーを寄せる人物である）にとって雨が降りそうなこと。
- ② 対人レベル：話し手がある予測をし、同様の予測をしていない聞き手に対して敢えてそれを述べるとする。話し手の予測が的中することは、聞き手にとっては予測が外れるということになり、それによって聞き手の体面（ポジティブ・フェイス）を潰してしまう恐れがある⁸。そのようなことは、対人レベルにおいて決して望ましくはない。対人レベルの危惧は言うまでもなく、より文脈依存性が高い。

「危惧」をこの二つのレベルに分けることで、「危惧-認識のモダリティ」を表す形式に由来する認識的モダリティの形式が多くの言語において存在することを説明できる。対人レベルの危惧は話し手が聞き手との関係を損なうことを懸念していることを意味する。よって、対人レベルの危惧はある意味で“politeness(気遣い)”に属する範疇でもある。一方、“politeness”を示す表現は頻繁に使われる中でその丁寧さが次第に摩耗して希薄になる面がある。また、対人レベルの危惧は高い文脈依存性を持つため、聞き手・読み手がその場で必ずしもそれを感じ取れないこともある。その結果、危惧-認識のモダリティはその危惧の一面が段々と消え、純粋な認識的モダリティと解釈されていくわけである。本来「制止」を表す“勦”は、まさにこの経路に沿って「推測」を表せるようになったのである。

以上の分析をまとめると、“勦”の表せる意味領域は「制止」から「危惧∧可能性(=推測)」へ、さらに「推測」へと広まってきたと考えられる。

⁸ 個人によって承認された望ましい自己像を維持することへの欲求のことである。Goffman 1967 を参照。

7.4.3 “勦”で表す「推測」における証拠性および確信度

“勦”で表す「推測」は“像煞”には含まれない成立可能な事態に対する危惧の意味合いを持っているということ以外に、その「推測」が基づいた根拠においても“像煞”などと異なる点がある。次の2例から分かるように、“勦”で表す「推測」は、(27)のような判断の根拠が明示された場合、または(28)a・bのような〈直接経験〉・〈伝聞〉といった情報源による判断の表明には用いられない。

(27) 照 安排, 伊 {像煞/ *勦} 勿 来 了 噢。

従う 手筈 彼 すごく似ている VIO NEG 来る FP FP

‘手筈によれば、彼は来ないことになったようだ’

(28) a. 我 刚刚 吃过 了,

私 さっき 食べる-EXP FP

甭 只 橘子 {像煞/ *勦} 有眼 坏脱 了 噢。

この CL ミカン すごく似ている VIO ちょっと 腐る FP FP

‘さっき味見をしたけど、このミカンはちょっと腐っているかもしれない’

b. 我 听说 讲, 甭 只 橘子 {像煞/*勦} 有眼 坏脱 了 噢。

私 伝え聞く COMP

‘聞くとところによると、このミカンはちょっと腐っているかもしれない’

“勦”は決定的な証拠を持たず、あくまでも話し手がふっと思いついたある可能性を聞き手に提示する場合に用いられる。よって推測された事態の真実らしさに対する話し手の確信度が決して高くない。“勦”が「危惧-認識のモダリティ」を表すのに相応しいのはまさにそのためであろう。前述したように、「危惧-認識のモダリティ」が「認識的モダリティ」へ変容するのは、対人レベルの危惧を表す段階を経なければならない。一方、対人レベルの危惧というのは、意見の食い違いによって相手との関係を損なうことに対する心配である。従って、動かぬ証拠を持っていることを言語化し、自分の判断が間違いないことを強化するのは明らかに矛盾する行為になる。「対人レベルの危惧」と「高い確信度の含意」とは互いに相容れない概念である。

7.4.4 「推測」を表す“勦”と「制止」を表す“勦”との相違点

次の〈表2〉から分かるように、「推測」を表す“勦”と「制止」を表す“勦”とは振る舞いが同じわけではない。

〈表2〉 “勦 X 噢”の「制止」と「推測」における相違点

意味機能		「制止」	「推測」
勦 X (噢)			
A) “噢”の構造上の必要性		必須要素ではない	必須要素である
B) 主語に関する人称制限		二人称のみ	制限なし
C) Xの意味的特徴	望ましさ	事実レベルの危惧	事実レベルの危惧／ 対人レベルの危惧
	現実性	非現実	非現実／現実

しかし、これらの相違点は“勦”が「制止」から「推測」へと拡張することを否定するものではない。とりわけ特筆に値するのは次の2点である。一つ目は、「推測」の場合、文末語気助詞の“噢”が義務的に共起することである。“噢”は、(29)で示すように相手によく言い聞かせるような語気や相手の同意を求める語気を表したり、事実を強調したりする働きがある（呉悦 1997：250）。

(29) a. 自家 当心 眼 噢!

自分 気を付ける CL FP

‘自分で気を付けろよ’

b. 依 勿要 瞎讲, 我 既没 看到 噢!

あなた PROH デタラメを言う 私 NEG 見る FP

‘俺は見なかったってば!’

(呉悦 1997:250)

(29)a のようなよく言い聞かせて同意を求める語気にしろ、b のような事実を強調する働きにしろ、“噢”はいずれも話し手の中で認定済みの事実を聞き手に提示し、それを認めさせた上で肯定的な対応を求めるという機能を有していると考えられる。「命令」（「制止」を含む）の場合や「（通常の）推測」の場合でも、“噢”

は意味的に馴染むが文法的には必要ではない。しかし、「制止」に由来する「推測」を表す表現は、必ずこのような文末助詞の類もしくは疑問の語気と共起するようである。文末に“吧”が現れた例(21)・(22)から分かるように、共通語の“別(是)”においても同様の結論を得ることができる。ちなみに、“噢”や“吧”の類が「制止」の“勦”・“別”と共起しなくても良いのに対し、「推測」の“勦”・“別是”と必ず共起するのはなぜであろうか。本研究は次のように考えている。「聞き手目当て」である「制止」と対照的に、「推測」の場合は聞き手を必要としない。従って「推測」を表す“勦”は「制止」を表すときに有している「聞き手目当て」の機能をそのまま受け継いでいない。一方、「制止」を表した名残のためか、「推測」を表す“勦”は§7.2.2に述べたように、聞き手目当ての文脈に用いられるものである。そこで聞き手目当ての機能を再び果たすために何らかの形式を補わなければならない。聞き手の存在を前提にしており、「制止」の場合において必要とされない“噢”をはじめとする助詞群は、このような背景のもとで、義務的な生起を負わされるのである。また、語気助詞の代わりに疑問の語気があれば、それでも良い、ということについても一貫して説明ができる。つまり、疑問という発話行為も通常聞き手目当てのものだからである。

二つ目に、「推測」の場合は主語の人称制限がないのに対して、「制止」の場合は二人称に限られているが、二人称主語なら必ず「制止」になるわけではないという点である。先に述べたように「制止」と「推測」のどちらの解釈になるかを大きく左右するのは「制御可能条件」である。この観点から見れば、人称制限の有無については以下のように説明できる。“勦”の表す「推測」が「制止」の延長線上にあるという前提を踏まえれば、両者は実際に同じく(30)の深層構造を持つと想定できる。

(30) PRO [勦 [NP VP]]

つまり、話し手（通常、音形を持たない PRO）は“勦”を用いて [NP+VP] で表される事態の成立を阻む。そして表層構造では、この構造内で VP（形容詞句も広い意味で VP として捉える）に対する主語（往々にして、動作・行為の実行者や属性の持ち主）にあたる NP が外に移動（raising）するか、あるいは“勦”が動詞に

より近い位置に移動 (lowering) することになる。

自分の動作行為なら自制可能なので、わざわざ発話することによって自分自身に何かの行動をやめさせることはない。従って NP が一人称の場合、(30)は「制止」として解釈できない。また、発話行為によって誰かに働きかけるためには、その発話内容がその誰かの耳に即時に届かなければならない。その誰かが発話の領域内にいない第三者の場合、話し手は実質的に制御不可能な状況にある。従って、NP が三人称の場合においても、(30)は「制止」として解釈するのは困難であり、「推測」の意味に傾くのである。

また、VP の表す意味が状態・属性の度合いを増すほど、話し手の制御可能性は低くなる。例えば、話し手は聞き手の「化粧 (≒動作行為)」に対してある程度の影響を与えることができるとしても、聞き手の「生れ付きの容貌 (≒状態・属性)」を制御することは不可能である。それゆえ、たとえ NP が二人称であっても、VP が状態・属性を表すのであれば、(30)は「制止」より「推測」と解釈される方が自然である。

7.5 「推測」から「感嘆」へ

前出の〈表1〉と〈表2〉に基づいて〈表3〉を作成すれば、「推測」に用いる“勦”と「感嘆」に用いる“勦”とが軌を一にしていることが分かる。

〈表3〉 “勦 X 噢”の「推測」と「感嘆」における比較

意味機能		「推測」	「感嘆」
勦 X 噢			
A) “噢”の構造上の必要性		必須要素である	
B) 主語に関する人称制限		制限なし	
C) Xの意味的特徴	望ましさ	事実レベルの危惧／ 対人レベルの危惧	(対人レベルの危惧) ⁹
	現実性	非現実／現実	現実

⁹ Xが望ましいかどうかということ自体は問わないが、Xだということを主張することは聞き手への押しかけになりかねないため、対人レベルにおいて危惧されるべき事態を指す。

「推測」という中間段階の導入によって、「感嘆」と「制止」との間に存在するギャップを埋めることが可能である。

では、 $X=AP$ で“太”が共起する“勦太 AP 噢”はどのようにして「推測」を表さないのだろうか。それには“勦”と“太”の両方の性質が起因していると考えられる。(31)bが示すように、“太 AP”が「推測」を表す“像煞～”句に埋め込まれても「感嘆」は表さない。

(31) a. 秤搭 个 蟹 勦 太 便宜 噢!

ここ SP カニ VIO すごく 安い FP

‘この蟹はなんて安いんだろう’

b. 秤搭 个 蟹 像煞 太 便宜。

ここ SP カニ すごく似ている すごく 安い

‘この蟹は安すぎるようだ’

まず“太”の性格から見てみよう。“太”は〈直接経験〉から由来して、動かぬ証拠を有する属性の想定外に高い程度を言語化するものである（小野 2010 および § 3.4.1.1 を参照）。一方、§ 7.4.3 で述べたように、明確な根拠の提示に抵抗する“勦”は推測を表すときに確信度が低い。それに比べて、本来「とっても似ている」を意味する“像煞”は確信度が高い。そうすると、(31)a は「構造の内側（＝太）は確信度が高で、外側（＝勦）は低」（「内高外低」）となる。つまり確信度の低いものが高いものより広い作用域を取るわけである。一方(31)b は「内側も外側も確信度高」ということになる。

同じ（あるいは同種の）情報源に基づく話者の主観的判断を含意する成分が同一文中に複数現れる場合、通常は確信度の高い順で命題の内側から外側へと並べられる。つまり「内高外低」である。例えば、共通語の副詞“一定”（§ 3.4.2.2 を参照）と文末語気助詞の“吧”（§ 3.4.2.3 を参照）はいずれも〈推測〉に由来した情報であることを表す成分であるが、確信度においては“一定”のほうが“吧”より高いという関係が成り立つ。例(32)における“一定”と“吧”の統語的配置は、まさに「内高外低」に合致している。

(32) [他 一定 会 来 的] 吧。

彼 きっと するものだ 来る FP FP

‘彼はきっと来るでしょう’

それに相反する配置になる“*一定也许”“*必然或许”などは成立しない¹⁰。“勳太 AP 噢”も「内高外低」であり、上述の規則通りのように思われるが、しかし内実は異なる。既に述べたように、“太”の使用が〈直接経験〉を前提にしているのに対し、“勳”は確信度の低い「推測」を示すものである。即ち、“太”と“勳”とは同種の情報ソースに基づくものではない。その場合、理論的には「内高外低」の語順は不合理なものとなる。なぜならば、確固たる確信や直接証拠に基づく内容を、確信度のより低い伝達手段を用いて表明することは事実上考え難いからである。従って、もしも同一（同種）の情報源に基づいておらず、かつ「内高外低」の語順

¹⁰ 言うまでもないが、次の自然な用例から分かるように、これらの形式が不適格になるのは、同じく〈推測〉を表す副詞が複数並べていることに起因するものではない。

- (i) 他们 可以 通过 变更 审判 地点、向 法院 提出 各种
 彼ら できる 通して 変更する 裁判 場所 に 裁判所 提出する 各種の
 申請、上诉 等等 办法，也许 一定 能够 推迟 审判，[……]
 申請 上訴 など 方法 かもしれない きっと できる 遅らせる 判決

(CCL: 《美国悲剧》)

‘彼らは裁判の場所を変更したり、各種の申請や上訴を申し立てたりするなどの方法を通して、きっと裁判官を遅らせることができるだろう’

- (ii) 太炎先生 赞赏 的“以愚自处”的 另 一面，或许 必然是 其
 太炎先生 賛称する SP 以愚自处 SP 別の 一面 或いは 必ず である 彼
 大 不以为然 的“不 肯 轻 著 书”。(CCL:读书)
 とても そうとは思わない SP NEG したい 軽々しく 書く 本
 ‘太炎先生が賛賞していた「以愚自处」のもう一つの側面は、或いは先生が
 とても正しいと思わない「軽々しく著書がしたくない」ということに違
ないだろう’

になっている文であれば、多くの場合、その文は文法的に成立しないか、あるいは外側に位置する（確信度の低い）伝達手段の方に意味・機能的変化が生じる。共通語の例を挙げよう。

(33) a. ??今天 怕是 [太 冷 了]。 (内高外低)

今日 懸念する とても 寒い FP

b. 今天 恐怕 [太 冷 了]。 (内高外低)

今日 恐らく とても 寒い FP

‘今日は寒すぎるかもしれない’

「内高外低」というパターンの(33)a・bは、同種の情報源に基づく発話ではない。「太冷了」は「直接証拠」に基づくものであり、「怕是」「恐怕」はともに単なる推測を表す (§ 3.4.2.1 を参照)。それゆえ(33)aは不自然さが感じられ文が成立しないが、一方(33)bは許容度が高い¹¹。後者における「恐怕」は、「推測」よりはむしろ対人的な機能である“politeness”を示すマーカーに変容して、文を成立させているのだと考えられる。これと同様に、「勑太 AP 噢」も「内高外低」のパターンに属すが、確信度の低い「推測」を表す“勑”の「推測」義が(33)bにおける「恐怕」と同様に抑制され、その結果聞き手の反応を強く要求しながら主観的判断の提示をするといった対人的な機能だけが残されるようになったのである。逆に言えば、「勑太 AP 噢」が(33)aのように非文にならず、また、そもそも相性が良いとは言えない〈推測〉を表す“勑”と直接経験を含意する“太”とが敢えて共起するのは、〈推測〉を表す“勑”が有する「完全に言い切らずに、ある程度は聞き手にも最終判断を委ねる」という対人的機能が、「勑太 AP 噢」の表す「感嘆」義の表出に必要な点からという点に求められる。つまり、§ 7.2.2 に述べたように“太 AP (了)”はデキゴトに対する話し手の一方的な感嘆であり、必ずしも同意をはじめとする聞き手の反応を期待しない。それに対し、聞き手にも同意してもらおうといった対人的

¹¹ § 3.4.2.1 で提示したように、CCL コーパスにおいては“怕是+太”の組み合わせは2例しかなかった。仮に(33)aを“他穿得非常厚”（彼は厚着している）といった文脈に入れば、(33)aの許容度が著しく上がる。しかしそれは、この場合の“怕是”で表された推論は“太冷了”に対するものではなく、“穿得非常厚是因为太冷了”のような原因の究明に伴った推論だからである (§ 3.4.1.1 の注 10 を参照)。また、例(33)bの許容度に関しては、若干ではあるが不成立というインフォーマントもいた。

な機能を実現させるために、聞き手からも共有可能な情報源である〈推論〉を表す“勦”が登場するわけである。コト目当ての“太”にヒト目当ての“勦”を加え、ある属性・性質が高い程度に達していることを述べると共に、それを聞き手に共有させるという一石二鳥の表現機能を果たすことになる。

以上が、“勦 X 噢”が“太”と共起した際に、〈推測〉ではなく「感嘆」を表すことになるメカニズムである。

7.6 本章のまとめ

以上、上海語の“勦太 AP 噢”が〈感嘆〉を表すようになった経路について考察してきた。ある性質や属性の程度が自分の中の想定範囲から逸脱するほど高い、という話し手独自の判断を聞き手に強く訴え、同時に同意・共感を求める、というのは“勦太 AP 噢”が他の感嘆表現と異なり、独自に有する意味機能である。

本章は、従来の諸説を検討した上で、“勦”が〈制止〉から〈推測〉という中間段階を経て〈感嘆〉に用いられるようになったという経路を新たに提案した。〈制止〉を表す成分が〈推測〉の表現に転じることは他にも見られる現象であるが、それが〈感嘆〉に用いられるのは、やはり“勦”と“太”それぞれの機能の合成によるものである。〈推測〉の“勦”は低い確信度を表すため、それが修飾する命題内部に確信度の高い程度副詞の“太”フレーズが埋め込まれると、“太”の意味機能に影響されて〈推測〉の解釈が抑止され、“勦”の「聞き手目当てのモダリティ」のみが前景化する。その結果、構造全体が「対人モダリティを含意した感嘆」を表すことになるのである。

これまでの事例研究からも分かるように、こういった意味機能の変化は特殊なものではない。より共有しやすい情報源である〈伝聞〉または〈推論〉を表す形式の作用域に〈直接経験〉が埋め込まれ、文が依然として成立する場合は、〈伝聞〉・〈推論〉の形式は例外なく情報源表出の機能から逸脱し、専ら「情報源の共有」から広い意味での「(その情報源から来たかのような)情報の共有」といった対人的な機能を担うようになるのである。

第8章 内在する状態の表現から見た中国語の証拠性

第4章から第7章までは、情報源表出形式の使用とその拡張をめぐって4つの事例を取り上げた。§3.1.4などに述べたように、情報源の表出は情報源を第一義とする形式——証拠素と証拠構造を含む——によって行われるのに限らず、特定の情報源を含意する証拠策でも可能である。本章は情報源の提示を最も求めるものだと思われる、他者に内在する状態に言及するにあたって、情報源の表出のしかたを切り口にして、証拠策の使用について考察する。

本章の構成は次のとおりである。§8.1の問題提起では「内在する状態」を定義し、内在する状態の主体によって異なる形式で言及するかどうかは言語によって違うことを示す。§8.2では連用修飾語において内在する状態の表現の仕方についての先行研究を取り上げ、方法論などにおける改善すべきところを指摘する。§8.3では本章の調査結果であり、日中対照コーパスから見られる連用修飾語における内在する状態の表し方およびその頻度をタイプごとに提示する。§8.4では、前節の調査結果に基づいてディスカッションをし、他者の内在する状態を表すときに〈直接経験〉・〈推論〉・〈知覚〉の情報源が表出されることを比較分析して、情報源が違っていることで各タイプ間に見られる意味機能上の相違が説明できることを示す。§8.5では、本章の内容をまとめた上で、情報源表出形式の「整合度」と情報内部における生起の難易度との間に正の相関が認められる考え方をあわせて述べる。

8.1 問題提起

〈直接経験〉で知り得ない情報と言えば、他者に内在する状態（internal state, 以下「内在的状态」と言う）が最も典型的と言える。内在的状态とは、温感、疲労感、痛痒感、味覚・嗅覚、飢飽感、快感、悲喜感など、人間の感覚・認知・欲求および身体的状態に基づく感覚や感情のことである。

内在的状态は心理的状态と重なる部分があるが、内在的状态を表すもの（もしくは形容詞などの基本形）しか入らない“我感到_____”というフレームを用いて、内

在的状态を表す表現であるか否かが判別できる¹。例えば、“高兴（嬉しい・嬉しがる）”も“镇定（冷静沈着だ）”も、ともに心理的状态を表すが、(1)aは問題なく成立するのに対し、bは極めて座りが悪いことから、“镇定”は本研究が定める内在的状态を表す形式ではないと認定できる²。

(1) a. 我 感到 高兴

私 感じる 嬉しい

‘私は嬉しく思う⇨私は嬉しい’

b.??我 感到 镇定

私 感じる 落ち着く

‘私は落ち着いていると思う⇨誰かが落ち着いていると私は思う’

ヒトの内在的状态に言及する際に、形の上で話し手自身の内在的状态と話し手以外のそれとを義務的に区別する言語とそうでない言語がある。例えば、日本語は前者の例である。話し手自身の内在的状态は形容詞の基本形で語るのに対して、他者の内在的状态を述べる場合は通常、形容詞の語幹に接尾辞の「ガル」が付き、形容詞句を動詞句に変換させる。例(2)に示すように、この「ガル」は一人称主語とは共起しない。一方、内在的状态を表す形容詞の基本形は三人称主語とは共起しない³。つまり、「ガル」と内在的状态を表す形容詞の基本形において、主語（内在的状态の主体）に関して人称制限があるということである。

(2) a. (私は) 暑い。

b.*私は暑がっている。

c.*彼は暑い。

d. (彼は) 暑がっている。

¹ 吕叔湘主編 1999:216にも記述されたように、“感到”の目的語となる形容詞はふつう体や心で感じるもの（視覚・聴覚などは含まない）に限られるので、“我感到_____”の「フィルター」をかけて単なる心理的態度を表すものが排除できる。

² “我感到高高兴兴”は自然な言い方ではないが、“高高兴兴”の基本形である“高兴”がこのテストにパスするため、“高高兴兴”も内在的状态を表していると考えられる。

³ 登場人物の心理を描写する小説の中で、三人称主語でも(2)cのように内在的状态を表す形容詞の基本形と共起することがある。

また、連用修飾語において内在的状态に言及するときにも、類似する人称の制限が観察される。語尾の「ソウダ」の連用形である「ソウニ」を形容詞の語幹に付けた形式は三人称主語の内在的状态を表すが、一人称主語とは共起できない。それに対して、形容詞が平叙文において直接に連用修飾として用いられるのは一人称主語の場合のみである。例えば、田中先生が「悲しい」の主体である場合、全く自然な(3)a と比べて c のほうはかなり不自然である。一方、「私」が「悲しい」の主体である場合、3(d)が問題ないのに対して b が許容されない。⁴

- (3) a. 田中先生は（一人で）悲しそうに立っていた。
 b.*私は（一人で）悲しそうに立っていた。
 c.??田中先生は（一人で）悲しく立っていた。
 d. 私は（一人で）悲しく立っていた。

以上から分かるように、これらの文における「ガル」と「ソウニ」の働きは、他者の内在的状态と話し手自身の内在的状态を形式の上で区別することにあるのである。この区別は、内在的状态の主体によって、情報——即ち内在的状态——の情報源が異なるといった認識論に起因すると考えられる。つまり、話し手自身の内在的状态は〈直接経験〉から知り得たものであるため、何らかのマーカ―を付ける必要がない。これに対して、他者の内在的状态は〈直接経験〉で知ることができず、ふつう外部からの観察に基づいて推論などを通じて間接的に知り得るものであるため、何らかのマーカ―を付けて表示するのである。

ところが、例(2)a・d と(3)a・d を中国語に訳すと(4)(5)になるが。これらの文だ

⁴ 「ソウダ」の意味機能については、益岡・田窪 1992:130 が「ある対象が呈している様態を表す」、「動的述語に接続した場合、動的事態の生起が予想されるような外的兆候が見られることを表す」と指摘している。なお次の2点を補足したい。伝聞を表す助動詞の「ソウダ」は本章の射程外であることをまず断りたい。また、「ソウニ」が付いているからといって、必ずしも第三者だとは限らない。例えば、「偉そうに喋っている」という表現については、「*偉く喋っている」という言い方自体がそもそも存在しない。従って当然、人称によって違う形を取るということが言えない。ところが中国語に、この「偉(そうに)」と意味的に対応しているのは“傲慢”などであり、後者は前述の“镇定”と類似し、“我感到_____”というフレームに入らない。よって、内在的状态について言及する表現ではないのである。このことから、「偉そうに(喋っている)」のように「～ソウニ」でしか連用修飾を構成できない形容詞も本章の考察対象には入れない。

けを見れば、中国語は内在的状态の主体によって、さらに言えば情報としての内在的状态の情報源によって、日本語ほど、特定の内在的状态を意味する形式で「自」-「他」もしくは「直接経験」-「非直接経験」を区別しないように見える。

(4) a. 我 很 热。

私 とても 暑い

b. 他 很 热。

彼 とても 暑い

(5) a. 田中老师（一 个 人）难过 地 站着。

田中先生 一つ CL 人 悲しい SP 立つ-PROG

b. 我（一 个人）难过 地 站着。

私 一つ CL 人 悲しい SP 立つ-PROG

しかし、それにより、中国語は形の上で自分の内在的状态と他者の内在的状态を常に同様視していると結論付けても良いだろうか。本章では、先行研究の考察と分析を検討しながら、ある動作行為を伴う他者の内在的状态が中国語でどう表現されるかを考察し、情報源の表出という証拠性の観点から内在的状态の言及の仕方、ならびに「中国語は内在的状态の表現形式を、主体の違いによって区別をするか否か」について再検討する。

8.2 先行研究

筆者はかつて上記と同様の目的で、日中対照コーパス（北京日本学研究中心 2003 年版）で、「形容詞語幹-ソウニ+動詞」の用例を検索し、そこで得た用例の中国語訳を考察した（李佳樑 2009）⁵。「形容詞語幹-ソウニ+動詞」で検索した理由は、この表現フレームはほとんど三人称の内在的状态を表すこと、内在的状态の表現が文の述語動詞の連用修飾語という命題の内部に位置すること、という 2 点が挙

⁵ 動詞が「する」「なる」「見える」「聞こえる」「見せる」「思う」などの「形容詞語幹-ソウニ+動詞」は除外した。なぜなら、これらの動詞は典型的な動作行為を表すものではなく、また、その前の「形容詞語幹-ソウニ」は主体の動作行為を伴う内在的状态を表すものでもなく、中国語に訳す場合は動詞の目的語になるからである。

げられる。対応する中国語の表現を考察することによって、もし何らかの傾向が認められれば、中国語における情報源の表出にかかわるストラテジーをある程度見出すことが可能になるのみならず、証拠性が命題の内部においてどう表出されるかについても窺えると考えたからである。

〈表1〉「形容詞語幹-ソウニ+動詞」に対応する中国語の表現のタイプ

タイプ	連用 修飾語	述語	様態補 語	連体 修飾語	意識	訳出 無し	合計
用例数	261	60	19	27	4	4	375
%	69.6	16.0	5.1	7.2	1.1	1.1	100

この調査では、「形容詞語幹-ソウニ+動詞」が375件検出され、それらの用例における「形容詞語幹-ソウニ」に対応した中国語表現を、統語的位置などによって〈表1〉に示すように整理した。そのうち、対応する中国語訳では日本語と同様に連用修飾語に訳されているものは261件あり、約7割を占めている。ところが、これらの連用修飾語のなかで情報源を明言しているのは次の1例だけであった。

- (6) a. 喜助は嬉しそうに忠平の顔を見ている (『越前竹人形』)
 b. 喜助 显得 很 高兴 地 望着 忠平 (《越前竹人形》)
 喜助 ~の様相を呈する とても 嬉しい SP 見る-PROG 忠平

それに対し、“显得(～の様相を呈する)”の類の形式が含まれず、「ソウニ」の直前の形容詞(語幹)が連用修飾語に訳されたものは、更に「裸」・「比況」・「程度副詞による修飾」という3種類に分けられた⁶。それぞれ、次の(7)~(9)を参照されたい。以上の3類および(6)の用例数と比率を示すと、以下の〈表2〉になる。

- (7) a. それから愉快そうに一つ笑っておいて[……] (『あした来る人』)

⁶ 「裸」とは副詞や様態補語が共起せず、形容詞が裸で連用修飾語になるものを指す。「比況」とは“好像”などに形容詞が続いて、全体が連用修飾語になるものを指す。また「程度副詞による修飾」とは、程度副詞の修飾を伴った形容詞句が連用修飾語になるものを指す。

- b. 他 高兴 地 笑笑 [……] (《情系明天》)
 彼 嬉しい SP ちょっと笑う
- (8) a. しんからのんきそうに笑っておっしゃる (『斜陽』)
 b. 她 好像 满不在乎 地 笑着 说 (《斜阳》)
 彼女 まるで~のよう 全く気に留めない SP 笑う-PROG 言う
- (9) a. ナオミは [……] 擦ったそうに私の顔を覗き込んで (『痴人の愛』)
 b. 纳奥米 [……] 有些 不好意思 地 望着 我 (《痴人之爱》)
 ナオミ 少し 恥ずかしい SP 遠くを見る-PROG 私

〈表2〉連用修飾語に訳されたものの分類

連用修飾語に 訳されたもの	裸	比況	程度副詞に よる修飾	情報源の 明示	合計
用例数	213	39	8	1	261
%	81.6	14.9	3.1	0.4	100

情報源を明示するものが全体の 0.4%しか占めていないことから、筆者（李佳樑 2009）は中国語において、連用修飾語の内部には情報源表出形式が現れにくいと結論した。同時に、現れにくい原因として、中国語において証拠性は文法化の度合いが低く、命題の外側にしか生起しないモダリティの成分に近いからなのではないかという仮説を提示した⁷。

しかしながら、あらためて検討すると、上で述べてきた考察と分析には、いくつかの不備が指摘できる。一つ目は、方法論として、日本語の原文に対応した中国語訳において、翻訳調など、統計の結果に影響を与えるファクターが排除できたかどうか疑わしい、ということである。二つ目は、情報源の表出にかかわる形式の認定基準が狭すぎるという点である。§3.1.4 で提示したように、それに基づいて情報源が特定化できる言語形式を「情報源表出形式」と見なすならば、その形式の語彙的な意味が何らかの情報源と直結できるか否かは情報源表出形式の認定にあたっての唯一な基準ではない。つまるところ、“显得”の類だけを情報源表出形式と見

⁷ つまり、モダリティ成分は命題全体にかかわるということである。

なすのは妥当だとは言えないことになる。それに関連して三つ目として、情報源表出形式が実際のところ“显得”の類に限らないのであれば、中国語の連用修飾語において情報源表出形式が出現しにくいという結論を見なおす余地が出て来る。さらに四つ目として、たとえ連用修飾語の内部における情報源表出形式の生起が難しいとしても、その原因について、モダリティの成分に近いからということのほかにも考えられる原因があるかどうかを、再検討すべきである。現に“好像”などが連用修飾語の内部に現れる場合、多義性が生じやすく、文の分析が難解になる。例えば次の(10)aは両義的である。この文における“好像”は、それぞれ(10)bと(10)cが示すように、広い作用域（スコープ）と狭い作用域を有する可能性が認められる。

- (10) a. 她 好像 满不在乎 地 笑着 说
彼女 まるで～のようだ 気に留めない SP 笑う-PROG 言う
- b. 她[好像[满不在乎地笑着说]]
‘彼女は平気で笑いながら話しているようだ’ ——広いスコープ
- c. 她[[好像满不在乎地]笑着说]
‘彼女は平気そうに笑いながら話している’ ——狭いスコープ

情報源表出形式においては、“好像”のような比況類が主語の直後に用いられた場合に、スコープの解釈が二つ以上許されることがあることから、その多義性を回避すべく、連用修飾語における生起が抑えられているのではないかと考えられる⁸。換言すれば、これらの形式が連用修飾語においてそれほど用いられない理由は、証拠性の文法化の度合いが中国語において低いこと以外にも存在するかもしれないのである。

以上の問題点に対して、本章は次のような修正を試みたい。まず、中国語のデータの信憑性を確保すべく、中国語の原文を日本語に訳したものから「形容詞語幹-ソウニ+動詞」の用例を検出し、それに対応した中国語の原文に遡って、中国語の原文で内在的状态の表出を考察する⁹。次に、「形容詞語幹-ソウニ+動詞」に対応す

⁸ “显得”は解釈として狭いスコープのみが可能であるゆえ、(6)bなどが許容されるのである。

⁹ 本章の注5と同様に「する」などの動詞を含む「形容詞語幹-ソウニ+動詞」の用例を除外した。

る中国語の表現に関して、語彙的な意味で情報源を表すものに限定せず、より広義の意味において情報源表出形式を認定することにする。この2点を主たる修正方針とした上で調査した結果をもとにして、命題内部における証拠性の表出およびその背後に潜んでいる規則性の究明を試みたい。

8.3 調査の結果

本章の調査では「日中対照コーパス」から日本語で「形容詞語幹-ソウニ+動詞」に訳されている中国語の原文を考察対象として、合計 636 の実例を得た。そのうち、中国語の原文が連用修飾語になっているものは 78%を占めており、原文が述語のものと“得”で始まる補語になっている文は 11%前後で、その他も 11%である。連用修飾語のものは、以下のように形式的特徴を基準にして分類することが可能である。

A 類：性質形容詞 + (地) + V

内在的状态を表わす形容詞が裸で連用修飾語になるタイプである。

A1

- (11) 道静 懊丧 地 摇着 头 (《青春之歌》)
 道静 元気をなくす SP 振る-PROG 頭
 ‘道静は情けなさそうに首をふった’¹⁰

A2

- (12) 荀磊 现在 却 歉然 地 对 她 笑着 (《钟鼓楼》)
 荀磊 いま しかし 申し訳ない SP に 彼女 笑う-PROG
 ‘荀磊は[……]すまなさそうに微笑みながら、[……]’

A3

- (13) 小 燕子 欢叫着 (《轮椅上的梦》)
 小さい ツバメ 楽しく叫ぶ-PROG

¹⁰ 本章における日中対照コーパスから検出された中国語の用例の日本語訳は、概ね当該コーパスの日本語訳をそのまま引用しているが、原文の意味を忠実に反映させるように、筆者が一部修正・変更したものも含まれている。

‘子ツバメは[……]楽しそうに鳴きながら、[……]’

例(11)に代表される A1 は A 類の中心的メンバーである。それに対して、(12)(13)が代表する A2 と A3 は典型から離れている。(12)にある形容詞“歉然”は形態素の“歉”と“……的样子(～さま)”を意味する形態素“然”からなっており、後に述べる C 類に共通する面があるが、“歉然”が一語である点から言うと A 類に帰属させるべきだと考える¹¹。(13)については、内在的状态を表わす形容詞的形態素“欢”が動詞的形態素“叫”と融合して一語化しており、“欢”が自由形態素ではないという点において、(11)の“懊丧”のような性質形容詞とはやや異なる。

B 類：状態形容詞＋（地）＋V

内在的状态を表わす状態形容詞が連用修飾語になる場合にも 3 つの下位類がある。

B1

- (14) 王一生 坐回 床上， 很 尴尬 地 笑着 （《棋王》）
 王一生 座る-戻る ベッド-LOC とても 不自然だ SP 笑う-PROG
 ‘王一生はベッドに戻って座り、てれくさそうに笑っていた’

B2

- (15) 荀磊 高高兴兴 地 扭 身 回 屋 取 浆糊 去 了（《钟鼓楼》）
 荀磊 嬉しい SP ぐるっと回す 体 戻る 部屋 取る のり 行く FP
 ‘荀磊はうれしそうに家へとってかえした’

B3

- (16) （杏儿）怯怯 地 叫了 声 （《钟鼓楼》）
 杏児 びくびく SP 呼ぶ-PERF CL
 ‘杏児は恥ずかしそうにあいさつした’

¹¹ 董秀芳 2004（注 4）は「“然”はほんらい生産的な副詞の接尾辞であったが、生産性の消失につれて、現代中国語には“突然、忽然”などしか残らず、“然”とその前の成分との関係が曖昧になってきた。中国語に関して通時的知識を持たない人にとって、これらの語は単純語と同様であろう」と述べた。また、辞書はよく“……然”類の形容詞の意味を“形容……的样子”と語釈している。

- (17) 牛牛也喜滋滋地叫着 (《轮椅上的梦》)
 牛牛も嬉しい SP 叫ぶ-PROG
 ‘牛牛もうれしそうに叫んだ’

「状態形容詞」については朱德熙 1982 に従って、“程度副詞+形容詞+的”をも状態形容詞と見なす。B1 がそれに該当するものである。また、(15)の状態形容詞“高高兴兴”には基本形として性質形容詞の“高兴”があり、性質形容詞の重ね型で構成される状態形容詞の B2 の代表となる。B3 類は主として語形成のレベルで構成される状態形容詞である。“怯”・“喜”は何れも自由形態素ではなく、“怯怯”・“喜滋滋”の形になって初めて語として用いられるため、これらを一つの下位類に収めておく。

C 類：似乎 + (程度副詞) + 性質形容詞 + 似的 + V

C 類は、性質形容詞がその前に“似乎”“好像”“如同”“显得”など、もしくはその後“似的”“一般”などと共起する連用修飾語のタイプである。その代表として、上のタイトルには“似乎”“似的”を挙げている。

C1

- (18) (道静) 歪过 头 好像 害羞 似地
 道静 かしげる-越える 頭 まるで~のようだ 恥ずかしい のようだ
 一 笑 (《青春之歌》)
 ちょっと 笑う
 ‘道静は振り向いて恥ずかしそうににっこりした’

C2

- (19) 鲍彦山 惭愧 似地 笑了 一 声 (《小鲍庄》)
 鲍彦山 恥ずかしい のようだ 笑う-PERF 一つ CL
 ‘鲍彦山は恥ずかしそうに笑った’

C3

(20) (恂如) 又 似乎 快意 地 叫着 (《霜叶红似二月花》)

恂如 また まるで~のようだ 爽快だ SP 叫ぶ-PROG

‘恂如は[……]愉快そうに笑った’

(19)(20)に示されるように、(程度副詞+) 性質形容詞の前後に“似乎”と“似的”を同時に用いる必要はない。後方のみ用いられているのは C2 類であり、前方のみ用いられているのは C3 類である。なお、“显得”と“好像”などは語彙的な意味がそれぞれ異なるものの、形容詞に前置するという統語上の位置が共通しているため区別をしない。

D 類：P + 性質形容詞 + 的 + N + V

D 類は、何らかの表情・眼差しを示したり、何らかの口調で喋ったりしながら、ある動作行為を行うことを表す。P は“带着”・“用”などの〈付随状態〉や〈道具〉を導く前置詞を表し、性質形容詞の修飾をうけ、表情・口調・眼差しなどを表わす名詞 N を後ろにとる。

(21) (他) 带着 满足 的 微笑 摸着 自己的 脸颊 说

彼 携帯する-PROG 満足する SP 微笑み なでる-PROG 自分 SP ほほ 言う

(《青春之歌》)

‘満足そうにうす笑いをしながら、頬をなでなでいう’

(22) 爸爸 用 疑虑 的 目光 打量着 我 (《轮椅上的梦》)

父親 使う 疑わしい SP まなざし 観察する-PROG 私

‘父は疑わしそうに私を見て’

E 類：一脸/满脸 + 性質形容詞 + 地 + V

E 類は主に動作行為 V に伴う表情を描くものである。

(23) 他 满脸 疑惑 地 问 我 (《轮椅上的梦》)

彼 顔全体 いぶかしい SP 訊ねる 私

‘彼はいぶかしそうに私にたずねた’

F 類：N＋性質形容詞＋地＋V

- (24) 那人 语气 担忧 地 讲着 她 刚才 在 屋里
 あの 人 語気 心配する SP 話す-PROG 彼女 さっき で 部屋-LOC
 看到 的 情形 (《轮椅上的梦》)
 見る SP 様子

‘その人が、いま見てきた中の様子を心配そうに話している’

- (25) 我都 看到 妈妈 神情 焦虑 地 注视着 我(《轮椅上的梦》)
 私 すべて 見る 母親 表情 気をもむ SP 注視する-PROG 私
 ‘目を開けるたび、心配そうにのぞきこむ母の視線にぶつかる’

F 類における N は D 類の N と同様に、表情・口調などを表わす名詞である。直後の形容詞と組み合わせた主述構造が“地”を介して動詞 V を修飾する。構造全体は動作行為 V が表出されると同時に、関連する表情などが付随的な情報として提示される。

E 類も“一脸/满脸”が名詞句であり、その後の性質形容詞と主述構造になるため、F 類と一つにすることも可能である。ところが、E 類の連用修飾語を構成する主述構造の主語にあたるものは“一脸/满脸”に限られており、なお且つ“一脸/满脸”という語自体には表情を表す意味がないため、ここでは取り敢えず E 類と F 類を二つに区別する。

〈表3〉連用修飾語における内在的状态の表出タイプ

タイプ	A			B			C			D	E	F	合計
	A1	A2	A3	B1	B2	B3	C1	C2	C3				
用例数	332	7	7	39	37	18	2	19	3	22	4	3	493
%	67.3	1.4	1.4	7.9	7.5	3.7	0.4	3.9	0.6	4.5	0.8	0.6	100
計%	70.1			19.1			10.8						100

〈表3〉は、以上の6つのタイプの用例数および比率を示しているものである。その内、A類は7割を占め、圧倒的に優勢である。その次はB類であり、およそ2割を占めている。C類以下は、合計で1割強を占めている。

以下、これらのタイプの存在および使用頻度は何を語っているのかについて、証拠性の観点から論じていきたい。

8.4 他者の内在的状态に言及する証拠性のストラテジーおよび傾向

§8.3に示したように、網羅的ではないが、A～Fはすべて他者が動作行為を行うのと同時点におけるその人物の内在的状态に言及する表現である¹²。この調査結果を基にして、中国語の連用修飾語における内在的状态の表出にあたって、いくつかの傾向が抽出できる。

8.4.1 〈直接経験〉

A類が書き言葉においておよそ7割を占めていることから、中国語の母語話者は連用修飾語で他者の内在的状态を表出するときに、4分の3近くのケースにおいて、その内在的状态の情報ソースを言語化・顕在化しないと言わざるを得ない¹³。取りも直さず(5)aが、話し手自身の内在的状态を語る形式——例えば(5)b——と同様に、〈直接経験〉の表明に準じた形式で述べ、自分の内在的状态なのか、それとも他者の内在的状态なのかを区別しないのである。

ところが、A類が圧倒的に多数を占めている事実がある一方で、B以下のタイプも合計すれば、決して無視できない3割を占めている。形から見ればA類と比べ、それ以外のタイプはすべて有標的であると考えられる。そして、それらの機能は他者の内在的状态という情報の情報源を提示することにほかならない。従来の研究において、これらの形式が証拠性の観点から体系的に考察されなかったのは、語彙的意味から特定の情報源と直接結びつかないものであるからだろう。本研究では、これらB～Fのタイプに属する諸形式を証拠性の観点から分析してみる。

¹² あくまでも「日中対照コーパス」から検出された用例である。

¹³ 本調査で使用した「日中対照コーパス」は書き言葉がメインである。また、検出した用例は台詞ではなく、地の文に集中している。

8.4.2 〈推論〉

8.4.2.1 D～F類

まずD類～F類から先に見ていく。(21)～(25)に対して、D類のPとN（以下はD類のNだけに言及した場合はPも含める）、およびE類の“一脸/满脸”、F類のNを削除すると、(26)～(30)のようなA類の文になる。

- (21) (他)带着 满足 的 微笑 摸 着 自 己 的 脸 颊 说
- (22) 爸 爸 用 疑 虑 的 目 光 打 量 着 我
- (23) 他 满 脸 疑 惑 地 问 我
- (24) 那 人 语 气 担 忧 地 讲 着 她 刚 才 在 屋 里 看 到 的 情 形
- (25) 我 都 看 到 妈 妈 神 情 焦 虑 地 注 视 着 我
- (26) (他) 满足地 摸 着 自 己 的 脸 颊 说
- (27) 爸 爸 疑虑地 打 量 着 我
- (28) 他 疑惑地 问 我
- (29) 那 人 担忧地 讲 着 她 刚 才 在 屋 里 看 到 的 情 形
- (30) 我 都 看 到 妈 妈 焦虑地 注 视 着 我

(26)～(30)は文法的に依然として成立するだけではなく、意味的にも元の(21)～(25)とさほど差がなさそうに見える。特に(22)(24)(25)の場合、“目光”“神情”“语气”は元の文においては修飾される主要部、もしくは主述構造の主語にあたる成分であるものの、修飾部もしくは述語の形容詞ほど必要ではないと言える。なぜなら、“打量”や“注视”などの動作行為の施行には必ず何らかの“目光”“表情”が伴うし、“讲”の場合も何らかの“语气”を伴って実行されるからである。それに対して、逆にNをそのまま残しながら、形容詞を削除した場合、文はすべて成立しなくなる。

- (31) *爸爸 用 目光 打量 着 我

なお、(21)を(26)のように変更すると、情報の一部——“微笑(微笑み)”——が伝わらなくなるのが確かである。しかし、それ自体が“满足地摸着自己的脸(満足

そうにあごを撫でる)”というイベントにおいてそれほど重要であるとは考えにくい。なぜなら、“満足（満足する）”の表情と言え、十中八九微笑みであり、つまり“満足”と“微笑”には広い意味での「一致関係」が認められるからである。また(23)からNの“满脸”が削除された(28)は“疑惑”の（高い）程度が読み取れなくなるが、“疑惑”があるか否かという点で言えば、(23)と内実が異なるとは思えない。

ところが、大した情報価値を持たず、経済性からかけ離れているように見えるN（Pも含む）が敢えて(21)～(25)のように、他者の内在的状态に言及する場合に表出されるのは、やはりそれなりの動機付けが存在するからであろう。そこで考えられるのは、D～F類は単にある主体の内在的状态を表わすだけではなく、その主体の外観的徴候——問題にしている内在的状态に関連する表情など——も同時に提示しているということである。その目的は、情報としての「話し手以外の主体」の内在的状态を知りえた情報源——観察された結果に基づいた〈推論〉——を言明することにある。以下に挙げる3点からこの観点を裏付けることができる。

①三人称との親和性

(21)～(25)の主語を一人称に置き換えると、文の許容度が著しく落ちることから、話し手自身の内在的状态の表出には、D～F類が不向きだということが分かる¹⁴。

(32) [?]我 带着 满足 的 微笑 摸 着 自 己 的 脸 颊 说

(33) [?]我 用 疑虑 的 目光 打 量 着 爸 爸

(34) [?]我 满脸 疑惑 地 问 他

(35) [?]我 语气 担忧 地 讲 着 自 己 刚 才 在 屋 里 看 到 的 情 形

(36) [?]我 神情 焦虑 地 注 视 着 妈 妈

それと対照的なのは、A類の用例の主語を一人称に置き換えても、文の許容度は変わらないという点である。

¹⁴ ただし、小説などで自分を客体化する場合は(32)～(36)のような文は問題なく成立する。§ 8.4.3.2 の例(60)～(62)についての分析を参照されたい。

- (37) 我 懊丧 _____ 地 叹了 _____ 一 口 气。(CCL: 戴厚英《人啊人》)
 私 元気をなくす SP ため息をつく-*PERF* 一つ CL 息
 ‘私は情けなくため息をついた’
- (38) 我 歉然 _____ 地 对 她 说 (CCL: 海星《陶斯亮找不着“高干子女”的感觉》)
 私 申し訳ない SP に 彼女 言う
 ‘私はすまなく思って彼女に言う’
- (39) 我 激动 不己, 伸出 双手 欢叫着 迎上去 了。
 私 興奮する 止まない 伸ばす-出す 両手 楽しく叫ぶ-*PROG* 迎える-行く *FP*
 (CCL: 冯苓植《雪驹》)
 ‘私はすごく興奮して、両手を伸ばし歓声を上げながら迎えて行った’

つまり、A類は三人称とも一人称とも自由に共起できるのに対して、D~F類は一人称との共起がある程度以上に制限されるのである。この制限は日本語の例(3)a,b ((40)に再掲)に示される「ソウニ」の人称制限と類似する。D~F類で(3)aは自然に訳出される。

- (40) a. 田中先生は（一人で）寂しそうに立っていた。
 ‘田中老师 {带着难过的表情 / 一脸难过地 / 神情难过地} 站着。’
- b.* 私は（一人で）寂しそうに立っていた。
 ‘??我（一个人） {带着难过的表情 / 一脸难过地 / 神情难过地} 站着。’

要するに、D類とF類のNとE類の“一脸/满脸”は〈表4〉でまとめるように、日本語の「ソウニ」と平行的な分布を示している。

〈表4〉 “一脸 / 满脸” と「ソウニ」の分布

		話し手の内在的状态	他者の内在的状态
中国語	D類とF類のN(Pを含む)	-	+
	E類の“一脸 / 满脸”		
日本語	「ソウニ」		

D類とF類のNおよびE類の“一脸/满脸”などはなぜこのような分布を示すのであろうか。情報源の〈伝聞〉を除外する限り、話し手は当該人物の表情・眼差し・声を観察して、その人の内在的状态を察知するしかない。D類とF類のNおよびE類の“一脸/满脸”はすべて外観的徴候が現れる「場」であり、それらの共起がまさに話し手が外部から観察を行ったことを示している。一方で、外観的徴候の感知は視覚・聴覚などの感覚に依存するため、話し手は自分の表情や眼差しを外部から観察することはできない。したがって、話し手自身の内在的状态の表出にはD類とF類のNおよびE類の“一脸/满脸”が用いられないのである。

②非叙実的な文脈に用いられる

次に、A類は内在的状态を叙実的 (factive) 事態として表出する¹⁵。それに対して、D類～F類は必ずしも叙実的事態として内在的状态を表わさない。言い換えれば、話し手自身は「主体がこの内在的状态にない」と認定している可能性も存在する。つまり非叙実的 (non-factive) である。E類の(23)とA類の(28)を例にとり、前後に内在的状态を打ち消す文脈を付けて考察してみると、次のようになる。

- (41) a. 他 满脸 疑惑 地 问 我, 心里 却 早已
 彼 顔全体 いぶかしい SP 訊ねる 私 心-LOC しかし とつくに
 有了 答案。
 ある-PERF 答え
 ‘彼はいぶかしそうに私にたずねたが、心の中には既に答えがあった’
- b. 他 明明 心里 早已 有了 答案, 却 满脸 疑惑
 彼 明らかに 心-LOC とつくに ある-PERF 答え しかし 顔全体 いぶかしい
 地 问 我。
 SP 訊ねる 私
 ‘彼は心のなかに既に答えがあったのに、いぶかしそうに私にたずねた’
- (42) a.^{??}他 疑惑 地 问 我, 心里 却 早已 有了 答案。
 b.^{??}他 明明 心里 早已 有了 答案, 却 疑惑 地 问 我。

¹⁵ つまり、話し手は「主体がこの内在的状态にある」ことを自らの信念として持っている。

なぜ(42)が不自然なのかというと、主体がある内在的状态にあることを話し手が認定したにもかかわらず、自らそれを覆すような事態を述べて自己矛盾を生じさせることはふつう考えられないからであろう。それと対照的に、(41)のように、内在的状态を意味する形容詞の前に“满脸”を加えると、一見矛盾するように思える文脈にも問題なく用いられるようになる。(41)において、“满脸疑惑”はあくまで観察した表情が“疑惑”のように見えたことに言及するだけであり、主体が本当に“疑惑”の状態にあるか否かは“满脸疑惑”という表現からは何も保障されていないのである。

面白いことに、日中対訳コーパスでは観察されていないが、一見したところ E 類に類似するが、“满心/满腔/满腹+性質形容詞+地+V”などは、(41)のように内在的状态と一致しない文脈においては成立しない。

- (43) a. 大家 满心 欢喜 地 把 老人 送下 飞机。(CCL: 人民日报)
 みんな 胸いっぱい 嬉しい SP を 老人 送る-降りる 飛行機
 ‘みんな大変嬉しそうに飛行機から降りる老人を見送った’
- b.*大家 一点儿 也 不 高兴, 却 满心 欢喜 地 把 老人
 みんな 少し も NEG 嬉しい しかし 胸いっぱい 嬉しい SP を 老人
 送下 飞机。
 送る-降りる 飛行機
 ‘みんなは機嫌がちっとも良くないが、大変嬉しそうに飛行機から降りる老人を見送った’
- (44) a. 作为 重庆大轰炸 的 受害者 和 幸存者, 老人 满腔
 として 重慶大空襲 SP 被害者 と 生存者 老人 胸いっぱい
悲愤 地 诉说:[……] (CCL: ニュース記事原稿)
 悲しみと怒り SP 語る
 ‘重慶大空襲の被害者と生存者として、老人は悲しみと怒りに満ちたように言った’
- b.*老人 对 此 早已 忘怀, 却 满腔悲愤地 诉说: [……]
 老人 に対して これ とっくに 忘れ去る しかし

‘老人はもうとっくに気にしなくなったが、悲しみと怒りに満ちたように言った’

- (45) a. 刘半仙 吃了 一 惊, 满腹 狐疑
 劉半仙 呑む-PERF 一つ 驚く 頭の中が～でいっぱいだ うたぐり深い
 地 望着 他[……] (CCL: 朱櫻《刘半仙与香港股市大谍》)
 SP 遠くを見る-PROG 彼
 ‘劉半仙はびっくりして、不審そうに彼を眺め’
- b.*刘半仙心里一清二楚, 却满腹狐疑地望着他。
 ‘劉半仙ははっきり分かっていたが、不審そうに彼を眺め’

“心”“腔”“腹”の中にあるものは目に見えないため、“满心/满腔/满腹+性質形容詞+地+V”などは外部からの観察に基づいて内在的状态を推論することを表すものではない。それゆえに、これらの形式は A 類と同じように〈直接経験〉を情報源として言語化するものであり、取り消すことができないのである。それと比べて、E 類は外部からの観察に基づいた〈推論〉という情報源を含意することが明らかである。

③意志表明に用いられる

D～F 類は行為の禁止などの話者の意志を表明する文脈に現れることがある。例(46)a と(47)a はその実例である。それに対して、(46)b と(46)c から分かるように、A 類は意志表明文には現れない。

- (46) a. 假如 我 某 一 天 在 拍 卖 行 欣 赏
 もし～ならば 私 ある 一つ 日 で オークション会場 鑑賞する
 珠宝, 请 不要 用 不屑 的 表情 对 我 大 谈
 真珠・宝石 どうぞ NEG 使う 蔑みの SP 表情 に 私 とても 話す
 贵族 的 不 劳 而 获。 (CCL: 读者(合订本))
 貴族 SP NEG 働く しかし 獲得する
 ‘もしも私がある日オークション会場で真珠・宝石のアクセサリを鑑賞しているところを見たら、さげすんだ表情で、貴族は働かないで(物

を) 手に入れる、と私に堂々と言わないでください’

b. ??请 不要 不屑地 对我 大谈 贵族的 不劳而获

- (47) a. 别 满脸 无辜 的 对我说 你 爱 她, 你
 PROH 顔全体 罪がない SP に 私 言う あなた 愛する 彼女 あなた
 他妈 你 爱 她 干嘛 跟我 好 啊
 チクショウ あなた 愛する 彼女 どうして と 私 よい FP

(<http://www.gexing.com/qqqianming/13604527.html>)

‘彼女を愛していると、何食わぬ顔で私に言うな。彼女を愛していると
 言うなら、どうして私にかまったりしたのよ’

b. ??别 无辜地 对我说 你 爱 她

この差も A 類と D~F 類の異なる性格を語っている。他者の内在的状态を制御することは不可能であるが、その状態の表面上への現れ——特定の表情・口調・眼差しなど——はコントロールできることから、意志表明に用いられない A 類が内在的状态を表すとすれば、D~F 類は内在的状态の外部への現れにより重きが置かれていると言える。

以上の3点をまとめると、D 類~F 類における N や“一脸/满脸”などの語句を通じて、話し手は外観的徴候に依存して対象を観察したこと、さらには外部からの観察が行われたことが表出されている、ということになる。

8.4.2.2 C 類

次に C 類について考えよう。以上で述べたように、D 類~F 類における N と“一脸/满脸”が、極めて少ない情報量しか持たないにもかかわらず生起する動機付けは、(48)に挙げる含意に基づいて情報源を提供することにある。

(48) 外観的徴候の依存対象を観察した結果に基づいた推論>

外観的徴候を観察した結果に基づいた推論>

<推論> の情報源を持っている

ところで、問題の内在的状态に関連する外観的な徴候を観察できたことさえ明言し

ておけば、その徴候は具体的にどのようなものなのかについては触れなくても構わない。従って、表情や口調などのような、外観的徴候に依存した対象の詳細までを具体的に明言する必要は必ずしもないのである。C類はこのような、外観的徴候の観察を行ったことのみを言語化するものだと考えられる。

D～F類が内在的状态の外観的徴候の依存対象である表情・眼差し・声などを言語化することによって情報源の表出を実現させるものだとすれば、C類は話し手が主体の何かしらの外観的徴候を観察したことの言及に留まり、「外観的徴候の観察を行った」ことのみを言語化するのである。以上のような相違があるものの、C類にもD～F類と同様に、一人称との非共起性および非叙実性が認められる。まず一人称との非共起性について、例(49)～(51)を(18)～(20)と比較されたい。

(49) [?]我 歪过 头 好像 害羞 似地 一 笑

(50) *我 惭愧 似地 笑了 一 声

(51) *我 又 似乎 快意 地 叫着

また、非叙実性については、「ある主体がなんらかの内在的状态にある」と話し手が認定したということを必ずしも含意しないC類は、しばしば当該の内在的状态を打ち消す文脈に用いられ、「その人の本当の気持ちは決してそうではなく、そういうフリをしているだけだ」ということを暗にほのめかし、反事実(counter-factive)の表現機能を果たしている。例えば、

(52) 他 说 得 那 么 委婉、 那 么 诚恳， 然 而 又
 彼 言 语 SP あんなに 婉曲だ あんなに 誠意がある しかし 又
 那 么 血 淋 淋 的 怕 人。 说 完 了 还
 あんなに 血がたらたら垂れている SP 怖い 言い終わる-PERF さらに
 无 限 惋 惜 似 的 长 叹 了 一 口 气。(《青春之歌》)
 限りない 残念だ のように 長い ため息をつく-PERF 一 つ CL 息
 ‘かれの口調は、やさしく誠実そうだったが、身ぶるいするほど恐ろしい
 人だった。しかも、話し終ると、さも残念そうに長い溜息をついた。’

- (53) 听到这个消息，关敬陶受了刺激，觉得唯一熟识
 聞く この CL 情報 関敬陶 受ける-PERF 刺激 思う 唯一の よく見知っている
 的领导 干部 走了，他无限惋惜地说 [……]
 PL 指導者 幹部 離れる FP 彼 限りない 残念だ SP 言う
 (CCL: 李英儒《野火春风斗古城》)
 ‘この情報を聞いてショックを受けた関敬陶は、たった一人のよく知っ
 ている幹部がいなくなったと思い、残念そうに言った’

例(52)は小説の悪玉である胡夢安教育局長についての描写であり、例(53)は作者が同情を寄せている対象である関敬陶についての描写である¹⁶。(52)の下線部を(53)と同じ“无限惋惜地”に置き換えると、もともとあった「残念そうなフリをしている」といったニュアンスがなくなるため、胡夢安という偽善者の人物像と噛み合わなくなる¹⁷。

C類の使用頻度はD～F類とおおむね同様である。しかしながら、〈表3〉に示したように、マーカー後置型のC2類は4%近くでCタイプの中で最も多くを占めており、マーカー前置型のC1とマーカー前後併用型のC3はいずれも0.5%前後である。このような頻度差は次のことに起因すると考えられる。C1は性質形容詞の後方が閉じていないため、どこまでがマーカーのスコープ内(つまりどこまでが外観的徴候を観察して知りえた情報)なのかについて多義性が生じる。まさに(10)の“好像满不在乎地笑着说”と並行する現象である。それに対して、マーカー前後併用型のC3は、C1にあるスコープの多義性は回避できるが、前後ともにマーカーが使用されるため、経済性に欠けるというデメリットが考えられる。それで使用頻度はそれほど高くないのであろう。結果として、明晰さと経済性を見事に両立させているC2類が、最も高い使用頻度で現れるわけである。

¹⁶ 作者の李英儒氏は同小説(人民文学出版社、2005年)の「序」に“对于关敬陶夫妇，也寄予了同情，这一点，读者从他们夫妇一出场就可以看出来(関敬陶夫婦に対しても同情を寄せた。この点は、この二人が登場した場面からも見える)”と述べている。

¹⁷ 出典の小説を読んでいない母語話者に(52)と(53)だけを見せ、(52)の“他”と(53)の“关敬陶”は悪玉と善玉のどちらに思うかを回答してもらった。被験者は殆んど“他”は悪玉で、“关敬陶”は善玉だと答えた。

8.4.3 〈知覚〉

A 類の次に高い頻度で現れるのは状態形容詞が連用修飾語になる B 類である。朱徳熙 1982:75(日本語訳は杉村・木村 1995 による)は以下のように指摘している。

書面語においては、二音節形容詞が副詞接尾辞“的”(しばしば“地”と表記される)を伴うと連述修飾語になることができる。

他恭敬的垂手站在伯夷的床前。(鲁迅)

[彼は恭しく両手を垂れて伯夷の寝台のそばに立っている]

“你等急了把?”他和气地跟我说。(新聞記事から)

[「待ちくたびれたでしょう」彼は穏やかに私に対して言った]

口語では、このような場合はつねに、“恭恭敬敬的站在那儿”，“挺和气的跟我说”のように状態形容詞を用いる。

状態形容詞のほうが性質形容詞より自由に連用修飾語として用いられるということは明らかである。では、なぜ状態形容詞がより自由に連用修飾語になれるのか。管見の限りでは、まだ明確な回答は得られていない。

8.4.3.1 一人称との非共起性

状態形容詞は連用修飾語になる以外に、人称との共起においても性質形容詞と異なる傾向が見られる。《汉语形容词用法词典》(鄭懷徳・孟慶海編, 商務印書館 2003 年)の付録に記載されている 25 個の内在的状态を表す ABB 型の状態形容詞を CCL コーパス(現代中国語コーパス)で検索したところ、一人称の内在的状态を述べるケースは全用例のうち 10%しか占めておらず、残りの 9 割はほとんど二・三人称の内在的状态を表したものであることがわかった。検索した結果は以下の通りである。なお、括弧の中にある数字に関しては、コロンの左側はその形容詞が一人称に用いられた用例数で、右側はその形容詞の全ての用例数である。

(ア)一人称に用いる用例がなかった ABB 型の状態形容詞 (9 個)

悲惨惨(0: 1), 悲凄凄(0: 1), 悲切切(0: 4), 病歪歪(0: 5),
病恹恹(0: 25), 病殃殃(0: 3), 急喘喘(0: 1), 气囊囊(0: 1),

喜盈盈（0：13）。

（イ）一人称に用いる用例が5%以下のABB型の状態形容詞（8個）

空落落（2：59），乐呵呵（13：345），乐滋滋（4：104），怒冲冲（1：106），气鼓鼓（2：86），气呼呼（1：23），怯生生（11：296），喜滋滋（4：169）。

（ウ）一人称に用いる用例が5%～10%のABB型の状態形容詞（3個）

急冲冲（3：50），气冲冲（13：220），气哼哼（4：71）。

（エ）一人称に用いる用例が10%～20%以下のABB型の状態形容詞（3個）

乐悠悠（1：5），美滋滋（24：124），兴冲冲（50：481）。

（オ）一人称に用いる用例が20%以上のABB型の状態形容詞（2個）

急乎乎（1：4），乐颠颠（6：26）。

以上の数字からわかるように、内在的状态を表すABB型の状態形容詞は多くの場合、他者の内在的状态を表す。また、比較的自由に一人称の内在的状态を表せる（用例が10%以上の）ABB型の状態形容詞は全体の五分の一弱を占めるにすぎず少数派である。

ほかの類の状態形容詞についても概ね同じ傾向にあると言える。例えば、B2タイプに分類されるAABB型の“高高兴兴地（喜んで）”・“慌慌张张地（あわただしく）”・“战战兢兢地（ビクビクして）”、B1タイプに分類される“{非常/很/十分/颇/特别}高兴地”・“{非常/很/十分/颇/特别}难过地”をCCLで検索した。結果として得た一人称に用いられる頻度を〈表5〉に示す。

〈表5〉ほかの類の状態形容詞が一人称に用いられる頻度

		1人称に用いる 用例数	全用例数	1人称に用いる 頻度
B2タイプ	高高兴兴地	33	491	6.7%
	慌慌张张地	6	168	3.6%
	战战兢兢地	22	189	11.6%
B1タイプ	adv.+高兴地	201	613	32.8%
	adv.+难过地	3	15	20%

なお、“程度副詞+高兴地”は一人称に用いられる頻度がかなり高いように見えるが、その201例の内、半分以上を占める107例が動詞の“看到”“见到”（以上は「見る」）、“得知”“获悉”“获知”“接到”（以上は「知る」）、“听说”（「聞く」）、“感到”（「感じる」）、“发觉”（「発見する」）といった知覚動詞、また“宣布”（「宣言する」）、“告诉”（「伝える」）など発話内行為（*illocution*）を表す動詞を修飾しているものである。例えば、

(54) 我 很_____高兴 地 看到 中国 在这 方面 所 作出 的 贡献。

私 とても 嬉しい SP 見る 中国 に この 分野 SP 作り出す SP 貢献

(CCL: 2004年ニュース記事)

‘中国がこの分野でなした貢献を見ることができて私は嬉しく思っています’

(55) 我 今天 特别 高兴 地 宣布, 泰国 承认 中国 完全 市场经济

私 今日 特に 嬉しい SP 発表する タイ 承認する 中国 完全だ 市場経済 地位。

(CCL: 2004年ニュース記事)

地位

‘タイが中国の完全な市場経済地位を承認したことを、(私は喜んで) 発表いたします。’

(56) 我 很_____高兴 地 告诉 各位, 玛莉 在 征文比赛中

私 とても 嬉しい SP 伝える 皆様 マリー に 作文コンテスト-LOC

得了 季军。

(CCL:《读者》)

得る-PERF 3位

‘皆さんに良いニュースがあります。マリーさんが作文コンテストで3位になりました。’

これらの動詞は歴とした動作を表すものではないゆえ、連用修飾語の“程度副詞+高兴地”は動作を行うのと同時点の内在的状態を表すというより、むしろ動詞の表す動作行為が遂行されることによって生じる心理状態を表していると考えられるべきである。例えば(54)の場合で言うと、「中国がこの分野で貢献しているのを見たから、私は嬉しく思います」ということである。それから、(55)と(56)の日本語訳か

らも分かるように、発話内行為を表す“我特别/很高兴地宣布/告诉各位”などは日本語に直訳しにくい。いずれにせよ、動作に伴う内在的状态とは違う性質のものであることが認められる。(54)~(56)のような別扱いすべき用例を除けば、一人称に用いられた“程度副詞+高兴地”の頻度は15.3%に下がる。

8.4.3.2 人称における偏りの原因

では、これらの状態形容詞が連用修飾語として一人称・話し手の内在的状态を表出するのにあまり用いられないのはなぜであろうか。ABB型をはじめとする状態形容詞は、内在的状态の表出のみならず、その状態に伴う外観的徴候も語彙的な意味の一部として状態形容詞の中に含まれていると思われる。“乐呵呵”・“气鼓鼓”を例にして考えてみたい。ある人物の「ハハハ」というような歓声が話し手の耳に届き、その人が楽しいという内在的状态にあるだろうと話し手は推定する、という状況を述べるのが「その人が“乐呵呵”」という文なのである。また“气鼓鼓”の場合は、「怒る」という内在的状态に伴って、頬や胸またはお腹を膨らませたりするという外観的徴候が観察される。次の実例から分かるように、「怒る」ときは「頬・胸・お腹を膨らませる」という発想はほかの中国語の表現にも現れる。

(57) 蒂德莉特 发出了 抗议, 脸颊也气得鼓了起来。

DET トリト 発する- PERF 抗議 ほおも 怒る SP 膨らむ- PERF- 動き出す

(CCL:《罗德岛战记》)

‘DETトリトは抗議して、頬まで膨らませて怒った。’

(58) 接着 他 鞠了 一 躬, 便 悠然自得 地

そして 彼 おじぎをする- PERF 一つ すると 悠然として 思いをはせる SP

走开 了。让 她 一个人 气得胸脯一鼓一

立ち去る FP CAUS 彼女 一つ CL 人 怒る SP 胸 一つ 膨らむ 一つ

鼓 地 站 在 那里。 (CCL:《飘》)

膨らむ SP 立つに そこ

‘そして彼はおじぎをして悠然と立ち去った。一人になった彼女は胸を一回また一回とふくらませて怒って、そこで立っていた。’

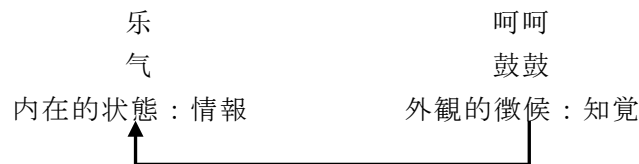
(59) 一个未过门的儿媳妇，竟敢
 一つ CL NEG 嫁に来る SP 息子の嫁 意外なことに する勇氣がある
 如此 頂撞 公公，真把老东山的肚皮气得
 このように たてつく しゅうと 本当に を 老東山 SP 腹 怒る SP
 鼓鼓的。 (CCL: 冯德英《迎春花》)

膨れている FP

‘まだ嫁に来ていない息子のフィアンセなのに、まさか義理の父にあんなに口答えするなんて、老東山はお腹が膨らむほど怒りを感じた。’

話し手は「頬・胸・お腹を膨らませる」様子を根拠にしてこの外観的徴候を示している主体が今現在「怒っている」と察知する。このことは〈図1〉のように図式化できる。

〈図1〉外観的徴候から内在的状态の察知 (1)

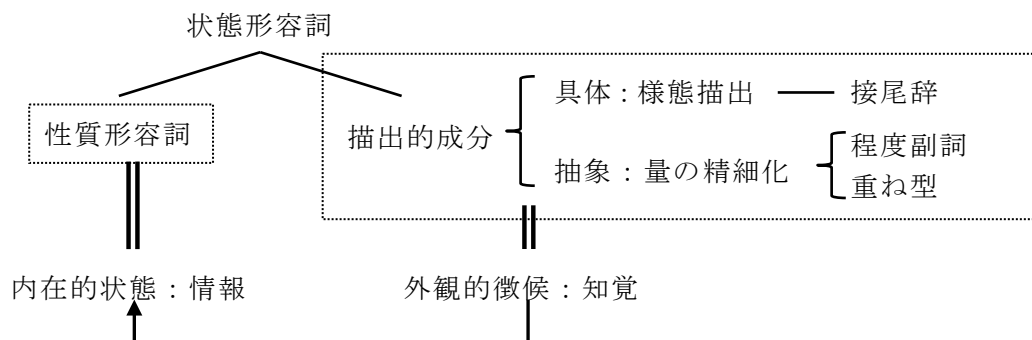


もちろん、すべての状態形容詞が“乐呵呵”や“气鼓鼓”のように、内在的状态を伴う外観的徴候を、構成する形態素の意味から直結的に分析できるわけではない。しかし、観察こそが描出の前提であり、高い描出度を可能にするのは外部からの観察にほかならない。ゆえに高い描出度が外部からの観察を含意するのである。換言すれば、高い描出度のあると思われる状態形容詞は、内在的状态に関連する外観的徴候を描出することによって、その内在的状态を察知することを想起させる。さらに、さまざまな側面から描出を行うことが可能である。多くの ABB 型の状態形容詞は外観的徴候と考えられる BB を通じて直接に描出するタイプだとすれば、程度副詞の修飾を受ける形容詞や重ね型による状態形容詞は量もしくは程度の精細化によって、間接的ではあるが、ABB 型と同様に描写を行っていると言えよう。情報としての内在的状态の情報源は、まさに状態形容詞が盛り込まれている外観的徴

候を観察した〈知覚〉である。よって〈図1〉は以下の〈図2〉のようにさらに一般化することができる。

以上の分析を踏まえれば、状態形容詞が話し手自身の内在的状态よりも頻繁に、他者の内在的状态を表出するのに用いられることが説明できる。つまり、それは〈直接経験〉では知り得ない他者の内在的状态に言及するために情報源の提示がより求められることの現れである。他者がある内在的状态にあることを認定する際、その情報源を言語化する必要が高ければ高いほど、言語化の手段の一つとして、状態形容詞が用いられる可能性が高まる。逆に、話し手自身の内在的状态を表出する時は、そもそも〈直接経験〉から知り得た情報なので、情報源を明言する必要はない。その結果、状態形容詞は話し手の内在的状态に言及するときにはそれほど用いられないのである。

〈図2〉 外観的徴候から内在的状态の察知 (2)



また、状態形容詞そのものはそもそも一人称の内在的状态を表出するのに向いていない。なぜなら、状態形容詞は語彙的な意味のレベルで「外部から観察を行っている」という意味がすでに盛り込まれているからである。§ 8.4.2.1 でも述べたように、話し手が普通、自分のことを観察できないということも、状態形容詞が一人称にあまり用いられない理由の一つに数えられる。

以上をまとめると、内在的状态を表す状態形容詞は内在的状态の表出にとどまらず、高い描出度を言語化することによって、〈知覚〉の情報源を有することを含意する。それゆえ一人称以外の人称に偏っているわけである。これは本章の冒頭で触れた日本語の「形容詞語幹+ガル」に類似している（ただし、「ガル」は形容詞の

語幹にくっついて述語になるのに対して、中国語の状態形容詞は連用修飾語になることが多い)。Aoki 1986:225によると、「ガル」は内在的な感覚や感情を外部から観察可能な状態の変化として捉え、形容詞を動詞に変換させて言語化する働きがあるという。他者の内在的状态を表出するときの、中国語の状態形容詞の働きについても類似のことが言える。状態形容詞の使用は他者の内在的状态を表出するためのストラテジーの一つであり、特定の内在的状态を意味する以外に、状態形容詞はその内在的状态の外部への現れも表す。

なお、次の例に示すように、状態形容詞と平行しているようであるが、「ガル」もまったく一人称の内在的状态を語らないわけではない。

(60) a. そのころ私はたいへん寂しがっていた。

‘那时 我 非常 寂寞。’

そのとき 私 非常に 寂しい

b. そうなれば私はたいへん寂しがっているだろう。

‘假如 那样 的话， 我 一定 非常 寂寞。’

もし あ的那样 であれば 私 きっと 非常に 寂しい

(Aoki: 1986 より。中国語訳は筆者より)

(60)a・b は、いずれも話し手の発話時の内在的状态ではない。このような現象について、Aoki 1986 は「自己分裂」と「タイムシフト」の概念を用いて説明を加えている¹⁸。この視点は、中国語の状態形容詞が低い頻度で一人称に用いられることをどう見れば良いのかを考えるにあたって、たいへん示唆的である。つまり、状態形容詞は話し手自身の内在的状态を表出する場合、話し手は自分のことを観察される客体として、「自己分裂」もしくは「自己の客体化」を行っているということが言える。このような用法は、よく過去のことを振り返ったり、未来のことを想像したりする場面で使われ、やや修辭的であることが、「自己の客体化」の発生に裏付けられる。例えば、

(61) 去年我生日那天，别人喊我去吃蛋糕，

去年 私 誕生日 その日 他人 呼ぶ 私 行く 食べる ケーキ

¹⁸ 「タイムシフト」は「自己分裂」をより発生しやすくする文脈的な要素と考えてよい。

我 乐颠颠地 跑去 准备 对 某人 喊 一声
 私 嬉しい SP 走る-行く するつもりだ に ある人 叫ぶ 一つ CL
 “生日 快乐。” (CCL:《读者(合订本)》)
 誕生日 ハッピー

‘去年私の誕生日に、ケーキを食べようと人に呼ばれた私は、喜んで駆け付けて、誰かさんに「ハッピーバースデー」と言おうとした。’

(62) 如果 你们 需要 什么 材料 或者 其他 东西，
 もし あなたたち ほしい なに 資料 あるいは その他 もの
 我会 很高兴地 提供 给你们。(CCL: 地球杀场)
 私 するものだ とても 嬉しい PL 提供する に あなたたち
 ‘もし貴方たちが資料あるいはそのほかのものが欲しがったら、喜んで提供いたします。’

例(61)(62)では、時空間の転換を明示する表現がある。(61)では過去の時点を表す文頭の“去年我生日那天”があり、(62)における“如果……”条件節は“很高兴”というのが想像の中で観察した自分の様子であることを示している。以上のことから、内在的状态を表す状態形容詞は一人称に用いられるのに制限があるものの、「タイムシフト」などによって「自己の客体化」を許す文脈に置けば成立可能となるわけである。

8.4.3.3 叙実性との関連

他者の内在的状态を表出し、主体の外在的徴候の観察にかかわっているとはいえ、B類は、叙実的な態度を表すか否かという点においてC～F類とは振る舞いを異にする。C～F類は、かかわっている外在的徴候は具体的に何なのかがはっきりしない。例えばE類の“满脸疑惑”であつても、結局“疑惑”の程度が“满脸”によって表されているが、具体的な“疑惑”の様子が語られていない。これらの形式は、ある種の外観的徴候が観察されていることの表出にすぎない。

これに対して、B類は、“气鼓鼓”における“鼓鼓”のごとく様態に対して具体的な描出を行ったり、抽象的でも“很尴尬地”における程度副詞や“高高兴兴”のような重ね型のごとく、量に対して精細化したりすることによって、外観的徴候は

何なのかということ具体的に言語化している。このように状態形容詞に含まれる積極的な描出は、話し手が情報としての内在的状态を認めていることにつながり、非叙実的な文脈への生起を許さない。次の例を比較されたい。

(63) 荀磊强忍着内心的不满，

a. {^{??}高高兴兴地 / ^{??}十分高兴地} 扭身回屋取浆糊去了。 (cf.例(15))

b. {高兴似的 / 带着高兴的神情 / 一脸高兴地 / 神情高兴地} 扭身回屋取浆糊去了。

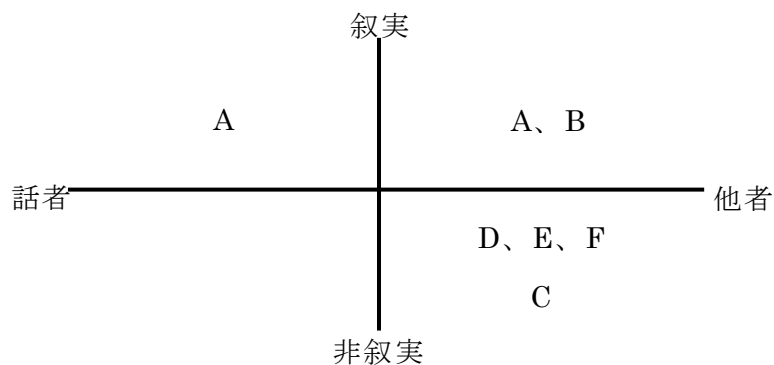
‘荀磊は我慢して怒りを表に出さず、うれしそうに家へ糊をとってかえた’

(63)a,b から分かるように、B 類は形容詞の表す内在的状态に相反する文脈を許す C～F 類と異なり、A 類と同様に叙実的である。

なお、A 類と比べ、B 類の特徴は高い描写性だけであり、〈知覚〉という情報源に関連付けなくても良いのではないかと、という反論が予測される。確かに、外観的な徴候を言語化するのに描写したいという動機づけは否定できない。しかし、描写してヴィヴィッドさや臨場感だけを出すような効果だけが出てくるのかと言うと、決してそうではない。外観的な徴候の提示によって、話し手が如何なる過程を経て、話題の人物が当該の内在的状态にいるか察知するのかが分かるからである。

8.4.4 連用修飾語における情報源表出形式の生起

〈図 3〉 A～F 類の分布



以上の記述・分析で明らかにした A～F 類の用法を踏まえて、〈話し手／他者に用いられるかどうか〉と〈叙実的／非叙実的〉を二つの軸とした座標系に基づき、〈図3〉のように A～F 類を位置づけることができる。A 類は〈話者〉と〈他者〉の二領域に跨っているが、それは一人称にあまり用いられない B～F 類と比べて、A 類が一人称にも三人称にも問題なく使えることを示している。ただし、話し手が〈直接経験〉から自分の内在的状态を知り得ることや、〈直接経験〉という情報源の表出が言語化される必要はないことから、A 類は話し手の内在的状态を表す無標的形式であることが言える。

ところが、他者の内在的状态を〈直接経験〉から知り得ることはそもそもないし、B～F 類のような〈直接経験〉以外の情報ソースを言語化する証拠性のストラテジーが用意されているにもかかわらず、他者の内在的状态に言及する場合においても、〈直接経験〉から知り得た情報に準じた A 類が圧倒的に多い比率を占めているのはなぜだろうか。この言語事実から、述語はもとより、連用修飾語において他者の内在的状态に言及するときにも、中国語は知り得た情報源より、言及する内在的状态が事実と合致するかどうかという次元がより優先される言語であると言わざるを得ない。また、B～F 類が連用修飾語においても他者の内在的状态に言及する「多数派」にならなかったのは、連用修飾という統語的位置の従属性に原因があると思われる。情報源の表出にあたって、統語論的な要因よりも語用論的なモチベーションが顕著な言語の場合、情報源の言語化は優先的に節の主要部に現れる。逆に言えば、情報源が言語化された統語的成分が文の主要部と認識されやすいことになる。ところが、連用修飾語はあくまでも主節に従属し、より副次的なものであり、情報源表出形式を付けると余計に目立ってしまい、主要部と副次的な成分の間に混乱が生じかねないのである。こういった曖昧さを回避するためにも、A 類が七割を占める結果となったのだと思われる。

その一方で、主流としての A 類より遥かに少ない頻度の B～F 類でも 3 割を占めているが、これについても説明するべきである。まず口語の場合は、連用修飾語の従属性による上述の制限がある程度緩和されることが考えられる。それは口語において、連用修飾語と修飾される成分の間にポーズが許され、連用修飾語がより自立性の高い並列的な節と認識されることが可能であり、情報源表出形式に対する抵抗

力が著しく弱くなるわけである¹⁹。例えば、B類に属す例(64)の“乐呵呵 de”を連用修飾語と見るのは問題ないが、(65)の場合、de の後ろにポーズがあるため、“乐呵呵 de”を依然として連用修飾語とは分析し難くなる。書面上(65)の“乐呵呵 de”の de が“的”で表記されるのも、その書き手がそれを連用修飾語と考えていないからであろう。

- (64) 穿着 新衣 的 起义 兵士[……] 都 乐呵呵 地 又
 着る-PROG 新しい服 SP 武装蜂起 兵士 すべて 楽しい SP また
 吹 笛 打 鼓 走 了。 (CCL: 中华上下五千年)
 吹く 笛 打つ 太鼓 立ち去る FP
 ‘新しい服を身に付け武装蜂起に参加していた兵士たちは、[……] みな楽しそうに笛を吹いたり、太鼓を叩いたりしながら去っていった。’
- (65) 望婆婆 乐呵呵 的, 又 把 白 衬衣 塞回 到 她
 望ばあちゃん 楽しい FP また を 白い シャツ 入れる-戻る 至る 彼女
 的 手上, 说 道 [……] (CCL: 湛容《梦中的河》)
 SP 手-LOC 言う COMP
 ‘望ばあちゃんは楽しそうに、またワイシャツを彼女の手にもどし、言った。’

また、C～F類にあるVの直前の成分——“似乎+（程度副詞）+性質形容詞+似的”、“带着/用+性質形容詞+的+N”、“一脸/满脸+性質形容詞”、“N+性質形容詞”——もみな並列節の述語として機能できる。次の実例に示すように、十分に明晰なポーズさえあれば、下線部が独立した並列節のようにも解釈することが可能である。

- (66) 他们 一 个 个 都 压抑着 惜别 的 冲动, 带着
 彼ら 一つ CL CL すべて 抑える-PROG 別れを惜しむ SP 衝動 携帯する-PROG

¹⁹ 様態・付随状態を表す連用修飾語と並列節とが判然としないケースがある。何洪峰 2010 に指摘されるように、こういった連用修飾語は並列節が文法化したものと見るべきである。

沮丧 的 神情，默默 地 目送 他 马车 过了
 がっかりする SP 表情 何も喋らない SP 見送る 彼 馬車 越える-PERF
 軍壘橋，过了 白楊 树林，消失 在 荒地 的 那边……
 軍壘橋 越える-PERF 白楊 森 消える に 未開墾地 SP あの辺

(CCL: 张贤亮《灵与肉》)

‘彼らは全員お別れの寂しさを抑え、意気消沈の面もちで、軍壘橋を渡っていた彼の馬車が白楊の林を通過して未開墾地の向こう側で姿を消したのを黙って見守っていた。’

(67) [……]，营员们 用 兴奋 的 目光，一边

营員たち 使う 興奮する SP 目つき ~しながら
 全神贯注 地 看，一边 录像、 拍照。
 全神経を集中する SP 見る ~しながら ビデオを撮る 写真を撮る

(CCL: 人民日报)

‘营員たちは興奮した目つきで、全神経を集中して見つめながら、ビデオと写真を撮っている。’

(68) 没 想到 她 猛地 一 惊，转过 身 来，两手

NEG 予測する 彼女 突然に 一つ 驚く 回転する-越える 体 来る 両手
 本能 地 护 在 胸前，满脸 惊诧，盯着 我问：[……]
 本能 SP 守る に 胸-LOC 顔全体 驚く 見つめる-PROG 私 訊ねる

(CCL: 贺士恒《贺绿汀胞兄进京告“御状”》)

‘意外なことに、彼女はいきなり驚いて踵を返して、両手は本能で胸を守って、訝しそうに私を見つめて訊いた。’

こういった条件が揃えば、情報源表出形式が現れても差し支えないのである。

更に重要なのは、連用修飾語における情報源表出形式が「目立つ」ものでないほど、受ける制限が緩やかになるということである。既に述べたように、B類の表す情報源としての〈知覚〉は内在的状态の外観的徴候を表出する中で含意されるため、その情報源表出機能は情報としての内在的状态と密接に整合され、容易に感知されるものではない。よって、連用修飾語における B類の生起が制限されずに済むわけである。B類の用例数が C~F類の合計の倍以上ということから、情報と情報源

の整合度と証拠性成分が連用修飾語の内部に入る自由度との間には正の相関が認められる。

最後に説明せねばならないのは、証拠性成分の生起において統語的な要因より語用論的な動機付けのほうが際立つ中国語において、A 類以外の手段・表現形式、とくに C~F 類のような、情報と情報源の整合度の決して高くない形式を用いる理由はどこにあるのかということである。感覚で感じ取った表象(=主体の外観的徴候)と内実(=主体の内在的状态)の間にギャップないし背離が存在可能だという余地を予め用意しておくべきだということが、話し手が C~F 類を用いる主なモチベーションであろうと考えられる。表象と内実が一致しないかもしれないと思われる場合、話し手は何らかのマーカ―を使って両者に区別を付け、伝達しようとする情報があくまで表象にすぎず、その主体が本当にその内在的状态にいることの断定を避ける、ということを示す。そこで C~F 類に現れる非叙実的な特徴が生かされるわけである。そういった区別を付けたい要請が強ければ強いほど、C~F 類が用いられる可能性が高く、逆の場合は A 類か B 類が使用されると予測できる。また、話し手が確認済みではない情報である以上、聞き手にも情報確認に参加してもらうことになりやすい。そこでより共有可能な情報源を提示する必要がある。〈直接経験〉と〈知覚〉より、聞き手と話し手が共有しやすい〈推測〉の情報源を提示することによって、聞き手からの参加がより期待できるようになる。

他の言語においてもこれと並行する現象が観察される。例えば、南アメリカで話されている Wanka Quechua 語では、話し手以外の人の内在的状态を語るときに、ふつうは(69)のように〈推測〉または〈伝聞〉としてマークすることが望ましいが、話し手がその内在的状态に対して十分に確信している場合は、(70)のように〈直接経験〉のマーカ―を用いることもできる、と報告されている。

- (69) pishipaa-shra-**chr** ka-ya-nki
 be.tired-ATTRIB-INFR be-IMPV-2p
 ‘(Sit here); you must be tired’ (INFERRED) (Aikhenvald 2004:161)
- (70) llaki-ku-n-**mi**
 sad-REF-3p-DIR.EV
 ‘He is sad’ (DIRECT) (Aikhenvald 2004:161)

つまり、自分が伝達しようとしている人の内在的状态の真偽に対して、話し手がどこまで保証しているかによって、情報源を提示するか否か、および複数の情報源が可能である場合、どの情報源を提示するかを決めるというわけである。

以上で述べた、他者の内在的状态に（連用修飾語として）言及すべく、表現形式を選択するにあたっての戦略は次のように図式化できる。

〈図4〉 内在的状态に関する表現形式の選択戦略

言及する内在的状态が事実に合致しない可能性があるか？

-ない

情報源を表出するか？

-しない →A類

-する →B類

-ある →情報源（推論）を表出せよ

推論の根拠を明確に提示するか？

-しない →C類

-する →D・E・F類

8.5 本章のまとめ

本章では、現代中国語では連用修飾語によって内在的状态を表出する際に用いられる以下の3つの戦略を明らかにした；①〈直接経験〉の表明に準じた形式で述べる（=A類）、②外観的徴候の存在を基にした〈推論〉が暗示される（=C～F類）、③外観的徴候を観察した〈知覚〉が暗示される（=B類）。戦略②と③は、三人称との相性が良いということを確認した上で、証拠性を示す戦略に数えられることを検証した。その内、②は〈推論〉の情報源を拠り所として提示しつつ主観的な非叙実的事態を表すものであり、③は〈知覚〉を通して主観的な叙実的事態を表すものであると結論づけた。

以上の証拠性の戦略が連用修飾語に用いられた場合、①は最も頻繁に使われ、約7割を占め、2割を占める③がその次である。②は最も少ない頻度で使用

され、1割しか占めていない。この頻度は、〈直接経験〉のような言語化を必要としない情報源を除けば、命題の内部における情報源表出形式の生起が制限されることを語っている。連用修飾語という従属度の高い統語的位置が情報源の明示に不向きだということは唯一の原因ではないと思われる。それ以外に多義性・曖昧さを最小限にしたり、経済性を高めたりするといったことに起因する制限もあると言っても良い。

②と③との比較分析から、現代中国語における情報源表出形式は、より整合されているものであればあるほど、命題の内部への現れが自由になることが分かる。このような整合性と命題の内部への出現との間の正の相関は、おそらく中国語以外にも見られるであろう。日本語においても、「ヨウダ」「ミタイダ」「ラシイ」「(シ)ソウダ」「(スル)ソウダ」などは何れも内在的状态を意味する形容詞に後続でき、情報源表出形式であるが、形容詞に後続した形で構造全体が他者の内在的状态を表して、連用修飾語として機能できるのは「(シ)ソウダ」しかない。興味深いことに、これらの形式の中において、単独で用いられない形容詞の語幹に接続できるのも「(シ)ソウダ」のみである。例えば、

- (71) a. 楽しそうに唄っている
 b. *楽しい {ように／みたいに／らしく} 唄っている
 c. 楽しそうだ
 d. *楽し {ようだ／みたいだ／らしいだ}

形容詞の語幹に接続することは、まさに情報内容を表す形容詞語幹と情報源表出形式からなる構造の整合性が高いということになる。単独で使える形容詞の終止形に接続する他の証拠性形式は、「(シ)ソウダ」と比べると整合性が劣っており、分析性が高いわけである。それゆえ、「(シ)ソウダ」が内在的状态を表す連用修飾語に用いられる唯一の情報源表出形式であることと、「(シ)ソウダ」のみが形容詞の語幹に接続すること、この二つの事象の間に観察される平行性は単なる偶然とは言えないであろう。

第9章 おわりに

9.1 各章の主な結論と更なる一般化

証拠性は言語における情報源の反映である。中国語を対象にした証拠性の研究が1990年代の半ば頃から始まったとはいえ、証拠性そのものに関する理論の「消化不良」や孤立語である中国語の性格などの原因で、第2章に示したように、

- ① 「情報源」と「情報源の信憑性」と「情報の信憑性」の混同。
- ② カテゴリとしての「証拠性」という意味において表出される情報源を認定する基準の不明確さ。

という二つの最大の問題点が存在しており、また中国語における情報源の表出を一般的に考察・記述する研究においては検討の余地が多く残されている。

このような背景の中で、本研究は第3章の前半で、証拠性の理論的枠組について次のような整理をした。

- ③ 「証拠性」を「情報源の文法的表出」と規定して、従来の狭義的証拠性の定義に従った。
- ④ 特定の情報源を意味する形式と、特定の情報源に由来している情報を要求する形式を合わせて「情報源表出形式」とした上で、「証拠素」・「証拠構造」・「証拠策」と3つに分類した。その中で、「証拠素」の認定範囲を *minor category* に属す副詞まで広げることにした。
- ⑤ ある言語に存在する文法範疇としての証拠性の有無は、証拠素の有無によって決まる。また、証拠素があると認められた場合は、その証拠性システム——いくつ選択肢を有するシステムなのかなど——も存在している証拠素によって決められる。

以上の枠組みを確定した上で、第3章の後半で中国語（共通語）において情報源表出形式を見出すための考察を行った。考察の結果としては中国語に関して、次のこ

とが確認された。

- ⑥ 証拠構造は主に動詞句によって構成されている。実証的情報源は感覚動詞から、推論的情報源は思考動詞から、伝聞的情報源は伝達動詞からなるのが一般的である。
- ⑦ 情報源を第一義とし、minor category に属するという「証拠素」の認定基準に合致する形式には“说是”と“想是”の二つがあり、それぞれ情報源の〈伝聞〉と〈推論〉に対応している。ところが、“说是”と比べると“想是”のほうにはジャンル・スタイルの特異性が見られ、共時的に“说是”と同一視しないほうが妥当であると思われる。
- ⑧ 実証的情報源と推論的情報源には、証拠策が複数存在していることが認められる。程度副詞の選択・持続的アスペクトの表出・描写性／臨場感の向上は、性質・属性に関する実証的情報源の表出につながっている。一方、「危惧」・必然性／蓋然性に関する認識的モダリティの形式は推論的情報源に由来している情報を要求する。
- ⑨ これらの情報源表出形式の実態を踏まえて、共時的な観点から見れば中国語（共通語）に存在する証拠素は“说是”のみである。したがって中国語においては“说是”が表す〈伝聞〉だけが比較対照的に文法的に表出され、そのことから中国語は2選択——〈伝聞〉であるか〈その他〉であるか——の証拠性システムを持つ言語であると見なせる。

第4章では証拠素の“说是”を取り上げ、伝達動詞が〈伝聞〉の証拠素へ変容する過程を明らかにすることを試みた。この過程においては、二つの先決条件を特筆すべきである。つまり、意味的に発信者指向から受信者指向に移行することと、文法的に動詞から脱範疇化することである。証拠構造に留まっている伝達動詞はこの二つの条件の何れかを満たしていないのである。

ところで、文法的に情報源を表出する形式であり、意味的に希薄化が起きていることから、用いられる情報が〈伝聞〉のみならず、話し手からの修正・補足説明を行うような逆接的な後続文脈があれば、という条件付きで〈直接経験〉の情報にも“说是”が付けられる。〈直接経験〉から知り得たはずの情報をあえて、最も共有

しやすい情報源である〈伝聞〉として伝達することから、この「伝聞」の内容と異なる情報を話し手が把握していることを連想させる効果がある。そこから〈伝聞〉と話し手からの修正・補足説明がつながってくる。

第5章と第6章で提示した方言の事実から見ても、〈伝聞〉の証拠素の派生用法あるいは意味機能の拡張は、最初は〈直接経験〉との共起から始まることが分かる。上海語の“伊讲”は〈直接経験〉に由来している情報を表す文の文末に現れ、話し手側の意外性を表す形式になった。また、平叙文・命令文・疑問文の文末に用いられる台湾語の“讲”は聞き手が情報を知った瞬間に感じるはずの意外性を想定し、聞き手に「注意喚起」を促す。“讲”が共起する平叙文・命令文・疑問文はいずれも話し手の〈直接経験〉を経て確認済みの情報を表したり、含意したりしている。

〈伝聞〉のみならず、〈推論〉の情報源表出形式が〈直接経験〉の情報に用いられた場合も、ほんらいの〈推論〉という情報源を表出する機能から逸脱する。第7章ではこのような事例を取り上げた。上海語の“勑”は制止を表す否定副詞から、「危惧-認識のモダリティ」の段階を経て蓋然性を表す認識的モダリティの形式になっており、〈推論〉の情報源を含意する。その“勑”の直後に〈直接経験〉の情報を要求する“太～”が生起すると、推論の意味が抑えられ、「感嘆」という強意の訴えかけの構文となる。

“伊讲”、“讲”、“勑太～噢”の事例から、中国語における証拠素をはじめとする情報源表出形式の意味機能の拡張は、〈直接経験〉に用いられることを要因として、対人的機能へシフトする傾向にあると結論づけられる。これは、第4章で議論した、伝聞的信息源と推論的信息源のほうが聞き手からも比較的共有しやすいということと密接な関係があると考えられる。話し手が聞き手に共有しやすい情報源を添付することによって、聞き手に情報確認の要請をしているわけである。つまり、〈伝聞〉・〈推論〉の情報源表出形式を付加すると、情報源の表出とともに、「聞き手が情報入手・形成へ積極的に参与してほしい」という合図も出されると考えられ、そこが〈聞き手目当てのモダリティ〉に繋がるのである。

我々は他者の感情・感覚など内在する状態を〈直接経験〉によっては知り得ない。しかしながら、他者に内在する状態へ言及する場合は、〈直接経験〉で了解可能な自分に内在する状態と同じ形式で表出することもあれば、異なる形式を取ることもある。第8章は他者に内在する状態への言及に焦点を当てて、その言及における情

報源の表出の有無を考察した。調査した結果に基づいて、中国語は多くの場合に内在的状態の主体を問わずに同様の無標の形式で表出するが、一方で情報源を特定化するような形式・ストラテジーもいくつか見られることが判明した。その場合、表出される情報源は（話し手自らの体験ではなく、五感による）〈知覚〉と〈推論〉である。内在的状態の主体が自分以外の他者であることをより明白にするのが、これらの形式・ストラテジーを用いる一つのモチベーションである。また、とりわけ情報形成への話し手の参与を最小限にすることによって、情報の真実らしさについての話し手の責任の矮小化を図り、〈推論〉の情報源を意図的に表出することが考えられる。そこから伝達される内在的状態に対して、話し手の断定保留ないし否定的態度が読み取れる。

9.2 今後の課題

9.2.1 情報源表出形式の拡張の可能性

本研究は、〈伝聞〉の証拠素が意外性や注意喚起を表すようになり、〈推論〉を表す証拠策が強意の訴えかけに用いられることを明らかにした。ところが、これはあくまで現時点で確認されている情報源表出形式の拡張であり、必ずしも拡張の全ての可能性を網羅したわけではない。今後の漢語系の方言調査により、新たな事実が発見され、以上で示した拡張とは別の情報源表出形式の拡張・転用が存在することもあり得るだろう。

例えば、〈伝聞〉の証拠性がさらに転じて命題に対する否定的な評価——命題内容が事実であることを認めないこと——を表すようになる可能性が考えられる。逆接の“说是”（§4.5）、または次の上海語の“伊讲”の例には、すでにこのような傾向が見られる。

(1) A: 我 晓得 依 老 哀怨 个,

私 分かる あなた とても 悔しく悲しい PF

来 安慰安慰 依。

来る ちょっと慰める あなた

‘あなたが非常に悔しくて悲しんでいることを知っているの、あなた

をちょっと慰めに来たのだ’

B: 哀怨 伊讲……

悔しく悲しい REP

‘悔しくて悲しいなんて（ことはない）’

湖南省の永州市内で話される西南官話における“的话”は、共通語と同様に仮定条件をマークする接続助詞とトピックマーカの用法を持つ以外に、次の例に示すように、会話において「相手の意見を（柔らかく）否定する」機能（以下は「否定用法」と略す）がある（贡贵训 2012）¹。

(2) A: 你 结婚 太 早 了吧?

あなた 結婚する すごく 早い FP FP

‘あなたは結婚（するの）が早すぎるだろう’

B: 早 的话。 (贡贵训 2012)

早い REP

‘早くはない’²

(3) A: 你 给咖 一百块钱 他 啊?

あなた 与える-PERF 百元 金 彼 FP

‘あなたは彼に百元も渡したの?’

B: 我 给咖 那么多 的话。 (贡贵训 2012)

私 与える-PERF そんなに 多い REP

‘そんなにたくさんは渡さなかった’

(4) A: 你 吃 的 是 苹果。

あなた 食べる SP である リンゴ

‘あなたが食べているのはリンゴだね’

¹ 湘江と瀟水の合流地点に位置する永州市は、湖南省最南部を占め、広東省・広西チワン族自治区と境を接する。

² 例文の日本語訳は、贡贵训 2012 の説明に従い筆者が訳したものである。その結果、“的话”は「～ない」もしくは「～なかった」と訳されてはいるが、筆者自身は必ずしもこの意味解釈が最も相応しいものであるとは考えていない。また、グロスにおいて“的话”の逐語訳を REP としているのは筆者の分析によるものである。

- B: 苹果 的话, 是 凉薯 好 不 好! (贡贵训 2012)
 リンゴ REP である クズイモ よい NEG よい
 ‘リンゴではない。クズイモだろう’

贡贵训 2012 は、“的话”のこの「否定用法」を、仮定条件をマークする接続助詞に由来するものだと分析している。しかし、結論はともかくとして、ここで詳しく言及する余裕はないが、その分析にはいくつかの問題点があり、納得できない部分も少なくないことを指摘しておきたい。

ところで、例(2)~(4)を(1)と比較すると、構造面だけではなく発話の場面・文脈も極めて類似することが分かる。そのことから、この“的话”は、相手の直前の発話から、一部もしくは全ての情報を繰り返すことによって、そこに妥当でない要素が含まれていることを相手に気付かせる機能を有しており、それが結果として話し手側の「否定」と解釈されるようになったのではないか、という可能性も検討に値するかもしれない。いわゆる“的话”の「否定用法」は、あくまで「有標で引用している」という発話行為の実行から推測されるものにすぎない。例(5)~(8)に示すように、日本語や他の言語にも同様の現象が存在する。

(5) A: きみ、結婚早すぎだよ。

B: 早すぎって。(俺、もう三十歳だよ。)

(6) A: アタシ、あなたのようなキレイな顔があればよかったのに。

B: 私がキレイな顔だなんて。(とんでもないです。)

(7) (Warlpiri 語)

Yuntardi **nganta!**

beautiful REP

‘She is beautiful indeed! As if she is beautiful!’ (Aikenvald 2004:183)

(8) (Nganasan 語)

d’esi i-**bahu**

father be-REP

‘He is reported to be her father’ (and yet he abandoned her, and she left her home) (Aikenvald 2004:183)

これらの例における〈伝聞〉の情報源を表す形式はいずれも、述べられた内容に対する話し手の不賛成あるいは否定的態度を表すと言える。この分析は“的话”にもそのまま適用できる可能性がかなり高いのではないかと考えられる。

もう一つ考えるべき拡張の方向は、一連のイベントの中の一つを表す連用修飾節に共起する情報源表出形式が、原因・理由もしくは目的を表す接続的用法である。例えば、知覚動詞である“看（見る）”はかつて「危惧」を表していた（高増霞 2003）が、〈推論〉を表すと解釈できる用例が存在する（§ 3.4.2.1 を参照）。

- (9) 劝 君 速 吃 莫 踌躇，
 勧める 貴方 早い 食べる PROH 躊躇する
 看 被 南風 吹 作 竹。 (宋・钱惟演《玉楼春》)
 INFR によって 南風 吹く なる 竹
 文字通りの訳：‘貴方に早めに食べることを勧める。南風に吹かれ竹になるものと予測する。’
 自然な訳①：‘[略] 南風に吹かれ竹になるだろうから’
 自然な訳②：‘[略] 南風に吹かれ竹にならないように’

例(9)は、早めに筍を食べよう（＝若いうちに人生を存分に楽しもう）と勧める内容である。その自然な訳からも分かるように、「南風に吹かれ竹になる」ことが真理・一般的な知識として捉えられることによって、“看”の「推測」の意味が抑えられ、原因・理由・目的を表す接続的な成分であると再分析される。

通言語的にも、これと同様の現象が確認されている。Aikhenvald 2004:253-254 によると、Tucano 語において従属節に生起可能な証拠素は〈伝聞〉のみであり、目的と解釈される；Tariana 語は目的を表す従属節に〈伝聞〉の証拠素が用いられると、（回避すべき）消極的目的を表す；Ngiyambaa 語の従属節も行為動作の意図を説明するために〈伝聞〉の証拠素を用いる、ということである。

以上のことを踏まえて言語事実を見渡せば、現代の漢語系方言にもこれらと類似する現象が存在しても不思議ではない。現に第4章で挙げた“说是”の実例において、意味上、共起する連用節が原因・理由・目的を説明しているものが偶然とは思

えないほどの多くの割合を占めている。

もちろん、以上に述べたことは、現時点では理論的な推測の域を出ていない。それらの真偽を確認するためには、今後より多くの言語資料の調査および綿密な記述を待たねばならない。

9.2.2 証拠策について

本研究は特定の情報源を第一義とはしないものの、その情報源に由来する情報しか用いられない *minor category* に属する言語形式を証拠策と定義した上で、§ 3.4 で共通語における証拠策をいくつか挙げたが、これに関してもやはり現時点で確認できたものに限っていると看做ざるを得ない。従って、今後は、本研究で挙げたものの以外の証拠策がさらに存在するかどうかを念頭におき、調査を進めていく必要がある。

また、§ 3.4 で述べたことから窺えるように、中国語において、推論的情報源の証拠策は事象叙述 (*event predication*) にも属性叙述 (*property predication*) にも幅広く用いられるのに対し、実証的情報源の証拠策は属性叙述に偏っているようである。もしこの傾向が更なる言語事実に裏付けられるのであれば、実証的情報源に由来する事象叙述的な情報には証拠策を講じないという結論が導き出される。この現象は何を意味するのか。その背後に潜んでいる原因についても、今後の興味深い課題となるであろう。

参考文献

- 赤塚紀子・坪本篤朗 1998. 『モダリティと発話行為』. 東京：研究社出版。
- 大堀寿夫 2005. 「日本語の文法化研究にあたって——概観と理論的課題——」, 『日本語の研究』第1巻3号. 日本語学会：1-17頁。
- 小野秀樹 2010. 「“挺～的”と“太～了”の意味機能」, 『汉语与汉语教学研究』創刊号. 東方書店：17—31頁。
- 神尾昭雄 1990. 『情報のなわ張り理論—言語の機能的分析』. 東京：大修館書店。
- 神尾昭雄 2002. 『続・情報のなわ張り理論』. 東京：大修館書店。
- 金水敏 2003. 『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』. 東京：岩波書店。
- 邢志強 2001. 「“そうだ” “ようだ” “みたいだ” “らしい” の相違と中国語への訳し方」. 『日本と中国ことばの梯』佐治圭三教授古希記念論文集編集委員会編. 東京：くろしお出版。
- 吳悦 1997. 『基礎からの上海語』. 東京：株式会社大学書林。
- 吳蘭 2011a. 「中国語の推論証拠性表現」, 『中国語学』第258号. 日本中国語学会：213-231頁。
- 吳蘭 2011b. 「日中伝聞表現の比較対照」, 『日本中国語学会第61回全国大会予稿集』. 日本中国語学会第61回全国大会準備会：285-289頁。
- 定延利之・張麗娜 2007. 「日本語・中国語におけるキャラ語尾の観察」, 『日中対照言語学研究論文集』. 和泉書院。
- 曹泰和 2000. 「反語文の“不是……(吗)?”について—日本語と比較しながら—」. 『中国語学』第247号. 日本中国語学会：311-327頁。
- 玉地瑞穂 2005. 「日本語と中国語のモダリティの対照研究—言語類型論の観点から—」, 『高松大学紀要』第44号. 17-54頁。
- 福田翔 2011. 「“静態形容詞+不了”の意味と構造」, 『中国語学』第258号. 日本中国語学会：232-251頁。
- 益岡隆志・田窪行則 1992. 『基礎日本語文法—改訂版—』. 東京：くろしお出版。
- 益岡隆志(編) 2008. 『述語類型論』. 東京：くろしお出版。
- 熊進 2006. 「成都方言における機能語としての“说[so²]”」, 『早稲田大学大学院文学研究科紀要(第二分冊)』第51号. 257-269頁。

- 李佳樑 2011. 「「感嘆」を表す上海語の“勁太 AP 噢”について」, 『中国語学』第 258 号. 日本中国語学会: 154-173 頁。
- 陈光磊 1994. 『汉语词法论』. 上海: 学林出版社。
- 陈曼君 2011. 「闽台闽南方言的反复问句」, 『方言』(2): 153-163 頁。
- 陈颖 2009. 『现代汉语传信范畴研究』, 北京: 中国社会科学出版社。
- 陈颖·陈一 2010. 「固化结构“说是”的演化机制及其语用功能」, 『世界汉语教学』(4): 505-513。
- 戴耀晶 2004. 「试说“冗余否定”」, 『修辞学习』(2): 3-6 頁。
- 董秀芳 2003. 「“X 说”的词汇化」, 『语言科学』(2): 46-57 頁。
- 董秀芳 2004. 「“是”的进一步语法化: 由虚词到词内成分」, 『当代语言学』(1): 35-44 頁。
- 房红梅 2006. 「言据性研究述评」, 『现代外语』(季刊)(2): 191-196 頁。
- 魏玉龙 2009. 「语气助词“着呢”的演变历程」, 『现代语文』(2): 32-34 頁。
- 高琇玟 2006. 「台语词汇“讲”和“看”的存在关系」。国立高雄师范大学台湾文化及语言研究所硕士论文。
- 高增霞 2003. 「汉语的担心-认识情态词“怕”“看”和“别”」, 『语法研究和探索(十二)』: 412-428 頁。
- 贡贵训 2012. 「湖南永州方言“的话”的否定功能」, 『中国语文』(1): 54-55 頁。
- 谷峰 2007. 「从言说义动词到语气词——说上古汉语“云”的语法化」, 『中国语文』(3): 231-236 頁。
- 顾之民 1996. 「“不要太 A”的特殊表达及其修辞效果」, 『东方论坛』(3): 77-80 頁。
- 何洪峰 2010. 「从方式谓语到方式状语的语法化过程及认知机制」, 『汉语学报』(1): 36-44 頁。
- 胡壮麟 1994. 「语言的可证性」, 『外语教学与研究』(1): 9-15 頁。
- 李佳樑 2009. 「从样态“~そうに”的对应表现看汉语的示证性」, 『日本中国語学会第 59 回全国大会予稿集』。日本中国語学会第 59 回全国大会準備会: 138-142 頁。

参考文献

- 李佳樑 2011a. 「试论认识情态副词“保不 X”的形成」, 『言語情報科学』第 9 号: 49—61 页。東京: 株式会社大應。
- 李佳樑 2011b. 「当传闻不再是传闻——论上海话表示“惊异”的语用标记“伊讲”」, 『语法化与语法研究(五)』, 144—163 页。北京: 商务印书馆
- 李佳樑 2012. 「从内在状态在状语中的表达看汉语的示证性」. 『現代中国語研究』第 13 期: 43—60 页。東京: 朝日出版社。
- 李晋霞·刘云 2003. 「从“如果”与“如果说”的差异看“说”的传信义」, 『语言科学』(3): 59—70 页。
- 李讷·安珊笛·张伯江 1998. 「从话语角度论证语气词“的”」, 『中国语文』(2): 93—102 页。
- 林华勇·马喆 2007. 「廉江方言言说义动词“讲”的语法化」, 『中国语文』(2): 151—158 页。
- 刘丹青 2004. 「汉语里的一个内容宾语标句词——从“说道”的“道”说起」, 『庆祝〈中国语文〉创刊 50 周年学术论文集』, 北京: 商务印书馆。
- 刘丹青编 2008. 『语法调查研究手册』。上海: 上海教育出版社。
- 刘一之 2006. 「北京话中的“(说): ‘……’说”句式」, 『语言学论丛』第三十三辑: 337—339 页, 北京: 商务印书馆。
- 刘月华·潘文娣·故犇 2001. 『实用现代汉语语法』(增订本)。北京: 商务印书馆。
- 吕叔湘主编 1999. 『现代汉语八百词』(增订本)。北京: 商务印书馆。
- 吕为光 2011. 「“说是”的语法化」, 『语言与翻译』(3): 21—25 页。
- 牛保义 2005. 「国外实据性理论研究」, 『当代语言学』(1): 53—61 页。
- 钱乃荣·许宝华·汤珍珠 2007 『上海话大词典』, 上海: 上海辞书出版社。
- 仇毅 2007. 「“不要太……”结构的“准语法化”分析」, 『镇江高专学报』(3): 48—51 页。
- 邵敬敏、罗晓英 2004. 「“别”字句语法意义及其对否定项的选择」, 『世界汉语教学』(4): 18—26 页。
- 沈家煊 2004. 「语用原则、语用推理和语义演变」, 『外语教学与研究』(4): 243—251 页。
- 史金生 2000. 「传信语气词“的”“了”“呢”的共现顺序」, 『汉语学习』(5): 32

—35 页。

- 史有为 1995. 「“看勿懂”和“勿要忒好”」, 『汉语学习』(3): 54 页。
- 太田辰夫 1958/1987[2003]. 『中国语历史文法』, 蒋绍愚·徐昌华译。北京: 北京大学出版社。
- 陶寰·李佳樛 2009. 「方言与修辞的研究界面——兼论上海话“伊讲”的修辞动因」, 『修辞学习』(153): 1—8 页。
- 王键瑶(未刊)「试论上海话中“伊刚”的词汇化与语法化」, 上海师范大学研究生院课程报告。
- 王敏 2000. 「“不要太 A”句式表达感叹的修辞基础探略」, 『修辞学习』(2): 18—19 页。
- 王彦杰 2010. 「“着呢”句式中形容词性成分的使用情况考察」, 『世界汉语教学』(2): 231—242 页。
- 费玉龙 2009. 「语气助词“着呢”的演变历程」, 『现代语文』(2): 32—34 页。
- 严辰松 2000. 「语言如何表达“言之有据”——传信范畴浅说」, 『解放军外国语学院学报』(1): 4—7 页。
- 杨娟 2009. 「“不要太 A”句式探析」, 『语言应用研究』(5): 47—48 页。
- 杨庆铎 1996. 「“不要太××噢!”小议」, 『咬文嚼字』(1): 8 页。
- 叶盼云 1994. 『学说上海话』。上海: 上海交通大学出版社。
- 余光武 2010. 「『言据范畴』介绍」, 『当代语言学』(4): 365—368 页。
- 乐耀 2011a. 「国内传信范畴研究综述」, 『汉语学习』(1): 62—72 页。
- 乐耀 2011b. 「从人称和“了₂”的搭配看汉语传信范畴在话语中的表现」, 『中国语文』(2): 121—132 页。
- 张爱玲 2006. 「“不要太……”否定冗余成分分析」, 『语文学刊』(3): 138—140 页。
- 张爱玲 2009. 「元语否定结构“不要太 AP”的习语化」, 『长春师范学院学报(人文社会科学版)』(5): 78—82 页。
- 张成福·余光武 2003. 「论汉语的传信表达——以插入语研究为例」, 『语言科学』(3): 50—58 页。
- 张伯江 1997. 「认知观的语法表现」, 『国外语言学』(2): 15—19 页。
- 张伯江·方梅 1994. 「汉语口语的主位结构」, 『北京大学学报(哲学社会科学版)』

参考文献

- (2) : 66—75 页, 57 页。
- 赵元任 1968. 『中国话的文法』, 丁邦新译, 收入『赵元任全集』(第一卷), 北京: 商务印书馆 2002 年。
- 郑怀德·孟庆海 2003. 『汉语形容词用法词典』。北京: 商务印书馆。
- 志村良治 1984/1995. 『中国中世语法史研究』, 江蓝生·白维国译。北京: 中华书局。
- 周领顺 2002. 「怎样解释“不要……太……”」, 『天中学刊』(1): 74—75 页。
- 朱德熙 1982. 『语法讲义』, 北京: 商务印书馆 1982 年。日本語訳: 杉村博文·木村英樹 1995, 『文法講義』。東京: 白帝社。
- 朱永生 2006. 「论现代汉语的言据性」. 『现代外语』(季刊)(4): 331—337 页。
- Aikhenvald, Alexandra Y. 2004. *Evidentiality*. New York: Oxford University Press.
- Anderson, L.B. 1986. Evidentials, Path of Change, and Mental Maps: Typologically Regular Asymmetries. In Wallace Chafe & Johanna Nichols (eds.)
- Aoki, H. 1986. Evidentials in Japanese. In Wallace Chafe & Johanna Nichols (eds.).
- Boas, Franz. (ed). 1911. *Handbook of American Indians languages*, Part 1. (Smithsonian Institution, Bureau of American Ethnology, Bulletin 40.) Washington: Government Printing Office.
- Boas, Franz. 1947. Kwakiutl grammar, with a glossary of the suffixes. *Transactions of the American Philosophical Society* 37(3). pp.201-377.
- Boye, Kasper & Harder, Peter. 2009. Linguistic categories and grammaticalization. *Functions of Language* 16:1, Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company. pp.9-43.
- Brown, Penelope & Levinson, Stephen C. 1987. *Politeness: Some Universals in Language Usage*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Bussmann, Hadumod. 1996. *Routledge Dictionary of Language and Linguistics*. London: Routledge.
- Chafe, Wallace. 1986. Evidentiality in English Conversation and Academic Writing. In Wallace Chafe & Johanna Nichols (eds.).
- Chafe, Wallace. & Nichols, Johanna. (eds.) 1986. *Evidentiality: The Linguistic Coding of*

- Epistemology*. Norwood, New Jersey: Ablex Publishing Corporation.
- Chang, Miao-Hsia. 1998. The discourse functions of Taiwanese Southern Min *kóng* in relation to its grammaticalization. *Selected Papers from the Second International Symposium on Languages in Taiwan*, ed. by Shuanfan Huang, pp.111-128. Taipei: Crane.
- Chappell, Hilary. 2001. A typology of evidential markers in Sinitic languages. In H. Chappell (ed.). 2001. *Sinitic Grammar: Synchronic and Diachronic Perspectives*. Oxford: Oxford University Press. pp.56-84.
- Chappell, Hilary. 2008. Variation in the Grammaticalization of complementizers from *verba dicendi* in Sinitic languages. *Linguistic Typology* 12: pp.45-98.
- Cornillie, Bert. 2009. Evidentiality and epistemic modality: On the close relationship between two different categories. *Functions of Language* 16:1, Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company. pp.44-62.
- DeLancey, Scott. 2001. The Mirative and Evidentiality. *Journal of Pragmatics* 33:369-382.
- Ekberg, Lena & Paradis, Carita. 2009. Editorial: Evidentiality in language and cognition. *Functions of Language* 16:1, Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company. pp.5-7.
- Goffman, Erving. 1967. *Interaction Ritual: Essays on Face Behavior*. New York: Pantheon Books.
- Heine, Bernd & Kuteva, Tania. 2002. *World Lexicon of Grammaticalization*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Hopper, Paul J. & Traugott, Elizabeth C. 1993 *Grammaticalization*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Huang, Hui-ju 2010 *An Integrative Approach to Grammaticalization of shuo in Taiwan Mandarin*, National Tsing Hua University Graduate Institute of Linguistics Ph.D. Dissertation.
- Jacobsen, William H. 1986. The Heterogeneity of Evidentials in Makah. In Wallace Chafe & Johanna Nichols (eds.).
- Jakobson, Roman. 1957. *Shifters, verbal categories, and the Russian verb*. Cambridge,

参考文献

- Mass.: Department of Slavic Languages and Literatures, Harvard University.
- Lichtenberk, Frantisek. 1995. Apprehensional Epistemics. In John Bybee and Suzanne Fleischman (eds.), *Modality in Grammar and Discourse*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company. pp.293-327.
- Palmer, Frank R. 2001. *Mood and Modality* (the 2nd edition). Cambridge: Cambridge University Press.
- Sweetser Eve E. 1990. *From Etymology to Pragmatics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Tseng, Ming-Hua. 2008. *The multifunction of Taiwanese Southern Min 'Kóng'*. M.A. thesis. National Tsing Hua University.
- Valenzuela, Pilar M. 2003. Evidentiality in Shipibo-Konibo, with a comparative overview of the category in Panoan. In Aikhenvald and Dixon (eds.) 2003. *Studies in Evidentiality*. Amsterdam: John Benjamins.
- Willett, Thomas. 1988. A cross-linguistic survey of the grammaticization of evidentiality. *Studies in Language* 12: pp.51-97.